鹿島町徳前C遺跡調査報告(II・III)

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前C遺跡第2・3次緊急発掘調査報告

1986.3

石川県立埋蔵文化財センター

鹿島町徳前C遺跡調査報告(II・III)

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前C遺跡第2・3次緊急発掘調査報告

1986.3

石川県立埋蔵文化財センター

第２次調査74～76ライン溝状遺構土器出土状態

序　　文

鳥屋町字黒氏地内にサクラマツ池と呼ばれる溜池がある。この池のすぐ西側は鹿島町字徳前に接している。昭和28，9年（1953，4）ごろ，鳥屋町では『鳥屋町史』編纂のための調査が，金沢大学教育学部若林喜三郎助教授（当時）を中心に進められていた。市町村史の編纂事業としては，県下でも最も早い段階の着手であった。サクラマツ池で底ざらえの作業中，村人の手で奇妙な形の木製品や土器類が掘り出されたのは，丁度このような時期であり，これらの掘り出し物が古代人が用いた遺物であると判断されたの若林助教授であった。氏によって間もなくこの情報は，石川考古学研究会の高堀勝喜代表幹事（当時）にもたらされたのである。高堀氏が最初にサクラマツ池の現地と出土品を調査されたのは，昭和29年5月5日の祝日であった。出土品は，舟形木器・盆形木器・梯子の3点の木器と，壺・鉢・高坏などの土器類であり，後日，高堀氏によって詳しく報告されている（『鳥屋町史』・『石川考古学研究会々誌　8』）。木器の発見例としても，最も早いケースであった。

国道159号線の改築計画（鹿島バイパス建設）が具体化をみせたのは，昭和40年代の後半に入ってからであり，建設省金沢工事事務所は，その路線を県教委文化財保護課に提示するとともに，埋蔵文化財の有無を問うている。その計画路線は，かつて，良好な状態で木器を出土したサクラマツ池に近接するように設定されていた。県教委が埋蔵文化財存在の可能性が極めて高いとし，試掘による確認を要すと回答したことは言うまでもない。そして，遺跡は非常に良好な状態で広がっていたのである。道路建設に先だち，4次にわたって発掘調査が行われ，多大な成果を挙げることができた。その二，三を挙げれば，①邑知地溝帯部における縄文集落立地に新知見をえたこと，②縄文中期前葉に土器編年に新たな資料を加え「徳前式」が設定されたこと，③弥生時代終末期および古墳時代前期の土器編年に新資料を提供したこと，④奈良時代集落構造の一端を明かにしたことなどが挙げられよう。いずれも能登の原始・古代を解き明かそうとするとき，かなりの発言力をもつものと考えている。

人の運命と同じように，遺跡にも運命というものがある。人知れず壊され，内に秘めた数々の情報を生かすことなく姿を消した不幸な遺跡もある。一方では，詳細な調査を受けて歴史の解明に役立った比較的幸せな遺跡もある。中には史跡公園として人びとの心を和ます幸運な遺跡もある。また，開発の手が及ばず，ひっそりと眠りについている遺跡も多い。しかし，遺跡の運命を決めるのは，多くの場合人間そのものである。徳前C遺跡は数々の新知見を世に残し，最悪の運命を辿ることだけは避けられた。それは，サクラマツ池の底ざらえで出た品々に関心を寄せた黒氏の農家の皆さん，これに注目した若林先生，そして学術的価値を与えられた高堀先生，その他この遺跡に関わった数多くの人びとの好意や努力によるものであった。遺跡は人の残したもの，私たちは，遺跡に不幸な運命を負わしてはいけないのであり，また多くの人々に，そのことを訴え続けねばならない。

所長　橋本澄夫

例　　言

1．本書は石川県鹿島郡鹿島(かしま)町徳前(とくぜん)地内に所在する徳前C遺跡の発掘調査第2・3次報告書である。第1次と第4次の報告書は先に発行済みであり、本書をもって鹿島バイパスに係る徳前C遺跡の調査報告書はすべて刊行したことになる。

2．本遺跡の発掘は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の国道159号線改築事業（鹿島バイパス）にかかるもので，昭和53年度に第2次発掘調査を石川県教育委員会文化財保護課が，昭和54年度に第3次調査を石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．徳前C遺跡の調査は下記の職員が担当した。

第2次調査　湯尻　修平（県文化財保護課主事）現在，県立埋蔵文化財センター主査
　　高橋　　裕（　　同　　）現在，県立郷土資料館学芸員
　　河村　好光（　　同　　）現在，県立金沢向陽高校教諭

第3次調査　谷内尾晋司（県立埋蔵文化財センター嘱託）現在，県文化課文化財専門員
　　中島　俊一（　　〃　　主事）現在，県立埋蔵文化財センター主査
　　米沢　義光（　　同　　嘱託）現在，県立埋蔵文化財センター主事

4．調査の実施にあたっては，建設省金沢工事事務所，鹿島町教育委員会及び鹿島町内有志の協力を得た。

5．本遺跡出土の遺物整理作業は，石川県埋蔵文化財協会に委託し，下記の職員が担当した。
勝島，大藤，滋井，河村，小林，小谷，福島，土井，北，米沢，辻森，松田，馬場

6．石器の石材鑑定は，藤　則雄（金沢大学教授）氏に依頼した。

7．本報告書の編集は湯尻，米沢があたり，以下同センター職員から教示を得た。執筆は次の如く分担した。
湯尻　第2章第1・2節，第3章第1・3～5節，第4章第2～4節，第5章第1・3節
米沢　第1章，第2章第3節，第3章第2節，第4章第1節，第5章第2節

8．本遺跡の遺構，遺物実測図，写真，出土遺物等の資料は，当センターにて一括して保存管理にあたっている。

目　　次

第１章　位置と環境…… 1
第２章　調査に至る経過…… 5
　第１節　調査に至る経過と第１～４次調査の概要…… 5
　第２節　第２次調査の経過…… 6
　第３節　第３次調査の経過…… 10
第３章　層序と検出された遺構…… 12
　第１節　層序…… 12
　第２節　縄文時代の遺構…… 14
　第３節　弥生・古墳時代の遺構…… 14
　第４節　奈良時代の遺構…… 17
　第５節　中世の遺構…… 21
第４章　出土遺物…… 22
　第１節　縄文時代の遺物…… 22
　第２節　弥生・古墳時代の遺物…… 79
　　土器観察表…… 122
　第３節　奈良時代の遺物…… 136
　第４節　中世の遺物…… 137
第５章　ま と め…… 144
　第１節　遺構…… 144
　第２節　縄文時代の遺物…… 147
　第３節　弥生・古墳時代の遺物…… 162

挿　図　目　次

第１図　徳前Ｃ遺跡の位置……1
第２図　周辺の遺跡分布図……2
第３図　徳前Ｃ遺跡周辺地形図……3
第４図　調査区の配置と層序……7・8
第５図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構土器出土状況……15・16
第６図　徳前Ｃ遺跡奈良時代遺構配置図……18
第７図　徳前Ｃ遺跡掘立柱建物集成……19
第８図　徳前Ｃ遺跡第２次52～55― ル調査区中世遺構……21
第９図　徳前Ｃ遺跡第3次包含層出土土器(1)…47
第10図　〃　〃　(2)…48
第11図　〃　〃　(3)…49
第12図　〃　〃　(4)…50
第13図　〃　〃　(5)…51
第14図　〃　〃　(6)…52
第15図　〃　〃　(7)…53
第16図　〃　〃　(8)…54
第17図　〃　〃　(9)…55
第18図　〃　〃　(10)…57・58
第19図　〃　〃　(11)…59・60
第20図　〃　〃　(12)…61
第21図　〃　〃　(13)…62
第22図　〃　〃　(14)…63
第23図　〃　〃　(15)…64
第24図　〃　〃　(16)…65
第25図　〃　〃　(17)…66
第26図　〃　〃　(18)…67
第27図　〃　〃　(19)…68
第28図　〃　〃　(20)…69
第29図　〃　〃　(21)…70
第30図　〃　〃　(22)…71・72
第31図　〃　〃　(23)…73
第32図　〃　〃　(24)…74
第33図　徳前Ｃ遺跡第3次包含層出土土器(25)…75
第34図　〃　〃　(26)…76
第35図　〃　〃　(27)…77
第36図　〃　包含層出土石器…78
第37図　徳前Ｃ遺跡第２・３次壺形土器分類一覧……80
第38図　徳前Ｃ遺跡第２・３次鉢形土器・蓋形土器分類一覧……83
第39図　徳前Ｃ遺跡第２・３次甕形土器分類一覧……86
第40図　〃　〃　……87
第41図　徳前Ｃ遺跡第２・３次高杯形土器・器台形土器分類一覧……93
第42図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(1)……95
第43図　〃　〃　(2)……96
第44図　〃　〃　(3)……97
第45図　〃　〃　(4)……98
第46図　〃　〃　(5) …… 99
第47図　〃　〃　(6) ……100
第48図　〃　〃　(7) ……101
第49図　〃　〃　(8) ……102
第50図　〃　〃　(9) ……103
第51図　〃　〃　(10) ……104
第52図　徳前Ｃ遺跡第２次57～63ライン包含層出土土器(1) ……105
第53図　〃　〃　(2) ……106
第54図　〃　〃　(3) ……107
第55図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(1) ……108
第56図　〃　〃　(2) ……119
第57図　〃　〃　(3) ……110
第58図　〃　〃　(4) ……111
第59図　〃　〃　(5) ……112

第60図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン
溝状遺構出土土器(6) ……113
第61図　〃　〃　(7) ……114
第62図　〃　〃　(8) ……115
第63図　〃　〃　(9) ……116
第64図　〃　〃　(10) ……117
第65図　〃　〃　(11) ……118
第66図　〃　〃　(12) ……119
第67図　〃　〃　(13) ……120
第68図　〃　〃　(14) ……121
第69図　徳前Ｃ遺跡第２・３次
包含層出土須恵器(1) ……139
第70図　〃　〃　(2) ……140
第71図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土
須恵器・土師器(3) ……141
第72図　〃　〃　(4) ……142
第73図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土
土師器・土師質土器・珠洲焼(5) …143
第74図　七尾市八幡昔谷遺跡 ……145
第75図　松任市法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区 ……145
第76図　金沢市中平遺跡出土土器(1) ……155
第77図　〃　(2) ……156
第78図　〃　(3) ……157
第79図　〃　(4) ……158
第80図　〃　(5) …159・160
第81図　〃　(6) ……161
第82図　富山県串田新遺跡第１・３号住居
跡出土土器 ……166
第83図　富山県本江遺跡第１号住居跡出土
土器 ……167

表　目　次

第１表　徳前Ｃ遺跡建物計測値一覧……20
第２表　徳前Ｃ遺跡第３次石器観察表……46
第３表　74～76ライン溝状遺構出土土器器
種別構成比 ……164
土器観察表……122～135

第1章　位置と環境

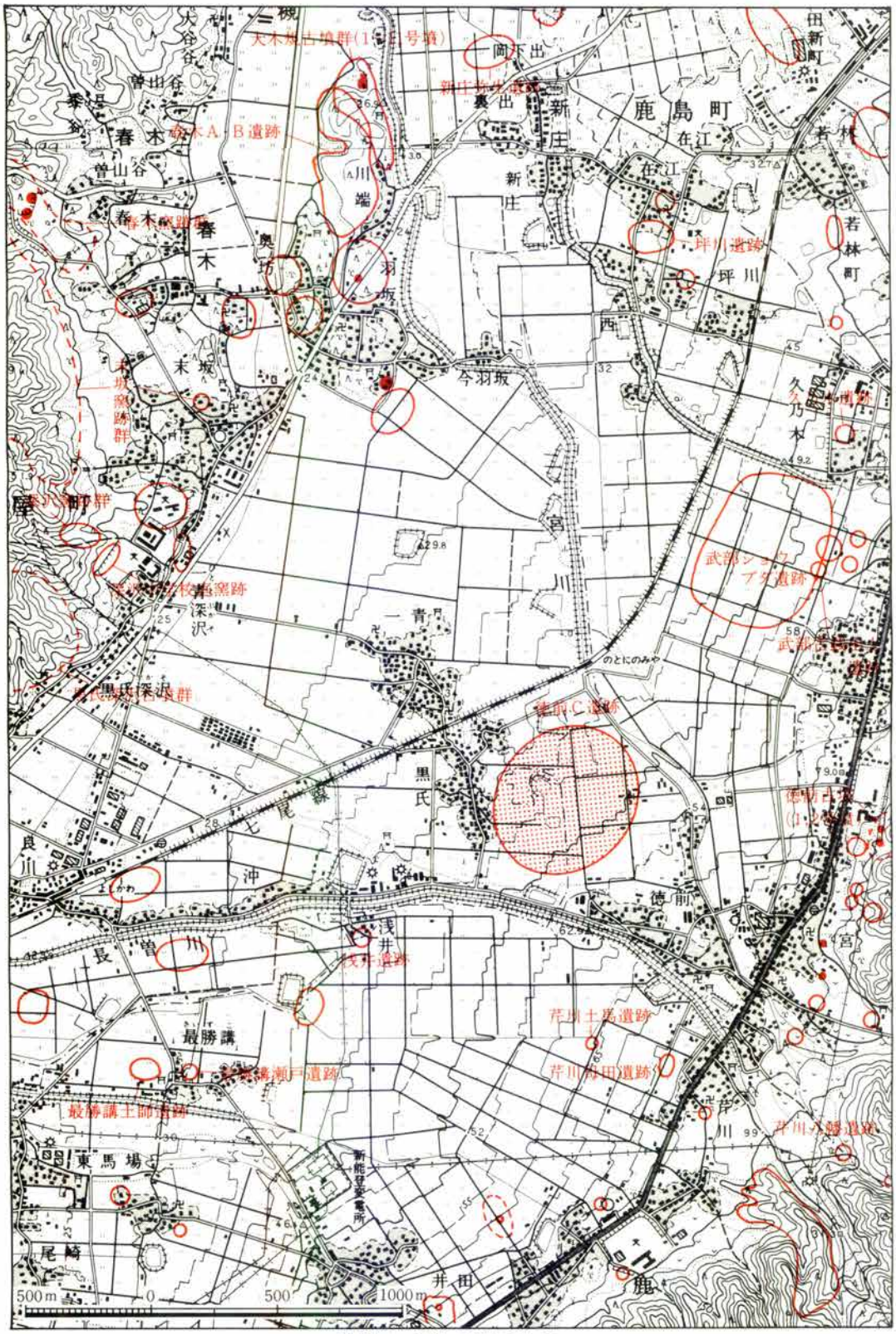
徳前C遺跡は能登半島の基部にあたる鹿島郡鹿島町徳前地内の通称七半(シチハン)から隣接する同郡鳥屋町黒氏地内にまたがって所在している。

遺跡の立地する邑知地溝帯は，新第三紀～第四紀更新世にかけて形成されたもので，半島基部の南西側羽咋市から北東側七尾市までの約20kmを幅約2～3kmの低地帯で斜断している。これによって山塊も大きく南北に二分されている。北側には標高188mを測る雷ヶ峰を最高峰とし、標高150m以下の眉丈山系が連なる。南側には宝達山系（宝達山637m）から派生する石動山（565m）や碁石ヶ峰（461m）等の峰々が七尾市の崎山半島まで伸びている。

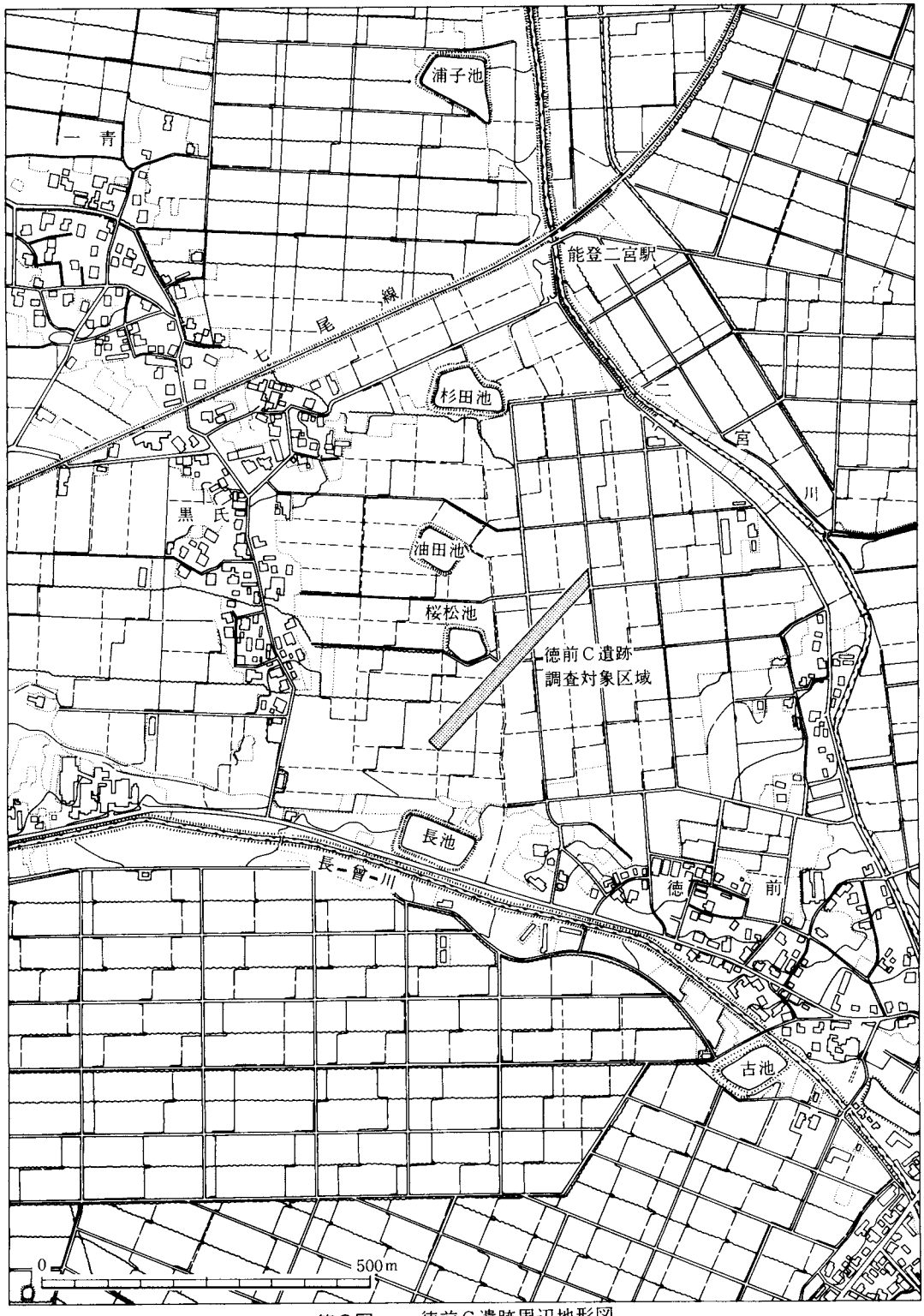
第1図　徳前C遺跡の位置

この邑知地溝帯は鳥屋町新庄から七尾市徳田付近で，北方の田鶴浜町方面に延びる二宮川水系の沖積低地と北東方向の七尾市方面に延びる御祓川水系に区分される。この地溝帯に注く河川は，北側眉丈山系がその背後で北及び北西方向に緩く傾斜しているため小谷川を除き少ない。一方南側の碁石ヶ峰や石動山及び原山等の比較的急峻で，深い渓谷の発達する地域からは二宮川・長曽川・久江川等の比較的水量の多い河川が流出している。本遺跡周辺の鹿島町二宮から徳前地区にかけては，県境に近い鹿島町原山から流出し，同町芹川から西流し鳥屋町良川から一転南西へ流れを転じて羽咋市の邑知潟へ注ぐ長曽川と石動山下杓子ヶ峠から流出し，同町二宮・徳前地区からやや蛇行ぎみながら北上し，田鶴浜町地内から七尾西湾に注ぐ二宮川が存在している。この邑知地溝帯南側の山塊から流出する河川は，山間部を抜けると天井川となるものが多く，二宮・長曽川もその例外ではない。南麓側にはこれらの河川の沖積作用によって形成された小扇状地が発達している。ここに報告する徳前C遺跡は徳前集落の北西側水田地帯で，二宮川・長曽川の両河川によって形成された複合扇状地のほぼ中央部に立地する。現標高で約45～47m付近に位置し，あたりは地溝帯中央部に向って緩やかに傾斜する緩斜面となっている。調査の結果本遺跡はこの扇状地の中でも僅かに高い微高地上に立地して，周囲の各所には砂礫層や砂層の堆積した旧河川の流路が確認されるなど，扇状地特有の複雑な地形の中に立地していることが明らかとなってきた。この最下層の縄文時代前期後葉～中期前葉から上層の中世にかけての各時期の生活面は、当時周囲に流れる小河川からの洪水等による厚い土砂の堆積層で完全に埋もれており，このことは本遺跡の立地する扇状地を形成していた当時の小河川の暴れ川的な姿を示すと伴に，当地の縄文時代から現在に到るまでの自然環境の変化を如実に示すものといえよう。

さて，周辺の歴史的変遷の中で最古の遺跡は，縄文時代早期のものとされる。すなわち鳥屋町若狭見地内から採集されている楕円押型文土器がそれである。これより時期が下るが早期末頃の尖底土器も同じく鳥屋町新庄地内から出土している。前期初頭の佐波式では鳥屋町花見月遺跡，田鶴浜町吉田野寺遺跡，七尾市水上ロクンダン遺跡等から出土し，吉田野寺遺跡では同期の土坑や炉跡



第２図　周辺の遺跡分布図



第３図　　徳前Ｃ遺跡周辺地形図

等の遺構も併せて検出されている。近年、七尾南湾から西湾域で検出されている該期の資料を検討する上で貴重な資料といえる。鹿島町の町域内で最古のものは本遺跡第４次調査で出土した前期後葉の福浦上層式土器で，数量は少ないながらも重要なものである。中期では南麓の藤井遺跡や鳥屋町花見月遺跡で出土している。また，石川考古学研究会が学術調査を継続して実施した福田原山遺跡（中期初頭～後期初頭）も存在している。この福田原山遺跡は石動山・碁石ヶ峰に連なる標高320ｍの丘陵上の平坦地に立地するものとして注目される。後期初頭では徳前地内から気屋式土器の出土が報告されているが少なく，中葉では花見月遺跡から僅かに出土しているだけと少なく実態は不明といわざるをえない。ただ，後期後葉の土器が南麓丘陵裾の井田テラガイ遺跡から、また，町域では初の晩期中屋式や下野式土器が隣接する井田堂坂遺跡それぞれの調査で出土しており，地溝帯内のみならず南麓丘陵裾も注意する必要があろう。

弥生時代では中期に遡る遺跡は，地溝帯西部の羽咋市吉崎・次場遺跡と東部では方形周溝墓の発見された七尾市細口源田山遺跡が確認されているが，地溝帯中央では発見されてはいない。南麓丘陵裾の井田テラガイ遺跡で中期頃の土器片が出土している。ただ、地溝帯中央部へ遺跡が進出するのは，本遺跡の下層で検出された弥生時代後期～古墳時代前期にかけてで，鹿島町の浅井，最勝講土師，芹川八幡，芹川母田，鳥屋町新庄，七尾市久乃木等の各遺跡が存在している。これなどは鉄製農具の普及と水稲耕作技術の進展を契機とし，さらにその集団内の人口増から地溝帯内へ進出したものであろう。

弥生時代後期末以降地溝帯内から田鶴浜町方面へ北上する二宮川を望む鳥屋町大槻地内の台地上や田鶴浜町吉田地内の経塚山に台状墓群が出現してくる。また，地溝帯の中央部では大型の前期古墳の造営が始まり，その墳形も前方後方や帆立貝形をとるものが多い。地溝帯の北に連なる鹿西町地内の眉丈山系最高峰の雷ヶ峰（標高188ｍ）には県下で最大級の規模の雨の宮１号墳（前方後方，全長70ｍ）、同２号墳（前方後円，全長70ｍ）が存在している。地溝帯南麓の鹿島町小田中には親王塚古墳と亀塚古墳が隣接して立地している。前者は70ｍを越える帆立貝形古墳の可能性があり，後者は推定約70ｍを測る前方後方墳である。水白鍋山古墳はその範囲確認調査により全長64ｍ，後円部径51ｍを測る帆立貝形古墳であることが判明し，５世紀前半代でも初頭に近い年代観が与えられている。また，ほ場整備事業に伴い範囲確認調査が実施された小竹ガラボ山古墳は全長約48ｍ，後円部径約28ｍ，前方部長約20ｍを測る前方後円墳の可能性が高く，５世紀中葉の年代観が与えられている。このほか前方後方形の墳形を呈するものは七尾市国分尼塚１，２号墳，鳥屋町大槻11号墳，川田ソウ山１号墳が存在しており，鳥屋・高階古墳群を含め，この地溝帯東部から二宮川下流域にかけては多数の古墳群が分布している。しかし，本遺跡周辺では７世紀前葉～中葉で無袖形横穴石室を有する円墳の徳前１，２号墳が南麓に存在しているのみと少ない。

奈良，平安時代では掘立柱建物が検出された武部ショウブダ遺跡，七尾市八幡昔谷遺跡，同古府タブノキダ遺跡が存在するがこれも少ない。武部ショウブダ遺跡では10世紀後半～11世紀にかけて，古府タブノキダ遺跡では８世紀前半から中頃にかけての掘立柱建物が検出されている。また，この時期は古墳時代から一貫して須恵器の生産供給を行う鳥屋窯跡群（春木，末坂等)が存在しており，本遺跡出土の須恵器もここから供給されたものであろう。

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と第１次～第４次調査の概要

徳前Ｃ遺跡の発見は，昭和30年代前半に実施された耕地整理の際に，土器片が採集されたことによる。また，昭和29年には調査区に隣接する鳥屋町黒氏地内に属する桜松池の改修工事の際に，耕土下約1.3ｍの砂層上部から梯子，舟形木製品，盆形土製品各１点が弥生時代後期から古墳時代前期の土器とともに出土したとの報告があり，第１次調査の際に下層として扱った弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層と一連の遺跡と考えられる。徳前Ｃ遺跡の発掘調査は，国道159号線の改築事業に伴ない以下に記したように４次にわたる調査が継続されたが，二宮川と長曽川によって形成された扇状地形の厚い堆積層の下から，縄文，弥生～古墳，奈良～平安，中世の各時代の包含層が確認されている。(註) とりわけ第３・４次調査で確認された縄文時代中期前半の良好な包含層の発見は，衝撃的であった。第４次調査を担当された西野秀和氏の指摘にある「邑知地溝帯におけるまばらな遺跡分布状態は歴史的な反映ではなく，扇状地形にまどわされた思い込みによるもので」あるという表現は，まさに本遺跡の調査成果から発する重みをもつ。

第１次調査（昭和52年）

試掘調査を対象地域約1,800㎡について実施したところ，奈良・平安時代と弥生時代後期～古墳時代の複合遺跡であることが明らかとなり，その結果をもとに７月15日から約750㎡を対象に発掘調査を実施した。上層の奈良時代前期の面では，８棟の掘立柱建物群などを検出し，湯尻は１時期に存在した３・４棟の建物群で構成されるまとまりを，集落の最小単位を示したものと考えた。下層の弥生後期～古墳前期の包含層は，遺構の存在こそ明らかにし得なかったが，出土土器をⅠ～Ⅲ様式に分類して編年的位置付けを行なった。調査期間は７月15日～８月26日と９月13日～10月６日までであった。なお、調査区の区割りは３ｍ角グリッドを基本とし，この区割りは以降の調査でも採用している。

第２次調査（昭和53年）

第１次に続いて湯尻が調査を担当した。第１次調査区の東及び北側（鹿島町地内）約300㎡と、西側（鳥屋町地内）約2,000㎡を対象とした。激しい湧水と土砂の崩落に悩まされ，十分な調査ではなかったが，奈良時代前期の遺構群を補足すると共に，弥生時代後期～古墳時代前期の良好な資料を得た。この他調査区の最西部では中世の包含層および遺構の一部を確認している。調査期間は７月20日～８月29日と９月21日～12月11日までであった。詳細については次節でとりあげる。

第３次調査（昭和54年）

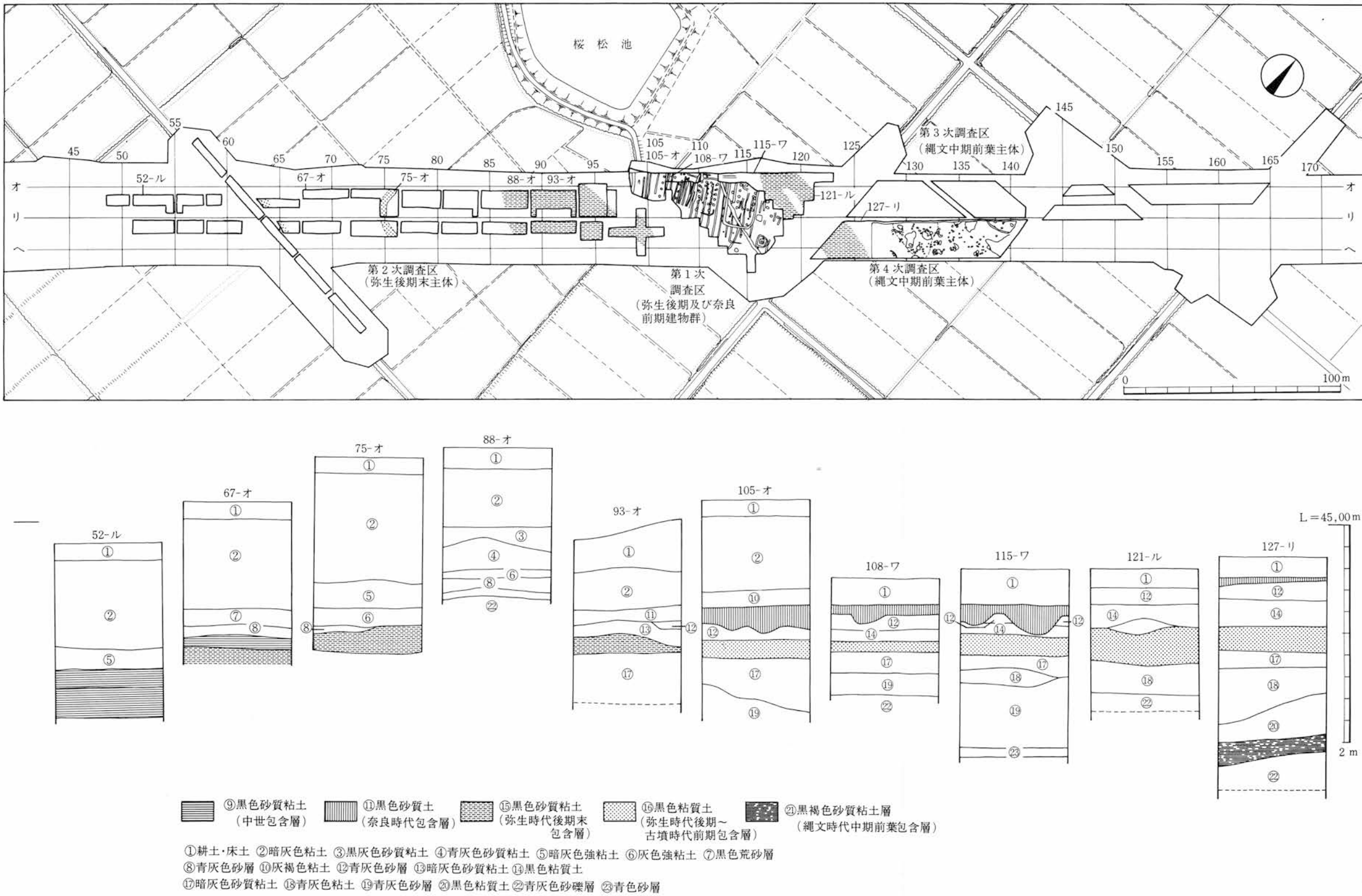
県教育委員会文化財保護課から改組なった県立埋蔵文化財センターの谷内尾晋司・中島俊一・米沢の３名が調査を担当した。調査面積は約700㎡で，第１次調査区の東側（鹿島町地内）の道路センターから北西部を対象とした。遺物包含層はこれまでの弥生時代後期～古墳時代前期と奈良時代前期層に加えて縄文時代中期前半の良好な包含層を発見し調査を行った。調査期間は10月１日～11月22日までであった。詳細については第３節でとりあげる。

第４次調査（昭和55年）

本次調査は，第３次調査区の道路中央線から南東部を対象とし，約600㎡を調査した。センターでは，第１次～第３次調査の結果から平行四辺形をなす調査区の三辺に鋼矢板を打ち込むことで発掘作業の安全確保と調査の万全を期すことを目的に建設省と協議を進め，矢板打ち工事の終了した10月５日から調査に着手している。調査は平田天秋・西野秀和・福島正実・浜野伸雄・土上正男の５名が担当し，12月21日に終了した。第４次調査の成果は担当者各氏の努力によって，昭和58年度『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）』として詳細にまとめられている。その成果の概要を列記すれば，第１～３次調査でも把握されなかった縄文時代および弥生時代～古墳時代の遺構が確認され，多量に出土する土器が単純な流れ込みによる堆積ではないことが明らかにされた。西野秀和氏による縄文土器の研究では，土器を12群に細別され文様と器種の分析から従来の新保式土器を二分するとともに，本遺跡の縄文土器が福浦上層式（前期後葉）～中平式（中期前葉）に至る５段階に比定されることを明らかにした。また，縄文土器の文様の受容と降下現象を指摘されており，縄文中期前半の土器研究には欠くことのできない重要な報告となっている。浜野伸雄氏による弥生時代後期～古墳時代前期の土器の研究では，第Ⅰ次調査報告書で湯尻が示したⅠ～Ⅲ様式の区分を基本的に継承しながら細分され，Ⅰ様式を柳田うわの～奥原併行期，Ⅱ様式を谷地石山～月影併行期，Ⅲ様式を金丸宮地併行期に編年するとともに，それぞれの器種の変遷を大系的にまとめられている。これまた該期の土器研究に大きな一石を投じている。

第２節　第２次調査の経過

第２次調査は，第１次調査の結果を受けて奈良時代前期の遺構群の広がりの確認と下層とした弥生時代後期～古墳時代前期の包含層の把握を目的に，第１次調査区の周辺で，排土の関係上調査ができなかった箇所，及び第１次調査区から西方向の鳥屋町黒氏地内の調査を実施した。結果は次章に記すように奈良時代前期建物群のうちの一棟の柱穴を補足するとともに，第１次調査で建物群に先行するとみた30条の平行溝の分布が若干北西側へ広がって計38条となった。建物群の東西方向はいずれも後世の河川による撹乱を受けていたため，期待した集落域の解明はできなかった。下層の調査では激しい湧水のため，今回も遺構の把握が不十分であったが，第１次調査区の周辺，特に110ラインより北東側（桜松池方向）では多くの弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土し，完形品の土器も幾つか出土した。第１・４次調査の成果と同様にⅠ様式（第４次報告書では柳田うわの～奥原併行期）に該当する土器の方が量的に多くみられた。100ラインから西方向では土器の出土量が激減したが74～76ラインと60～62ラインで集中的に土器が出土し，特に75・76ラインでは多量の完形品を含む土器が出土し，幅約４ｍ，深さ約40cmの南北方向に円孤を描く浅い溝に投棄されたような状況であ



第４図　調査区の配置と層序

った。土器はII様式（第４次報告書では谷内石山～月影併行期）を主体としたものである。65ラインあたりから西では，新たに中世の遺物を含む層が重なって出現し，農道取り付け部に設定したトレンチでは次第に中世の遺物が増え，55ラインより西で室町時代の遺構を一部確認した。第２次調査の結果，河川の度重なる洪水を受けてはいるものの，地点を少しずつ変えながら各時代の遺跡が形成されており，かなり広範な広がりをもつ遺跡であることが判明したのである。しかし，激しい湧水と排土や調査区壁の崩壊に対する対策もとらず，専従調査員が全期間を通じて殆んど湯尻一人であったことが，不十分な調査で終了した原因となったのであり，深く反省しなければならない。

７月18日～25日　器材搬入。発掘調査対象地の草刈りと杭打ち作業。現場小屋建設。

７月26日～８月９日　第1次調査区の西側（鳥屋町側）に，センター杭をはさんで幅３～６ｍトレンチ設定，耕土除去。中世以降の厚い堆積層があることを確認。

８月10日～24日　排水ポンプなどの器材を追加し，第１次調査区の東側（鹿島町）の奈良時代の遺構検出。第３号建物が３×４間の建物となる。13条の南北平行溝も確認。

８月25日～29日　120ラインから東側では，近世以降の河川による撹乱のため，奈良時代の遺構確認できず。耕土40～50cmで弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層確認。完形品を含む土器が出土。

９月21日～10月14日　稲刈りのため中断していた作業を再開。奈良時代の遺構群の遺存状態の悪い114～122ラインは，記録作成後，弥生時代後期～古墳時代前期の包含層を掘り下げる。この間，10月２日～９日までバックホーを使用して鳥屋町側調査区の耕土作業を併行。

10月15日～24日　鳥屋町側調査区の耕土作業。105～87ライン付近では，中世以降の河道跡とみられ，更に東側へ厚く暗灰色粘土層が堆積。

10月25日～11月２日　高橋主事の応援を受け，105～113ラインで検出した奈良時代の遺構群の実測作業。図化の後，弥生～古墳時代前期の掘り下げ。ヘドロ化した包含層の中から手探りで，土器を取り出す。

11月３日～９日　鳥屋町側調査区の発掘作業。土層観察用のたちわり作業をしながら，98～77ラインまで到達。この間殆んど遺物の出土なし。但し，奈良時代の遺構面である青灰色砂層は，90ラインまで確認。

11月10日～22日　75～77ラインで土器が大量に出土。河村主事の応援を受け，浅い溝状遺

構から発見された土器出土状態などを記録。赤彩された土器が多く，完形品となる土器が多いことが注目された。発掘作業の迅速化をはかるため，16日以降は金沢から作業員を運ぶ。10月15日には，現地で記者発表を行い，弥生時代後期～古墳時代の土器が大量に出土し，出土状態からみて溝状遺構を埋める際に祭祀が行われた可能性を指摘。

11月24日～30日　60～50ライン発掘。特に60～62ラインでも弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多く出土するが，土砂の崩落が激しく作業難行し発掘作業断念。

12月１日～２日　鹿島町側調査区のたちわり作業を進め，耕土下約２ｍまで掘り下げる。弥生時代後期～古墳時代前期の包含層とその下部について最終確認。

12月５日～８日　55～75ラインの農道わきのトレンチ，およびその西側の発掘作業。中世の遺物包含層や遺構の一部を確認するが，土砂の崩壊が激しく，部分的調査で断念。

12月９日～10日　器材の整理を行い，現場徹収。

第３節　第３次調査の経過

第３次調査は，第１・２次調査で確認された奈良時代前期と弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物の把握を目的に，第１次調査区の東側（鹿島町地内）の道路センターから北西側の調査を実施した。

調査は同バイパス路線内での包含層の拡がりを確認するため，同路線の七尾側から羽咋側へトレンチによる確認調査を実施しながら進めた。その結果，145ラインから七尾側にかけては耕土・床土下で砂礫層である部分が多く，同層中には僅かに磨耗した土器の細片が含まれてはいたが，旧河道であったことが窺われた。142ラインから羽咋側の耕土・床土下で奈良時代前期の包含層（⑪層）が確認されたことから，この部分を全面調査することにした。調査区は路線内に残る旧水田区画にあわせ，140ラインから南西側水田部分をＢ区，このＢ区南西側並び水田をＡ区，このＡ区と農道に挟まれた三角形部分をＡ拡張区と呼称した。この奈良時代前期の包含層下で地表下約100㎝あたりに弥生時代後期～古墳時代前期の包含層（⑯層）が拡がっていた。さらにこの（⑯層）より下部の地表下約150～200㎝で縄文時代中期葉の包含層（㉑層）が堆積していた。この層は128～135あたりで厚く堆積し，130～135あたりではセンターライン側の調査区壁面近くの青灰色砂礫層のベース面はやや高く，ピット等の遺構も存在していた。地形的にはセンターライン側から西側へ向って傾斜し，Ａ拡張区では遺物量も少なく，ベース面も南西方向へ下降していくことが窺えた。

ただ，調査自体は地表下約200㎝まで掘り下げたことから激しい湧水にみまわれ，包含層がヘドロ化してそれに足を取られることも度々であった。その中から手探りで遺物を採集する有様で，ヘドロと水を汲み上げたバケツの中から遺物を取り上げたこともあったと記憶している。壁面が激しい湧水のため崩壊し，土層図や壁際で検出したピット等の実測図作成も困難なため，センターより山側路線内の第４次調査に万全を期すことで断念した。しかし，縄文中期前葉の包含層と

遺構が検出されたことは，地溝帯の原始時代を再考させるだけの大きな衝撃を与えたといえる。

10月１日～５日　器材搬入，発掘予定の草刈りと杭打ち作業。

10月９日～15日　七尾側からＡ区までの確認調査。

10月16日～23日　Ａ・Ｂ区の弥生後期～古墳前期の包含層を掘り下げると間層を挟みその下部から縄文中期の包含層が検出され大いに驚く。湧水のため包含層等がヘドロ化し，発掘作業が難渋する。

10月24日～31日　Ｂ区の縄文中期の包含層を掘り下げる。ここも激しい湧水のため作業進まず。上部の間層及び耕土除去のため重機（ユンボ）を投入する。

11月１日～16日　Ａ区南西側を新たにＡ拡張区として掘り下げる。湧水が激しく作業進展せず。

11月19日　松岡所長現場視察する。

11月20日～21日　Ａ・Ａ拡張区の排水後掘り下げを終了する。鹿島バイパス路線内で発見された武部遺跡の現地確認をする。

11月22日　武部遺跡の試掘調査を行う。本日で調査を終了し，センターへ撤収する。

（註）　徳前Ｃ遺跡については，これまでに次の文献が刊行されている。

高堀勝喜「鹿島郡鳥屋町黒氏出土の木器について」石川考古学研究会々誌第８号(1956)

湯尻修平『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅰ）』石川県教育委員会（昭和53年）

西野・平田・藤・浜野・福島『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）』　石川県立埋蔵文化財センター（1983）

高堀・米沢・平口・橋本・谷内尾・湯尻・平田「第二編　考古資料」石川県『鹿島町史』資料編（続）上巻（1982）

第３章　層序と検出された遺構

第１節　層　　序

徳前Ｃ遺跡は二宮川と長曽川が形成した旧扇状地の扇端部分に位置し，標高は45～46ｍを測る。邑知地溝帯は，能登半島基部の羽咋から七尾にかけて斜断する典形的な地質構造であるが，碁石ヶ峯，石動山，城山に源を発する小河川は，急峻な山間部を抜けて低地に遅すると，そこに小規模な小扇状地を形成している。遺跡がこのような条件下に立地しているため，度々洪水に見舞われており，遺物包含層や遺構を寸断する河道の跡も数ヵ所（大きくは２ヵ所）で確認した。第１次～４次にわたる調査は延長350ｍにもなるが，約２ｍの深さに存在する包含層の発掘作業は，困難を極めた。第２次・３次調査では，十分な記録を作成しないまま崩壊した調査区や多量に出土する遺物をヘドロ化した包含層から手探りで取り出すという有様であった。従って本節で扱う層序も基本的な部分を選択して取りあげ，第１・４次調査の成果も取り入れて概説したい。

第４図に層序の代表例を記したが，調査区の北東部の層序は第４次調査の報告から引用しておく。「発掘区中央部分での基本的層序は，Ⅰ耕作土（灰茶褐色粘質土，10～20cm），Ⅱ黒色砂質土層・黒色粘土層（弥生～奈良時代遺物包含層，20～40cm）Ⅲ青灰色粘質土（20～30cm），Ⅳ黒褐色粘質土層（40～50cm），Ⅴ黒褐色粘質土層（縄文時代包含層，10～20cm）で，暗茶褐色砂礫土の縄文時代遺構検出面に至るが，各々の層位は砂粒の含み具合や色調によってさらに細分される。最終遺構面としたベースも地点によって変化し，灰褐色砂質土となっているところも見られる。水田面から最終検出面までは150～200cmをはかった。」と言い，第４図の127－リグリッド西部で略測した堆積層と一致する。また，第４次調査区の「南西地区では奈良時代の須恵器は黒色土上面で散発的に得られ，グリッドナンバー134ラインから北東部分へのびていないし，134ラインより南西側では遺構の検出はなかった。弥生時代の包含層は131ラインまでは青灰色粘質のベースを持つが，北東方向へむけて傾斜を強め，135ラインからは縄文時代包含層と直接的に重複するようなかたちで堆積していた。」と奈良時代と弥生時代の包含層の北西側の限界を示している。第２次調査区の116ラインから北では，東西方向に流れる近世以降の河道跡が確認され，117～120ラインでは奈良時代及び弥生後期～古墳前期の遺構・包含層はかなりの撹乱を受けていた。砂利層からは磨滅した土器の他，近世陶磁器断片，寛永通宝，鉄製羽釜断片などが出土した。この状態は第４次調査区でも「調査区の南西端，長軸方向で約20ｍの範囲は，耕作土下層に近世陶磁器断片や流木を含む河道が北流するような状況で認められ」ていて符合する。

第２次調査では，第１次調査区の北西部の奈良時代の遺構を確認するとともに，100～120ラインのオ・ワ列区で下層の調査を実施した。層序の状態は第１次調査の所見と全く同様で，基本的な堆積層はⅠ15～20cmの耕土・床土（第４図①層），Ⅱ０～15cmの黒色砂質土（奈良時代前期包含層，⑪層）Ⅲ10～15cmの青灰色砂層（⑫層），Ⅳ15～20cmの黒色粘質土（⑭層），Ⅴ10～30cmの黒色砂質土（弥生時代後期～古墳時代前期包含層，⑯層），Ⅵ10cm前後の暗灰色砂質粘土（⑰層），Ⅶ10～20cmの青灰色粘土（⑱層），Ⅷ15～50cmの青灰色砂層となり，更にその下では青灰色砂礫層（㉒層）

や青色砂層（㉓層）が存在した。116～120ラインに存在した近世以降の河川による撹乱のため，必ずしも明確さを欠くが縄文時代中期の遺物包含層が115ラインより北西側にまで広がっていないと判断される。弥生時代後期～古墳時代前期の包含層の下には青灰色の砂や砂礫層が堆積しており，仮に縄文期の包含層があれば更にこの下か，あるいは砂や砂礫層が堆積した際に押し流された可能性がある。

第１次調査の結果からその一部は明らかになっていたが，徳前集落と桜松池を結ぶ農道の南西側（95と105ラインの付近から西側方向，100ラインは欠番。）では北西側の層序と全く異なっていた。105ラインから50ラインでは耕土の下に平均50cm（薄い所で30cm前後，厚い所で100cmに達する。）の暗灰色粘土層が堆積しており，50～60ラインの状況から中世以降に堆積した層であるとみられた。94から87ライン付近では粘土層の所々に砂を含んでおり，この暗灰色粘土層が数回の洪水によって堆積したと推察された。奈良時代前期の遺物包含層は次第に薄くなりながら，90ライン付近まで認められたが，ベースとなる青灰色砂層(⑫層)の状態が悪く，遺構を確認することができなかった。90ラインより南西側では暗灰色粘土層下部の強粘土層の下に薄い黒色砂質粘土（弥生時代後期末包含層，⑮層）が断続的に認められ，散発的に遺物が出土した。74～76ラインと59～67ラインでは特に遺物量が多く，75～77ラインでは南北方向にのびる〝く〟の字形に彎曲した浅い溝の様な落ち込みから完形品を含む大量の土器が出土した。59～67ラインでも，特に60～62ラインでは土器の出土量が多く，同様な遺構の存在が予測されたが，土砂の崩落と湧水のためしばしば危険な状態となったため，調査の進行を断念せざるを得なかった。

70ライン付近より西側では，耕土下に80～100cmの厚さで堆積した暗灰色粘土の下に黒色砂質粘土（⑨層）が存在し，西へ行くに従ってその厚味を増していた。この層からは土師質土器片や珠洲焼片が出土し，中世の包含層であることが明らかとなり，50～55ラインでは石列の様な遺構の一部を確認した他，漆器椀１点も出土した。黒色砂質粘土は50ラインより更に西側へ伸びていたが，75・76ラインの弥生時代後期末の溝状遺構の調査に力を注いだため，これ又その存在を確認したに止まった。弥生時代後期末の包含層（⑮層）は，57ラインあたりまで中世包含層の下に確認されたが，それより西側では堀り下げ作業が困難であったため，未確認である。

以上，徳前Ｃ遺跡の層序について概説してきたが，各時代の遺物包含層の下に重複して存在しており，しかも激しい湧水と土砂の崩落にはばまれての調査であったため，十分に把握できたとは言えず調査の不備を反省している。確認できた事項を以下にまとめて整理しておきたい。

１，95と105ラインから西方向では，中世以降の厚い堆積層（②層）があり，70ラインより西側では中世の包含層および遺構の一部が確認された。94から87ラインでは中世以降の河道跡と推定された。

２，90ラインより西側，57ライン付近までは，地表下約100～130cmに弥生時代後期末の遺物包含層（⑮層）が断続的に確認され，60・61ラインと74～76ラインでは集中的に土器が出土し，75・76ラインでは浅い溝状遺構を検出した。

３，105ラインあたりから東側，第１・３・４次の各調査では，地表下約100cmに弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層(⑯層)が確認され，第４次調査区では弥生時代後期の住居跡１棟

が検出されている。

4，93ラインあたりから東側，第1・3・4次の各調査区では，耕土・床土の下に奈良時代前期の遺物包含層（⑪層）が確認され，基盤となる青灰色砂層の状態が良好であった第1次調査区では，該期の建物群などの遺構を検出した。

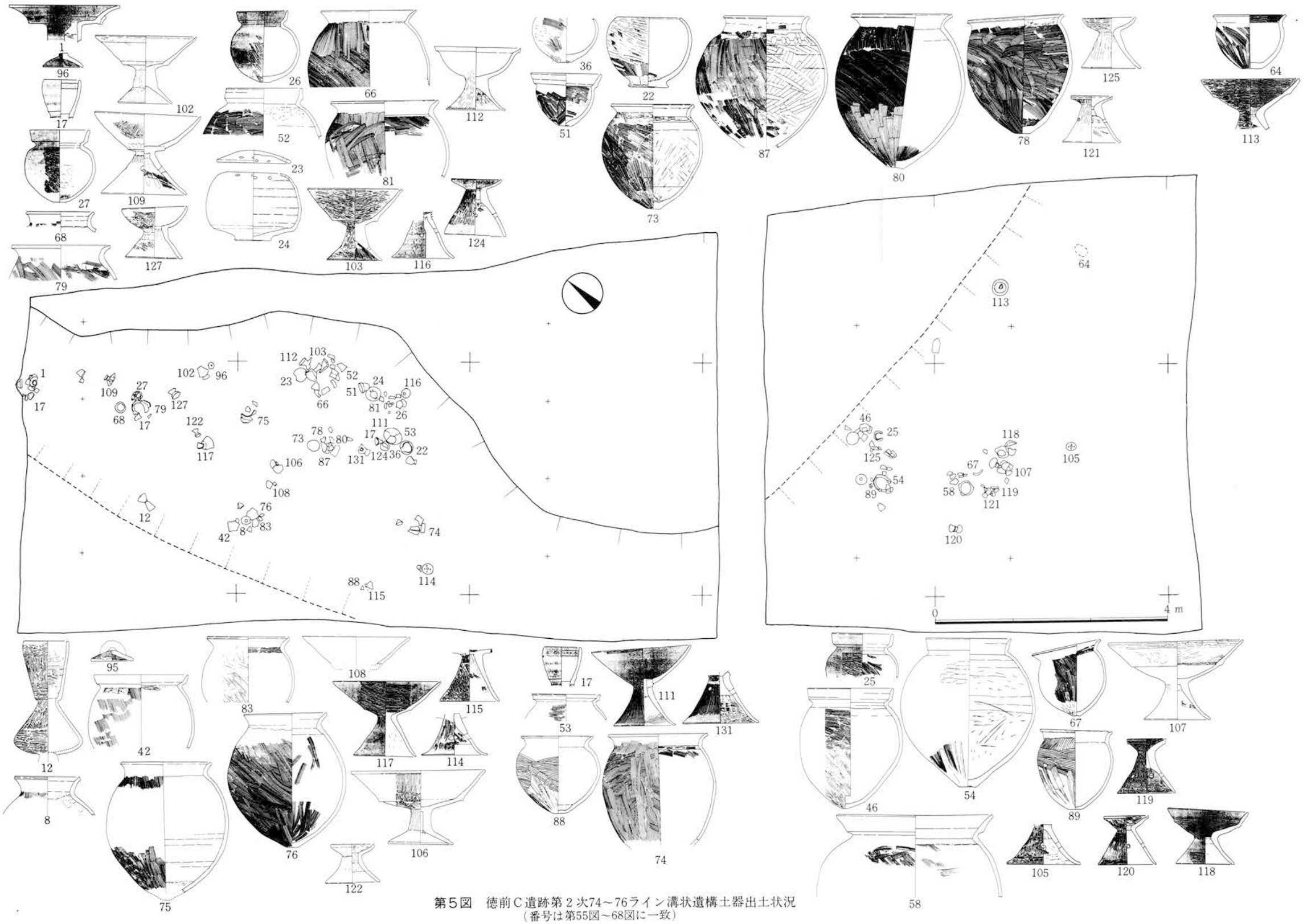
5，127ラインから東側，第3・4次調査区では地表下約150～200cmで縄文時代中期前葉の遺物包含層（㉑層）および遺構を検出した。縄文時代の包含層の西側への伸びは，近世の河道跡による撹乱のため不明確であるが，115ラインより北西側にまで広がっていないと判断される。

第2節　縄文時代の遺構（図版30）

縄文時代の遺構で検出されたのはA区，A拡張区南東側壁際の微高地部分からで，それは青灰色砂礫層（㉒層）のベースに掘り込まれた土坑とピットであった（図版30参照）。その数は僅かに5～6個と少なかった。この遺構の存在が確認された微高地の北西側は，微高地側からこの の方向へ傾斜して低くなり，ここに激しい湧水でヘドロ化した包含層等の土が絶えず溜まるため，それ以上の確認はできなかった。ただ，地形的にも傾斜して低くなっており，遺構の存在していた可能性は少ないであろう。A拡張区やB区では遺構は確認できなかった。このA区で検出された遺構は調査区の壁際近くに存在し，この壁面からの湧水で壁面自体が度々崩壊しており，これに近づいて実測作業を行うには危険なため，これらの遺構を実測することを断念せざるをえなかった。また，このA区で検出された遺構は，第4次調査でグリッドナンバー130～133にかけて検出された遺構と対応するものであろう。

第3節　弥生時代の遺構（第5図，図版2～6）

弥生時代後期の遺構も土砂の崩落と激しい湧水にはばまれ，検出したのは第2次調査の74～77ラインの溝状遺構1ヵ所のみであった。第2次調査では110～120―オ・ワ区で，多くの土器が出土し，完形品も含まれていて，土器が数個体並んで発見されるような状況もみられたから，溝などの遺構が存在したことは疑いない。しかし，遺構の姿を把握することはできず，ヘドロ化した包含層から遺物を採取したにとどまる。74～76ラインで検出した溝状遺構は，幅約4m，深さ35～40cmの浅い溝で，センターを挟んで延長約15m分を調査した。北西方向から南東方向に孤を描いて彎曲する溝は，青灰色砂層をベースとしていたため，堀り込みの肩部は刻々と崩壊する状態であった。溝のやや不整形なプランやその深さから，これが人工的に手が加わった遺構と見るよりも，自然の凹地や流路であった感じが強い。第5図に示したように中に堆積した黒色砂質粘土からは，多量の土器が出土した。発掘時に取り上げてしまっていた個体もあって，完掘状態での残存状況を示したものであるが，壺・鉢・蓋・甕・高杯の各器種が認められる。完形品も多く，復元した個体も含めると，60数個体がその全形を窺うことができた。出土状態からみて，溝状遺構に一括投棄されたと推定され，土器も若干の型式差を含む個体がないとは言えないが，Ⅰ型式の枠内で納まり得る土器群であると考えている。出土土器については，次章で扱うことにするが，完形品が多いこと，赤彩された壺・高杯・器台などが多いこと，くの字形口縁の甕が多いことの



第５図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構土器出土状況
（番号は第55図～68図に一致）

３点が特徴としてあげられる。以上のような土器の出土状態から，この遺構が廃棄される際に何らかの目的で，多量の土器が入れられたと推定される。なお同様の溝状遺構と推定される遺構の存在を60～62ラインを中心に確認したが，土器の採取にとどまる調査に終っていることを付け加えておきたい。

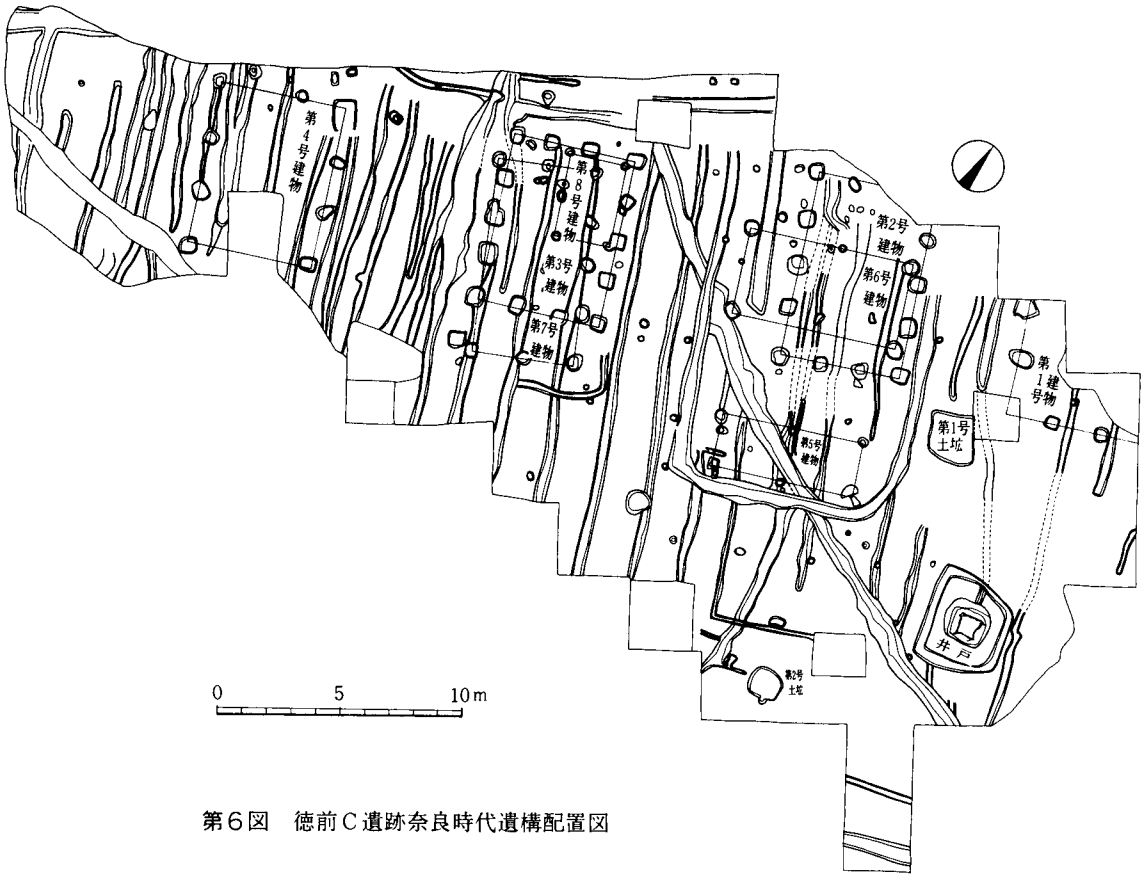
溝状遺構の土層

第４節　奈良時代の遺構（第６・７図，図版24）

奈良時代の遺構については，『報告書Ⅰ』で報告済みであるが，第２次調査で４号建物の規模を把握し，第１次調査と同様なほぼ南北に平行する溝８条を追加検出している。重複する部分も多いが該期の遺構についてその変遷を中心に概観しておきたい。

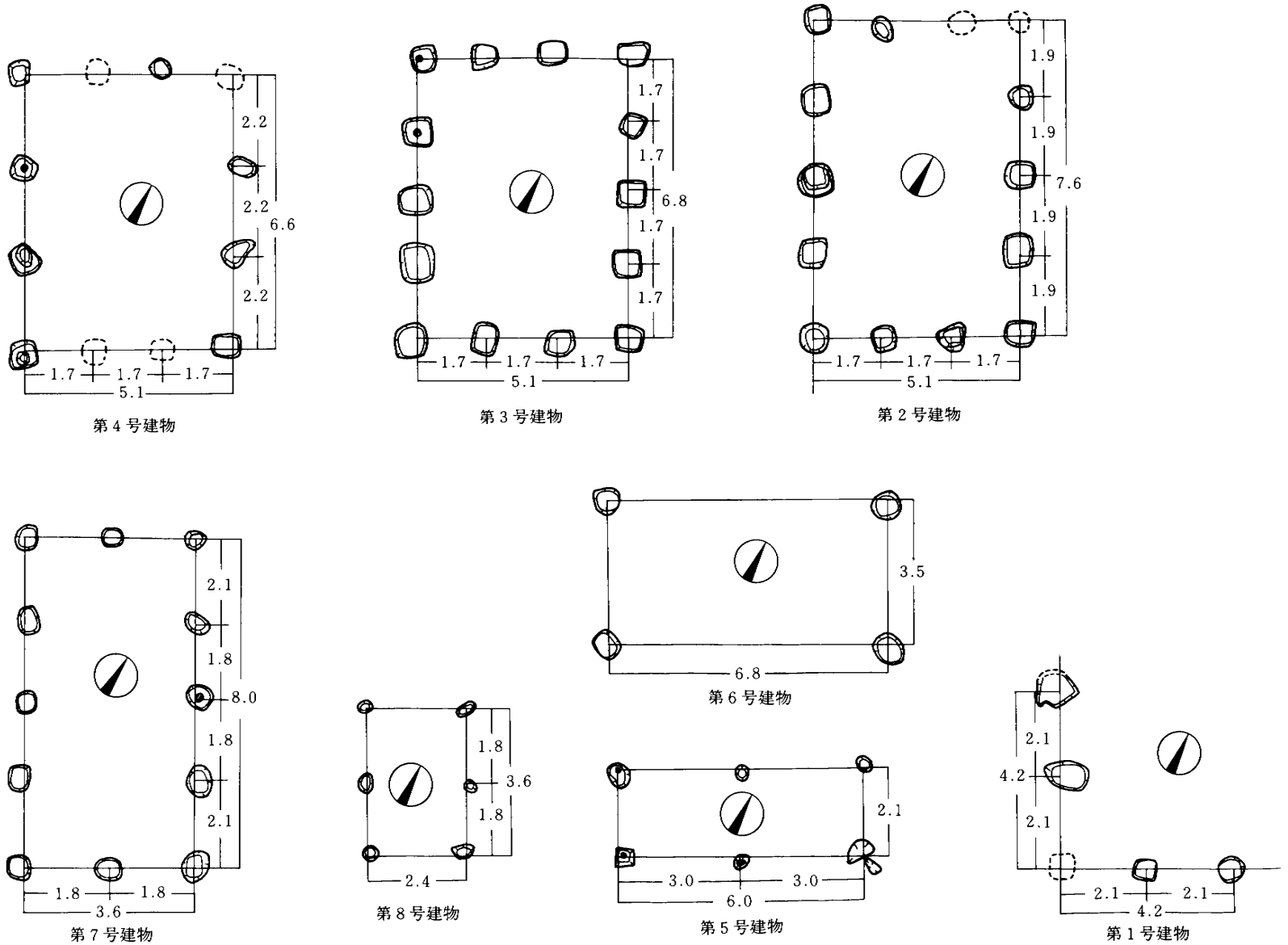
奈良時代前期の８棟からなる建物群に若干先行するとみられる，ほぼ南北に平行して走る溝は第１・２次調査で計38条検出した。幅30～50cm，深さ６～11cmの浅い溝で，黒色の覆土中からは須恵器・土師器の小片が断片的に出土する。平行溝は，２ｍ前後の等間隔に存在しており，第２次調査区の西端部では，重複した溝の間隔と方向の比較から38条の溝が一度に造られたのではなく，二期に分解されることが判明した。本遺跡にみられる様な平行溝は，辰口町辰口西部遺跡群（東大寺領幡（ばん）生庄の一角に推定されている。）や羽咋市寺家遺跡などでも発見されているが，一般に農耕に関係した，例えば畝間の排水溝などの機能目的が推定されている。

８棟の掘立柱建物は，建物の配置関係から大きく３期にわけて建てられたとみている。建物群に付随する遺構として，コの字やＬ字形に巡る溝３ヵ所と井戸１基，２基の土坑がある。個別建物については，第７図と第１表に集成しておいた。２・３・４号建物の３棟の建物は，東西方向の梁行柱を同一線上に揃えて建てられ，ほぼ等間隔に並列している。３棟の建物は規模も類似しており，計画的に配列されたとみられる。２号建物は，東西5.1ｍ，南北7.6ｍ，平面積38.76㎡の規模をもつ。梁行３間，柱間寸法1.7ｍ等間，桁行４間，柱間寸法1.9ｍ等間で，柱穴の掘り方は一辺約80cmの方形である。３号建物は，東西5.1ｍ，南北6.8ｍ，平面積34.68㎡の規模をもつ。梁間３間，柱間寸法1.7ｍ等間，桁行４間，柱間寸法1.7ｍ等間で，柱穴の掘り方は一辺約70cmの方形を基本としている。４号建物は，東西5.1ｍ，南北6.0ｍ，平面積30.1㎡の規模をもつ。梁行３間，柱間寸法1.7ｍ等間，桁行３間，柱間寸法2.1ｍ＋1.8ｍ＋2.1ｍで，柱穴の掘り方は一辺70cmの方形を基本としている。３棟の建物群と同一の方位となる遺構では，２号建物の南側にコの字形に巡る溝があり，これと関係する遺構であろう。次の時期に建てられたとみるのは，５号・６号建物とそれをコの字形に囲む太い溝，およびその東西に位置する１号，８号建物の４棟である。５号・６号建物は，第１期の建物群と異なり建物の主軸を東西に置いている。５号建物は，６号建



第6図　徳前C遺跡奈良時代遺構配置図

物の南東に並列する梁行1間（2.1m），桁行2間（6.0m），平面積12.6㎡の建物である。6号建物は，5号建物と4.2m離れており，梁行1間（3.5m），桁行1間（6.8m），平面積23.8㎡の長方形で，柱穴は一辺70cmの略方形である。2棟の建物を囲む溝は，幅50～102cm，深さ10～15cmの浅い溝で，6号建物を母屋とすれば，並列する5号建物は脇屋的な付属建物ということになろう。1号建物は，近世以降の撹乱を受けていたため，その全容を明らかにし得なかったが，他の建物例から推定して梁行2ないし3間，桁行4間の建物規模と考えられる。柱間寸法は梁・桁とも2.1mを計る。8号建物は，梁行1間（2.4m），桁行2間（3.6m），平面積8.64㎡の小規模な建物である。井戸は，第1期ないしは第2期に関係する遺構とみているが，井戸枠は一辺90cmの方形をなし，四隅に柱を立てた横桟縦板組み式の構造であった。第3期の建物として7号建物があてられる。東西4.2m，南北8.4m，平面積35.28㎡の規模をもち，梁間2間，柱間寸法2.1m等間，桁行4間，柱間寸法2.1m等間を計る。柱穴の掘り方は径50～70cmの円形である。建物の東南角に雨落ち溝の一部が確認されている。2基の土坑は，須恵器・土師器の小片が出土したが，建物群との共伴関係を明らかにできない。以上，奈良時代前期の遺構について記したが，その性格等については第5章でまとめてとりあげたい。



第7図　徳前C遺跡掘立柱建物集成（柱間数置単位m）

第1表　徳前C遺跡建物計測値一覧

建物番号	柱間（梁行×桁行）	柱間寸法		梁長	桁行	面積	掘り方の形・規模	方位	時期	備考
		梁行	桁行							
1	2以上×2以上	2.1m等間	2.1m等間				略方形0.6～0.7m	N-25°-E	2期	
2	3×4	1.7m等間	1.9m等間	5.1m	7.6m	38.76m²	方形0.8m	N-28°-E	1期	南側にコの字形溝，3号，4号と梁行同一線，6号と重複
3	3×4	1.7m等間	1.7m等間	5.1m	6.8m	34.68m²	方形0.7m	N-28°-E	1期	2号，4号と梁行同一線，2号との間7.4m，7号，8号と重複
4	3×3	1.7m等間	2.2m等間	5.1m	6.6m	33.66m²	方形0.7m	N-28°-E	1期	1号，2号と梁行同一線，3号との間7.0m
5	1×2	2.1m	3.0m等間	2.1m	6.0m	12.6m²	円形0.3～0.5m	N-65°-W	2期	東西棟，6号との間4.2m
6	1×1	3.5m	6.8m	3.5m	6.8m	23.8m²	円形0.7m	N-65°-W	2期	東西棟，5号とともにコの字形溝に囲まれる
7	2×4	2.1m等間	2.1+1.8+1.8+2.1m	4.2m	8.0m	33.6m²	円形0.5～0.7m	N-20°-E	3期	3号，8号と重複，東南角にL字形溝
8	1×2	2.4m	1.8m等間	2.4m	3.6m	8.64m²	円形0.4m	N-25°-E	2期	6号との間5.5m，3号，7号と重複

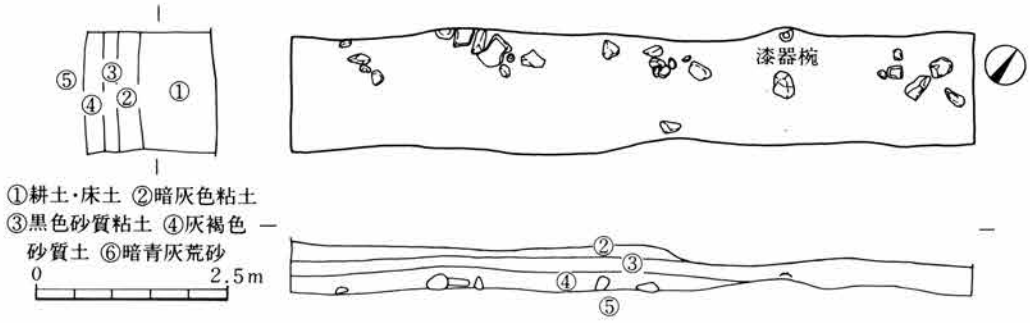
（註）『報告書Ⅰ』および『鹿島町史資料編(続)上巻』でも一覧表を掲げたが，誤記・誤植があり，本表をもって訂正したい。

第５節　中世の遺構（第８図）

第１次調査時にも耕土や床土から珠洲焼の小片や北宋銭が出土しており，近隣地に中世の遺跡が存在するのではないか，という予測をもっていた。第２次調査では，鳥屋町側の調査区をその対象としたが，75～60ラインの農道脇に設けたトレンチから珠洲焼や土質土器が発見されるに至り，この付近から西側に中世の遺跡が存在することが判明した。しかし，多量の排土と壁の崩落，湧水に悩まされる状況では，十分な調査もできずに途中で断念せざるを得なかった。52～55－ル区に設定したトレンチでは，耕土下に１ｍ足らず堆積した粘土層の下から砂を含んだ黒色の遺物含包層が確認された。堆積の状態については，第２節で概説した通りである。このトレンチでは，第８図に示したように河原石が並べられた状態で発見されており，中世の遺構の一部がかかったものと判断された。農道脇のトレンチでも，柱根２本がヘドロ化した包含層の中から掘り出されており，この近辺一帯に中世の遺構が存在することは確実といえる。遺物では珠洲焼片，土師質土器片の他，漆器椀１点（底部から胴部下半のみ残存したが，取り上げ後の処置が悪く崩壊）が出土している。

配石の出土状況

漆器椀出土状況



第８図　徳前Ｃ遺跡第２次 52～55－ル 調査区中世遺構

第4章　出　土　遺　物

第1節　縄文時代の遺物

第3次調査で出土した遺物は，遺物箱で14箱分である。その出土地点はA区，A拡張区南東側の壁面際の微高地上に堆積していた包含層と湧水のためヘドロ化した包含層から取り上げたものである。第4次調査では130～133ラインにかけて集中的に遺棄されていたという。ここに報告する土器群もその出土位置が対応し，時期も中期前葉と共通することから，その遺棄されていた土器群の一部であろう。

(1)　土器・土偶

第3次調査出土の土器群の一部は鹿島町史で発表しているが，その分類が十分でないため使用しない。第4次調査出土の土器群は西野秀和氏が精緻な考察を加えて報告し，その内容も大方の承認を得ている，ここでは西野氏の報告した群別と類別に準拠して行きたい。ただ，第1群土器（前期末葉に含まれる土器）は存在せず，第9群土器（類例の少ない文様をもつもの，および，口唇部突起）は細片のため掲載していない。また，群別や類別での大小の差，その他をＡＢＣで区分しているが，その表現や内容については第3次調査の出土遺物に合せて変更した。以下，群別と類別の基準を記しておきたい。

第2群土器　口縁部に斜位格子目状文，綾杉状文，細い半隆起線文を持つもの。

第3群土器　口縁部に縦位の平行半隆起線文を持つもの（縄文地文上に引くものと無文地上に引くくもの)。

第4群土器　口縁部に軌軸文，印刻蓮華状文をもつもの。

第5群土器　口縁部と胴部に弧線文，Ｂ字状文を持つもの。

第6群土器　口縁部に横位の無文帯を持つもの。

第7群土器　口縁部に横位の縄文帯を持つもの。

第8群土器　胴部に半隆起線文を持つもの（縄文地文上に引くものと無文地上に引くもの)。

第10群土器　縄文施文の粗製土器。

第11群土器　浅鉢器形のもの。

第12群土器　胴部片及び底部。

1類口縁がキャリパー形を呈する深鉢。　2類口縁が「く」の字形に内屈する深鉢。　3類口縁が直立かやや外反する円筒形の深鉢。　4類口縁の外傾する深鉢。　10類口縁が「く」の字形に外傾する深鉢。　11類内屈する口縁の上端が外反する深鉢。

第2群土器

口縁部に斜位格子目状文を持つものを主体にまとめたが，類似するものも含めた。

1類A（第9図10，図版39）

これは小片のためやや難しいがここに分類した。波状口縁で上端から半隆起線文を引き，これをヘラ状具で切って斜位格子目状文としている。胎土，焼成は良好で，色調は灰褐色を呈する。

２類（第９図１，３，図版39）

口縁が「く」の字に内屈する深鉢で，１と３は同一個体であるが接合しない。口縁部上端から爪形文を施した隆帯を垂下させ，また，口縁部上端と屈曲部に爪形文を配し，この内部に右下りの半隆起線文を左下りのヘラ先で切り斜位格子目状文としている。頸部にはＬＲの縄文を施す。胎土，焼成は良好で，灰褐色から淡灰褐色を呈す。３は波状口縁を呈するもので，口縁上端にヘラ状具の刻目，下段には爪形文を施して区画し，中は１と同様である。焼成はやや不良で脆く，淡白褐色を呈する。

２類Ａ（第９図２，４，図版39）

この１，３は斜位の格子目状文を施すものであるが，２は口縁上端から屈曲部に幅約１cmの爪形文を施し，内部に幅約３mmの横位の半隆起線文を引いている。内面端には粘土紐を貼付して肥厚させ，接合痕が残る。色調は淡白褐色を呈し，焼成は不良でやや脆い。４は口縁部に幅約３mmの半隆起線文で綾杉状に配し，屈曲部以下に同様な幅の半隆起線文を垂下させている。色調は灰茶褐色を呈し，焼成は良好である。

３類（第18図134，図版35）

口縁が直立する円筒状の深鉢で，口径約38.6cmを測る大型品である。口唇部はやや肥厚し，器厚も約1.5cmと厚い。口縁部文様は口縁上端から垂下する太い隆帯状の半隆起線文と縦位の半隆起線文で加飾した突起で４分割していたと推定させる。分割された口縁部内に斜位格子目状文を配するが，２類（１，３）のように密なものではない。胴部には木目状撚糸文を施す。胎土，焼成は良好で，色調は淡白灰褐色を呈する。

４類（第９図11～13，図版39）

口縁の外傾する深鉢で，口縁の上下に横位の半隆起線文を引き，この中を斜位格子目状文としている。11は口縁上端が肥厚するが下部は薄手の作りで，外面の遺存状況は悪く砂粒の剥落が著しい。12，13は厚手の作りで，13は口唇部をやや平に仕上げている。全般に砂粒を含み焼成もあまい。11は淡灰褐色，12は淡灰褐色と淡白褐色，13は黒灰色や淡褐色を呈する。

11類（第９図14，図版39）

波状口縁を呈し，口唇部に爪形文を，口縁部文様帯の上部に爪形文と押し引き痕を残す半隆起線文を横走させ，波頂部下から口縁部文様を分割する爪形文を加えた隆帯を貼付している。これらに囲まれた中を斜位格子目状文としている。口縁部文様と波頂部間には無文部を残している。胎土，焼成は良好で，色調は灰褐色を呈している。ただ，この土器は波状口縁を呈するが，その色調や文様等の施文法が１類の（１）と類似しており，同一個体の可能性も考えられる。

第３群土器

キャリパー形の口縁を呈し，口縁部に縦位の半隆起線文を持つもので，半隆起線文の間隔や曲線文，縄文地文の有無等から分類してみたい。

1類（第9図16，図版33）

これは大型のキャリパー形の口縁を呈する深鉢で，口径約35cmを測る。やや開きぎみに口縁が展開し，口唇部も肥厚してＬＲの縄文を施している。口縁上端にはやや細い爪形文を配し，口縁部にはＬＲの縄文地文上に幅約３mmの半載竹管で約1.5～２cm間隔に縦位の半隆起線文を引いている。胴部には網目状撚糸文を施すが，口縁部の縄文と違えている点に注目したい。胎土は精選されており，焼成も良好である。色調は淡褐色を呈し，一部に黒斑も認められる。頸部内面に稜線がある。

1類A（第9図15，第10図23～25，28，図版39）

これらは縦位の平行半隆起線文の間隔が約1.5～２cm程度と広いものを含めた。15は口縁上端に爪形文を配し，これとＲＬの縄文地文上に引かれた縦位の半隆起線文との間に幅約2.5mmの細い半隆起線文と押し引き痕のある半隆起線文と山形文を横走させている。半隆起線文の幅が全体に細いのが特徴といえる。色調は暗灰褐色から茶褐色を呈し，全体に脆い。23は器厚約１cmを測り，口縁部は丸く内湾している。口縁部には横位の木目状撚糸文を地文とし，幅約７～８mmの縦位半隆起線文を広い間隔で引いている。胎土には約２～３mmの白灰色土粒を多量に混入し，焼成もやや良好である。灰褐色で一部黒斑も残る。これは第４次調査の第３群１類Ａ（Ｐ20－24）と同一個体である。24はＬＲの縄文地文上に幅約４～５mmの半隆起線文を浅く引いている。口唇部はやや肥厚している。暗茶褐色から黒褐色を呈し，焼成があまく脆くなっている。25は横位と縦位に半隆起線文を浅く引いている。地文としてＬＲの縄文を僅かに施している。やや薄手の作りであるが，焼成は良好で堅い。色調も暗茶褐色から淡茶褐色を呈する。ただ，この25はこの器面に縦位の半隆起線文が１条しか残っておらず，その間隔が開きすぎなことから第６群に含められる可能性もあるが，本類に含めておいた。28はＬＲの縄文地文上に半隆起線文を引いているが，口縁上端を横走するものは幅約８mm，縦位に垂下するものは幅約５mmと竹管幅を違えている。胎土は良好であるが，焼成はやや不良。色調は淡灰褐色や暗灰色を呈する。

1類B（第9図17，18，第10図22，31～35，図版39）

これらは口縁部の縦位半隆起線文の間隔の狭いものをまとめた。口縁部上端がやや内湾ぎみのものと直立ぎみに開くものがあり，半隆起線文の引き方も深く引くものと浅いものに区分される。また，前者はその文様構成や雰囲気から新保第II１型式や本遺跡の１類Ａからの系譜が考えられるが，後者は前者からの影響を受けながらも独自に発展した可能性が考えられる。ここでは前者を１類Ｂ①とし，後者を１類Ｂ②とし，縦位半隆起線文を深く引き，地文部を僅かに残すものを１類Ｂ③としておきたい。

1類B①（17，18，22）

17は口縁上端に爪形文と横走する半隆起線文を引き，ＬＲの縄文地文上にやや細い半隆起線文を垂下させている。口唇部もやや肥厚させている。色調は暗灰色を呈し，焼成も良好である。胎土にはやや粗い砂粒を含むが良好で，粘質土的な土となっている。18は口縁上端に横走する半隆起線文と強く押し引きして幅広の爪形文風にした文様を連続させている。ＬＲの縄文地上に半隆起線文を引くが，その中間部あたりで口縁が内屈している。胎土は17と類似し，焼成も良好で堅

い。色調は暗茶褐色や褐色を呈する。22も同様なもので口縁上端に半隆起線文と幅広の爪形文を横走させ、ＬＲの縄文地文上に半隆起線文を頸部まで引いている。胎土，焼成は良好で，暗茶褐色と暗褐色を呈する。外面には一部ススが残っている。これらは縦位の半隆起線文間に縄文地文部を半隆起線文と同じ幅かやや広めに残している。

１類Ｂ②（31～32）

31は器厚が約１cm程度と厚い作りで，口唇部は平担に作られここに富士山形の突起を付ける。口縁上端には横走する２条の半隆起線文があり，以下，木目状撚糸文の地文上に縦位半隆起線文を等間隔に引いている．口縁部はキャリパー形を呈するが上端がまっすぐ上に開いている。また，半隆起線文も浅く引かれている。内面は平滑に仕上げられているが，全体に焼成はあまい。32は波状口縁の深鉢で，口唇部を肥厚させ稜を有している。口縁上端に２条の半隆起線文を横走させ，木目状撚糸文の地文上に縦位半隆起線文を等間隔に引いている。波頂部下には縦位の突起を２個貼付（１個は剥落）している。内面は丁寧にヘラミガキされているが，焼成はややあまい。色調は暗灰茶褐色から褐色を呈する。この２点は全体に沈線が浅く引かれているのが特徴といえる。

１類Ｂ③（33～35）

これらは前２者に比べると半隆起線文が深くなり，縦位の半隆起線文の引き方もやや雑になってきている。33は口縁部の縦位の半隆起線文間に突起を貼付している。34,35は同一個体と推定される。口縁上端に横走する半隆起線文は部分的に断面三角形となる部分も認められる。また，縦位の半隆起線文間に残す地文部も一段と狭くなり，この半隆起線文を２本単位で引きその間に地文部を残している。その地文部の幅は太い部分と細い部分があり，規測性が認められない。縦位の半隆起線文を密接して施す直前段階のものであろうか。暗茶褐色を呈し，焼成はあまい。

１類Ｃ（第10図36，37，第11図38～40，第16図116，123，図版39，41）-

口縁部に地文として縄文や撚糸文を施さずに半隆起線文を等間隔に引くものをまとめた。36，37は同一個体と推定され，横走する半隆起線文で区分された中に等間隔に半隆起線文を垂下させている。一部には曲線文も引かれている。胎土中には粗い砂粒を含み，焼成はややあまい。淡灰褐色，褐色を呈し，一部に黒斑あり。38は口縁部の文様が２段構成のもので，上部には口唇部の突起から半隆起線文が左下りと垂直の２本下り，屈曲部には刺突と三角形の抉りで加飾した突起を右流れ方向に貼付している。口縁部から胴部の半隆起線文の引き方をみると，口縁から胴上部にかけて先に縦位に引き，これを口縁下部と頸部で横位半隆起線文で切っている。灰色から淡灰色を呈している。39は口縁上部から右下りに隆帯状の半隆起線文を引いている。40は波状口縁かと推定され，口縁上部に左下りの半隆起線文を引き，頸部に縦位の半隆起線文を引いている。淡茶褐色を呈している。123は口縁上端が直立ぎみに開くもので，外面はやや剥離ぎみながら縦位の半隆起線文が残る。また，この上部にはこれと交叉する横位の半隆起線文が引かれている。全体に厚手の作りで胎土にも砂粒を多く含む。116は細片であるが，上端には半載竹管による押し引きが，その下に縦位の沈線を密に施している。

１類Ｄ（第10図21，図版39）

口縁部に曲線文を引くもので，21は口縁上端の半隆起線文間に右方向へねじり込むようにして

引かれた爪形文を配し，ＬＲの縄文地文上に縦位とＵ字形の半隆起線文を引いている。半隆起線文の引き方や内面調整は丁寧な作りとなっている。胎土，焼成は良好で，外面は暗茶褐色，内面は褐色を呈する。

1類J（第　図26，27，図版39）

これは同一個体で，口縁部に幅約４～５㎜の細い半隆起線文を密に引いている。地文に縄文等が施されていたかは不明である。半隆起線文の引き方も器面に対して強く当てている部分とやや弱く当てている部分が存在している。胎土，焼成は良好で，灰褐色から淡白褐色を呈する。内面は丁寧にヘラミガキされている。

1類K（第９図19，第10図29，30，図版39）

口縁部に縄文地文を残すものをまとめた。19は口縁上端に引かれた３条の半隆起線文のうち中央部のものには押し引き痕を残している。胎土中には砂粒が多く，暗灰色を呈している。29は口径約　cmを測るもので，口縁部にはヘラナデした上にＲＬの縄文を施し，口縁上端からＬの字状の突起を２個貼付している。胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好で，黒灰色を呈する。内面も丁寧にヘラミガキされている。30は口縁上端部を欠くためその形態は明らかではない。口縁上部から下端側へ３条程度の半隆起線文を引き（うち１本は隆帯状)、これを口縁下端部でめぐらして区画している。口縁部内と頸部以下にもＬＲの縄文を施している。内面は丁寧にヘラミガキされ，29,30は頸部に稜線を形成している。胎土,焼成も良好で，外面は灰色，内面は褐色を呈する。

1類H（第９図20，図版39）

その他のもので，20は波状口縁を呈するもので，口唇部には細い爪形文を，この上端には３条ほどの細い半隆起線文を引いている。その下には突起の剥離痕が残る。胎土，焼成は良好で，灰褐色を呈する。内面は丁寧にヘラミガキされている。

2類A（第９図５，図版39）

口縁の内屈する深鉢で，口縁部の上下端は粘土紐を隆帯状に貼付している。ただ，口縁全体を十分に指ナデ調整していないため口縁部は大きく歪んでいる。この口縁部と頸部にはＬＲの縄文地文上に半截竹管で軽く横位や縦位の沈線を引いているが，その沈線はやや乱雑に引かれている。口縁下端には横走する沈線のつなぎ目があり，その状態から時計回り方向で引かれたことが窺われる。胎土，焼成は良好で，内面は丁寧にヘラミガキされている。色調は灰褐色から淡灰褐色を呈する。

2類B（第９図６，図版39）

これは口縁部を欠落するが，立ち上り部分が僅かに残る。口縁部下端の隆帯上には爪形文を施している。頸部のＬＲの縄文地文には等間隔で半隆起線文を引いているが，その引き方はやや弱くてその半隆起線文内に縄文が残っている。内面はヘラミガキしているが，口縁部の立ち上り部には接合痕を残す。胎土には砂粒を含み，焼成もややあまい。色調は外面が暗灰茶褐色，内面は淡灰褐色を呈する。

4類A（第９図７，図版39）

強く外傾する口縁のＲＬの縄文地文上に半隆起線文を等間隔やＶ字形に引いている。口唇部に

は爪形文を配し，内面はヘラミガキされている。胎土には砂粒を多く含み，色調は内外面が淡灰褐色から白灰褐色で，断面は黒色を呈する。

４類Ｂ（第９図８，図版40）

口縁が強く外傾するもので，端部をやや内湾させている。口縁部の文様はまず上端にやや細い半隆起線文を縦位に連続させ，その下に４条の半隆起線文を横走させ，中央の２条に押し引き痕が残る。爪形文を施した隆帯下にはＲＬの縄文地文上に等間隔に半隆起線文を引くが，それはやや右ながれのものとなっている。内面端部には粘土紐を貼付して肥厚させている。内面は指ナデ後軽くヘラミガキをしている。胎土には砂粒を含むが焼成と伴に良好で，外面は淡灰褐色，内面は褐色を呈する。

４類Ｃ（第９図９，図版40）

口縁が外反するが，その全形については明らかではない。外面には木目状撚糸文を，内面端部には横位の半隆起線文で区画された中に斜位方向の半隆起線文を入れている。外面は暗灰色，内面は淡灰褐色や淡白褐色を呈する。

３類Ａ（第27図331，332，図版48）

これらは小型の円筒状深鉢で，331は口径約11.2cm，底径6.7cm，器高約12.8cmを測るものである。口縁部の上下に横走する半隆起線文を引き，ＲＬの縄文地文上に縦位の半隆起線文を等間隔隔に引いている。暗茶褐色を呈し砂粒を多量に混入している。332は口縁上端に横走する半隆起線文を引き，この下のＬＲの縄文地文上に半隆起線文を浅く引き下している。淡白灰褐色を呈する。

３類Ｂ（第27図333）

口縁上端がやや外反するもので，口縁部上端にはヨコナデ調整をしている。頸部以下にはＬＲの縄文地文上に縦位の半隆起線文を等間隔に引き下している。胎土にはやや砂粒を多く含むが，色調は淡灰色を呈する。

第４群土器

口縁部に軌軸文や蓮華状文を施すものをまとめた。口縁部に狭く横走する無文帯を残し，ここにヘラ先で縦位の細線を入れこれを横位のヘラ先沈線で切り，所々にヘラ先で三角形の印刻（抉り）と丸い刺突を入れるもので，第４次報告でこれを軌軸文と名付けている。本稿でもこの名称を使用したい。この軌軸文に伴う三角形の印刻を連続すれば蓮華状文の祖型的文様となるものでここではこれを印刻蓮華状文と呼ぶことにする。この三角形の抉りの入れ方は，Ａ種一方から直角三角形状に入れるもの。Ｂ種左右から二等辺三角形状に入れるものが認められる。また，Ｂの手法でも蓮華状文の頭部を丸くヘラ調整しているものも存在している。蓮華状文内の縦位の細線の数は，①２～３条のものが主流で，②これに横位の細線を入れて格子目状とするものも少量存在している。

１類Ａ（第11図41～46，48～54，第14図86～90，94，100，図版33，40）

これはキャリパー形口縁に軌軸文と印刻蓮華状文をもつものをまとめたが，軌軸文を持ち縦位

半隆起線文間に縄文地文が残るものを１類Ａ①，これの残らないもの１類Ａ②，印刻蓮華状文を持ち縦位半隆起線文間に縄文地文が残るものを１類Ａ③，これの残らないもの１類Ａ④と区分しておきたい。

１類Ａ①（86）

内湾する口縁上端に軌軸文を配し，この下のＬＲの縄文地文地に縦位や「Ｕ」の字や「∩」の字に半隆起線文を引いている。また，口縁の屈曲部に突起も貼付している。軌軸文の三角形の抉りもＡ種とＢ種のものを併用している。胴部の木目状撚文上には頸部から２条単位の半隆起線文を垂下させている。この胴部の文様形態からすれば，第30図390の胴部文様と類似するのであろう。胎土には砂粒を多量に混入し，焼成もややあまく，そのためか口縁部の外面は器面が薄く剝離している。色調は暗茶褐色から褐色を呈し，外面には一部ススも付着している。

１類Ａ②（41～43，45，46）

41は口縁部に縦位方向に引かれた半隆起線文の幅はやや細いが，密接して引かれている。また，横位の半隆起線文と丸い刺突で加飾した突起も貼付されている。この突起左側の半隆起線文は曲線的に引かれている。この土器も口縁部外面が薄く剝離しているなど焼成はあまいといえる。胎土には砂粒を含み，色調は暗茶褐色や淡白褐色を呈し，外面にはススが付着している。また，一部に黒斑も認められる。42は上端が直立ぎみに立ち上り，軌軸文下の縦位半隆起線文は浅く等間隔に引かれている。内面は丁寧にヘラミガキされている。43，46は口縁上端部の破片である。46は上端が肥厚して直立し，口唇部は平垣に仕上げている。45も口唇部が肥厚して直立し，上端が外側へ突出している。軌軸文の縦位短線は引かれているが，これを切る横位の沈線は引かれていない。胎土中には赤褐色の土粒を含み，色調も淡赤褐色を呈している。

１類Ａ③（87～90，94，100）

87～89，94，100 は同一個体である。口縁部上端にはＢ種の三角形の抉りを上から入れて正位の印刻蓮華状文を連続させている。88，89では下からも抉りを入れている。下部の縦位半隆起線文はやや長く，口縁の形態も内湾が弱まり伸びきっている。口縁上端には「Ｕ」の字形で三角形の抉りと刺突を加えた突起を貼付している。この突起部分は２点存在しており，２単位構成であろうか。内面は丁寧にヘラミガキされ，黒色の付着物が残っている。胎土，焼成は良好で，淡灰褐色を呈している。90は上端を欠くため問題もあるが，印刻で正位蓮華状文を連続させて，この蓮弁部先端はヘラ先で丁寧に調整されている。ただ，上部からの抉りの角度から右傾した蓮華状文となっている。胎土，焼成は良好で，暗灰茶褐色を呈している。

１類Ａ④（44，48～54）

44は口縁上端が直立するもので，上端には上から三角形の抉りを入れて正位で台形状を呈する蓮華状文を連続させている。他にこれの同一個体の破片があり，それの蓮華状文部分は薄く粘土紐を貼付した上から三角形の印刻を入れていることが分る。縦位の半隆起線文は弱く引くが，これを密接させている。全体に微細な砂粒を多量に含み，焼成はややあまい。色調は暗茶褐色から淡褐色を呈する。内面は丁寧にヘラミガキしている。48は下からの抉りで逆位の蓮華状文としている。抉り方がやや雑で，形の不揃いなものになっている。下部の縦位半隆起線文はやや長くて

器面に深く喰い込み密接させている。内面は丁寧にヘラミガキされ，胎土，焼成も良好で，淡灰褐色を呈する。49は口縁から底部にかけての文様構成が判明する数少ないもので，口径約18.7cm，器高約18cm，底径約９.４cmを測る。口唇部には２個以上の突起があり，うち１個には焼成前の穿孔が認められる。この突起から口縁部にかけて隆帯状の半隆起線文が下るが頸部で止まる。上端には抉りによる逆位の蓮華状文を連続させている。口縁下部から底部近くまでの縦位の半隆起線文は僅かに地文部を残して引くが，沈線は弱く引かれている。この縦位のものを頸部と胴下部で横位のもので切るが，縦位のものは一度に引かれたのかは明らかではない。色調は褐色を呈し，胎土，焼成も良好である。50は直立しているもので，逆位蓮華状文と縦位半隆起線文を等間隔に引いている。胎土には砂粒が多い。51は上端に正位の蓮華状文を配し，この下に縦位半隆起線文を引いている。また，上端側から２本の粘土紐による突起を垂下させる。胎土は砂粒を含むが焼成は良好。52，54は蓮華状文下の半隆起線文が，曲線的に引かれている。52は正位蓮華状文の縦細線が左下りとなっている。53は上端に三角形の抉りを密に連続させ小型の逆位蓮華状文としている。この下部にはＢ字状文で区分した中に縦位の細線を入れている。胎土，焼成は良好で，色調は暗茶褐色や褐色を呈している。

１類Ｂ（第11図55，56，第12図57～67，第13図68～70，第14図91，図版33，40，41）

これはキャリパー形口縁の深鉢でも軌軸文や蓮華状文と無文帯を形成しているものをまとめた。これもその文様構成から区分したい。軌軸文を持つもので，縦位半隆起線文間に縄文地文を残すものを１類Ｂ①，軌軸文が無文帯を挟み上下２段にあり，縦位半隆起線文間に縄文地文を持たないものを１類Ｂ②，軌軸文と無文帯のものを１類Ｂ③，蓮華状文が無文帯を挟み上下２段にあり，縦位半隆起線文間に縄文地文を持たないものを１類Ｂ④としたい。

１類Ｂ①（91）

これは上端に軌軸文を持ち横位の無文帯を挟んで下部にＬＲの縄文地文上に等間隔に半隆起線文を引くものである。また，口縁上端から屈曲部にかけて突起が貼付されていたと推定される。胎土には砂粒を含むが焼成も良好で，淡褐色を呈する。実測図では軌軸文の縦位短線を書き忘れている。

１類Ｂ②（56～62，65）

56は無文帯を挟み軌軸文を２段構成にし，下段の軌軸文横からヘラ先による短線を入れた文様を半円状に配するものと推定される。口縁部も内湾ぎみに立ち上っている。無文帯と内面は丁寧にヘラミガキしている。胎土には砂粒を多く含むが，焼成は良好である。色調は淡灰色から暗灰褐色を呈する。57は口縁に突起を持つもので，先端を半円形に作成し，突起の上部には三角状に透し穴を入れている。口縁上端と屈曲部の軌軸文と無文帯が，突起の左右で半隆起線文１条分ずれているのが特徴といえる。また，下部にある縦位半隆起線文はやや弱く引かれている。胎土には砂粒と伴に赤色土粒を含み，焼成はややあまい。色調は暗茶褐色から淡褐色を呈する。58も同様な文様かと推定される。口縁上端から屈曲部にかけて縦位に突起を貼付し，これから左右方向に半隆起線文を延ばしている。下部の縦位半隆起線文は密接するが弱く引いている。59も同様な器形と文様構成であるが，上端から屈曲部にかけての２個連接の突起から右側の口縁部内へ半隆

起線文と軌軸文を延ばし，これらで区分された三角形部分内を抉り込んでいる。下端の縦位半隆起線文は等間隔に引いている。胎土，焼成は不良で脆く，茶褐色から淡白褐色を呈している。60は上端から半隆起線文で加飾した突起を右下りに貼付している。61は口縁部の屈曲部あたりのものであろう。62は口縁部が丸く湾曲するもので，口縁に鶏の鶏冠を模したかのような突起が貼付され，突起の左右には目を模したかと推定される刺突を加え，口唇部には三角形の抉りを加えている。また，この突起から口縁部の無文帯へ印刻の蓮華状文を施した突帯を延ばしている。口縁上端には軌軸文を配し，無文帯はヘラミガキされている。口唇部は幅広の平坦面とし内面端部は肥厚して稜を形成している。胎土には粗い砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調は淡白褐色を呈している。この土器は第4次調査出土の第4群1類B（P30－119）とは同一個体である。65は波状口縁の可能性がある。

1類B③（55）

これは口縁上端を欠くため正確な文様構成は明らかではないが、頸部上に無文帯を持つ点に特徴がある。口縁の上端側から無文帯にかけて2本の粘土紐を貼付し突起としている。無文帯はヘラミガキされ，無文帯上端の半隆起線文は突起の左右で1条分ずれている。胴部にはＬＲの縄文地文上に直線や曲線の半隆起線文を等間隔に引いている。胎土には砂粒は少なく焼成も良好である。色調は灰褐色から淡白褐色を呈する。

1類B④（63，64，67～70）

63，64は同一個体で内屈ぎみの口縁端部が肥厚し，上端部に逆位蓮華状文と無文帯を形成している。全体に磨耗して蓮華状文の縦位細線もあまり残っていない。赤褐色を呈し焼成はあまい。67も同様なものである。66は口縁部に筒状の突起があり，その上部は丸く刺突し，内面には三角形の抉りを加えている。この突起から三角形の印刻を入れた逆位蓮華状文と六角形文を口縁上端に延ばしている。六角形文には縦位の細線と伴に中央部には刺突を加えている。また，この突起から三角形の印刻を加えた別の突帯を垂下させている。ただ，この六角形文を表出するための三角形の印刻は蓮華状文を表出するものと同様に浅く施されており，六角形文は立体的なものとはなっていない。胎土には砂粒がやや少ないが焼成があまく，色調は淡褐色を呈している。68は口径約25.8cmを測り本類の中で口縁部の文様構成が判明する唯一のものである。口縁端部は直立し口唇部は肥厚して平坦になっている。口縁部には無文部を挟み片側から抉りを加えた正位で台形状の印刻蓮華状文を連続させている。また，この口縁上部には右流れの突起の剥離痕が残っている。口縁下端には縦位の半隆起線文を等間隔に浅く引き下している。口縁部の無文帯はヘラミガキされているが，一部にヘラミガキ前にここを抉り込んだのか器厚の減じている部分も認められる。内面はヘラミガキやヨコナデ調整されている。胎土には砂粒を多く含むが焼成はやや良好で，暗灰色から灰褐色を呈する。69，70も印刻による正位蓮華状文としているが，蓮華状文内の縦位の細線が左傾している。

1類C（第16図111，114，図版41）

これは軌軸文や印刻蓮華状文と爪形文を伴うものをまとめた。この両者が同一器面内で共伴する例は少なく，ここでは僅かに2点を数えるものである。数量的にも少ないため，1類Cでまと

める。114は口縁上端が直立するもので，器厚もほぼ均一なものとなっている。口縁上端に軌軸文を配し，右方向への爪形文を入れ，この下にＬＲの縄文を施している。また，屈曲部に右流れで刺突を加えた突起を貼付し，その左側に頸部へ続く爪形文を配している。内面はヨコナデ調整を加えている。胎土には砂粒を多量に含み，焼成はあまい。色調は淡白褐色を呈する。111は口縁上下端には逆位と正位の印刻蓮華状文を連続させ，この間に左方向への爪形文を入れている。ただ，上端の蓮華状文の部分はやや磨耗が著しいが，ここでは逆位の蓮華状文と判断した。また，口縁部の下端に無文帯を形成するのも例の少ないものである。内面は磨耗して砂粒の剝落が著しい。胎土は良好であるが焼成はあまい。色調は淡褐色で一部に黒斑が認められる。

頸部（第13図71～85，第14図92，93，95～99，第15図101～110，図版41，42）

これらはキャリパー形口縁の深鉢の口頸部片である。基本的には半隆起線文間に縄文地文を残す①グループ（75，92，95～99，101，104～110）と半隆起線文間に縄文地文の無い②グループ（71～74，76，93，102，103）に区分される。前者では75は縦位半隆起線文間に地文部が僅かに残るのみであるが，他はほぼ等間隔に引かれている。107では半隆起線文が３条分のみと少ない。109は半截竹管とヘラ状具で，108はヘラ状具のみで沈線が引かれている。後者で縄文地文が無く半隆起線文を密に引いているものは71，72，73，74，78で，他のものは半隆起線文を等間隔に引き地文の無文部を残している。73には丸い刺突と三角形の抉り及び軌軸文で加飾した右流れの突起を貼付している。71は木目状撚糸文施文後に縦位半隆起線文を引き，この後に頸部に横走する半隆起線文を配している。全体に半隆起線文は深く引かれている。胎土，焼成は良好なものである。72は上端に無文部を，85は頸部上に無文部がありヘラ状具でナデられている。81は縦位半隆起線文をほぼ等間隔に引いているが，その半隆起線文とその左側に残る地文部間をヘラ先で深く引き直すことを繰り返している。これは93にも認められ，他にヘラ先を左傾させて加えているものも存在している。110では頸部の区画文として半截竹管で山形文を配している。

３類（第11図47，第16図129，130、132，133，第17図124，第18図135，第19図136，第20図137～154，第27図336，図版35，36，42，43）

これは円筒形の器形を呈するもので軌軸文や印刻蓮華状文を持つものをまとめた。第４次報告で３類としているものは口縁が外傾し４類に該当するものが多く，第３次では外傾するものと直立するものが存在している。この直立しているものを３類Ａ，外傾するものを３類Ｂとし，３類Ａで軌軸文を持つものを３類Ａ①、印刻蓮華状文を持つものを３類Ａ②。直立するものでも軌軸文を持つものを３類Ｂ①，印刻蓮華状文を持つものを３類Ｂ②。口縁のやや内湾ぎみのものを３類Ｃ②としたい。小型で三角形の印刻を施すものを４類Ａ①としておきたい。

３類Ａ①（138，148，149，150）

これらは直立する口縁部に軌軸文を持つもので，上端のみの破片のため文様構成は明らかではない。150のみ無文部を形成していることが分る。

３類Ａ②（124，133，143）

124は口径約31.6cm，底径約13.2cm，器高は推定ながら約52cm程度になるものと思われる。正に円筒状の器形を呈するものである。口縁部の上下に縦位や右流れの半隆起線文や縦位の半隆起

線文で加飾した突起で口縁部文様を大きく分割している。中央に幅の狭い無文帯があり，この上部には正位の印刻蓮華状文と押し引き状で幅広の爪形文を，下部には逆位の印刻蓮華状文と同種の爪形文を配している。口縁部文様下端にはやや細い半隆起線文と伴に細かい爪形文を加えた隆帯を横走させて文様を区分させている。胴部には木目状撚糸文が施されている。胎土は良好であるが焼成があまく，色調は茶褐色を呈している。133は胴部片で正位の印刻蓮華状文と半隆起線文を横走させ，これを切る形に突起を貼付している。突起下から1条の半隆起線文が下っている。器厚は約2cm程度と厚い。143は直立する口縁上端に片方から抉りを加えた印刻蓮華状文がある。

3類C②（47，153）

図示できたのは僅かに2点のみと少ない。中を格子目状にした正位の蓮華状文を連続させているが，横位に連続する格子目状文から蓮華状文を作り出すため半截竹管を左傾させ花弁端から左側面にあたる部分へ押し込み分割させている。このような手法は他には認められない。色調は淡灰色や淡白褐色を呈し，胎土や焼成も良好である。153は逆位の蓮華状文が施されている。

3類B①（136，137，142，144，145，152，154）

136は全体が窺える良好なものである。頸部でややくびれてから口縁が外反し，胴中位が少し脹らんでいる。口径約26.2cm，底径13.6cm，器高約41.6cmを測るものである。口縁部の文様構成は無文帯を挟み軌軸文を上下2段に構成するもので，無文帯上端から「し」の字形で軌軸文を施した突起を3単位で貼付している。胴部にはＬＲの縄文地文上に半隆起線文を縦横に展開し，胴中位の最大径あたりで胴部文様を上下に分割する半隆起線文を2条横走させている。ただし，基点と終点では上下に2条分ずれていること及び縦位の半隆起線文は半截竹管を左傾させて引かれていることに注意したい。口縁部の無文部はヘラ状具でナデつけし，内面は丁寧にヘラミガキされている。胎土には砂粒をやや多く含むが焼成は良好である。淡白褐色や暗灰色を呈する。137は軌軸文を2段連続させ，口唇部もやや平坦に仕上げている。142は軌軸文と幅の狭い無文帯を残している。145は上端近くに軌軸文を持つが，形態的に台付土器の脚部の可能性も考えられる。色調は淡白褐色を呈している。154は上端に幅の狭い軌軸文を配し，その下に無文帯を形成している。152は口縁下部の破片で，軌軸文を2段に構成している。144はやや強く外反し，口縁上端部に軌軸文を作り出しているが，縦位の細線に横位2条の細線を入れて格子目状としている所に特徴がある。

3類B②（132，135，140，141，146，147，151）

ここに分類したものは印刻の蓮華状文を持つものであるが，140と141，146と147は同一個体の可能性が強い。139は胎土に多量の砂粒を含み遺存状況が悪い。それぞれ上からの印刻によって蓮華状文を表出している。139は砂粒も含むが粘質土的な土が使用されている。また蓮華状文内が格子目状になっているのも特徴といえる。151は強く外反して口唇部に1条の沈線を引き，蓮華状文を上端に配してその下を幅広の無文帯としている。132は口縁でも下端近くのものと推定される。正位の印刻蓮華状文と半隆起線文及び爪形文が施されている。器厚は約2cm程度と厚いが胎土，焼成は良好で，色調は灰色や暗灰色を呈する。135も口縁部下端に丸い刺突を加えた突起があり，この脇に逆位の印刻蓮華状文を連続させている。また，この突起下の胴部へ半隆起線

文を一部引き下している。胴部の木目状撚糸文はこれらの半隆起線文が引かれた後に施されている。色調は淡白灰褐色を呈し，胎土，焼成も良好である。この土器は第４次調査出土の第４群３類Ａ（Ｐ32－144）と同一個体の可能性が高い。

３類Ａ③（336）

これは口径約15cmを測るもので，小型の深鉢と推定される。口縁部を横走する半隆起線文間に幅約５㎜程度の狭い無文部を残し，ここに三角形の印刻と刺突を加えている。この下の胴上部には丸く刺突を加えた突起を貼付している。胴部にはＬＲの縄文地文上に等間隔に半隆起線文を引いている。また，この胴部の半隆起線文の引き方にも特徴がある。それはこの縄文地文左側と半隆起線文間にヘラ状具で深く引き直すことの繰り返しており，これはキャリパー形口縁の深鉢（第13図81，第14図93）でも認められている。同様の手法が器形の手法が器形を違えても認められることに注目しておきたい。胎土，焼成は良好で，灰色から灰褐色を呈している。

３類Ｄ②（129，130）

130は外反するもので，無文部の代りにＬＲの縄文を施している。上段にはやや凹んで印刻蓮華状文が施されるが，下段のものは器面より盛り上っている。129はこれと同一個体と推定されるが両者は胎土，焼成が悪く器面の剥落が著しい。淡茶褐色や灰色を呈している。

第５群土器

口縁部や胴部に半截竹管で「Ｕ」の字状や「∩」の字状に半隆起線文を引くもので，これに類似するもの，また，弧線状になるものも含めた。この文様の表出技法は，３種確認できる。

１類Ｂ（第26図319，320，324，図版43）

キャリパー形口縁にこの文様を持つもので，319，320は324のように縦位に引かれた半隆起線のうち，間に１条分を残して一方向から再び「Ｕ」の字状に引き直している。324は横走する半隆起線文間に縦位の短い半隆起線文を引いており，この種の弧線文の施文順序を知る上で重要な資料といえる。319は下端隣接部を丁寧に抉り取るが，320はそうされてはいない。前２者は胎土，焼成は不良であるが，324は伴に良好で淡白褐色を呈している。323は，319，320とは違い324のように引かれた半隆起線文を３条１単位とし，これの下端隣接部に三角形の抉りを入れて逆位の蓮華状文風に仕上げているのが特徴である。

３類Ｂ（第26図318，322，325，図版43）

この318，322は同一個体の可能性が強い。口縁上端の弧線文は，間に２条の半隆起線文を残すが，これは「Ｕ」の字に引き直した過程で細くなったりしている。また，この下端隣接部の三角部分は丁寧に抉られている。無文帯下のものはこれと逆で「∩」の字状に施されているが，同様な手法で表出されている。胎土，焼成は良好で，色調は淡褐灰色を呈している。325は３条の縦位半隆起線文の下端隣接部を三角形に抉り込んで表出している。その手法は323と同じである。

３類Ｃ（第26図321，図版43）

これは器形的には第４群３類の深鉢と同種のものである。この場合は弧線文内に縦位の半隆起線文を残さず，直接半截竹管で「∩」の字状に引くものである。この上端隣接部は三角形の抉り

を入れた部分と竹管の動きで抉れたようになっている部分がある。この文様の中央部は竹管の回転でできた凹が認められ，拓影上では中央部に丸い刺突を持った印刻蓮華状文風に見える。胎土焼成は不良で脆く色調は茶褐色を呈する。

胴部（第26図326，327，図版43）

326はＬＲの地文縄文を持ち弧線文を右向き方向で上下に並べている。施文順序としては縄文地文部横に下へ連続して施し，これを縦位の半隆起線文で上端の一部を切っている。また，これの上端に隣接する三角形部分は抉り取ってはいない。327は縄文地文は無いが，縦位の半隆起線文間に挟まれた縦長の無文帯に左向きにして上下に並べている。その引き方は下端から上端側へ半截竹管を動かしている。上端に隣接する三角形部分は抉り取られてはいない。326は天地逆の可能性もあり，その場合はその引き方が共通している。

3類A（第16図125～127，第29図380，381，図版43，48）

125は口唇部は平坦に仕上げている口縁部のＲＬの縄文地文上に細かな爪形文を施した隆帯内に半截竹管で連続弧線文を施している。この区画内に右流れの爪形文を加えた隆帯も入れている。内面は入念にヘラミガキを加えている。色調は暗灰褐色や淡灰褐色を呈し，胎土，焼成は良好である。127は木目状撚糸文の地文上に半截竹管にて連続弧線文を施している。色調は暗灰色や淡灰色を呈すが，胎土は前者より砂粒が多く焼成はややあまい。126は口縁上端の破片である。また，口縁下端を区画する隆帯は爪形文と半隆起線文を数条併走させている。器厚は前者が約1.3cm，後者が約1.5cmを測り大型の深鉢である。ただ，この両者の胎土を比較すると前者は粘質土的なものである反面，後者はやや砂質土的なものが使われているのも特徴といえる。380，381は125～127の円筒形を呈する深鉢の胴部文様と推定される。器厚も約1.3cmを測り，胴上部を横走する半隆起線文上に弧線文を連続させている。胎土中には砂粒を多く含み，焼成はややあまい。色調は暗灰色を呈している。

第6群土器

本群は口縁部に横位無文帯を持つものをまとめた。口縁の外傾する円筒形のものが多く，その場合爪形文を施すものが多い。

1類A（第16図117～122，図版43）

口縁部に無文帯を持つものは半截竹管で山形文を施すものである。ただ，確実に無文帯を持っているのが117のみで，他に可能性のあるものは118と119が考えられる。他は山形文を施すことから本類に含めた。

1類B（第16図112，113，115，図版43）

これらは内湾する口縁部に爪形文を間に無文帯を挟んで2段に構成するものである。112はこの下に縦位の半隆起線文を等間隔に引いている。胎土には砂粒を含み焼成はややあまい。色調は暗茶褐色を呈している。

1類C（第21図183，図版43）

これは口縁部がキャリパー形で端部が上に開くものである。口縁上端の丸い突起から2条の半

隆起線を垂下させ，ここから口縁に沿って太い爪形文を横走させている。頸部内面には段を形成している。胎土中には砂粒を多く含み，焼成はあまく器面は磨耗ぎみである。色調は灰褐色から淡灰色を呈する。

１類Ｄ（第26図312，313，図版43）

これも同一個体と推定される。頸部の貼付隆帯の上下には無文帯を残す。胴部文様を区分する横走する半隆起線には粘土紐を突起状に貼付し，そこから貼付隆帯を垂下させている。胴部にＬＢの縄文を縦位に施している。胎土は良好で粘質土的なものとなっている。焼成も良好で312が淡褐色，313が淡灰褐色を呈している。

１類Ｅ（第27図337，338，図版43）

これは口縁部上端が内湾ぎみに立ち上る小型の深鉢で，両者は同一個体である。口唇部はほぼ平坦に仕上げている。口縁上端の横走する半隆起線文内にヘラ削りされた無文帯がある。この下に縦位の半隆起線文を密接させて引いている。また，この無文部と縦位半隆起線文間には半隆起線文で加飾した突起が貼付され，338では突起右側の縦位半隆起線文が無文帯上端まで延びている。この文様構成はキャリパー形口縁の深鉢口縁部の文様と類似し，事実，338の場合土器の下端でややくびれるような形態を示しており，この種の深鉢から変化したものと推定される。胎土，焼成は良好で，色調は暗茶褐色を呈して一部ススが付着している。

３類（第20図159～162，164～168，170，171，第21図173～179，184，191～197，第26図308～311，314～316，図版44，45）

３類器形のものは数量が多く，口縁の外反するものが多数を占める。ここではこれを３類Ａとし，半隆起線文と爪形文を持ち口縁の直立するものを３類Ａ①，同様な文様を持ち口縁の外反するものを３類Ａ②，半隆起線文のみで風形文を持たないものを３類Ａ③，無文部のみを３類Ａ④としておきたい。

３類Ａ①（184）

これは口縁上端に一条の沈線を引き，下端には半隆起線文と爪形文を横走させ，その横に突起を貼付している。これは淡茶褐色を呈するが土器の遺存状況は悪く脆くなっている。

３類Ａ②（159～162，164～168，170，171，173～179）

これらは口縁部に２～４条の爪形文を伴う半隆起線文を間に無文帯を挟み上下２段に構成している。小片のものが多く全形の明らなものは少ない。爪形文が口縁端部に施されるもの159～162と２本目の半隆起線文に施されるものが存在している。その爪形文も太いものと細いものが確認できる。口径の推定できるものは165のみで，これは約29.6cmと中型品のクラスにあたる。色調は166が褐色，173が淡褐色を呈し，他のものは全般的に灰色から灰褐色を呈するものが多い。焼成も並である。

３類Ａ③（191～197，308～311，314～316）

191は外反するが口唇部が先細りしている。192，193は同一個体と推定され，口縁端部が内屈ぎみに立ち上っている。194～196は外反するが口唇部を丸く仕上げており，195は外面端部が張り出している。これも同様な色調を呈し，192，193以外は焼成は良好である。196は器面の剥落

が著しい。308～311は外反し，314～316は直立しているものである。308は無文帯の器厚がやや減じており，器面を一部抉り取っていることが分る。310の無文帯も同様に器面をやや抉り取っているようである。311は波状口縁と推定される。308は灰褐色，310は淡白褐色，309は黒灰色，311は暗灰茶褐色をそれぞれ呈している。314と315は直立するもので同一個体である。無文帯下端を半隆起線文2条と貼付隆帯1条で区画している。胴部はナデ調整しているが，315は垂下する半隆起線文をヘラ状具でこれを消すようにヨコナデしている。胎土は粘質土的なもので，色調は314は淡白褐色，315は淡褐色を呈している。

4類A（第18図157，第21図190，図版34，44）

口縁の外傾するもので，口径約57cmを測る大型品もので口縁の半隆起線文の幅が広く多条化している。口縁端部が強く外反し，口唇部に半円形の突起を付してここを爪形文を施す基点としている。口縁上端の半隆起線文は5条，下段では6条まで確認できた。半隆起線文は器面に深く喰い込むように引かれている。無文部はヘラ削された後にヘラ状具で軽くミガキを加えている。内面は丁寧にヘラミガキされている。胎土には1～2mmの砂粒を含むが焼成と伴に良好である。色調は外面が暗灰茶褐色や淡褐灰色，内面は暗茶褐色から暗褐色を呈している。190は口縁部の突起で，外面に爪形文を施すが157と比較すると器厚もやや薄い。色調は白灰褐色を呈する。

4類B（第20図156，158，第21図198，図版44）

中型品の深鉢で，口唇部に粘土紐を折り曲げて内面側に刺突や抉りを加えている。156はこの突起の後部に小さな粘土塊を入れ三角形の形態にしている。内面には目を表わしたのかヘラ先で小さく切れ込みを入れている。口縁外面の爪形文は押し引き状のものとなっている。胎土は粘質土的なもので，焼成は良好で，色調は暗茶褐色から暗褐色を呈し，突起後部には黒斑が認められる。158の突起も内面に目を表わしたものか楕円形の刺突と三角形の抉りを入れている。口唇部は肥厚して平坦面を形成している。口縁部の無文帯上には4条の半隆起線文と太い爪形文を横走させている。全体に磨耗と剥離が進んでおり無文帯の調整は明らかではないが，内面はヘラミガキを加えている。胎土中には粗い砂粒は少ない。色調は淡褐灰を呈している。198は口縁の破片である。胎土には細かい砂が多い。色調は淡灰茶色を呈する。

10類（第21図185～189，図版44）

口縁が「く」の字に外反する深鉢で，頸部と肩部に半隆起線文と爪形文を施し，その間を無文帯としてヘラミガキしている。189は同一個体と推定され，185，186，188の下端に爪形文をめぐらしているが，この部分と接合する可能性がある。爪形文は上方へ向うと途切れ，ＬＲの縄文を施している。胎土，焼成は良好で，色調は淡白灰色を呈する。

第7群土器

口縁部に半隆起線文で区画した中に縄文地文を残しているものをまとめた。

3類（第16図128，131，第20図163，第21図172，181，199～203，第27図334，335，図版44，45）

口縁が直立するもので，横位の半隆起線文に爪形を伴うものを3類Ａ、伴わないものを3類Ｂとしておきたい。

3類A（128，163，172，181）

128は口縁上端を欠くが，横走する半隆起線文や爪形文間にＬＲの縄文を施している。また，縄文帯下端に小突起が貼付されている。内面は磨耗しているが胎土，焼成は良好，色調は黒灰色を呈している。181は口縁上部に2条の爪形文が横走し，口唇部の半円形の突起には丸い透し穴があいている。また，この突起から下端の爪形文まで半隆起線文が垂下している。また，この半円形突起の外面には別に粘土が貼付されていたとみえて剥離痕が残っている。内面は入念にヘラミガキされている。色調は外面が暗灰褐色，内面は淡灰褐色を呈する。この土器は第4次調査出土の第7群3類（P50－308）と同一個体である可能性が高い。182は上端に爪形文があり，その下に木目状撚糸文を施している。色調は淡白褐色を呈する。163は強く外傾し地文にＲＬの縄文を施し，上端の爪形文は太い。

3類B（199～203）

これらは半隆起線文に爪形文を伴っていない。199は形態的には第6群3類のものと胎土，焼成，色調や沈線の引き方が類似している。ここにはＬＲの縄文を施している。色調は暗灰色で胎土中には砂粒が多く含まれている。203はこの種の縄文施文部のものであろう。外面にはＬＲの縄文を施し，内面には入念にミガキを加えている。色調は淡灰褐色を呈する。200はやや外反ぎみのもので，口唇部は平坦にしている。外面には3条の半隆起線文を横走させているが，その間に非常に幅の狭い無文帯を残している。半隆起線文下にはＬＲの縄文を施文している。内面はやや丁寧なヘラミガキをしている。外面は暗灰茶褐色，内面は暗褐色を呈する。胎土，焼成は良好。201も口唇部を平坦に仕上げ，外面にはＲＬの縄文を施す。暗灰褐色の色調を呈する。202も口唇部を同様に仕上げ，外面はＲＬの縄文地文上に半隆起線文を引いている。外面褐灰色，内面淡白褐色を呈する。

5類（180）

この類は180の1点のみである。口縁の外反するもので木目状撚糸文の地文上に，口縁上端と頸部に爪形文と半隆起線文を横走させて区画している。外面は暗灰色，内面は淡白褐急を呈する。外面には一部ススが付着している。

3類C（334，335）

334は小型の深鉢で，口縁上端に並列する爪形文と半隆起線文の区画内に縄文を施し，また，突起を貼付している。335は縄文地文上に爪形文と半隆起線文を引いている。前者は粘質土的な胎土で焼成と伴に良好で淡灰褐色を呈する。後者は細かい砂粒を多量に含み，後者は暗灰茶褐色で焼成はあまい。

3類D（131）

口縁にＬＲの縄文施文後下端に粘土紐の突帯を貼付し，この突帯上を半截竹管で引き直している。口唇部は先細りぎみになっている。内面は磨耗し一部器面が剥落している。色調は淡灰褐色を呈し，胎土，焼成は良好。

第８群土器

この土器群は深鉢の胴部に施されている半隆起線文のものである。口縁部を欠くため全形を判断することはできないが，第３～７群土器の深鉢胴部と推定される。この胴部片も地文に縄文地文を残すものと無いものが存在している。その半隆起線文も細いものと太いもの，半隆起線文間に格子目状文としたり無文部とするものが認められる。器形がある程度判明するものから説明したい。

１類①（第22図204，第23図205，206，209，211，図版34，45）

204は底径14.6cm，現存器高で27.3cmを測り底部から頸部へ緩く外傾している。内面は丁寧にヘラミガキされている。文様はＬＲの縄文地文上に縦位主体の半隆起線文を引いている。ただ，その半隆起線文も文様の区画のため外側に引かれたものは太く，その内部のものは細いなど，施文具の半截竹管も使い分けされていたことが分る。また，文様も縦位に引い半隆起線文で挟まれた縦長の縄文部の配置から何単位かに分割されていた可能性があるが，破片の無い部分もあるため明らかではない。さらに底部の網代痕の方向が中央部と外側では違っており，最初に作成した径12cm程度の円盤外側に粘土紐を付け足したものであろうか。胎土にはやや砂粒を多く含み焼成はややあまい。色調は淡白褐色で断面部を見ると黒色を呈している。205はキャリパー形の深鉢で，口縁の屈曲部には横位に隆帯状の半隆起線文を引いている。口縁下端から胴部にはＬＲの縄文地文上に縦位の半隆起線文を等間隔に引いてから，頸部に横位半隆起線文を引き分割している。胎土には砂粒をやや多く含むが，焼成はややあまい。色調は暗灰褐色を呈している。206と209は同一個体で，胴部から頸部にかけて外反している。ＲＬの縄文地文上に等間隔からやや狭く縄文地文を残している。胎土にはやや粗い砂粒を含むが焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。211は頸部から胴上部にかけてのもので，ＬＲの縄文地文上に２本単位に半隆起線文を引き，その中に半截竹管で縦位に軽く沈線を引いている。内面は丁寧にヘラミガキされている。色調は淡灰茶褐色を呈し，焼成は良好である。

１類②（第24図247，248，図版45）

これはキャリパー形深鉢でも縄文地文の無いものである。247は胴上部に縦位半隆起線文間に地文の無文部を僅かに残し，半隆起線文も半截竹管を左傾させて引いている。248は強く引かれた半隆起線文による区画内に浅く半截竹管で沈線を引いている。247は焼成は良好で，248は焼成不良で外面の器肌は荒れている。

３類①（第23図208，図版45）

胴部がやや外傾する深鉢で，胴部文様の上端は横走する半隆起線文と隆帯で区分し，中にＲＬの縄文地文上に縦位に半隆起線文を引いている。胴上部から頸部側は無文となっている。色調は淡灰褐色を呈する。

３類②（第24図243～246，292，図版44）

243，246は同一個体で胴上部を横走する半隆起線文からＬＲの縄文地文上に３条の半隆起線文を垂下させている。この垂下する半隆起線文間には縄文を残している。縄文は他のものより節が

大きい点も特徴となっている。内面は比較的丁寧にヘラミガキされている。胎土には砂粒を多く含み，焼成はあまい。色調は黒灰色を呈する。244，245も同じく胴部の部分である。292は磨耗ぎみのものであるが横走する半隆起線文と垂下する半隆起線文がある。

3類③a（第23図207，210，212～232，235～240，図版45，46）

これは器形が直立や外反する深鉢の胴部片で，縄文地文を残すものをまとめた。全体的には細片のものが多い。器形の直立するものは全体的に胎土も精選され砂粒がやや少なく，焼成も良好なものとなっている。このうち207，210，212～218，223，237，238では，縦位に引かれた半隆起線文を横位の半隆起線文で切る手法が認められる。比較的破片の大きい207の施文順序からすると，まず先に胴部文様を上下に分割する横位の半隆起線文を2条引き，その後にこの上下部に縦位の半隆起線文を等間隔に引いている。この施文順序は他のものと比較すると逆になっていることが認められる。また，縦位に引かれている半隆起線文を見ると，これの左側が深く右側が浅い。これも半截竹管を左傾させて引いたものであろう。色調は淡灰褐色や淡灰色で，一部黒灰色を呈し黒斑かと推定される。胎土は精選された土が使用され，焼成と伴に良好である。212では縦位や横位に区画する半隆起線文以外の縄文地文上を，これらの胴部片で，半截竹管の浅い沈線で縦位に切っている。213は唯一であるが地文に木目状撚糸文が残されている。器面に引かれている半隆起線文の幅は比較的細く，237～240はさらに細いものとなっている。これに対して218は太い半隆起線文となっている。

3類③b（第24図249～259，261～266，第25図267～279，281～284，286，288，図版46）

これも深鉢胴部で直立や外反するものであるが，縄文地文を持たないものをまとめた。ここにまとめたものも細片のものが多い。直立するものは前類同様に胎土がやや精選され，焼成も良好なものが多い。胴部文様も前類同様に縦位の半隆起線文を胴中位で横位の半隆起線文で切り，胴部文様を上下に分割しているものが存在している。249～257，259，261がそうである。253と254は同一個体の可能性が大きい。249は大きな破片で器面を荒くヘラ削りした上に縦位半隆起線文を引き，これを横位の半隆起線文で切っている。縦位の半隆起線文の引き方はやや乱雑で，強く引かれている沈線と弱く引かれている沈線があり，弱いものはやや擦痕状に引かれている。これは270にも認められ，また，第35図456のものも類似している。253，254も胴中位で分割されているが，縦位の半隆起線文は一部に地文の無文部を残すが比較的密で丁寧に引かれている。胎土は特に精選され焼成と伴に良好である。色調は淡白褐色を呈している。257は縦位方向に引かれている半隆起線文は半截竹管を左傾させて引いている。この左傾させて引いているのは277にも認められる。この場合は半隆起線文を右下りでやや等間隔に引き，地文の無文部を少し残している。右下りである所に違いがあるが，キャリパー形深鉢の口縁下端の文様と類似している。278，279は胎土中に砂粒を多く含み，縦位の半隆起線文を横位の半隆起線文で分割し，縦位の半隆起線文間に無文帯を残している。この半隆起線文の断面が三角形を呈しており，他に類例のないものである。286は貼付突起があり，ここから右回りに半隆起線文を垂下させている。282では半隆起線文を右下りに入れている。275では細い半隆起線文で山形文としている。

3類④a（第23図233，234，236，241，242，図版46）

これらは縄文地文上に縦位の半隆起線文を引くが，その半隆起線文の幅がやや太く，縄文地文上に細い沈線を引くものをまとめた。233，242では地文の縄文の節が大きなものとなっている。234，241では縦長の縄文地文部にヘラ先による沈線を引いている。233と236は褐色，234と242は淡褐色，241は黒灰色から淡褐色をそれぞれ呈している。

3類④b（第25図285，287，288，図版46）

このものは胎土中に多量の砂粒を混入し，半隆起線文も幅が太く密に近い状態で引かれている。253，254の胎土と比較すると大きな違いがある。

3類⑤b（第24図260，第25図289，290，291，293～307，図版46，47）

これらは縦位の無文帯や正位の格子目状文，さらに三角形の抉りを持つものをまとめた。260，289，290，291では胴部文様を上下に分割する横位の半隆起線文と縦位の無文部を残している。260，289，290では無文部をヘラミガキしているが，291では縦位の無文帯両側に粘土紐を貼付し隆帯状にしている。260は他のものより薄手の作りとなっている。胎土では260，289，290はやや粘質土的なものであるが，291は全体に微細な砂粒を多量に混入している。色調も291は灰色で他は淡褐色を呈している。格子目状文を持つのは293，294，295，297～304に認められる。293は丸い貼付突起部分に正位格子目状文を持ち，その横にも同様な文様が残っている。294～296は同一個体で胎土は精選され粘質土的な土で，焼成と伴に良好である。胴部には爪形文を持つ隆帯が垂下し，これと半隆起線文間に縦長や横方向に延びる無文帯が残る。無文帯の縁には三角形の抉りを加えている。また，曲線文での区画内に正位の格子目状文が引かれているが，一部のものは消されている。色調は淡褐色を呈している。297～303では縦位の半隆起線文間にも格子目状文を施している。304，305も僅かに格子目状文を施している。306，307では無文部の縁を三角形に抉っている。289，290の半隆起線文は施文具を左傾させて引いている。302，304，305は胎土には微細な砂粒を含み焼成もあまい。色調は褐色を呈している。301，307も同様な胎土であるが，黒褐色を呈している。

第10群土器

器面に縄文や木目状撚糸文を施しているものをまとめた。口縁部の破片は細片が多くて口径の判明するものは少ない。口径と口縁の傾きから区分した。

1類A（第28図341～350，図版47）

口縁がキャリパー形のものを含めた，ただし，口径の判明するのは2点のみと少ないが，他のものはその傾きから区分した。341は口径約34.8cmを測る大型品で，口縁端部になるにしたがい器厚が薄くなり，口唇部は平坦に仕上げている。口縁にはＲＬやＬＲの縄文を施し，胴部には縦位の羽状縄文としており施文方向を違えている所に特徴がある。胎土，焼成は良好で，色調は淡褐灰色を呈している。342は口径約35cmを測るもので，頸部内面には稜線を有している。外面の縄文は口縁と胴部にＬＲの縄文を施している。胎土，焼成は良好であるがやや磨耗ぎみになっている。焼成は2次的加熱を受けたのか赤褐色，淡褐色，淡灰色を呈している。343は口縁内面を強くヨコナデし頸部に稜線を残している。ＲＬの縄文を施して口唇部は先細りにしている。344

は強く内屈し，口唇部を平坦に仕上げている。345は上端からヘラ先沈線を引き下し，その左側にには346のような突起を付けていたと推定され，その剝離痕が残っている。346は上端に粘土を足して肥厚させ，ヘラ先による三角形の沈線と丸い刺突を加えている。外面にはＬＲの縄文を施し，口唇部は平坦に仕上げている。口縁内面は丁寧にヘラミガキを加えている。外面は暗茶褐色から淡褐色を呈している。347は口縁部に粘土紐を貼付し，その後ＲＬの縄文を施している。頸部でのくびれは弱い。淡褐色を呈している。348は上端を押え込むようにして内湾させている。349は内屈する口縁部の器厚が頸部より薄くなっている。ＬＲＬの複節縄文が施されている。350は部分的にしか縄文が施されていない。ただ，２次的加熱のためか色調が赤褐色や淡白褐色を呈している。

１類Ｂ（第28図351～354，359，図版47）

351は直立ぎみに開くが口唇部を丸く仕上げている。内面は強いヨコナデをして頸部内面に稜線を有している。口縁部にＬＲの縄文を施すが，器面は磨耗ぎみになっている。色調は淡灰褐色を呈している。352は強く外反するが端部はやや内湾ぎみとなり，横位に羽状縄文を施している。353も同様な形態を呈し，口縁の上端外面をやや突出させている。354は口径22.8cmを測り，外傾した後に口縁部が直立している。口縁部にはＲＬの縄文を，胴部には縦位にＲＬの結果縄文を施している。口縁部の内面には炭化物が付着している。色調は淡褐灰色を呈している。359は口縁が内湾ぎみに立ち上り，口唇部を平坦に仕上げている。口唇部から胴部へ縦位の羽状縄文を施している。器厚は他のものより薄くなっている。

１類Ｃ①（第28図355～357，第29図360，375，371，379，図版47）

これは口径約20cm以下のものをまとめた。355は口径約16cmを測るもので，口縁部は上方へ開きぎみに内湾し，口唇部を平坦に仕上げている。358の口縁形態は355と類似するがやや短く，口唇部も先細りぎみのものとなっている。胴部は円筒状に立ち上り，これに口縁をつないでいる。口縁にはＲＬの縄文を横位に，胴部にはＲＬとＬＲの原体を結束した羽状縄文を縦位に施している。内面は横位にヘラ削りしている。胎土，焼成は良好で，色調は淡灰褐色を呈すが一部に黒斑が認められる。356，357は口縁部片である。360は口径約17cmを測るもので，形態的には355と同様なものである。口縁部には横位に，胴部には縦位の木目状撚糸文を施している。口縁外面には丸い刺突を加えている。371，375，379はこれらの頸部から胴部の破片であろう。

１類Ｃ②（第29図362，364，図版47）

これは口縁上端を半截竹管でヨコナデしている。口縁下端にはこの半截竹管による文様が残らないために本類に含めた。362は縦位に結束した原体で羽状縄文を引いている。ただ，ＲＬの縄文は残るが他のものは無節の撚糸状となっている。これは原体が施文の過程でほどけたものであろうか。焼成は良好である。364は端部の破片である。

１類Ｃ③（第29図361，363，374，図版47）

これは口縁部に粘土紐を貼付しているものである。361は上端部に沿って，363は上端部及び上端部から頸部側へ垂下させている。これらの粘土紐を貼付後にＲＬの縄文を施している。374は頸部に粘土紐を貼付しているものである。全般的に胎土中には砂粒が多い。

3類（第29図367～370，372，373，図版48）

口縁の外傾するもので，367は外面に「し」の字状に粘土紐を貼付している。368は口縁が外傾するもので，口唇部も平坦にし外面端部をやや突出させている。複節の縄文が施されている。369，370も外傾するものである。373は口径約17.2cmを測るもので、口唇部内面側から丸い突起が貼付されている。372は無節の縄文が施されている。

5類（第29図365，366，図版47）

口縁が外反して上端に粘土紐を貼付して段をつけているものである。365はＬＲの縄文を施し口唇部は平坦になっている。366も同様なものであるが口縁上端を半截竹管で調整している。これも口唇部は平坦に仕上げている。

第11群土器

浅鉢となるものをまとめた。（第27図328～330，図版48）328と330は同一個体で，328は底径9.4cmを測り器厚も約1.3cmを測り厚手のものとなっている。外面にはＬＲの縄文地文上に2本単位の半隆起線文を引いている。胎土中には微細な砂粒を多量に含み，焼成は良好である。色調は淡白灰褐色で一部黒斑が残っている。329は口径約21.8cmを測り，外傾する胴部が口縁部で直立ぎみに立ち上る。外面にはＬＲの縄文を施すが，器面が一部剝落するなどその遺存状況は悪い。胎土には微細な砂粒を含み，焼成も不良であまい。色調は暗茶褐色を呈している。

第12群土器

ここでは胴部片と底部片をまとめておきたい。胴部については特徴的な文様を持つもののみとし，縄文，木目状撚糸文等を施す大きな土器片であっても掲載してはいない。

胴部

縄文（第29図376～378，図版48）

これは縦位に施された縄文地文上に粘土紐を貼付して隆帯とし，この隆帯上を半截竹管で引き直している。ただ，377の器面右側に引かれた半隆起線文は，縄文地文上に引かれているものである。胎土には砂粒を含むが，焼成と伴に良好である。色調は明褐色を呈している。ただ，土器の内面側の破れ口には黒色の付着物が残っている。

木目状撚糸文（第29図388～390，図版48）

388～390は第3～7群土器の胴部から底部である。388は胴中位で脹らむものである。389は胴部から頸部にかけて外反している。390は胴下部に最大径があり，胴部には一部隆帯状になった半隆起線文を3単位に配している。胎土には砂粒を多く含み，焼成はややあまい。色調は褐色から暗灰色を呈している。

網目状撚糸文（第29図384～387，図版48）

第3次調査でこの種の文様を施したものの出土数量は少ない。384には爪形文を加えた隆帯が横走している。

底部・台付土器

第３次調査で出土した底部は遺物箱で約３箱分あるが，文様等が明らかなものは少なく，その多くは底面の円盤部分か底面から僅か数cmの所までの破片のものが多数を占めている。ここで図示したものはその実測可能なものである。確認できる文様は木目状撚糸文，網目状撚糸文，縄文，無文，縄文地文上に半隆起縄文，無文地に半隆起線文となっている。

木目状撚糸文（第31図391，392，第32図393～410）

この文様を残す底部には外傾するもの391～401，直立するもの402，403，内屈ぎみのもの404～408が存在している。外傾するものでは391は底径約14.2cm，現存高26.4cmを測るもので，底部から外傾ぎみに立ちあがって胴下部から直立するものである。底面にスダレ状圧痕が残る。392は底径約17.7cm，現存高で13.7cmを測る。これも底面にスダレ状圧痕が残る。393では底径が約17.4cmを測り，これもスダレ状圧痕が残る。394は底径約15.2cmで底面に網代痕が残るが，その組み方は明らかではない。その底径は約13～15cmのものが多く存在している。

網目状撚糸文（第32図411）

これは１点のみしか確認できなかった。直立ぎみに立ち上るもので，底径は約９cm測るが接地部では約８cmとなる。

縄文（第33図42～416）

縄文を施したものも数が少ない。414や415以外は外傾している。また，416では底面より少し上でくびれてから再び外反している。底面に僅かに網代痕の痕跡が残るが，磨耗ぎみのため明らかにしえない。

無文（第33図419～430）

これらも外傾するものが多い。底部の圧痕も423は網代痕のようであるが明らではない。425，430～432はスダレ状圧痕を残すが，433は網代痕であるがその編み方は明らかではない。

縄文地文に半隆起線文（第34図434～436，447～449）

これも確認できたものが少ないが，434～436は外傾し，447～449は内屈ぎみに立ち上る点から胴部が鼓形を呈する深鉢のものであろう。また，434は下端の半隆起線文で「∩」の字形に区画された中を指頭で強くナデで凹ませている。

無文地に半隆起線文（第34図437～446，450～455，図版48）

これは無文地に半隆起線文を引くもので，442以外は縦位方向に引いている。442は下端近くに横走する半隆起線文を持っている。446は底径が約４cmを測り，確認された底部の中では最少のものである。また，450～453は直立するもので，451にはスダレ状圧痕が残る。454，455は内屈ぎみに立ち上っており，これも胴部が鼓形を呈する深鉢のものであろう。456は底径12cm，現存高で22cmを測るもので，外面の無文地上に半截竹管で擦痕状の沈線を引いた後，半隆起線文で山形文や直・曲線文を引いている。内面は底面あたりは横位にヘラ削りするが，上部は入念なヘラミガキをしている。胎土，焼成は良好で，色調は灰褐色，暗灰褐色，褐色を呈している。

台付土器（第27図339，340，図版49）

339は脚径約13.6cmを測り，脚部には隅丸正方形の透し穴が４ヶ所あると推定される。脚上部には幅約３mmの半隆起線文を横走させている。また脚外面にはＲＬの縄文地文上に同様な幅の半

隆起線文と押し引き文を施している。胎土には全体に細かい砂粒を含み，焼成はややあまい。色調は淡白灰褐色や暗灰色を呈している。340は脚下端に軌軸文を引き，その上部には三角形の透し穴を持ち，これとは別に左側にも別の透し穴の一部が残っている。淡茶褐色から淡白褐色を呈し，胎土中には２～３cm大の砂粒を含むが，良好なものとなっている。

土偶（第34図457，図版48）

土偶はＡ区の包含層から出土したものである。十字形板状土偶で，頭部，左腕，胴部を欠いている。外面には頭部側から胴部へ２条単位の沈線を引き下し，左右両碗の上端や中央にも２条１単位の沈線を引いている。この沈線は背面にも引かれている。また，胸部から右腕にかけては反りぎみに作られている。破れ口から粘土紐の接合状況を見ると，胸部前面から右腕にかけては１本の粘土紐で作られ，その背面に別の粘土紐を接合させて厚味を持たせている。胸右側の沈線上に右乳房の剝離痕が残っている。胎土は特に精選されて砂粒分の少ないものとなっている。色調は赤褐色や淡白褐色を呈し，焼成は良好なものとなっている。

(2) 石　　器

石器の出土量は少なく，石器16点，フレーク１点，石核１点のものが出土している。ただ，その出土状況の明らかなものは少ない。調査区内が湧水のため包含層等がヘドロ化した状態では，石器とベースの青灰色砂礫層中の礫との区別をつけるのが困難で，泥水と伴に排土され，後日降雨で泥が流されて発見されたものが多い。特に石核についてはベースの礫として捨てられたものであった。

打製石斧（第36図１～９，図版49）

打製石斧は９点出土している。形態的にＡ類基部が刃部幅より狭くなるもので，敲打を施してくびれ部をつくり出すもの。Ｂ類短冊形のもの。Ｃ類撥形のものに区分される。スクリーントーン貼付部分は磨耗節囲を示している。全体に扁平なものが多い。

Ａ類（２，４，９）

２はほぼ完形品で，刃部は磨耗している。側縁のくびれ部には敲打を加えている。刃部の磨耗範囲は実測面に多く，裏面では使用の際に剝離したためか少ない。４は完形品で，刃部両面に磨耗範囲が残っている。側縁の敲打は基部側から刃部側に認められる。９は全体に磨耗しており，刃部の磨耗も明らかではない。片側縁には敲打によって大きく凹ませている。

Ｂ類（３，５～８）

３は右側縁から刃部にかけて磨耗している。両面と基端部には自然面が残っている。刃部も欠けて剝離しているが，その剝離面も磨耗していることから，剝離後も使用したのであろう。５もその両面に自然面が残る。右側縁が直線的で，左側縁は内湾ぎみになっている。６は両面と左側側縁に自然面が多く残り，横断面も二等辺三角形の形態を示すなど扁平な礫が使用されている。刃部には使用痕が残っている。７は全体に打ち欠きで形を整えているが，刃部側を欠いている。８は両面と左側縁に自然面を残すなど，６のように扁平な石材で作られている。基端部を一部欠くが，刃部には磨耗痕が残っている。

Ｃ類（１）

これは撥形を呈するもので，基端部を欠いている。右側縁部幅は厚く敲打を加えている。刃部は一部剥離しているが，磨耗して縦方向の擦痕を残している。

磨製石斧（第36図10，図版49）

磨製石斧は１点のみで，礫を敲打して整え，磨いたものである。部分的に礫の自然面や敲打痕を残している。基端部を欠いている。

磨石類（第36図11～13，図版49）

磨石類は３点出土している。実測図中の１点破線は磨面範囲を，破線は敲打面の範囲を示している。

11は半欠品であるが両面に磨面があり，側面には敲打痕を残している。12は両面に磨面と凹部を残している。13は両面に磨面部を持つものである。

石皿（第36図14，図版49）

これも破片であるが，磨面部に平行して剥離している。磨面部はやや荒れている。

スクレイパー（第36図16，図版49）

これは剥片の一端を打ち欠いて刃部を形成している。15は剥片で，石質はフリントである。

石鏃（第36図17，図版49）

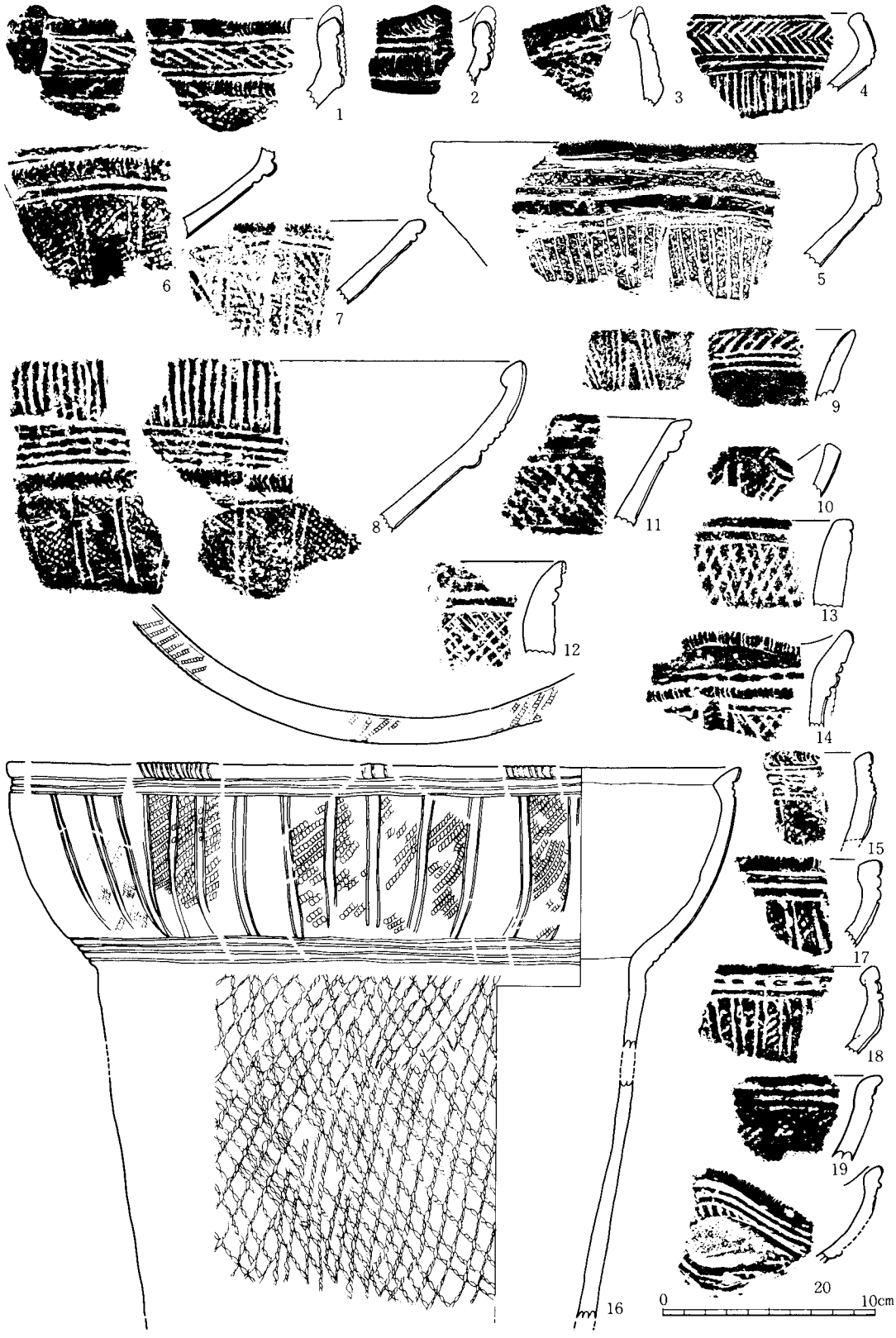
これは両側縁を調整剥離させて作っているが，基部側を欠いている。

石核（第36図18，図版49）

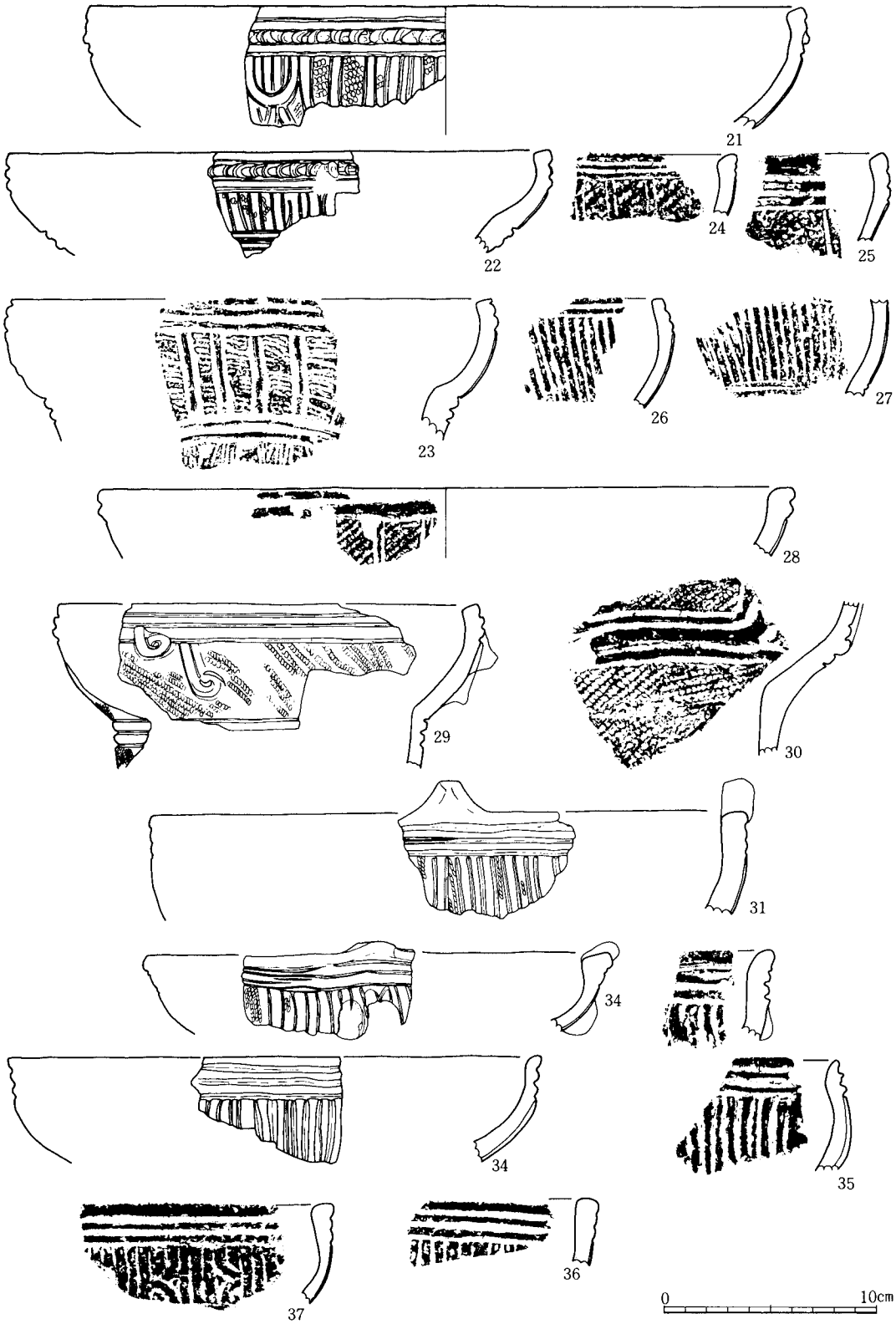
石核は１点のみで，握拳大の大きさである。重量も１kgを越えており，他地域から持ち込まれたものである。

第2表　徳前C遺跡第3次石器観察表

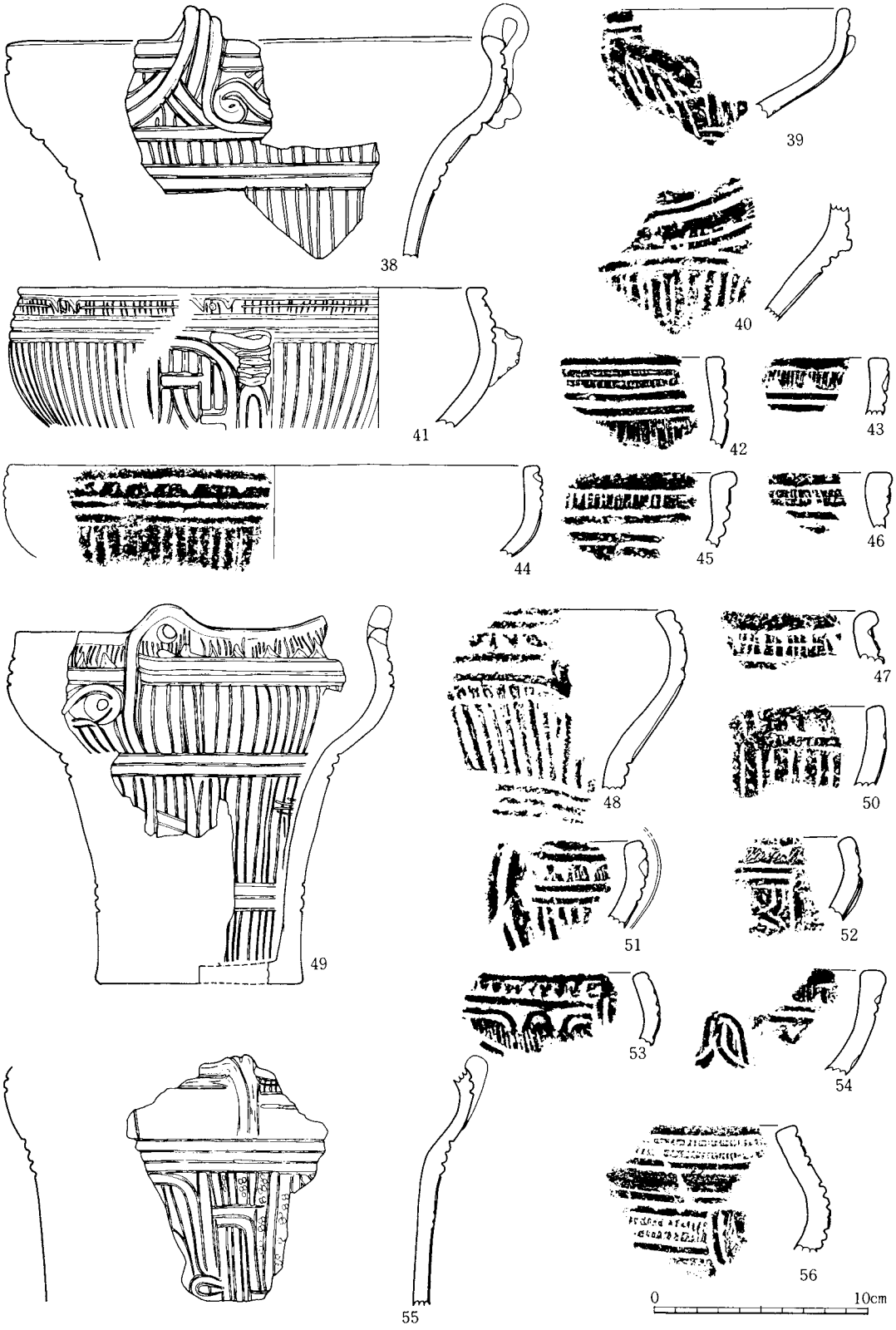
遺物No.	石器名	出土地点	挿図No.	石質	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	遺存状態	備考
1	打製石斧	不明	1	輝石安山岩	(106.5)	66.0	23.8	(204.5)	基端部欠	
2	打製石斧	A区黒色下層	2	安山岩	104.3	53.0	23.5	(119.5)	裏面刃部欠	
3	打製石斧	不明	5	安山岩	118.2	53.0	16.0	128.2	完	
4	打製石斧	不明	6	変質輝石安山岩	100.8	49.8	16.0	99.8	完	
5	打製石斧	A区黒色下層	7	安山岩	(87.2)	49.0	(21.0)	(74.1)	刃部欠	
6	打製石斧	不明	8	輝石安山岩	(94.2)	45.9	16.9	(67.9)	基端部欠	
7	打製石斧	A区黒色下層	3	安山岩	88.5	51.7	17.0	78.7	刃部欠	
8	打製石斧	不明	4	安山岩	106.1	51.5	26.0	138.5	完	
9	打製石斧	不明	9	輝石安山岩	(81.9)	48.5	24.0	(92.6)	基端部欠	
10	磨製石斧	不明	10	輝石角閃石安山岩	(120.5)	70.0	32.2	(444.5)	基端部	
11	磨石類	A区黒色下層	13	石英安山岩	(68.1)	85.6	56.5	(452.1)	⅓欠	
12	磨石類	不明	12	緑色凝灰岩	112.1	75.0	37.0	(322.5)	一部欠	
13	磨石類	A区Ait2	11	花崗岩	(90.0)	(30.0)	(50.5)	(151.0)	⅔欠	
14	石皿	A区黒色下層	14	中粒砂岩	(95.5)	(102.2)	(21.2)	(225.0)	残欠	
15	スクレイパー	不明	16	輝石安山岩	34.5	55.5	11.2	24.3	完	
16	石鍛	不明	17	輝石安山岩	(12.4)	(9.5)	(2.0)	(0.2)	基部欠	
17	石核	不明	18	輝石安山岩	80.0	112.0	104.0	1148.0		



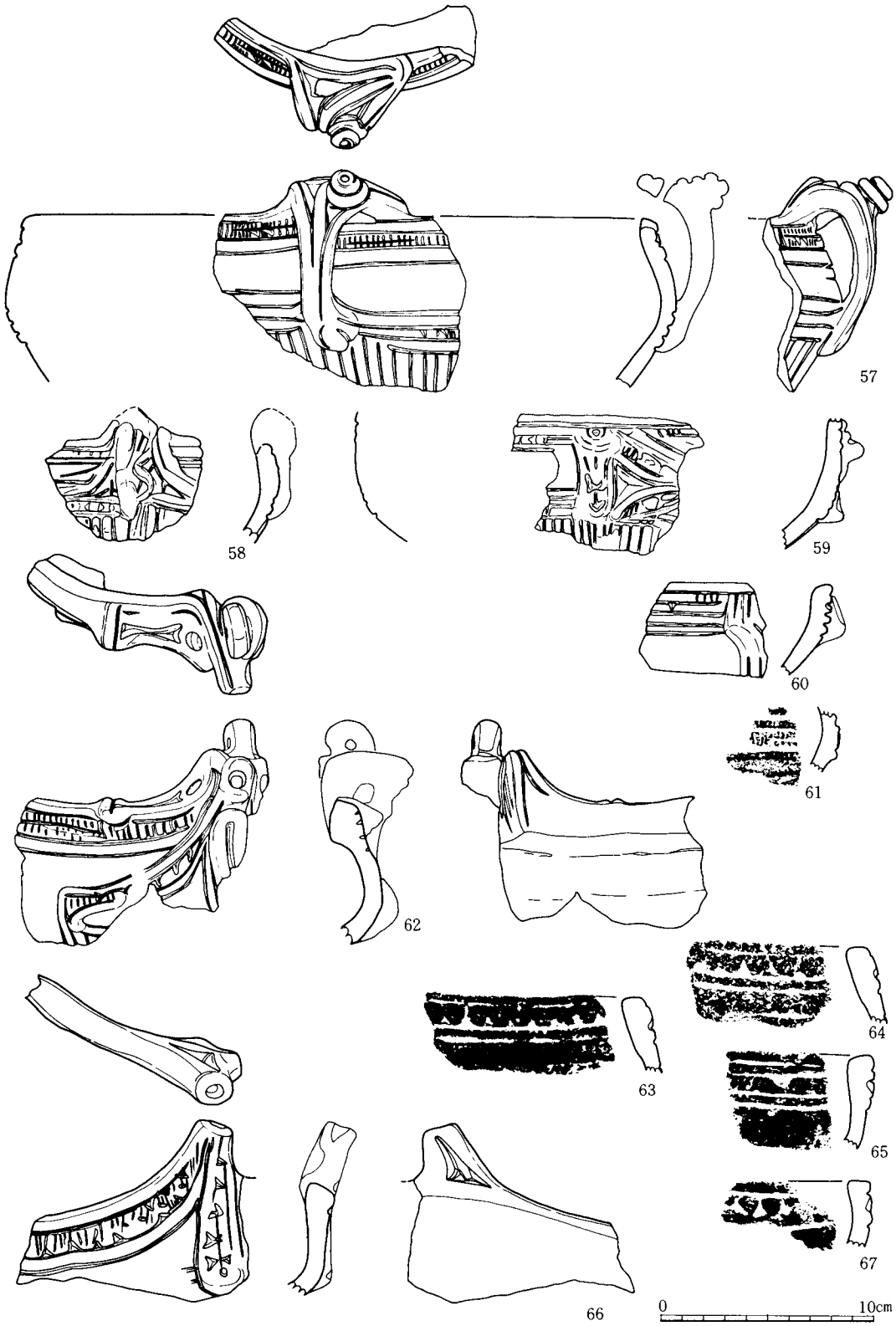
第９図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(1)



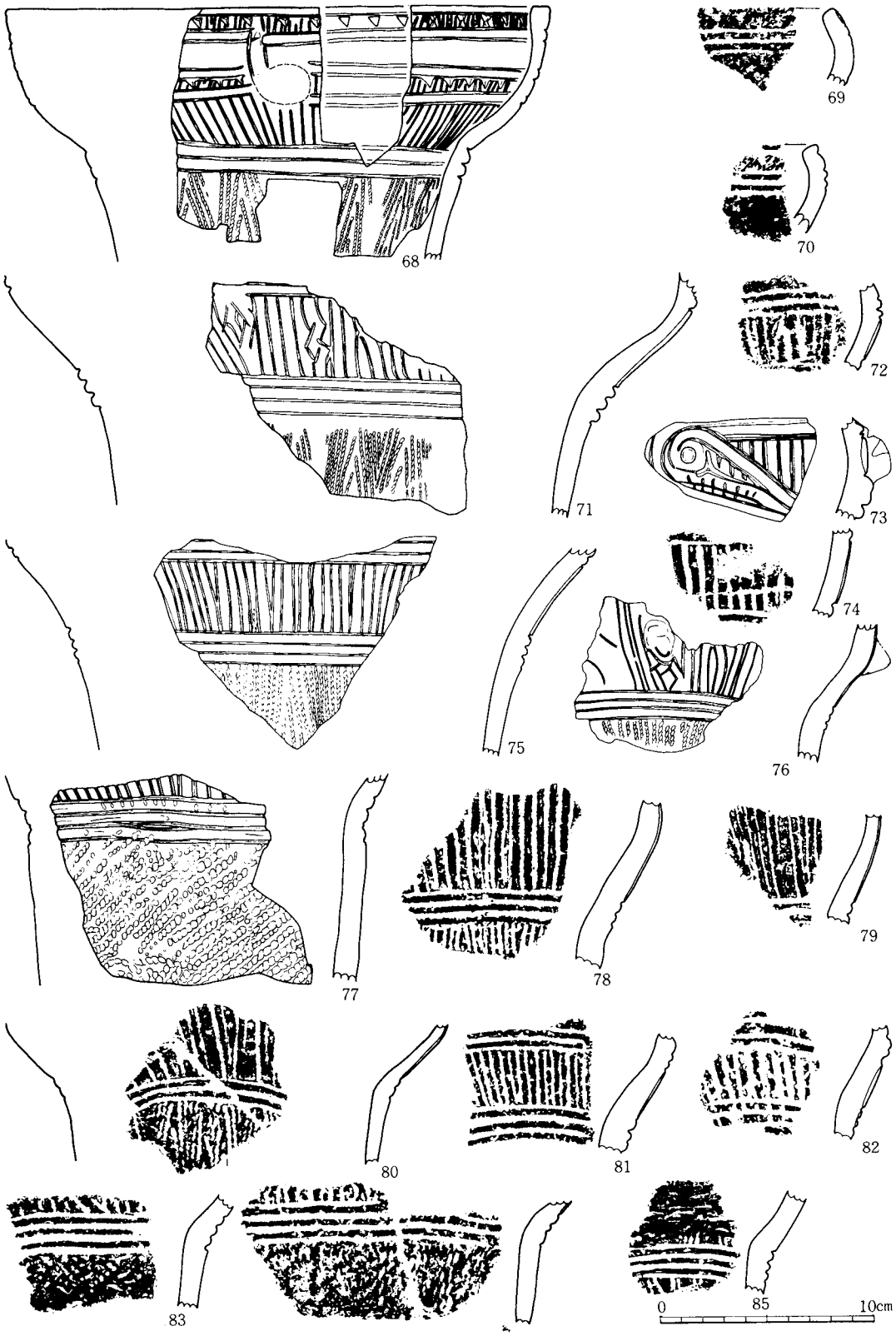
第10図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(2)



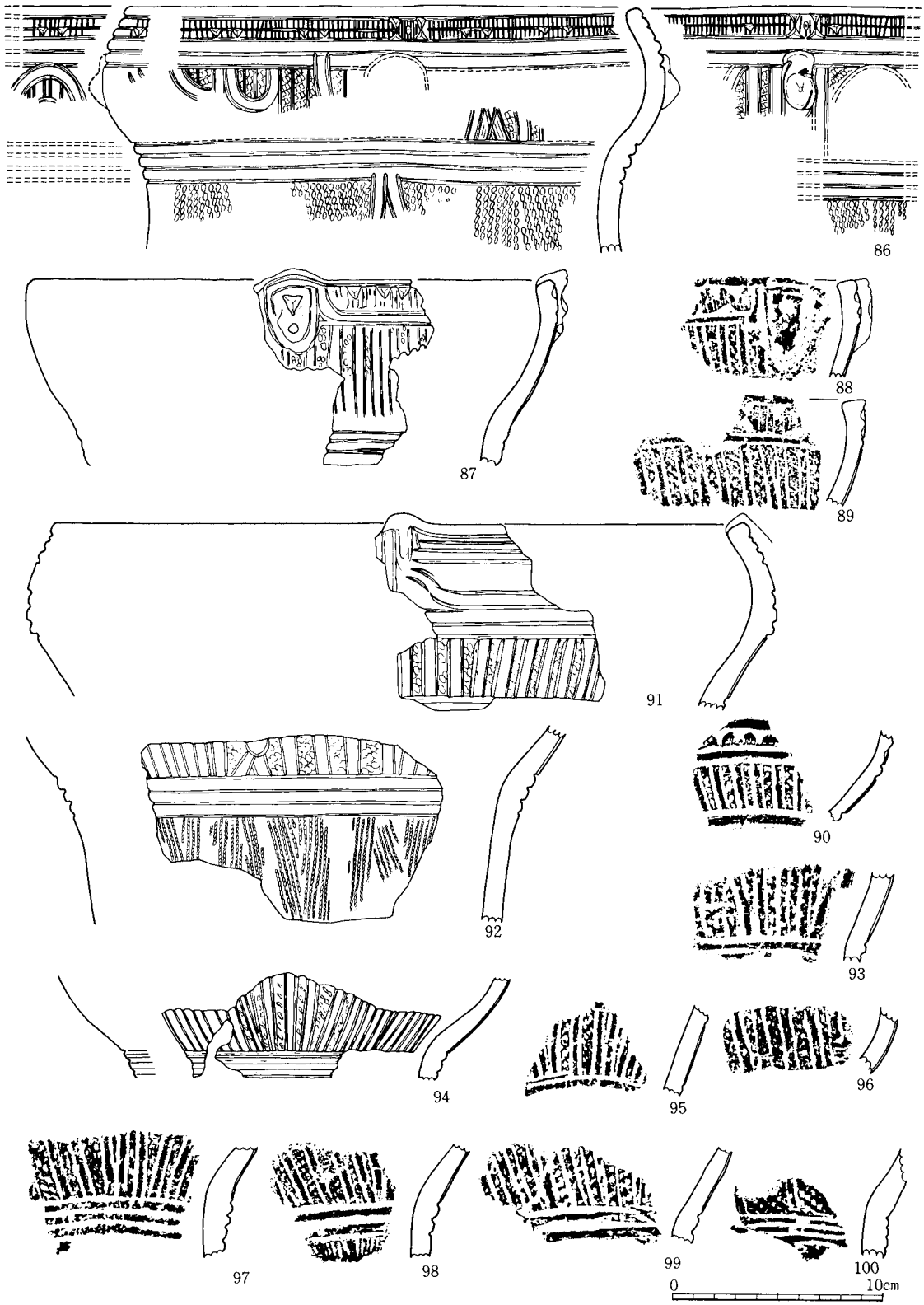
第11図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(3)



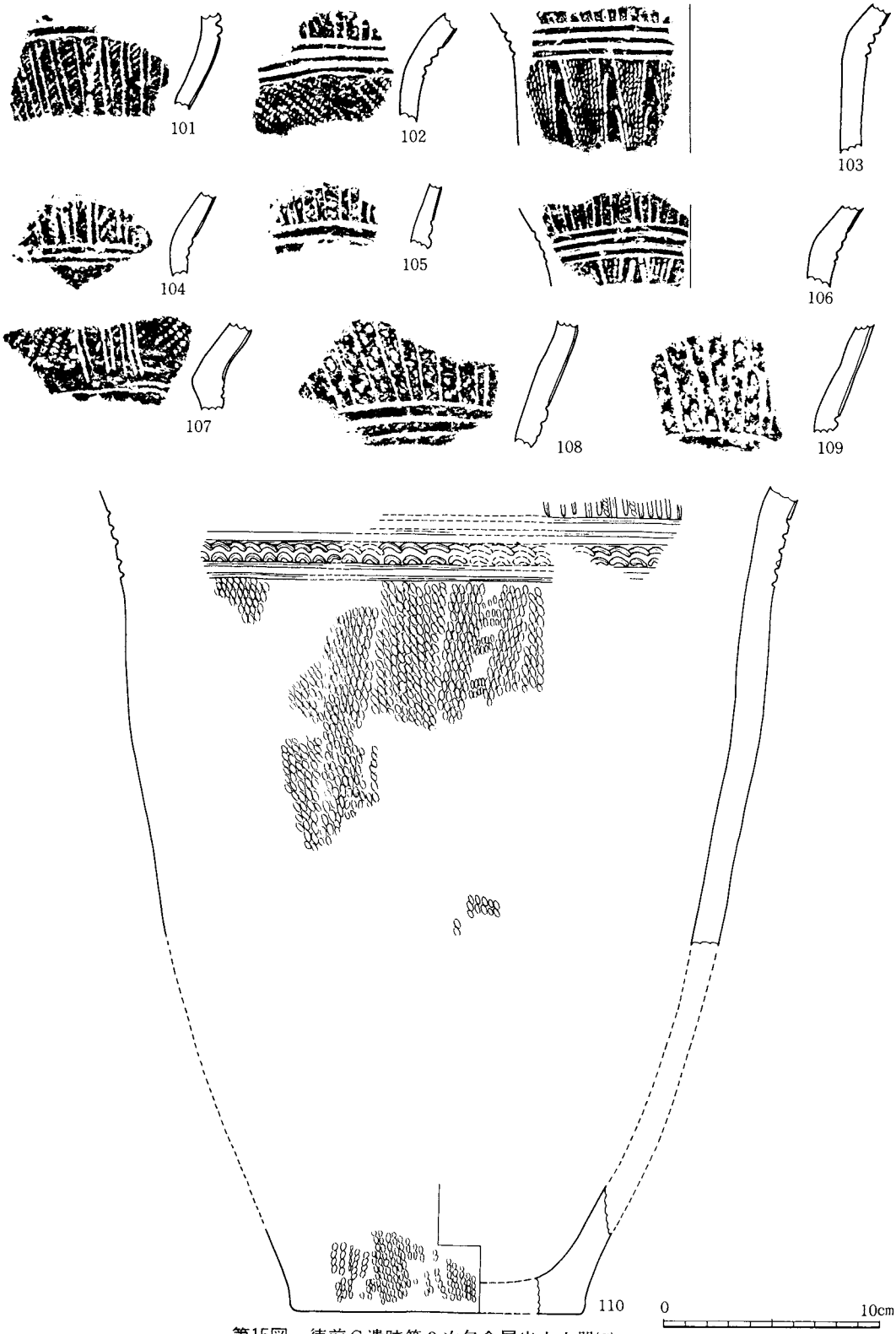
第12図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(4)



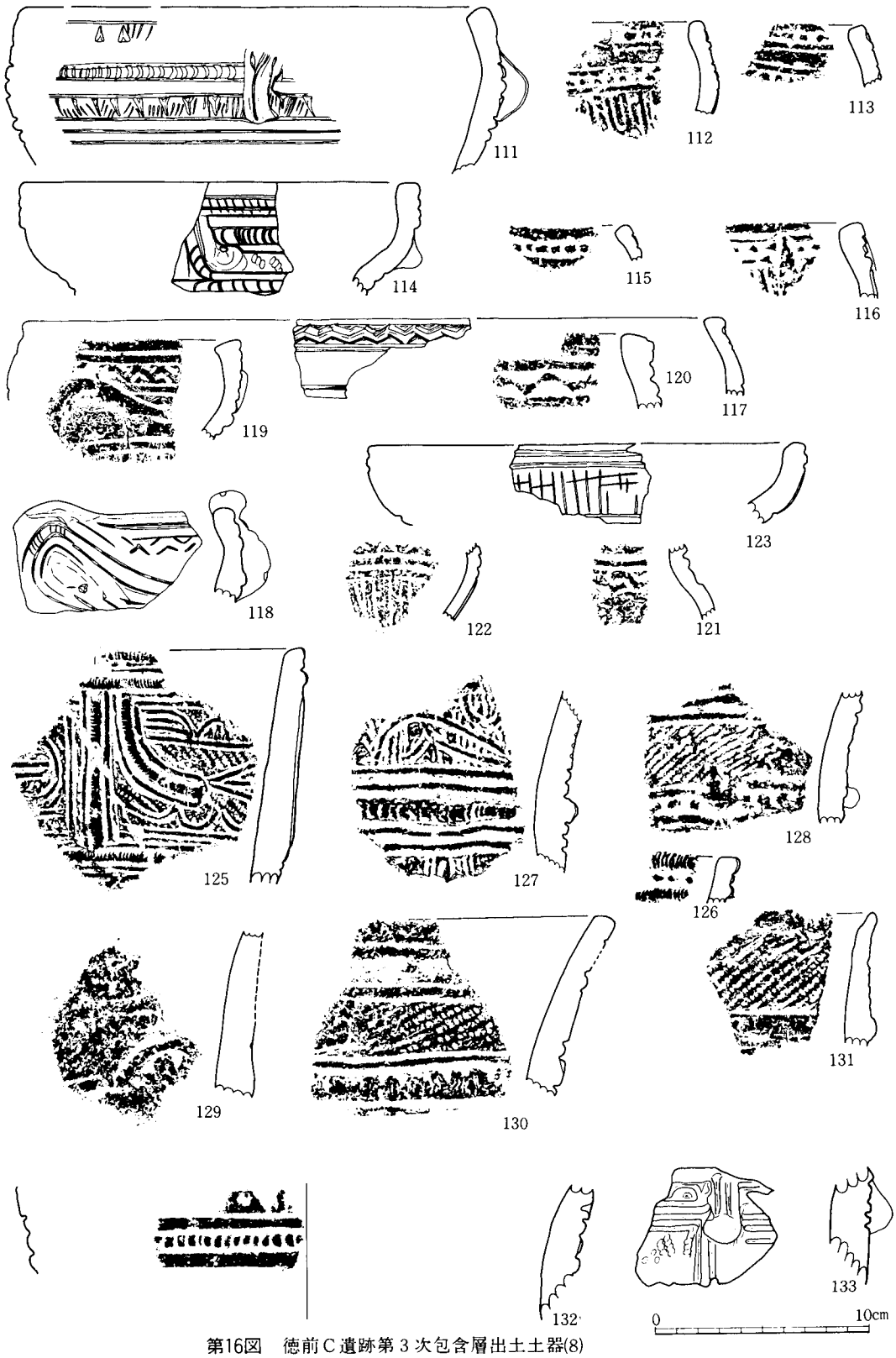
第13図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(5)



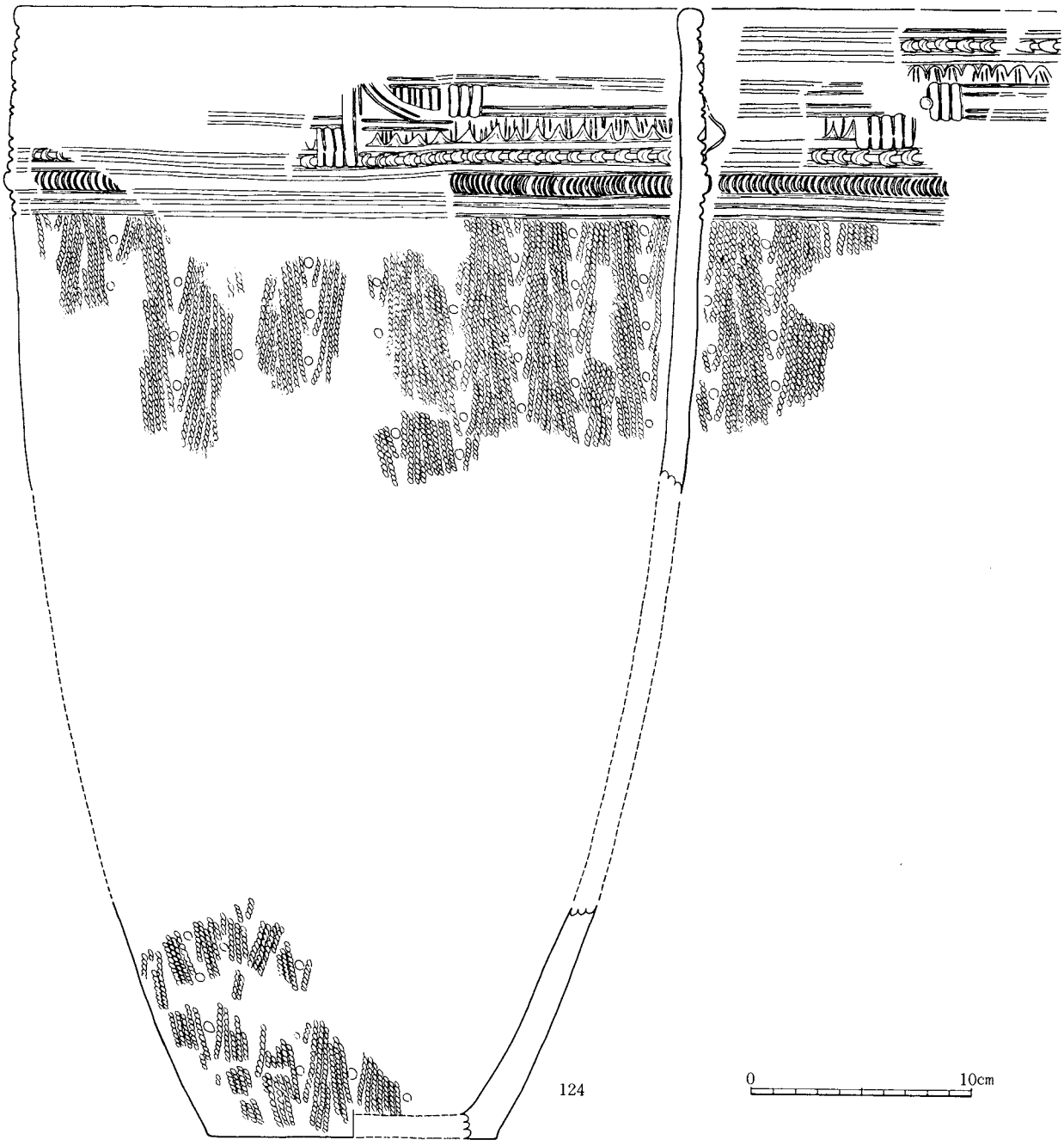
第14図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(6)



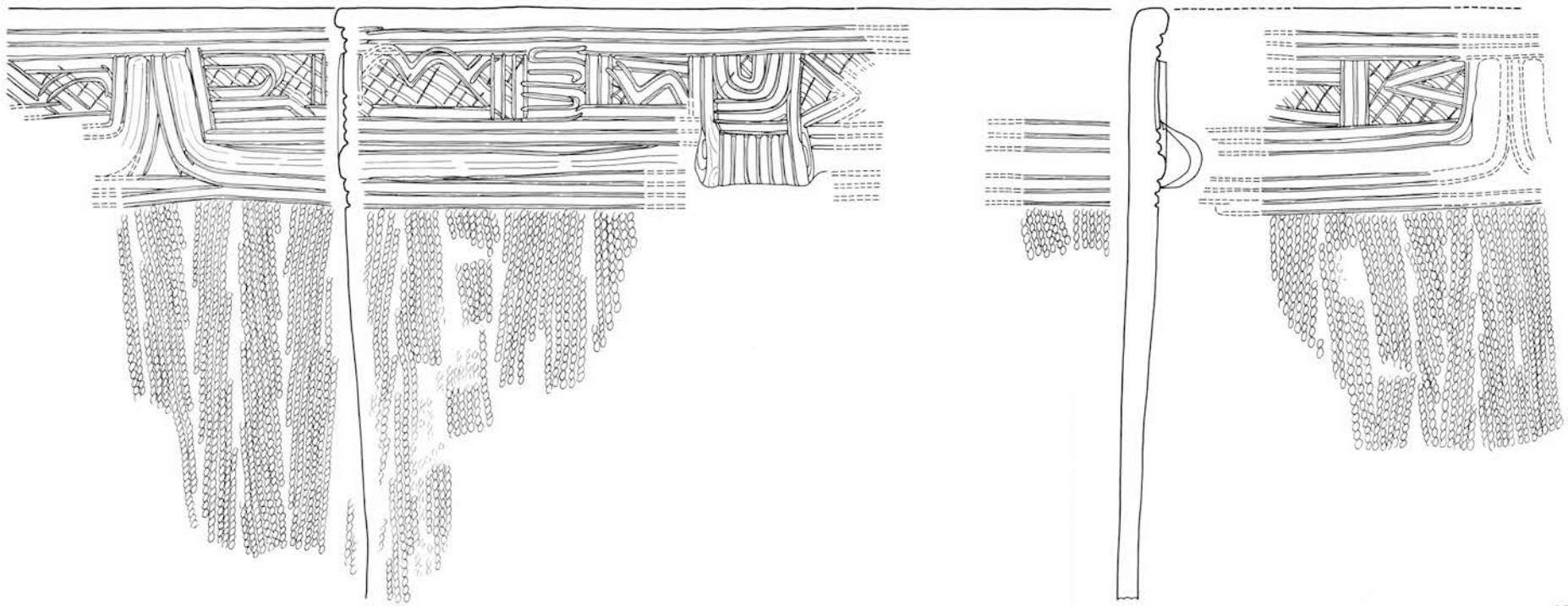
第15図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(7)



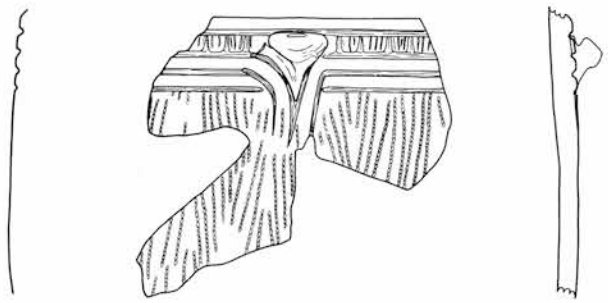
第16図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(8)



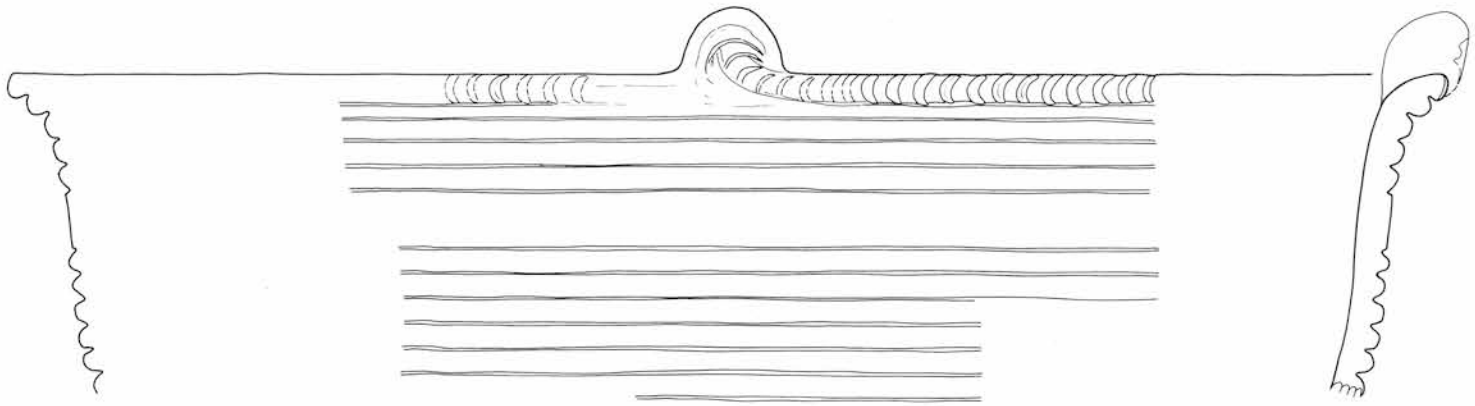
第17図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(9)



134



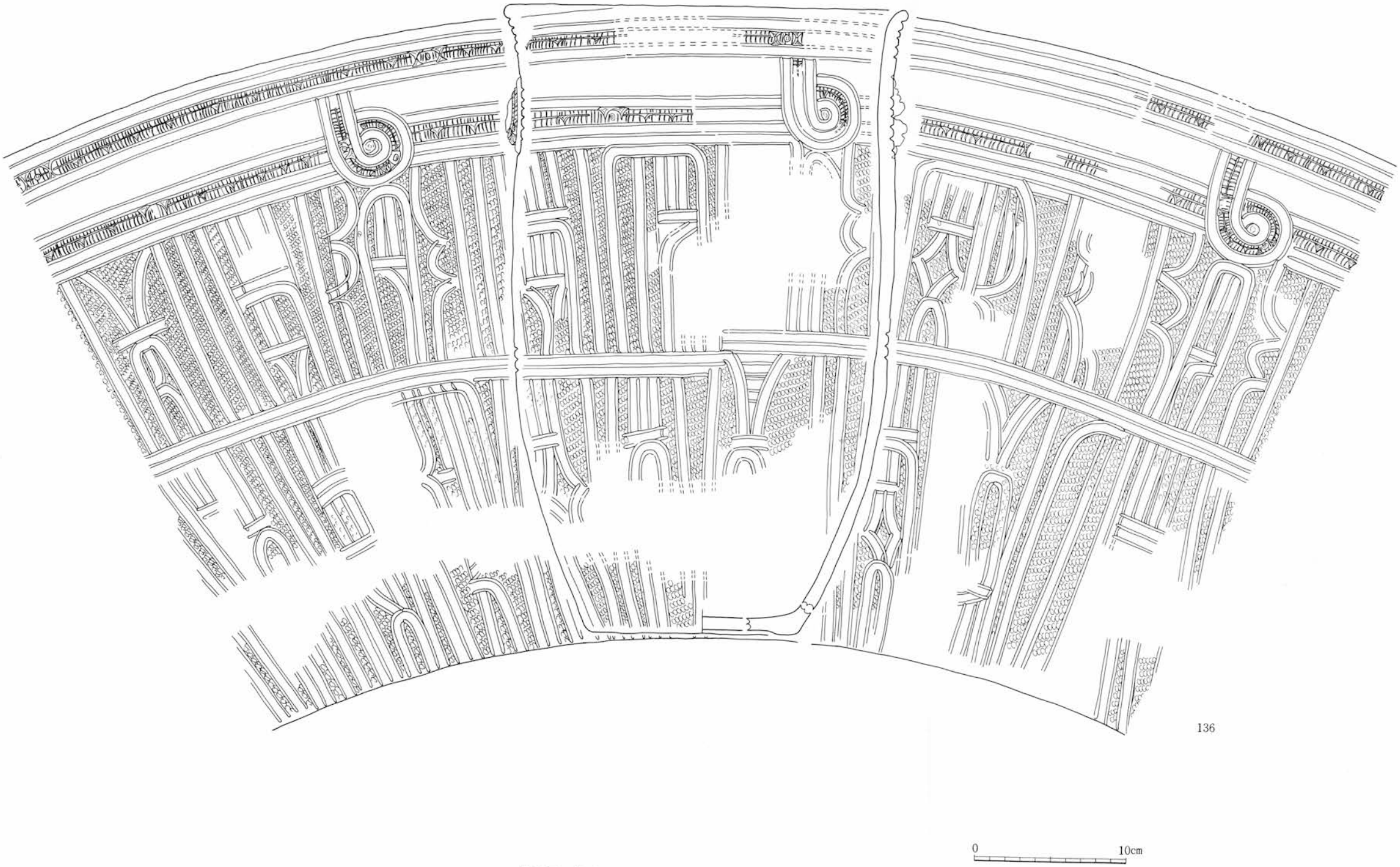
135



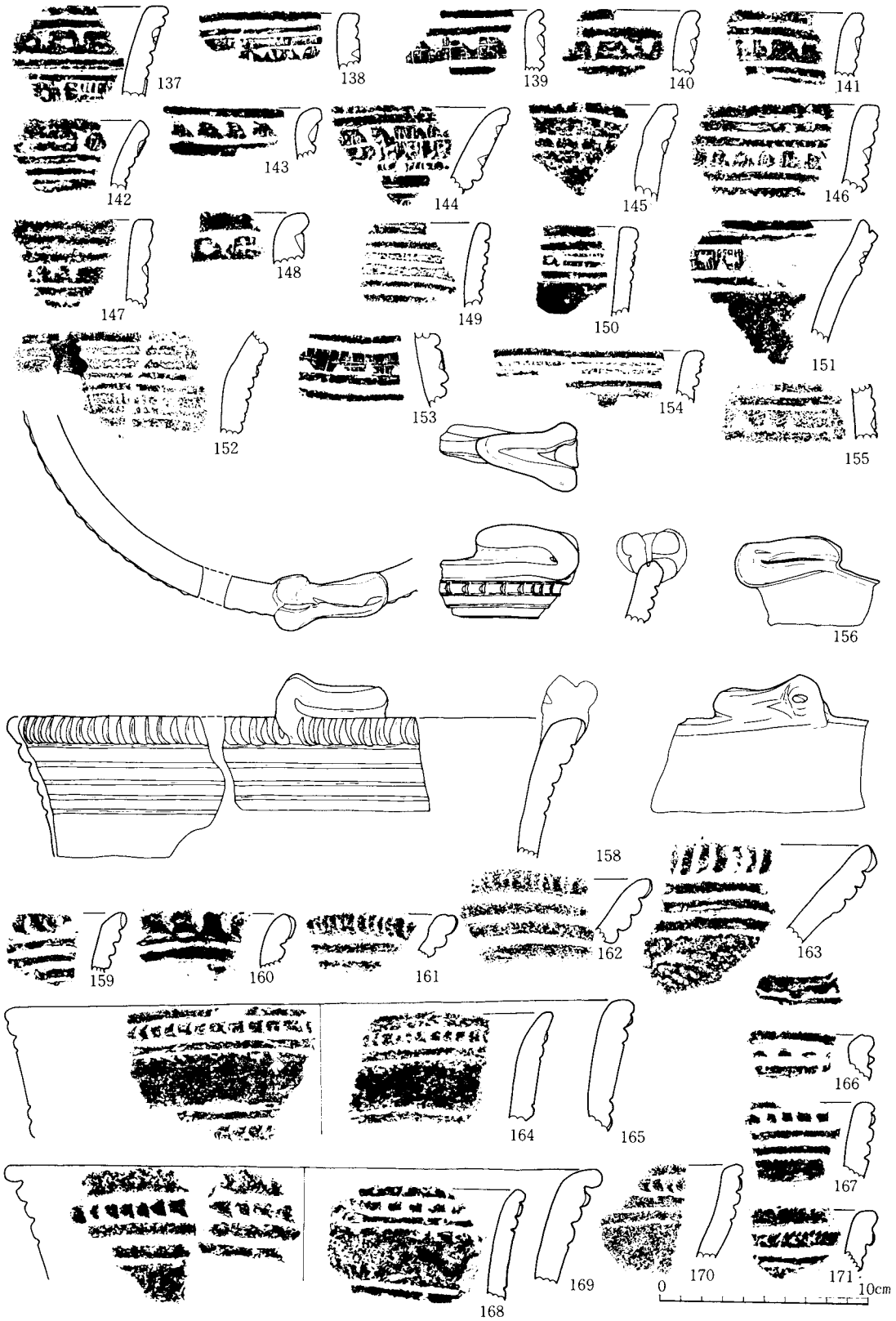
157

0　10cm

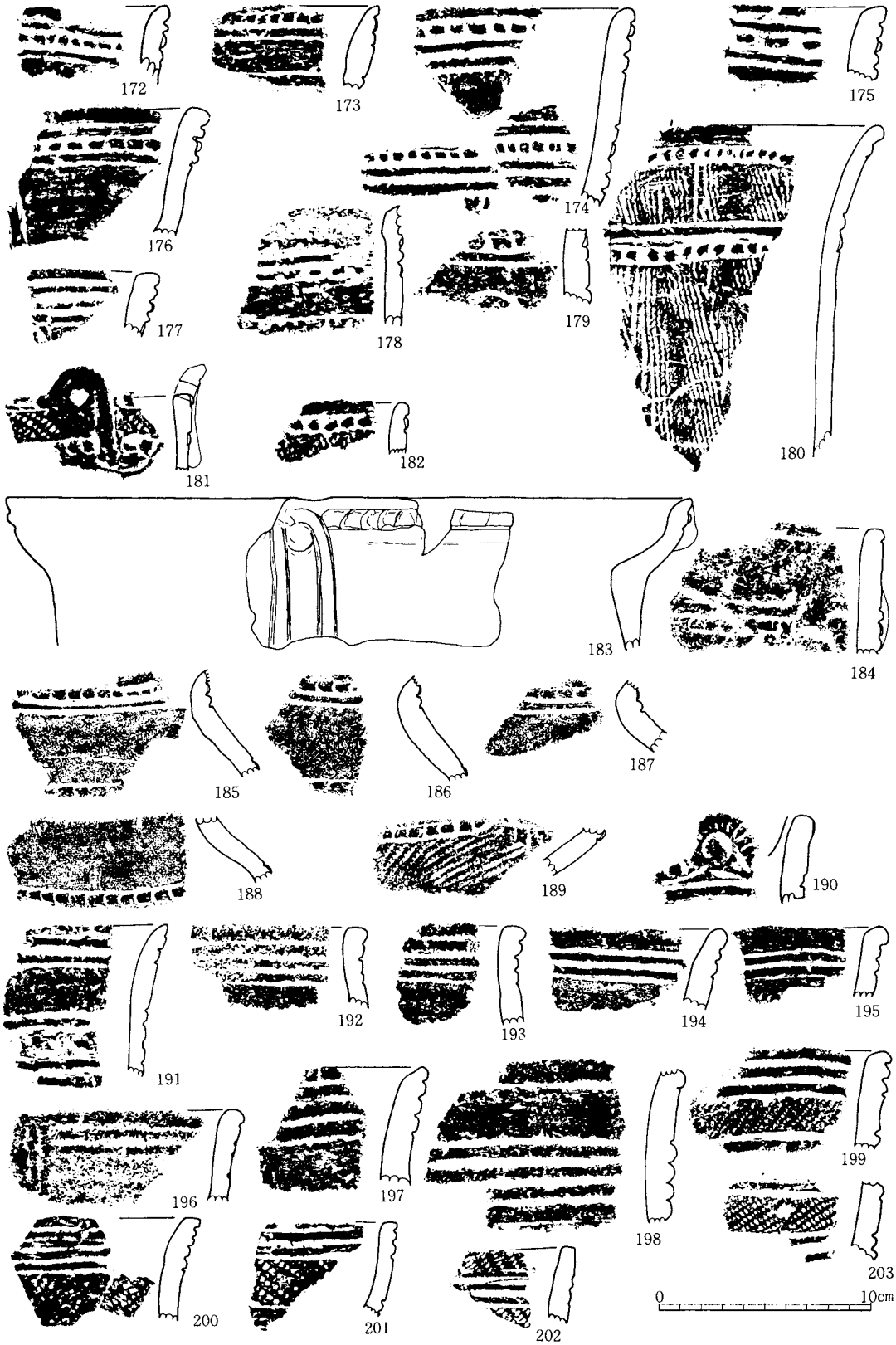
第18図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(10)



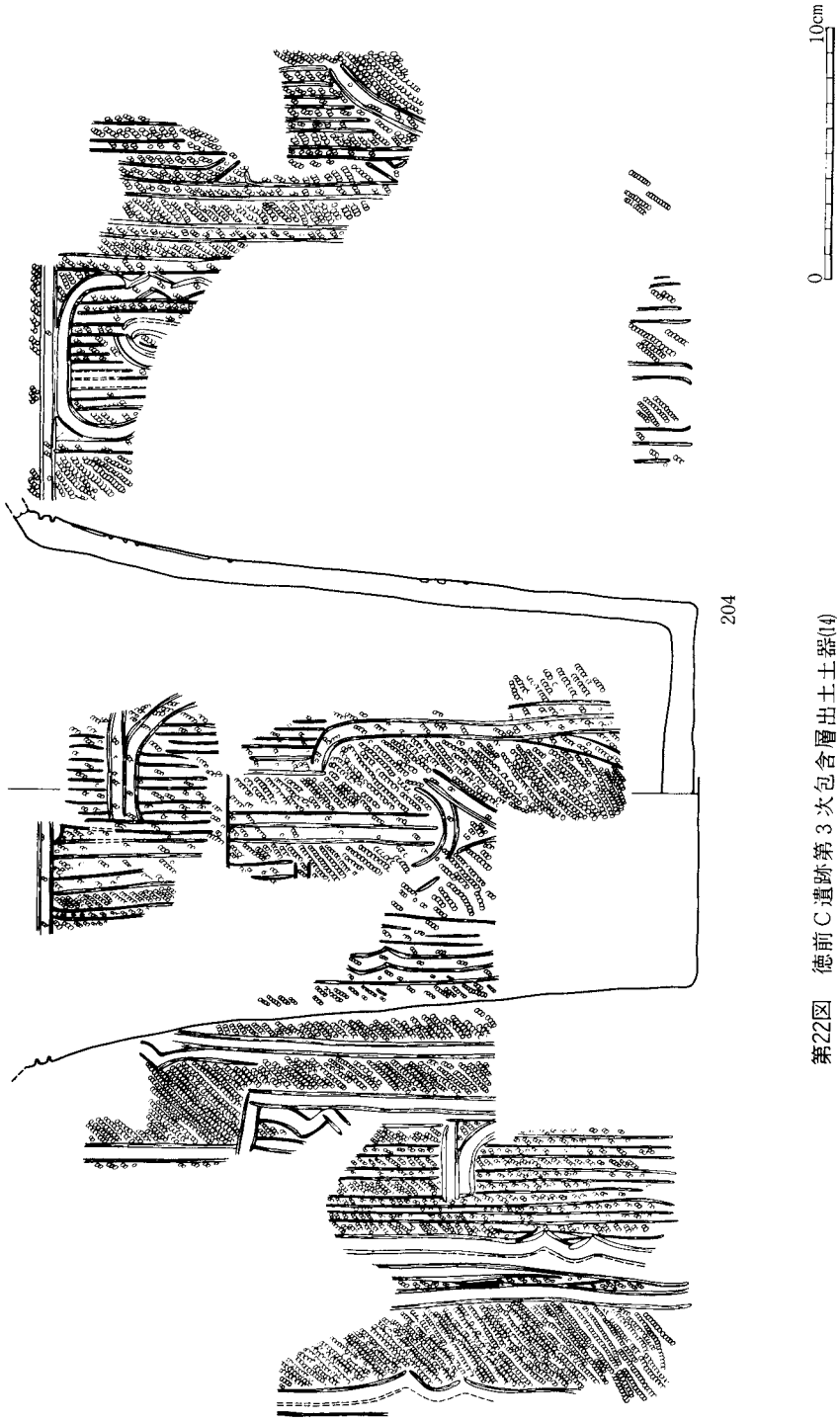
第19図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(11)



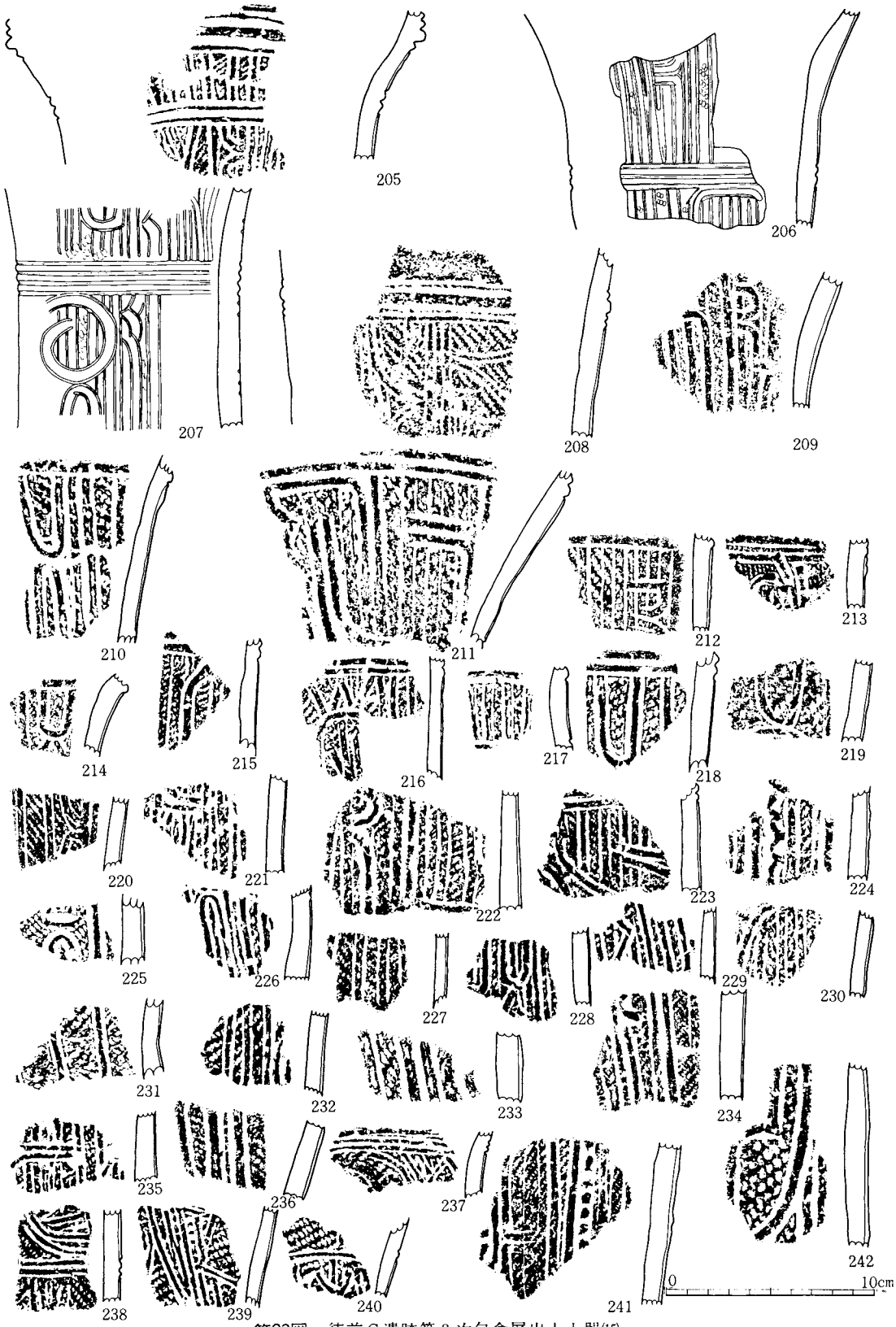
第20図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(12)



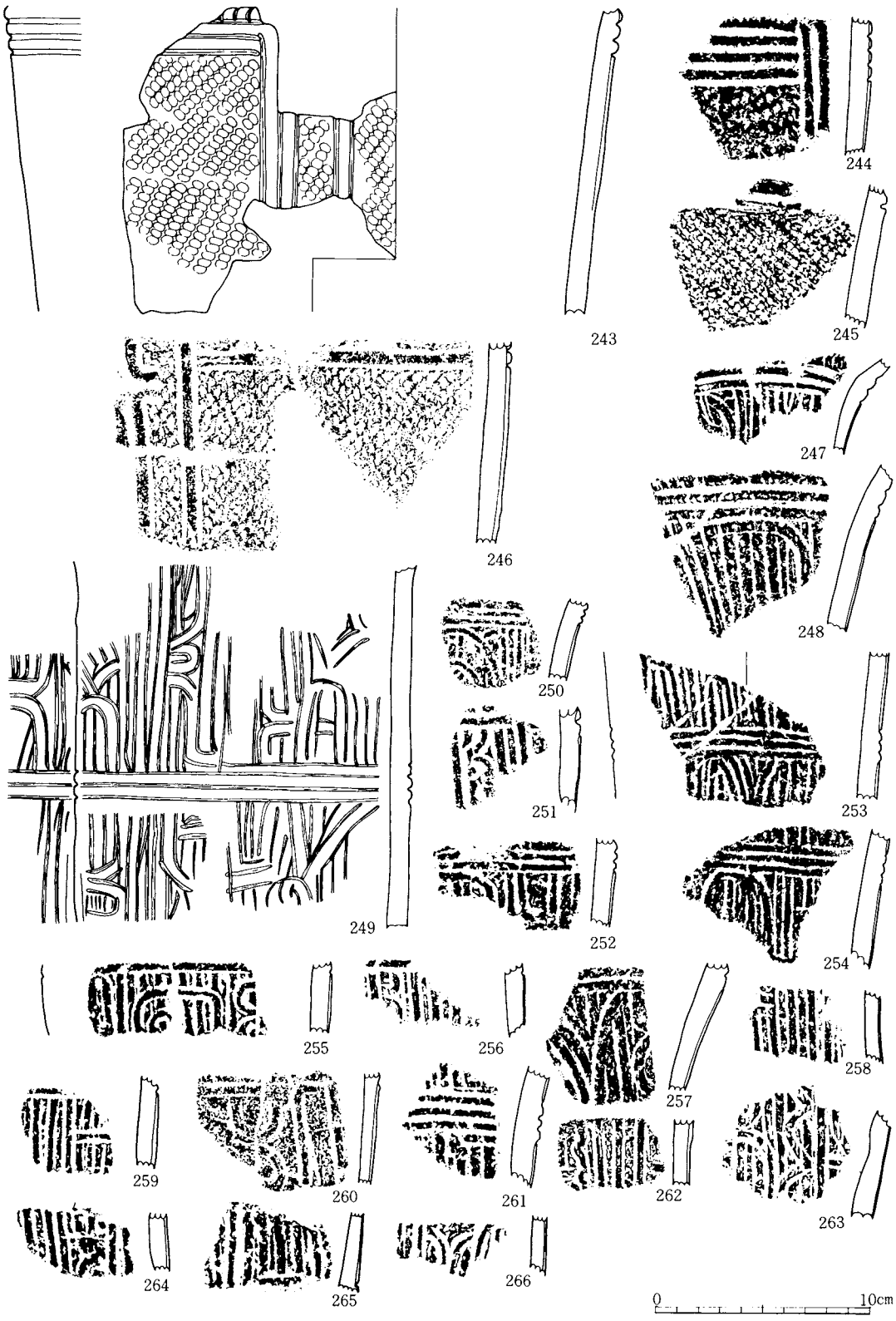
第21図　徳前C遺跡第３次包含層出土土器(13)



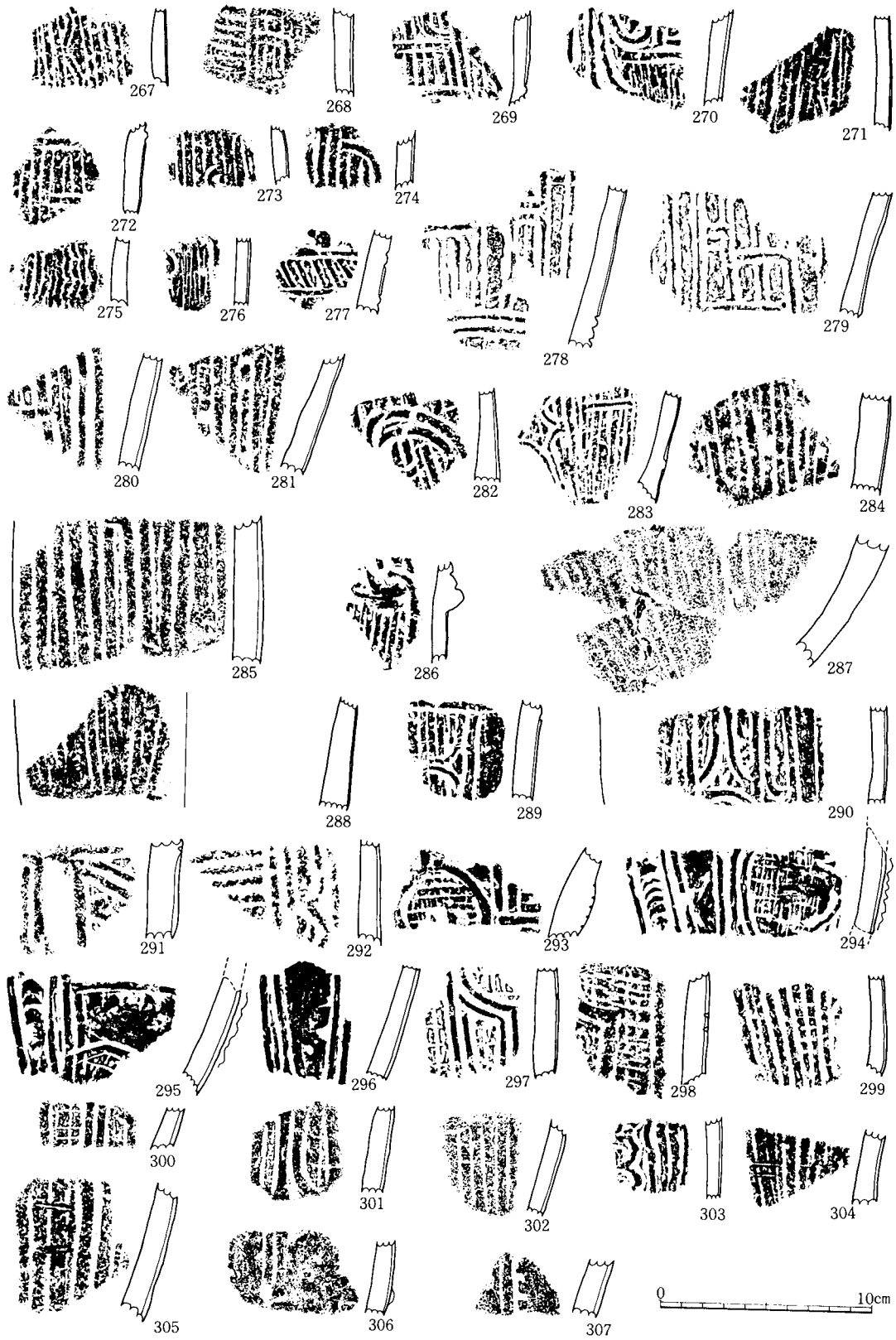
第22図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(4)



第23図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(15)

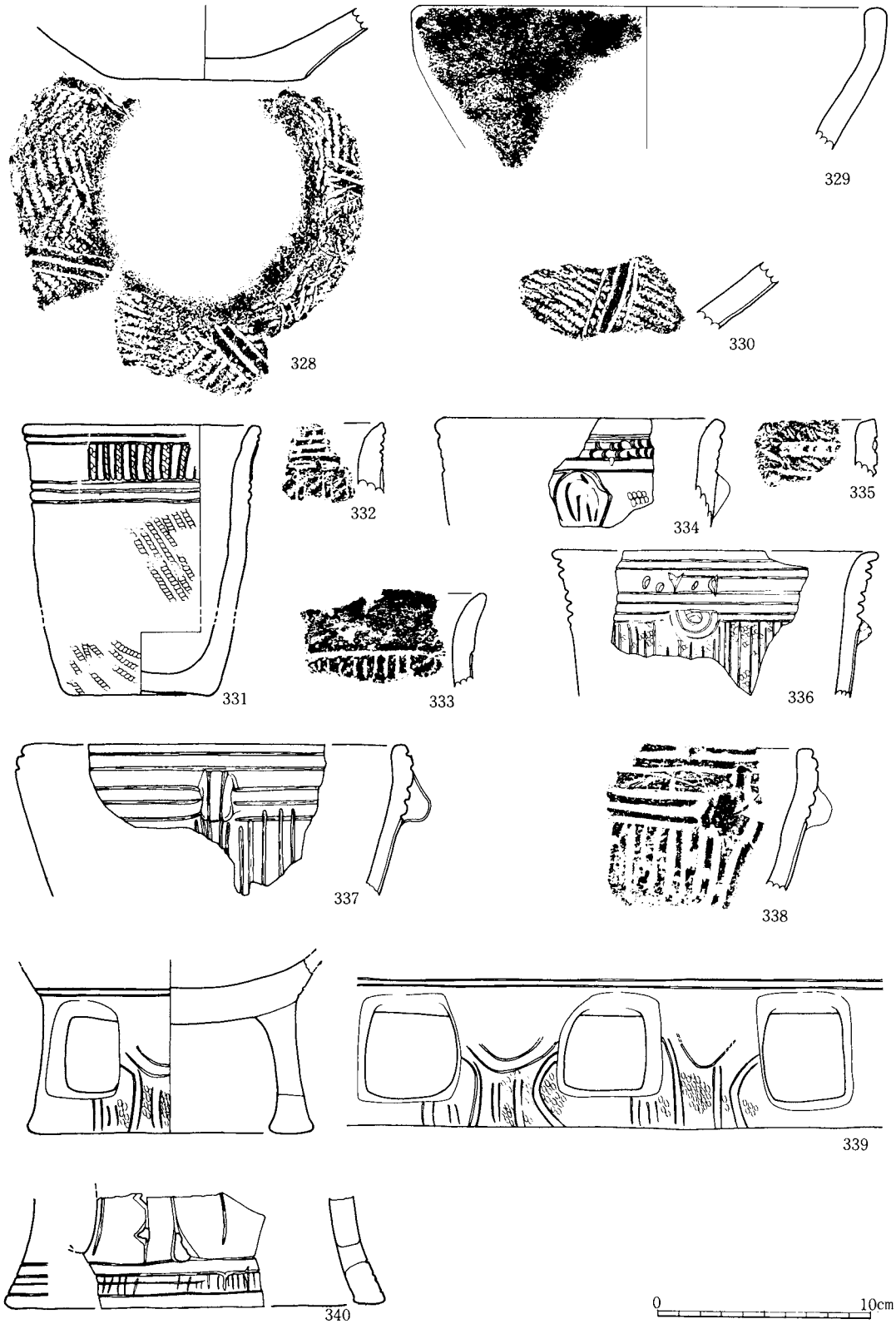


第24図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(16)



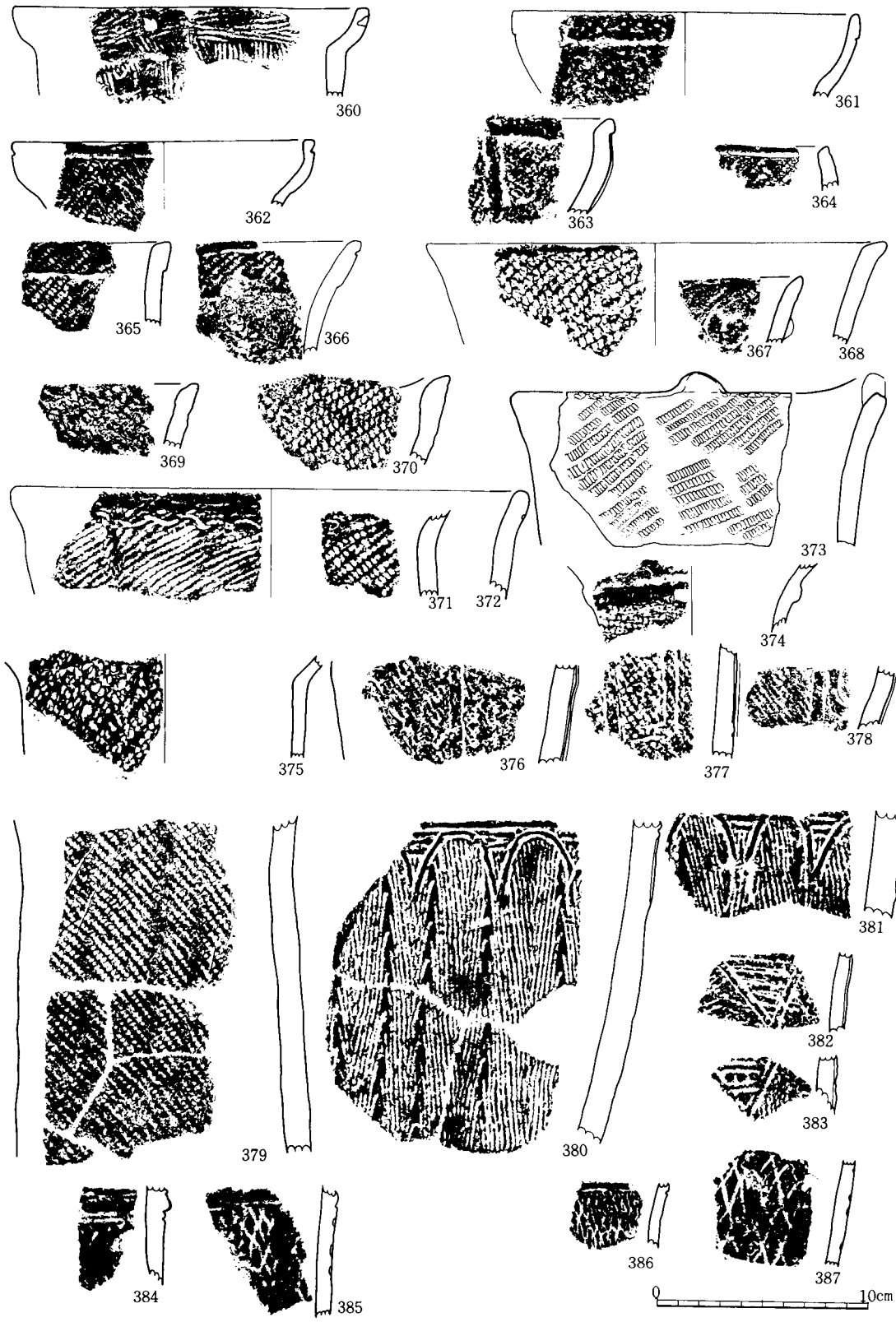
第25図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(17)

第26図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(18)

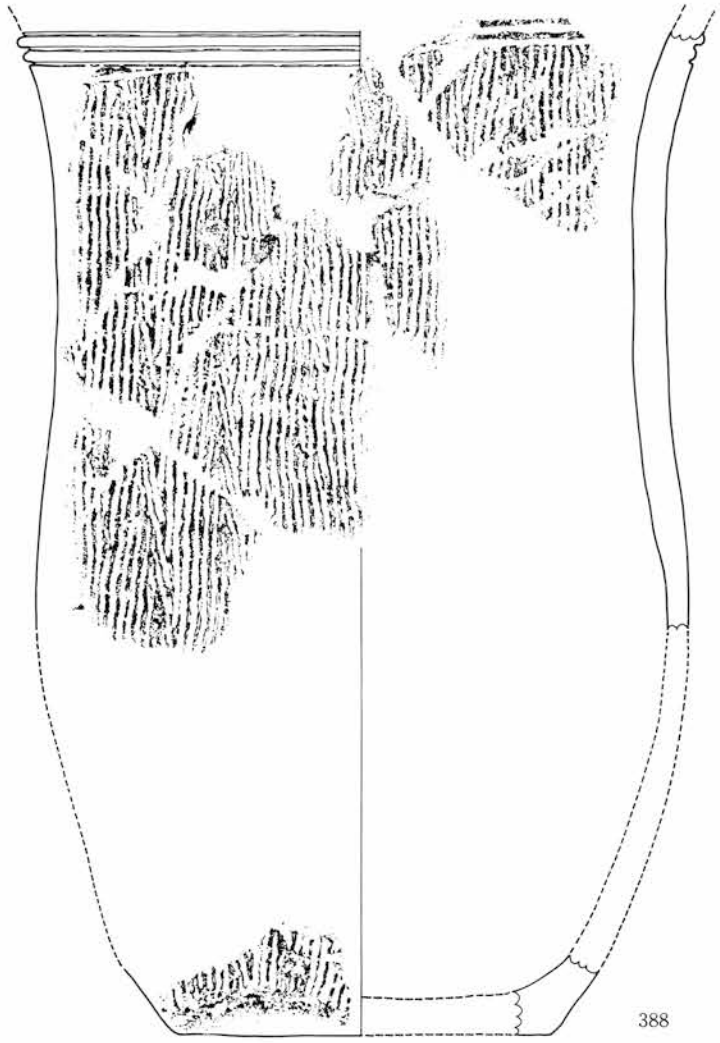


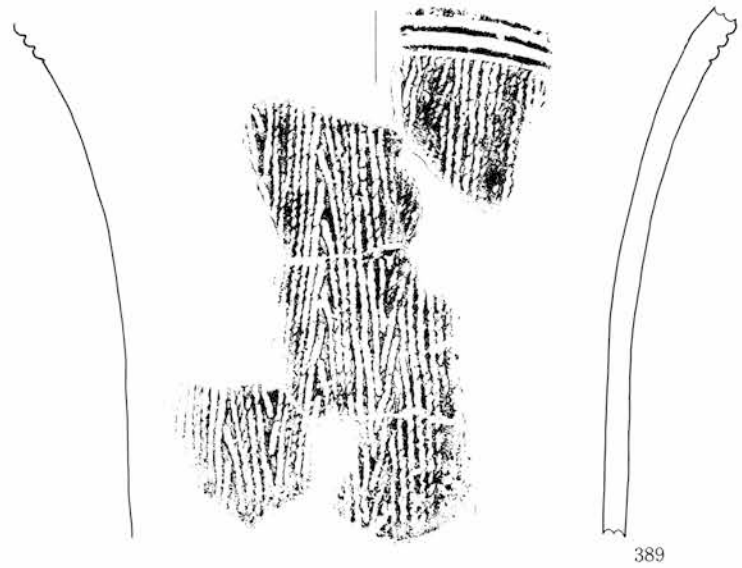
第27図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(19)

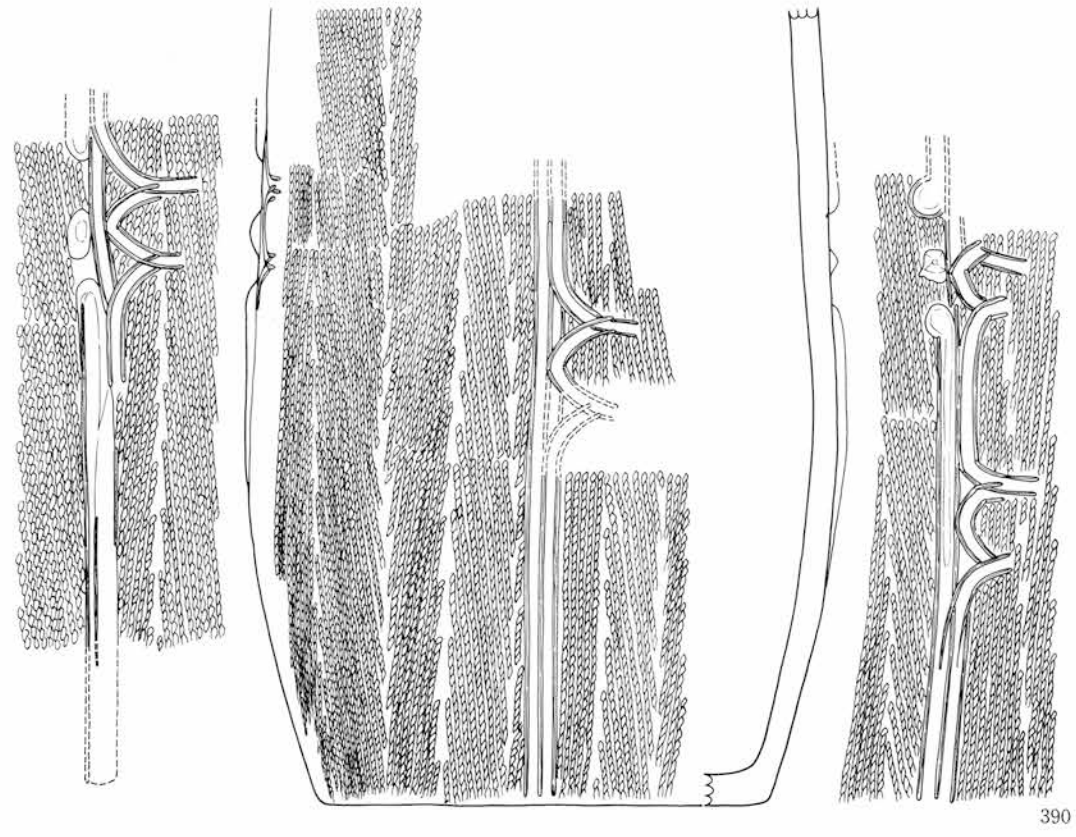
第28図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(20)



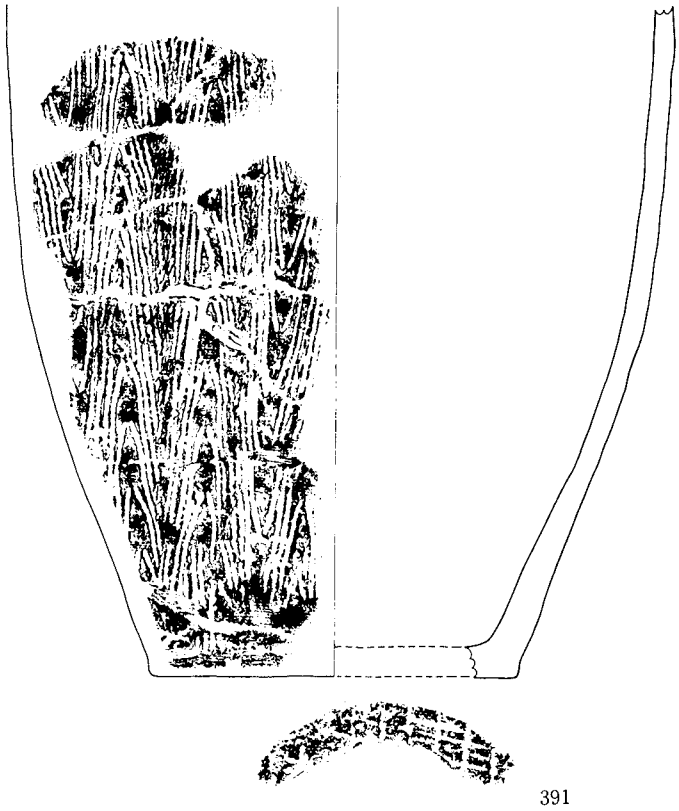
第29図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(21)

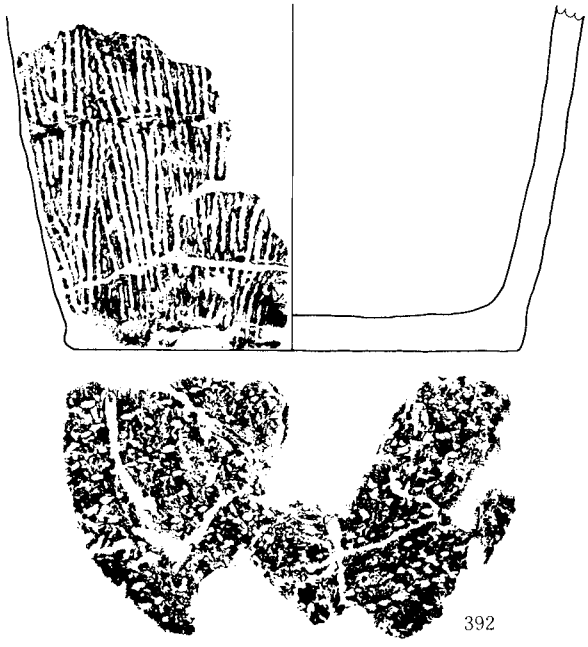






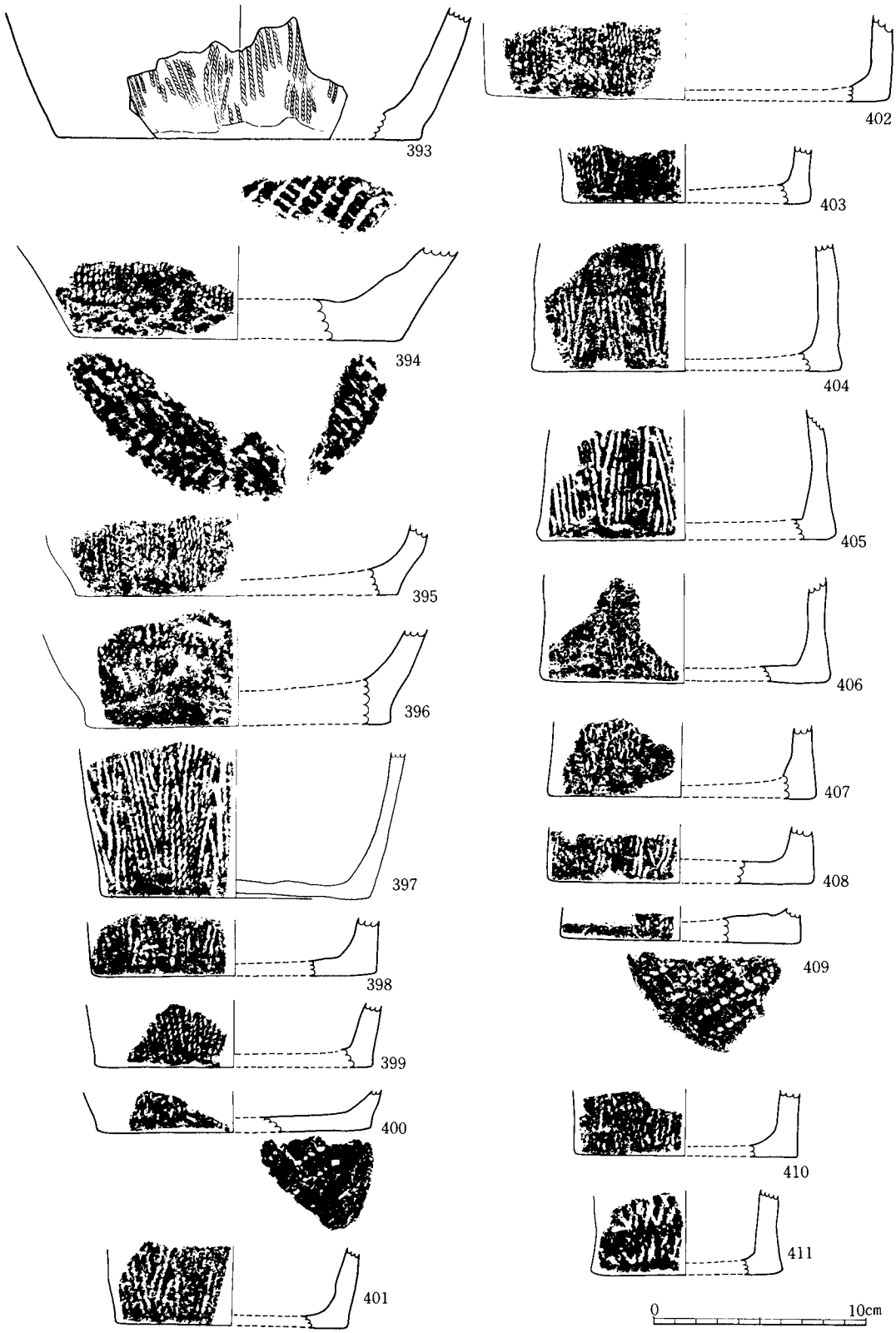
第30図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(22)



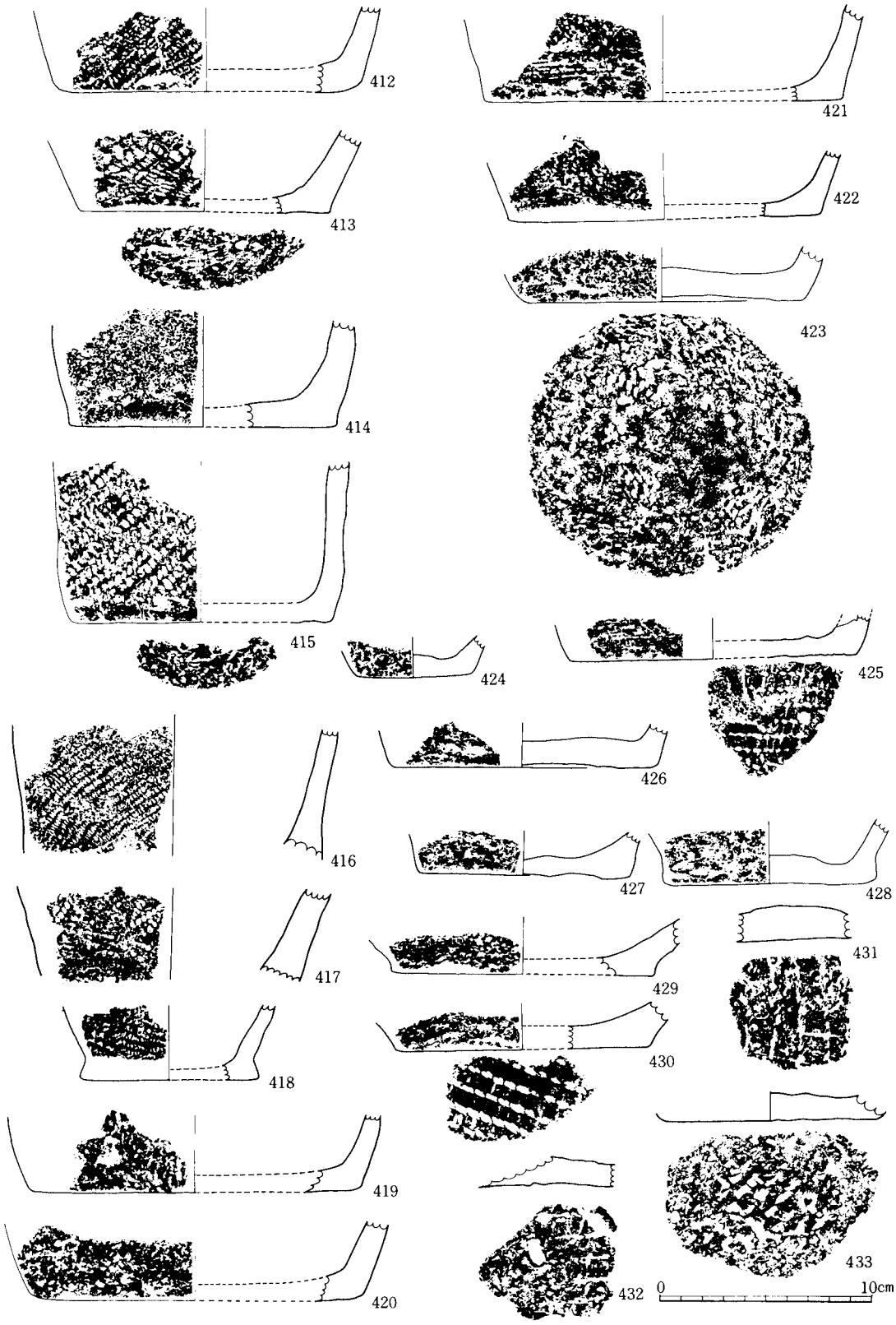


0　10cm

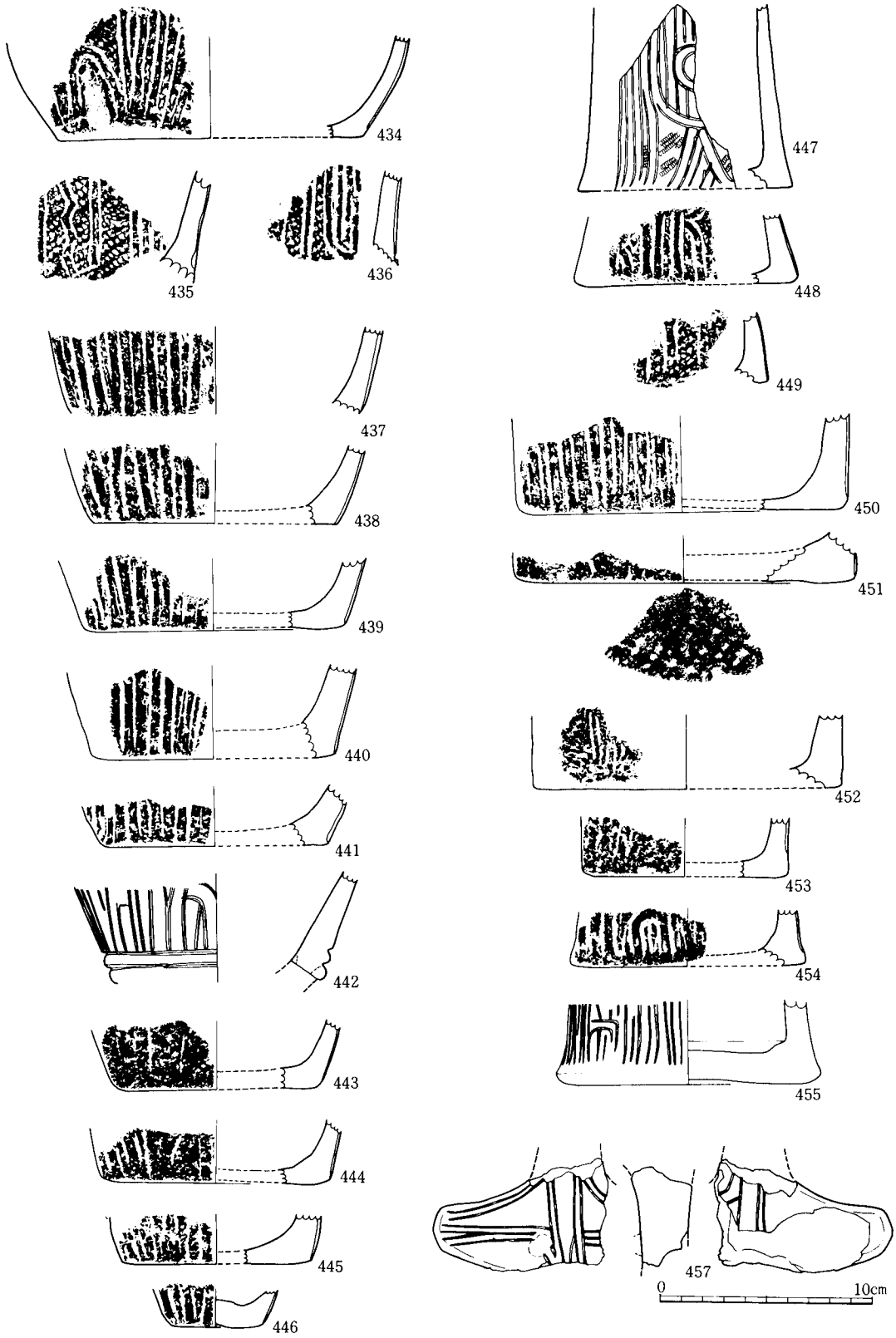
第31図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(23)



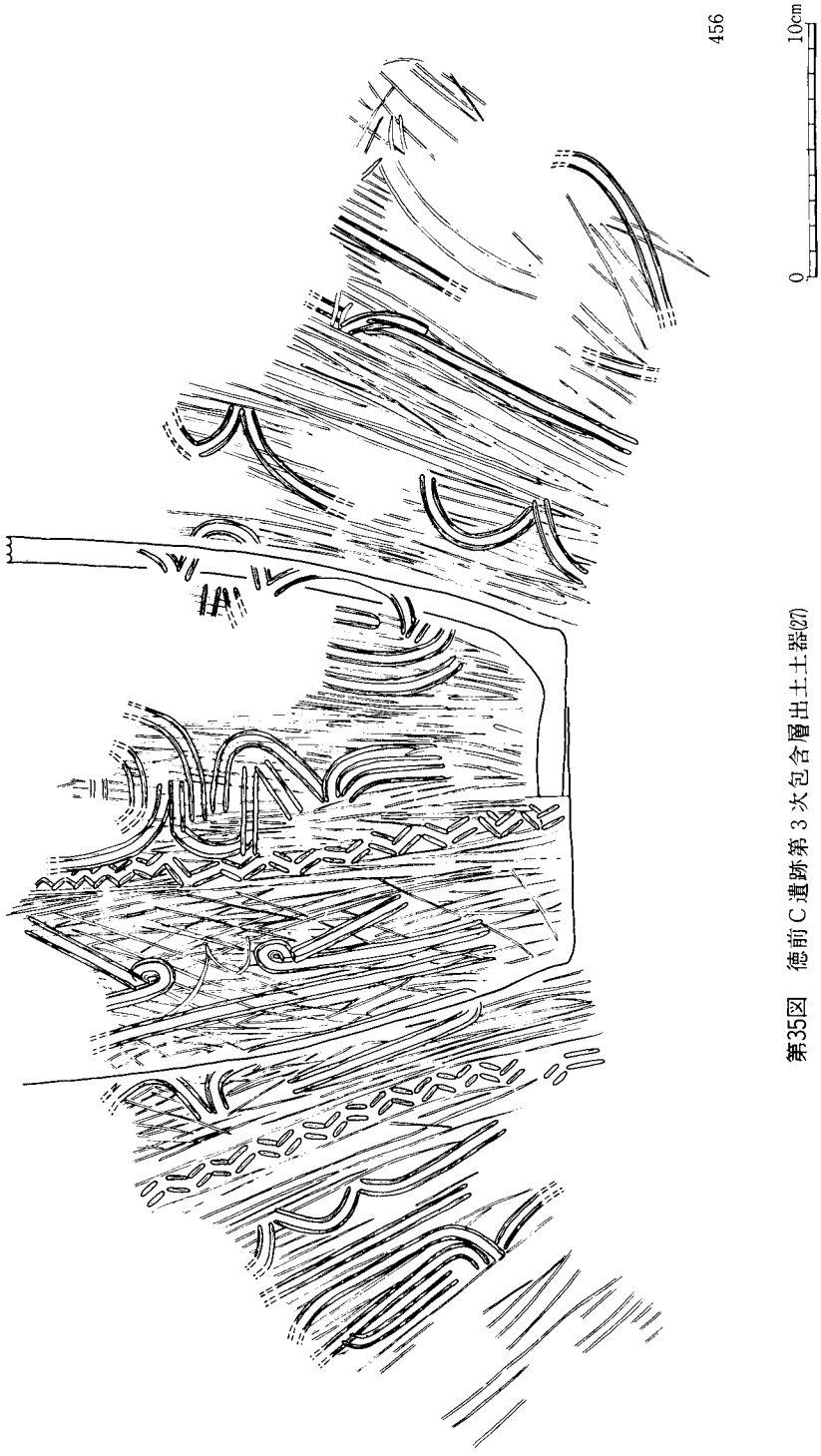
第32図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器(24)



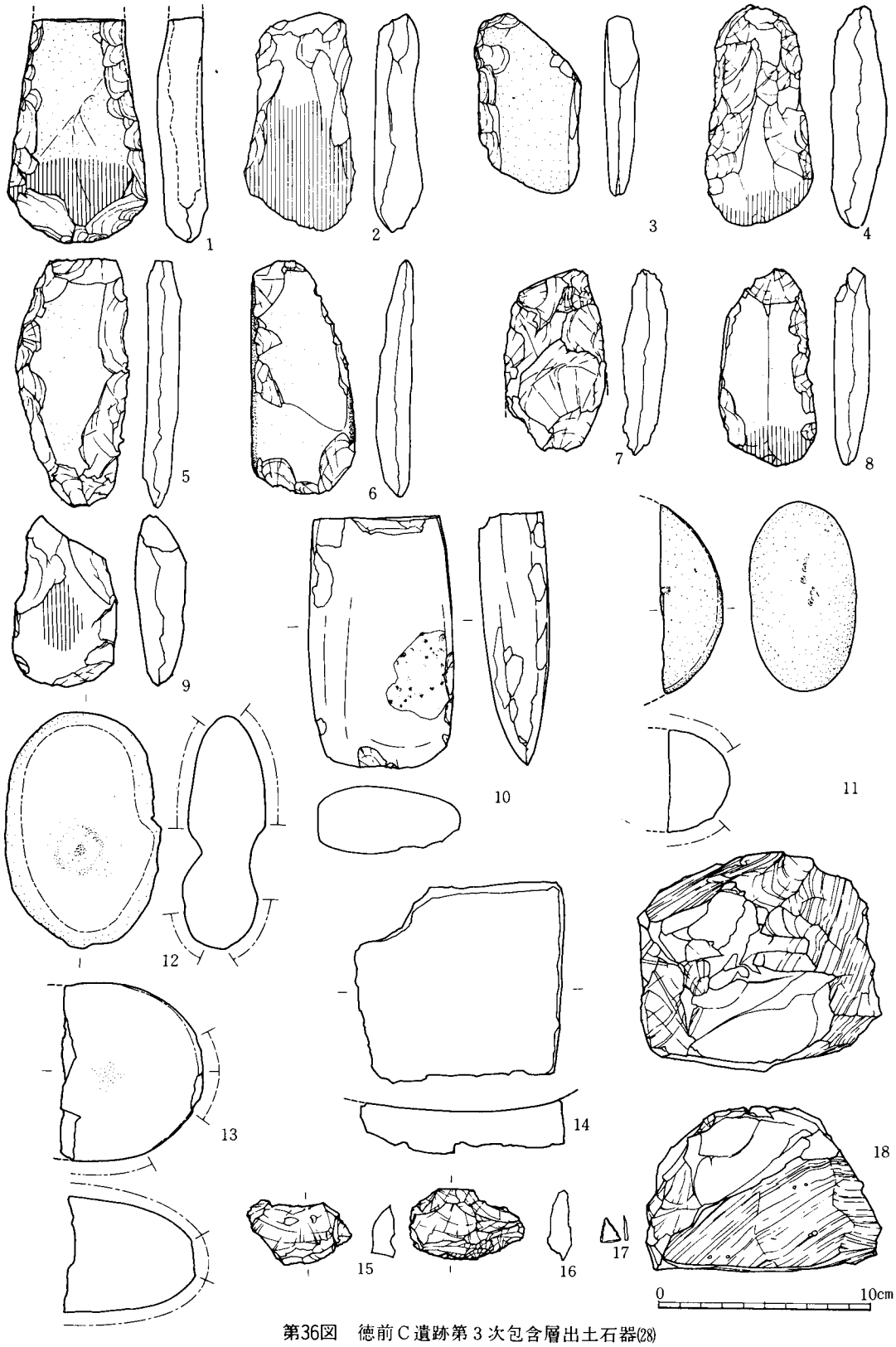
第33図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(25)



第34図　徳前C遺跡第3次包含層出土土器・土偶(26)



第35図　徳前Ｃ遺跡第３次包含層出土土器(27)



第36図　徳前C遺跡第3次包含層出土石器(28)

第２節　弥生・古墳時代の遺物（第37～68図，図版６～23）

第２次・第３次調査に出土した遺物は，第２次調査区の東端部から第３次調査区へかけての黒色包含層から出土した土器，および第２次調査の60～62ラインと74～76ラインで集中的に出土した土器がその大部分である。前章でも説明したとおり，74～76ラインの浅い溝状遺構からまとまった出土した土器を除いては，包含層からの出土である。徳前Ｃ遺跡の該期の土器については，湯尻が『報告書Ⅰ』[(1)]でⅠ～Ⅲ様式に分類し，その編年的位置付けを概略行っておいた。また，浜野氏は『報告書Ⅳ』[(2)]で湯尻の分類を基礎に３区分し，精緻な考察を進められている。本稿では，第２・３次調査出土の土器をまとめ，先の分類の成果を念頭に置きながら改めて分類を行うことにした。すでに指摘したように，弥生時代後期から古墳時代前期までの時間幅を持っているが，ここでは溝状遺構から出土した土器も含めて分類作業を進めて行くことにしたい。なお，分類に際しては，器種による分類を中心に器形・調整等による区分を加味した。個別個体の説明については，本節の後に第122頁～135頁に遺物観察表を掲載したので参照されたい。

器種は，壺形土器，鉢形土器，蓋形土器，甕形土器，高杯形土器，器台形土器で構成される。

(1)壺形土器（第37図，図版６・７）

壺形土器は，普通の壺と器面を赤彩した，いわゆる装飾壺に大別される。主として口縁部の形態差から15種に分類した。

壺Ａ$_1$（第42図１・２）

長胴の体部にやや外へ開く口頸部を付けた長頸壺で，体部との境には明瞭なくびれを欠く。口縁端部は平縁に面取られる。第42図２は，荒いハケ調整痕を器面に残し，内面の頸部以下にヘラ削りをする。口頸部に山形のヘラ描き文がある。『報告書Ⅳ』のＢ類に該当する。

壺Ａ$_2$（第42図５・６）

Ａ$_1$類と似るが，口縁端部は丸みをもつ。第42図６は器肉の厚いずんぐりとした壺で，口縁端部をわずかに拡げ，次のＡ$_3$類との近縁関係を窺わせる。粗雑なハケ調整痕を残す体部には，煤が全面に付いている。『報告書Ⅰ』のＧ類，『報告書Ⅳ』のＡ類に該当する。

壺Ａ$_3$（第42図７～９）

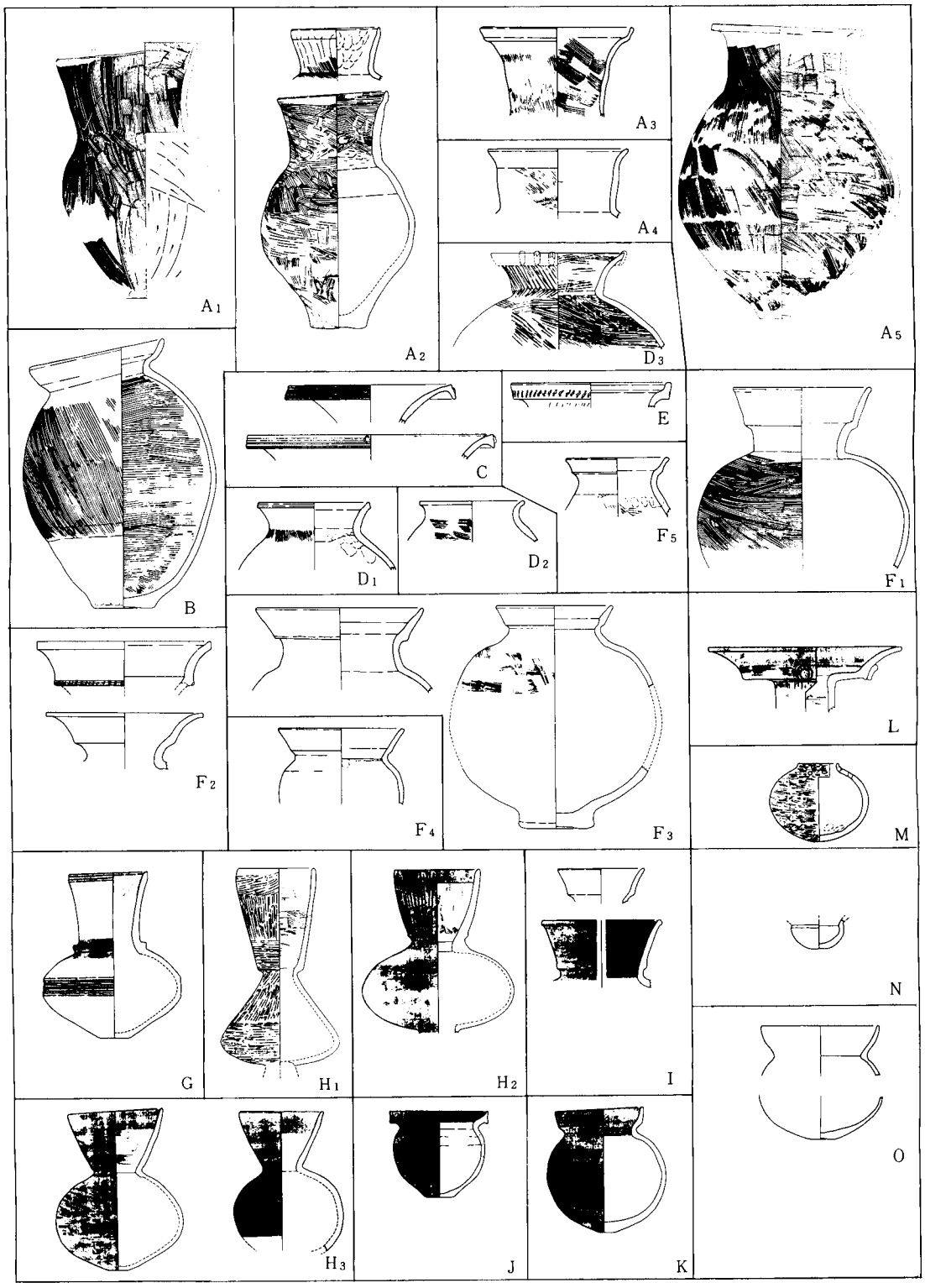
有段口縁の長頸壺で，第42図７のように口頸部が外へ開くため，くびれは比較的明瞭になるとみられ，第42図４の如くなろう。第42図８は有段とはいえないが，手法的には７と共通すると理解して本類に含めておく。『報告書Ⅳ』のＦ類に該当する。

壺Ａ$_4$（第42図３）

ほぼ直立に立ち上がる口頸部の先端がわずかに外へ開く。頸の長さに比較して口径が16.0cmと広く，Ａ$_1$～Ａ$_3$類とは趣を異にする。

壺Ａ$_5$（第43図10）

胴ぶくらみの体部に筒形の頸部が立ち上がり，口縁部は外へ開く。口縁端部はナデによる面取りがされている。内外面ともにハケ調整痕がみられ，粘土紐積み上げ痕が観察される。胴部外面の最大径部位より下には全面に煤の付着が認められる。



第37図　徳前C遺跡第２・３次壺形土器分類一覧

壺B　（第48図83）

底部の大きな卵形の胴部に，ゆるいカーブの有段口縁を付けた壺。胴部の内外面は，荒く不揃いなハケ調整をする。底部から胴の約⅓下までと，それより上体部から肩部までを別個に製作して接合した痕跡が良く残っており，体部の歪みも大きい。

壺C　（第43図11～13・第52図２）

外反する口縁端部を，下方に折り曲げたり上方に引き出して，口縁帯を幅広くする壺。口縁帯には３条程度の擬凹線が施され，第43図11や12の様に数個の浮文を貼り付けたり，口縁帯を赤彩する例がある。第52図２は，口縁端部の状態などやや異にしており，別に分類すべきかも知れないが，一応本類に含めて扱うことにした。『報告書Ⅰ』のＣ類，『報告書Ⅳ』のＧ類に該当する。

壺D_1　（第44図24・25，第55図８）

「くの字」口縁の短頸壺。ゆるやかに外反する口縁部は，強いヨコナデにより面取りされている。

壺D_2　（第44図23）

「くの字」口縁の短頸壺で，口縁端部が丸味をもつ。『報告書Ⅰ』のＪ類23が該当する。

壺D_3　（第44図30）

口縁部が球状の体部から外反する「くの字」口縁の壺。口縁端部に粘土紐を貼って幅約２cmの口縁帯をつくり，３個の棒状浮文を並べる。内外面ともに幅１～２cmの荒いハケ調整痕を残す。

壺E　（第44図22）

口縁部は受口状に有段をなす。この類は頸部以下を失っており，実際のところ，本稿で甕Ｄ類として扱う甕との区別は難しい。22の場合受口部が直立することや，器肉が一定の厚さをもつ点から，壺と判断した。口縁帯には中空の草本茎を５本一単位とした施文具による斜行刺突文がある。『報告書Ⅰ』のＫ類，『報告書Ⅳ』のＨ類に該当する。

壺F_1　（第44図28）

球形の体部に明瞭な有段のある幅広の口縁帯をもつ壺。体部外面には斜方向の荒いハケ調整を施す。『報告書Ⅰ』のＡ類１に該当する。

壺F_2　（第44図26・27，第55図２・11，第57図30）

有段口縁の壺で，幅広の口縁帯は外反する。このため，内面の段はF_1に比べてゆるい。口縁端部はヨコナデによる面取りがされている。26は外面の段部に棒状具による押圧をくり返す。

壺F_3　（第52図４，第55図４・５・７）

有段口縁の壺でF_2類と似るが，内面の段が殆んど段をなさず，わずかな凹みとなっている。口縁端部は丸みをもつこともその特徴である。口縁帯の幅によって幅広のタイプ（第52図４，第55図４・５）と幅狭のタイプ（第55図７）に細分することも可能である。『報告書Ⅰ』のＡ類５～７が該当する。

壺F_4　（第57図40，41）

有段口縁の壺で，口縁部の形態はF_3類と似るが，内面の段は更に無く，外面の段がわずかに認められる。体部径が口縁部径とほぼ同じである点もF_3類と異なる。

壺F$_5$　（第43図14）

有段口縁の壺であるが，体部が張らず，やや胴長のタイプとなろう。

壺G　（第43図17）

ソロバン玉形の体部に直立する口頸部の付く壺。胎土・焼成ともに良好で，器表は全面にヘラ研磨している。口縁部に2条，体部最大径部に9条の稚拙なヘラ描き沈線と頸部の隆帯上にヘラ刻み目文がある。口縁部の内外面，頸部，体部最大径部に赤彩が認められる。

壺H$_1$　（第55図12）

下ぶくれの体部に直立して開く口頸部の付いた台付壺。頸部に明瞭なくびれをもつ。器表の全面を磨き，赤彩する。

壺H$_2$　（第56図13・16・17・20）

やや扁平な球状の体部に，ゆるくカーブして立ち上がる口頸部の付いた台付壺。頸部に明瞭なくびれをもつ。器表を磨いて赤彩するものが多い。

壺H$_3$　（第45図38，第56図14・15・18・19）

やや胴の張った球状の体部に，外反する口頸部の付く小形壺。底が小さいため，体部は一層の球状感を与える。頸部のくびれは弱く，15の様にくびれを持たない壺も含む。

壺I（第45図32・33，第52図3）

有段口縁の壺。第45図32・第52図3の小形壺と，第45図33の大形壺がある。口縁帯は幅広で，頸部に明瞭なくびれをもつ。器表を磨いて赤彩する。

壺J（第45図34）

肥厚した口縁端部をヨコナデして上下につまみ出す小形壺。口頸部が広く鉢の一類形とみることも可能である。口縁部内外面と体部外面を赤彩する。

壺K（第57図25～27）

有段口縁で，球状の体部をもつ小形壺。底部は小さく丸みもち，自立するにはやや不安定である。内面の段はゆるく、口縁端部は丸くヨコナデする。器表は良く磨かれ全面を赤彩する。25・27には煤が付着している。

壺L（第55図1）

口縁部の外反する有段口縁壺。頸部が細く，有段部は水平面となる。口縁端部はヨコナデによる面取りをする。口縁部外面にはボタン状の円形浮文（本来2個か）が付いている。器表と口縁部外面は，赤彩されている。

壺M（第45図42，第57図38）

球状の体部にわずかな口縁部の付く，いわゆる無頸壺である。いずれも肩部に2ないし4孔1対の焼成前穿孔がなされ，蓋止め用の紐を通したとみられる。2点とも器表を赤彩する。

壺N（第51図1）

口縁部を欠くが，いわゆる小形丸底壺の体部である。

壺O（第48図89）

やや内彎気味にゆるく立ち上がる「くの字」口縁の壺。器表が磨耗しており調整は不明である。

上記に分類した壺の他に，皮袋形壺の断片（第57図39）がある。また，壺の底部も台付装飾壺の台部とみられる第　図35～37，第45図35もあるが，断片的な資料であるため分類を避けた。

(2)鉢形土器（第38図）

鉢形土器は，主として口縁部の形態を中心に３種に分類した。

鉢A$_1$（第45図43～45）

有段口縁の浅い鉢を一括した。口縁部や体部の形態差から更に細分される要素をもつ。43は口縁帯に６条の擬凹線が施され，体部は半球状をなす。44の有段口縁の鉢は，底部が大きく安定感をもつ。段部は幅をもち，口縁帯は外へ開く。45も有段口縁の鉢であるが，体部が張って頸部が強く曲がる。外面を良く磨いている。

鉢A$_2$（第45図46，第57図32）

第57図32は，口縁の立ち上がる有段の小形鉢。内外面ともに赤彩される。第45図46は浅い有段口縁の鉢で，内外面ともに赤彩される。

鉢B　（第45図47）

「くの字」口縁の小形鉢。口縁の外反は弱く，体部は半球状をなす。器表はヘラ研磨と赤彩がされる。

鉢C$_1$（45図54，第57図31）

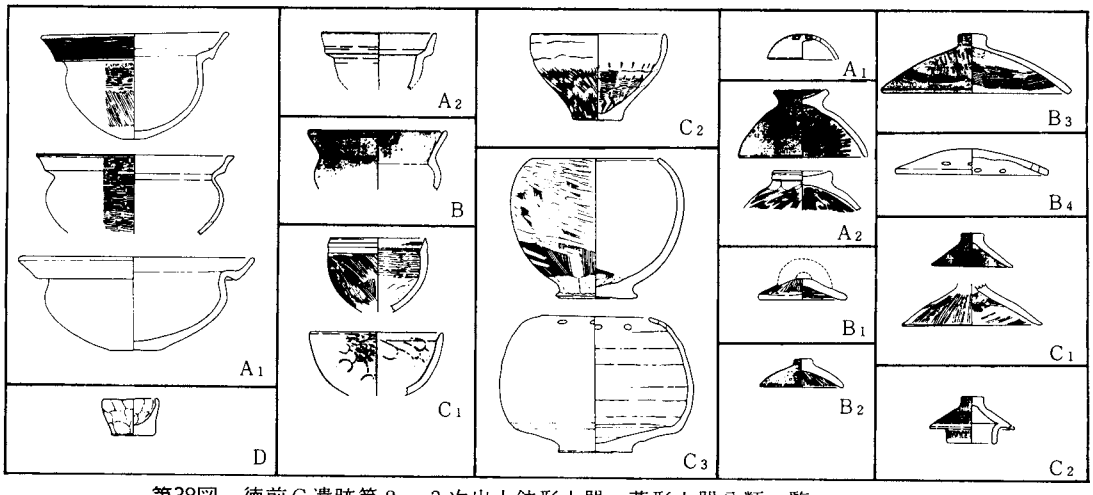
いわゆる埦形の小形鉢。第45図54は内外面ともにヘラ研磨と赤彩がされる。第57図31は口縁部を失った小形甕のような小形の鉢で，つまみ出した口縁部に２条の太い凹線を施す。体部外面はハケ調整，内面はヘラ研磨される。

鉢C$_2$（第54図37，第56図21）

安定した底部をもつ埦形の小形鉢。

鉢C$_3$（第56図22・24）

大きな底部をもつ鉢で，体部は内彎気味に立ち上がる。丁度壺形土器の頸部から上を切り取ったような形態をとる。22は器表をハケ調整の後，軽くヘラ研磨する。24はわずかに上向く口縁



第38図　徳前Ｃ遺跡第２・３次出土鉢形土器・蓋形土器分類一覧

部に２孔１対の焼成前穿孔があり，近くから同時に出土した第56図23の蓋が伴うものとみている。体部は軽くヘラ研磨されている。

(3)蓋形土器（第38図）

主に壺や鉢の蓋に用いられた土器である。形態により３種に分類した。

蓋A$_1$　（第45図48）

半円球状の小形の蓋。壺M類に伴う蓋とみられ，頂部に２個の孔が焼成前に穿けられている。外面はヘラ研磨と赤彩される。

蓋A$_2$　（第54図48～50）

半円球状をなす体部に，中央部が凹むつまみの付く蓋。鉢形土器の底部と区別しにくい場合もある。50は内面をヘラ研磨し，全面に赤彩をする。

蓋B$_1$　（第65図95）

笠形をした蓋で，半環状のつまみが付いた痕跡を残す。内外面ともに良くヘラ研磨されている。

蓋B$_2$　（第65図96）

赤彩の壺に伴う笠形をした小形の蓋。中央にボタン状のつまみをもつ。外面は赤彩，内面はヘラ研磨する。

蓋B$_3$　（第54図47，第65図100・101）

蓋B$_2$類の大型品。第65図100・101はヘラ研磨と赤彩している。

蓋B$_4$　（第56図23）

笠形の蓋でつまみをもたない。前述の通り第56図24の鉢とセットをなすものとみられ，端縁部に２孔１対の焼成前穿孔がある。

蓋C$_1$　（第54図46・第65図97～99）

体部が直線的に広がる蓋で，ゆるくカーブを描くB類と異なる。破片となった場合には，小型の鉢の底部と区別が難しい。第54図46は内外面を赤彩する。

蓋C$_2$　（第54図45）

蓋C$_1$類に反りを付けたもの。外面を赤彩する。

(4)甕形土器（第39・40図）

徳前C遺跡では甕が最も多く出土しているが，その中でも「くの字」口縁の甕が圧倒的に多い。口縁形態の区分を中心に８種に分類した。

甕A$_1$　（第46図55～58，第52図12・14～16）

口縁帯が幅広に面取られたり，口縁上端部がヨコナデにより引き伸ばされ有段状をなす。口縁帯には２～４条の比較的明瞭な擬凹線がみられ，第52図14・15にハケ調整の原体を押圧した文様のある例もみられる。口縁部の立ち上がりの状態や口径の大小から細分される要素をもつ。『報告書Ⅰ』の甕A・B類，『報告書Ⅳ』の甕B類に該当する。

甕A$_2$　（第46図59，第52図13）

口縁内面に明瞭な段をもつ有段擬凹線甕。幅広の口縁帯には４・５条の擬凹線が施文される。

口縁帯は直線的もしくはやや外反して伸びる。体部はハケ調整するが，肩部には甕Ａ$_1$類と同じ施文がある。『報告書Ⅳ』の甕Ａ類に該当する。

甕Ｂ$_1$（第46図63・64・67）

口縁内面に明瞭な段をもつ有段甕で，外面をヨコナデして口縁帯をつくる。擬凹線はもたない。体部をハケ調整するが64では肩部にヘラで軽く押圧した施文がある。

甕Ｂ$_2$（第53図21～23）

口縁内面に段をもつ甕で，厚味のある口縁帯は，直線的もしくはやや外反して伸びる。口縁帯はヨコナデして端部を丸くする。体部はハケ調整している。

甕Ｂ$_3$（第46図60，第51図２）

有段口縁の甕で，口縁部はわずかに外反する。口縁帯には擬凹線を意識した施文がみられるが擬凹線の体をなしていない。体部外面はハケ調整，内面はヘラケズリが行われている。

甕Ｂ$_4$（第52図17，第58図42）

有段口縁の甕であるが，口縁内面の段は不明瞭で口縁部は外反する。口縁帯外面は強くヨコナデをしており，一見，弱い擬凹線があったような印象を与える。第58図42の外面はハケ調整，内面はナデ調整をする。

甕Ｂ$_5$（第46図61・65，第58図47）

口縁内面に明瞭な段をもつ甕。口縁帯はヨコナデにより外反する。甕Ｂ$_6$類との区別は難かしいが，口縁帯下部をナデて引き出すことにある。

甕Ｂ$_6$（第46図62，第57図29，第58図43～46）

口縁内面に段をもつ甕。口縁帯は直線的もしくはやや外反して伸びる。口縁部はヨコナデて丸くおさめ，体部にハケ調整がされる。体部はなで肩で，最大径を胴中位からやや上半部に置く。第58図46では底部が小さく，自立することができない。体部の内面はナデ調整によることが殆んどである。法量的には口径13cm前後の小型甕と，口径16cm前後の中型甕に分けられる。『報告書Ⅳ』の甕Ｇ類12が該当する。

甕Ｂ$_7$（第53図24・25・27，第57図28・30，第59図55～57）

口縁内面の段があっても弱いか，あるいは全く認められず，口縁部が頸部から直線的に開くような甕。口縁帯の存在により有段甕の一類型として扱うことができる。口縁部はヨコナデて丸くする。体部の内外面はハケ調整をするが，甕Ｂ$_6$類と同じく内面をナデ調整することも多い。第２次調査で検出した74～76ライン溝状遺構では，有段の甕の中では甕Ｂ$_6$類とともにその数が多い。法量的にも甕Ｂ$_6$類と同じように小型と中型甕に区分できる。『報告書Ⅳ』の甕Ｈ類に該当する。

甕Ｂ$_8$（第59図58）

形態的には甕Ｂ$_7$類と全く同一であるが，口径が30.8cmを測る大形甕である。

甕Ｂ$_9$（第59図52）

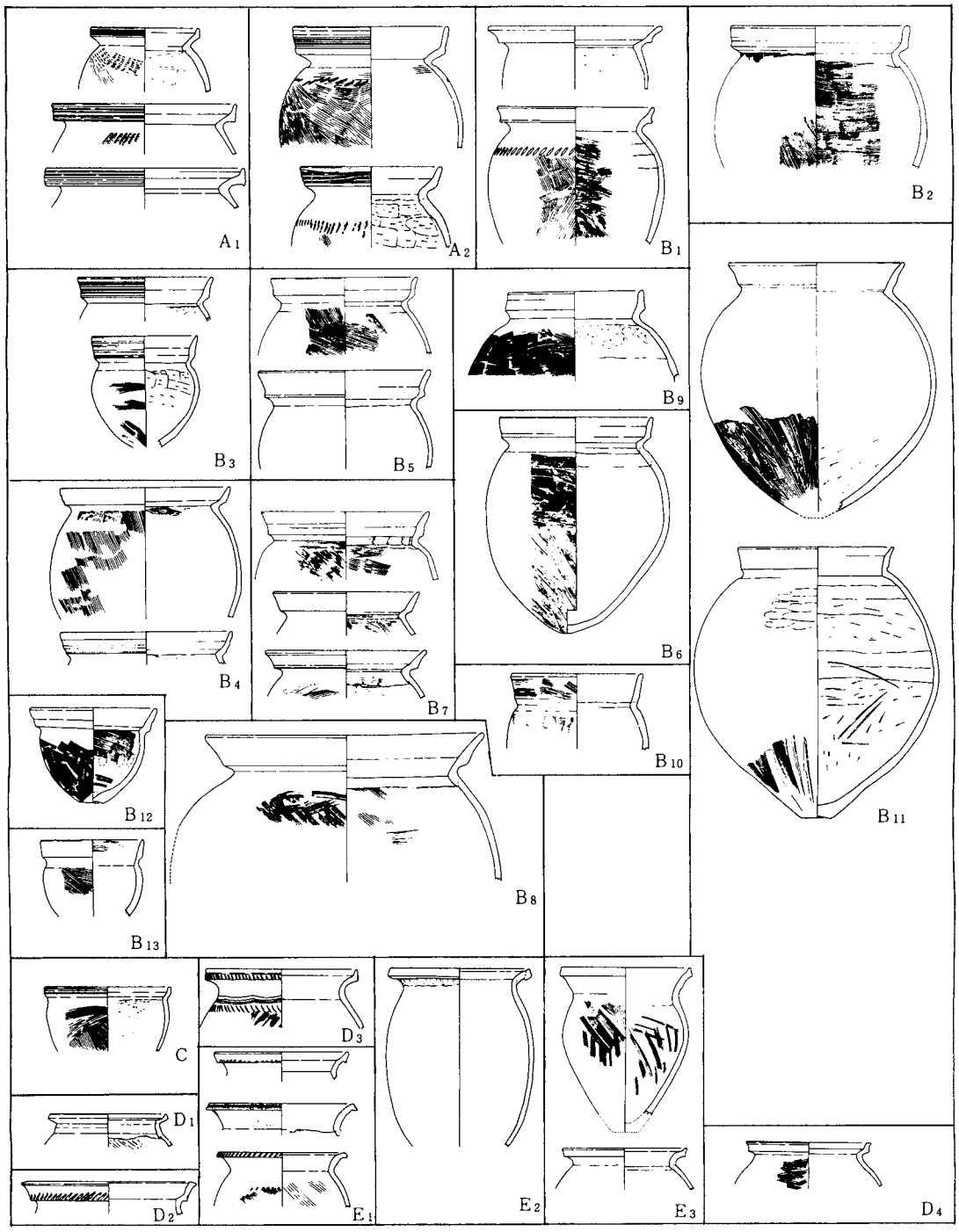
口縁がやや内傾気味に立ち上がり，肩の張る有段口縁の甕。体部外面は荒いハケ調整，内面はナデ調整をする。

甕B$_{10}$（第53図20）

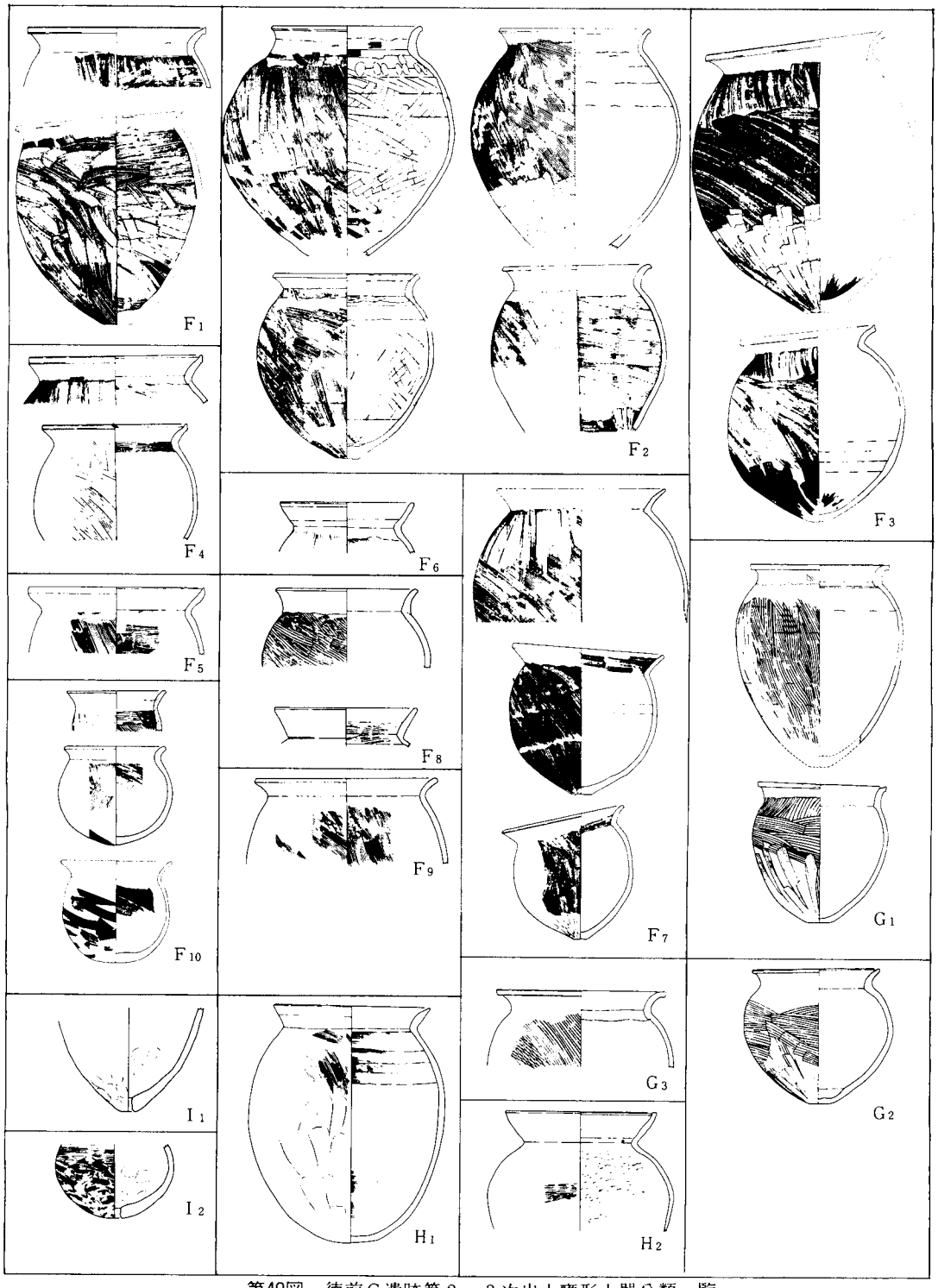
頸部がわずかにくびれ，有段口縁の面影をとどめる小形の甕。口縁部はヨコナデ，体部はハケ調整をする。

甕B$_{11}$（第58図48，第59図54）

頸部がわずかにくびれ，有段口縁の面影をとどめる中形の甕。口縁部は外反し，第58図48では



第39図　徳前C遺跡第2・3次出土甕形土器分類一覧



第40図　徳前Ｃ遺跡第２・３次出土甕形土器分類一覧

内面の段も全く痕跡程度となっている。口縁部形態から分類した甕B$_8$類と共通するが，口縁帯のあり方は更に不明瞭である。口縁部の大きさに対して，体部は大きく，胴のほぼ中位で最大径となる。体部外面はナデ調整を行うが，⅓より下部ではハケ調整が認められ，口縁部，体部上半と別に製作してこの部位で接合されたことを示す。体部内面はナデ調整と軽いケズリを行う。

甕B$_{12}$（第59図50・51）

口径14cm前後の有段口縁をもつ小形甕。頸部の締りが無く，器高も10cm前後と低いため，鉢と形態的には似ている。口縁内面の段は痕跡程度で，口縁部は外反する。

甕B$_{13}$（第46図66・第52図18・19）

口径12cm前後の有段口縁をもつ小形甕。頸部のくびれは外面にみられるだけで，内面は「くの字」に外反する。

甕C（第51図３）

体部が口径を超えない有段口縁の小形甕。幅の狭い口縁帯は強いヨコナデをし，端部は面取りをする。このため，受口状の口縁形態となる。体部外面はハケ，内面はナデ調整をする。

甕D$_1$（第53図30）

強く外側へ押れ曲がる口縁端部に粒土紐を貼り付けた，受口状口縁の甕。頸部での接合痕を観察できる。

甕D$_2$（第47図68・69）

外反する口縁の端部がやや外傾気味に立ち上がる受口状口縁の甕。口縁端部をナデて面取りする。口縁帯にはハケ状具原体を用いた斜行刺突文がある。69は胎土・焼成ともに精良で搬入品の可能性をもつ。

甕D$_3$（第47図70～72，第51図７，第53図28・29）

口縁部が受口状であることは，甕D$_2$と変わりがないが，口縁端部に丸味をもち，甕D$_2$類と比べると調整なども鋭さを欠く。口縁帯に斜行刺突文を施すことはD$_2$類と同じである。本類は第１次第４次調査でもかなりの頻度で出土しており，徳前C遺跡の土器構成の１つの特徴といえる。『報告書Ⅰ』の甕G類，『報告書Ⅳ』の甕Ⅰ類に該当する。

甕D$_4$（第59図53）

受口状の口縁部をもつ甕。口縁端部はヨコナデによる面取りがなされ，先端部をわずかに外側へつまみ出す。胴下半を欠くが肩の張った体部をもつとみられる。

甕E$_1$（第47図74～77）

外反する「くの字」形口縁の端部を下へ押り曲げて引き出したり，口縁部外面に断面三角形の粘土粘を貼り付けて幅の狭い口縁帯をつくり出した甕。口縁帯にハケ状具原体やヘラを用いて文様を付けることが多い。『報告書Ⅳ』の甕O・R類に該当する。

甕E$_2$（第48図81）

やや長胴の体部にゆるく外反する頸部を取り付け，更に粘土紐を貼って口縁端部を厚くした甕。頸部には指頭による押圧痕をとどめている。

甕E$_3$（第43図15，第47図73・78～80）

口縁端部をつまみ出して受口状の口縁とした甕。口縁部を粘土帯を貼ることにより有段口縁とする第47図73もこの類に含めた。体部最大径が口径を超えない第47図73・80と，超える78・79は更に細分されるべき要素とみられるが，資料的にも少いため，一応まとめて扱っておきたい。

甕形土器Ｆ類は,「くの字」口縁甕であるが，第２次調査74～76ラインの溝状遺構からまとまった状態で出土しており，しかもかなりの個体が復元することができた。分類に際しては口縁部形態の他に全体的な形態の差も加味したが，結果としてやや細分しすぎたきらいがある。従ってここでは，その「差」を中心に説明を加えることにする。

甕Ｆ$_1$（第48図82・85，第58図49，第62図78，第63図81・82）

口縁端部をヨコナデして面取りをする。体部最大径が口径を大きく越えないタイプで，第58図49，第62図72の形態を基本とする。体部内外面は原則として口縁部のヨコナデの後ハケ調整を行う。底部が小さいのに頸部での径が広いため，体部は砲弾形をなす。法量は口径17cm，器高22cmの中型甕と，口径15cmのやや小ぶりの甕に分けられる。

甕Ｆ$_2$（第48図84，第61図69・70・72，第62図75～77・79，第64図87）

口縁部がゆるく外反して開く甕。体部最大径が口径の1.5倍前後と大きく，胴部中位に最大径をもつ。底部が小さいため，自立することができない。口縁部はヨコナデして端部に面取りをする。体部外面は，原則として口縁部のヨコナデの後ハケ調整を行い，体部内面はナデ調整をする例が多い。第61図72・73，第62図75・76，第64図87では，体部の約⅓下の調整の方向は，それより上部のハケ調整の方向と明らかに異っており，口頸部と底部から約⅓上った箇所での分割成形がなされたことを示している。第61図72は体部の約⅓下をヘラで調整し，第61図73，第62図75・76，第64図87ではハケで調整する。調整のハケは木口などを利用したと推定しているが，１cm単位当たり15～18条に遅する極細のハケ，１cm単位当たり９～12条の細いハケ，１cm単位当たり７～５条の荒めのハケの３通りが使用されている。内面は，前述の通りナデ調整を行う例が大半を占めるが，第61図73や第64図87のようにヘラで軽く調整するものもある。しかし，この調整も器内を薄くするために行われる積極的なヘラケズリとは全く異っている。器高が27cm前後の大きめの甕と20cm前後のやや小ぶりの甕にわけられる。『報告書Ⅳ』の甕Ｔ類が該当する。

甕Ｆ$_3$（第61図71，第63図80・84）

甕Ｆ$_2$類と基本的に変わるところも少ないが，口縁部が「くの字」形に強く外反し，頸部のくびれが明瞭なことと，口縁端部を上下に引き出すようにヨコナデして面取りをする点で若干の差がある。第63図80と84は大小の関係で区分され，80は口径20.2cm，器高31.2cm，84は口径16.4cm，器高21.8cmを測る。80は体部を極細のハケ，84も細いハケで調整するが，甕Ｆ$_1$類でみたように体部の約⅓以下では調整の方向が全く異っている。84などは底部から上方へ調整を進めており，粘土が薄くかぶっている。断面の状態からみても三分割法で成形されたことは明らかである。調整の順序をたどってみると，口縁部ヨコナデ，頸から肩部縦方向のハケ（上→下)、体部の斜方向ハケ（順序や方向は必ずしも一定しているとはいえないが。)、体部の⅓から下と底部のハケ(下→上，但しこれも一定したものではないが，その多くはこの方向である。)となっている。

甕Ｆ$_4$（第53図36・第63図83）

口縁端部をつまみ出し，下部に細い粘土紐を貼付して，狭い口縁帯を形成する。第63図83のように口径16.4cmに対して体部最大径が18.4cmを測り，体部径が口径を大きくは超えない形態をとる。『報告書Ⅳ』の甕L類が該当する。

甕F$_5$ 類（第53図31・32）

口縁端部をつまみ出し，ヨコナデをして面取るが，下部に粘土紐を付加していない。このため，口縁下部はやや丸味をもつ。

甕F$_6$ 類（第60図59・60）

口縁が頸部からやや内彎気味に立ち上がるため頸の締りがゆるくみえる。口縁端部はヨコナデして丸くおさめる。

甕F$_7$（第60図65～67）

丸味をもつ体部から「くの字」に外反して伸びる口縁部をもつ。66が大型，65が中型，67が小型の関係になろう。口縁部はヨコナデして端部を面取りし，やや外側へ開く。体部の調整は甕F$_2$類やF$_3$類でみたのと基本的には同じく，体部外面は三方向からなるハケ調整が認められ，分割成形によってつくられたとみて良い。中・小型の65や67では体部が球形に近く，小さな底部をもつが自立できない。内面はナデ調整がされている。

甕F$_8$（第48図87，第53図33）

丸味をもつ体部から「くの字」に外反する口縁部をもつ。第53図33は，口縁端部を面取りするが，先端部がやや丸くなっている。体部外面は荒いハケ調整をする。

甕F$_9$（第53図34）

ゆるやかに立ち上がる体部に外反する口縁が付く。口縁端部を面取りするが，先端部に丸味をもつ。『報告書Ⅳ』の甕U類に該当する。

甕F$_{10}$（第60図61～64）

口径13cm前後，器高10cm前後の小型の甕を一括した。形態的には61・62の様にゆるやかにくびれる頸部から外反する長い口縁部をもつタイプと，63のように短い口縁部をもつものに分けられる。62・63は体部が球形をなしており，明瞭な底部をもたない。62では底部が厚く，平面を形成するため安定するが，63では自立できない。61～63の口縁部はヨコナデをするが端部を丸くおさめている。

甕G$_1$（第64図89・90，第65図91・92）

短い口縁部が外側へ強く彎曲する。口縁端部はヨコナデにより面取りを行うが，口縁端部に細い粘土紐を貼って口縁帯をつくる。体部外面は荒い（1cm単位当たり4～5条）のハケ調整を行う。この種の調整は甕G類に特徴的な調整である。口径約15cm，器高約25cmの90・91と口径約14cm，器高10.5cmの89は大・小の関係とみられ，器形や調整まで相似する。89と91では，体部の下半ではハケの調整方向や調整具（91は板状具によるナデ）を異にしており，先に甕F類のいくつかで見た三分割成形が共通して行われている。体部の内面はきれいなナデ調整をする。

甕G$_2$（第64図88）

甕G$_1$類と全く同じと言って良い甕であるが，口縁端部を面取りしない点が違う。第64図89と

体部の調整や三分割成形をとることも類似する。体部は球形を帯び底部が小さいために自立できない。

甕Ｇ$_3$（第64図93・94）

口縁部がＧ$_1$・Ｇ$_2$類に比較して長く，外反の度合もゆるい。体部外面の調整は，荒いハケを用いている。93の体部内面は細いハケ調整をする。

甕Ｈ$_1$（第51図８）

「くの字」口縁の甕で長胴の体部をもつ。厚味をもつ口縁の端部は，ヨコナデにより丸くおさめる。底部は丸底とみなして良い。体部内外面はハケ調査をする。

甕Ｈ$_2$（第48図88）

口縁部がやや内湾気味に立ち上がる「くの字」口縁の甕。口縁端部が内側に肥厚し，上端面にヨコナデによる面取りがなされる。体部は球形を呈し，外面は横方向のハケ，内面はヘラケズリ調整がされている。図示しなかったが，本例の他にも別個体の口縁部小片が２点，包含層から出土している。

甕Ｉ$_1$（第54図35）

肩部より上を欠失するが，体部が球形で丸底をなす甕。底部中央に径 1.6 cmの焼成前穿孔がある。

甕Ｉ$_2$（第54図36）

口縁部を欠くが，底部の小さい砲弾形の甕。底部中央に径0.8 cmの焼成前穿孔がある。体部内外面は押圧・ナデ調整をする。なお，本稿では甕として扱ったが，形態的には鉢として扱う方が適当かも知れない。

(5)高杯形土器（第41図，図版21～23）

高杯形土器は，赤彩された土器が多く，壺形土器，器台形土器とともに，本遺跡出土土器の一つの特徴となっている。高杯形土器には，台付鉢形土器と呼ぶ方が良い器種も含むが，主として形態差から６種に分類した。

高杯Ａ$_1$（第49図90）

高杯の部類に含めて扱うが，本来，台付鉢として扱うべき形態のものである。杯の底部以下を失っているが，杯部は底部から内側に屈折して立ち上がり，口縁部では逆に外反する。口縁帯には３条の擬凹線を施こす。杯部外面の屈折部には同種の施文具による刺突文がある。器表を磨いて，杯部外面と口縁部は赤彩をしている。

高杯Ａ$_2$（第49図91・92）

口縁部断片を図化した。浅い杯部の高杯（これも台付鉢として扱うべきかも知れないが。）とみられ，口径が30cm前後となる大形品である。91・92ともに口縁部に赤彩が認められる。92には口縁の一部をヘラで抉り取っている。

高杯Ａ$_3$（第49図93～99，第50図106）

杯部が口径に対して浅く，口縁部が外反して開く高杯の杯部を一括した。詳しく見れば，口縁端部に丸味をもつ第49図93や，口縁部上端を面取りする第49図94～97，口縁部外端を面取りする

第49図98・99に細分が可能である。第49図95・96・99の様に赤彩するものや，第49図96や第50図106の様に施文をもつ例がある。器表を磨くことも多く，一般に精良なつくりのものが多い。第49図99は円筒状をなす脚柱部をもつが，本類の脚部は断片的な資料に限られて全形を窺えるものはない。脚部は円筒状のものと，第49図100・101の様に円錐状に開くタイプがあり，脚端部も直線的に開く第50図109・110（この2点は器台脚部の可能性あり。）・111と有段状となる第50図104・112がある。スタンプ文を施す例もあって第50図104は∩形，106・107はハ形，105は円文のスタンプがみられる。『報告書Ⅳ』の高杯B・C類に該当する。

高杯B（第67図110・111）

杯部が大きく開いて立ち上がり，その底部は小さい。脚部は110では端部がややすぼまるのに対し，111では開脚する。110では脚部内面の下半，111では脚部内面を除いて全面を赤彩する。111の脚部外面には，明瞭なハケ調整をとどめており，文様的効果を出している。

高杯C_1（第66図106・107）

口縁部は直線的に開き，杯底部は中央が凹む。口径27cm前後の大きな杯部に対して，脚部は小さくて短い。杯部外面の屈折部分に粘土紐を貼ってこれを強調する。106の脚部は短い円筒部から開脚するが，107では杯部直下から開脚する。106・107のいずれも丁寧な磨きとナデ調整が行われる。

高杯C_2（第54図38，第66図102～104，108）

基本的な形態は高杯C_1類と似るが，口径が19cm前後と小さい。このため器高では殆んど差のない高杯C_1類の杯部に比較して深い印象を与える。脚部は中空にならない短い円筒部から開脚する第66図102・103と中空になる円筒部から開脚する第54図38が知られる。磨きとナデ調整がなされ，脚部内面を除く全面を赤彩することが多い。

高杯D（第66図109）

ゆるやかに立ち上がる杯部に，その直下から開く安定感のある脚部が付く。外面は磨き調整をする。

高杯E（第67図112）

杯部が半球形の浅鉢形をなす。口縁部は外へ広げ，端部上面に粘土紐を載せて口縁帯をつくる。脚部は円錐状に開脚し，外面を磨いている。

高杯F（第50図113）

杯部は浅い鉢状を呈し，口縁は長く伸びて外反する。口縁端部は薄くなって先端は丸味をもつ。口縁の立ち上がり基部に3条の沈線が巡る。内外面ともに磨いて全面を赤彩する。『報告書Ⅳ』の高杯D類に該当する。

(6)器台形土器（第41図，図版23）

器台形土器も磨いたり赤彩するものが多い。主として形態差から7類に分類した。

器台A（第43図16）

有段状の口縁部をもつ。脚部以下を欠失するが，器受部から脚部に曲線的に連続する。『報告書Ⅳ』の器台D類に該当する。

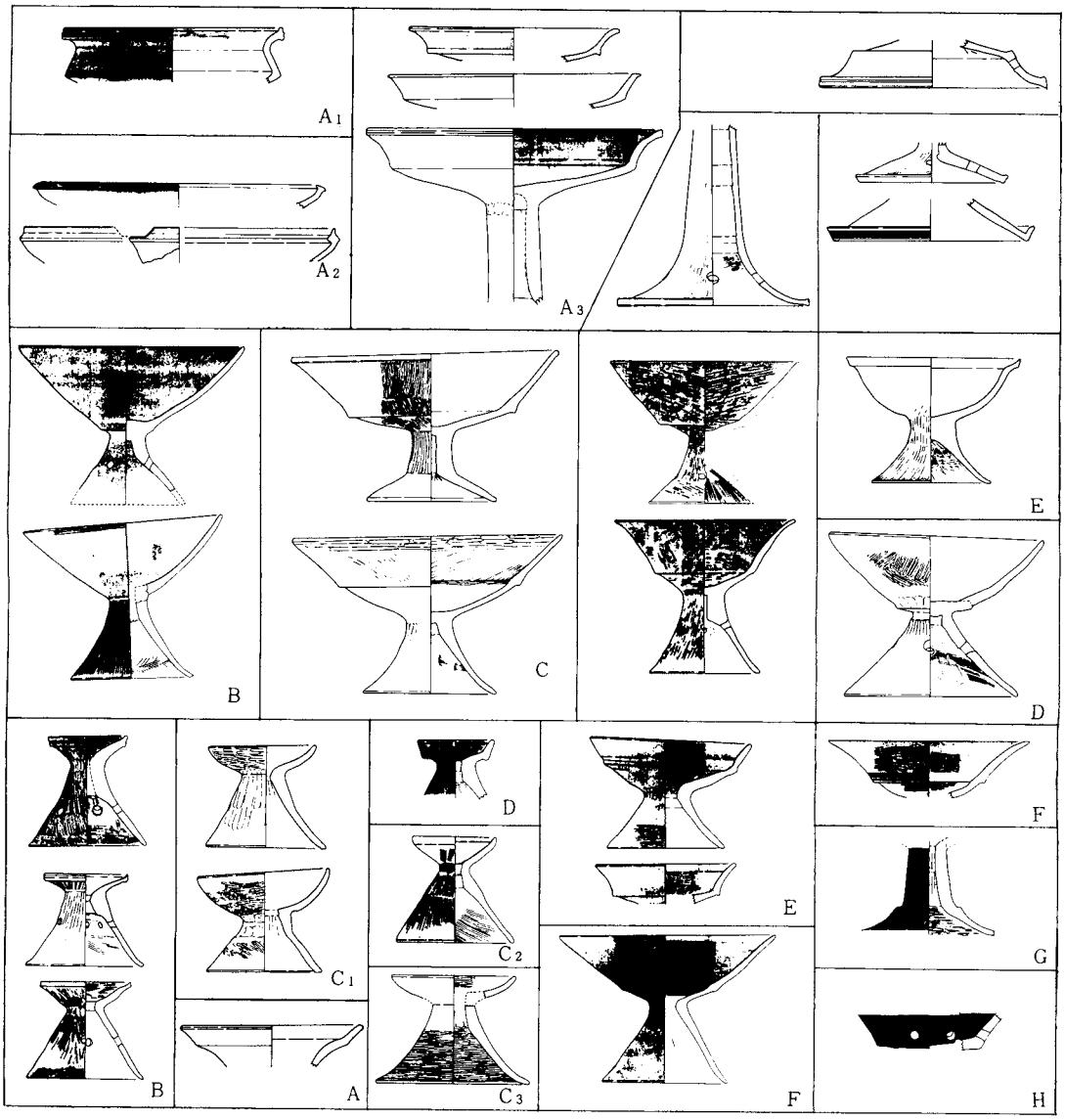
器台Ｂ（第68図119～121）

器受部が脚部から「くの字」形に外反する小形器台。口縁帯に１条の沈線を施す119と，口縁端をつまみ出す120・121に細分が可能である。器表を磨き赤彩することが多い。

器台Ｃ$_1$（第68図122・125・127）

浅い皿状の器受部に円錐形に広がる脚部の付く小形器台。122、125は口縁部をヨコナデにより端部を上方へ引き出す。口径が13.1cmを測る127は，器受部が椀状に深く，細分すべき要素を備えるが，調整や脚部の形態が類似するため，本類にまとめた。脚端部を水平に面取ることと，外面を磨いて調整することが共通する。

器台Ｃ$_2$（第68図123・128）



第41図　徳前Ｃ遺跡第２・３次高坏形土器・器台形土器分類一覧

器台A類とB$_1$類の中間的な様相をもつ小形器台。「くの字」に外反する器受部の先端をヨコナデして上方につまみ出す。123は器表を磨いて器受部とともに赤彩をする。

器台C$_3$（第68図124・126）

器受部が浅い皿状を呈する小形器台。器台B類の器受部と似るが，口縁先端部を丸くおさめるのを基本とする。脚部の形態は，124の様に端部が広がらないタイプと126の端部が広がるタイプがある。器表は丁寧な磨きが行われる。『報告書Ⅳ』の器台E類が該当する。

器台D（第54図38）

器受部が口径7.4cmの有段状となる小形器台。磨いて赤彩を施す。

器台E（第50図114，第67図113，118）

器受部の口縁が屈折して立ち上がる器台を一括した。第67図118は肉厚の器体を磨いて赤彩をする。第67図113は，器受部が深く，口縁の屈折部が直線的となって開く。口縁部を肥厚させ，内側を若干くぼめて口縁帯の区別をするが，全体としてみる形は118のそれと大きく異っている。磨きと赤彩が行われている。

器台F（第67図117）

形態的には高杯C$_1$類と相似する器台。口縁部が直線的に開き，器受部中央がわずかに凹む。磨きと赤彩が行われている。

器台G（第54図40）

脚部のみの断片資料。有段をなす脚部である。

器台H（第50図116）

器受部の断片資料。平担な器受部から折れて口縁部が立ち上がる。焼成前の円孔が3個，等間隔に穿たれており，復元すると10個の孔があったとみられる。内外面を磨いて赤彩をする。

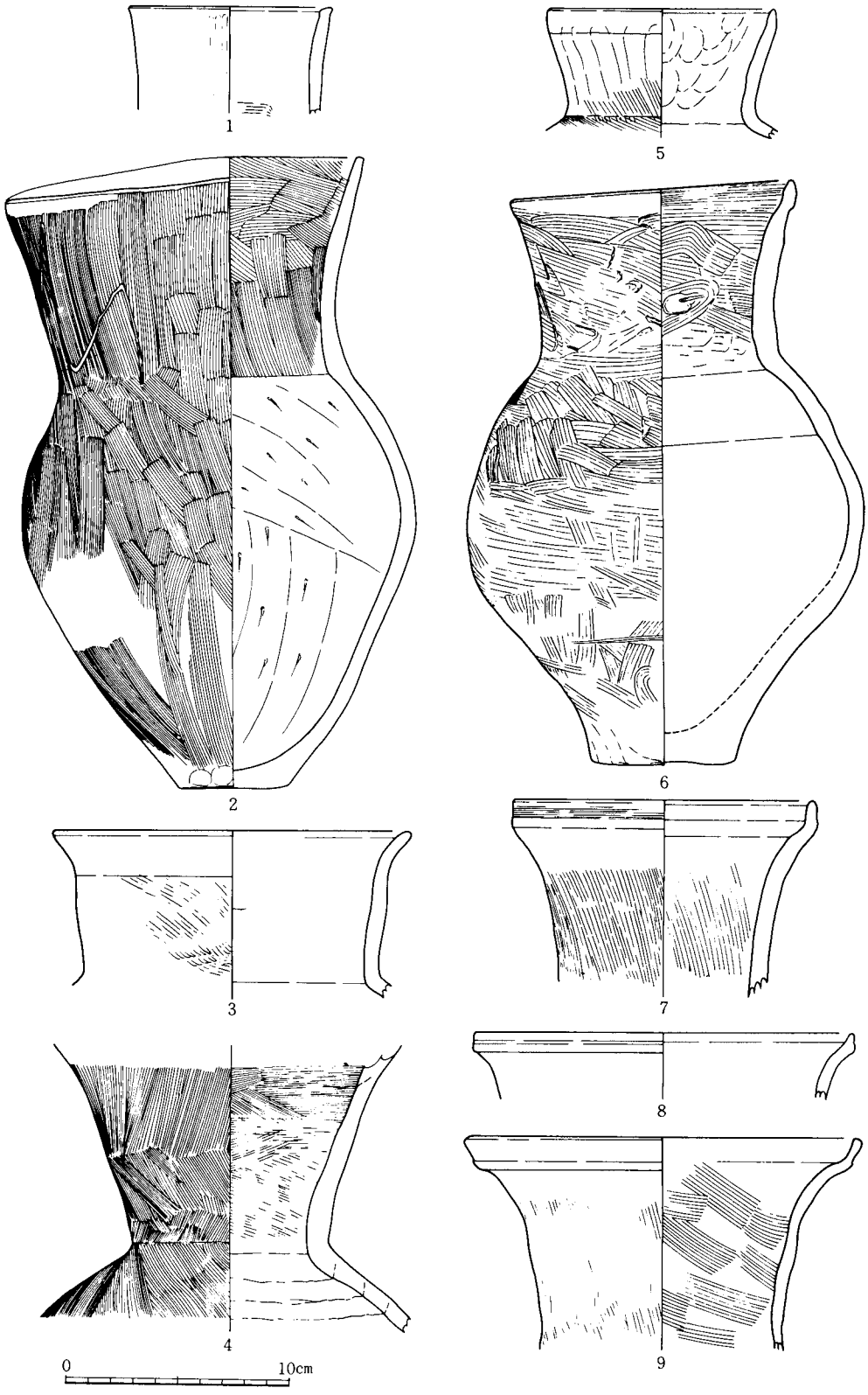
磨製石斧（第51図11，図版8）

第2次調査の際72ラインから単独出土した。全長11.4cm，幅4.1cm，厚さ2cm，重さ136.5gの小形石斧である。暗灰色に黒色の鉱物粒を多く含む角閃石安山岩を用いている。刃部は両面ともに約1.3cmの幅で磨かれ，基部の片面は軽く磨いて平面とし，もう一方は中央がややふくらんだ，カマボコ形に近い断面形をもつ。縄文時代の磨製石斧とはやや形状を異にしており，弥生時代の石斧として扱う方が適当とみたい。

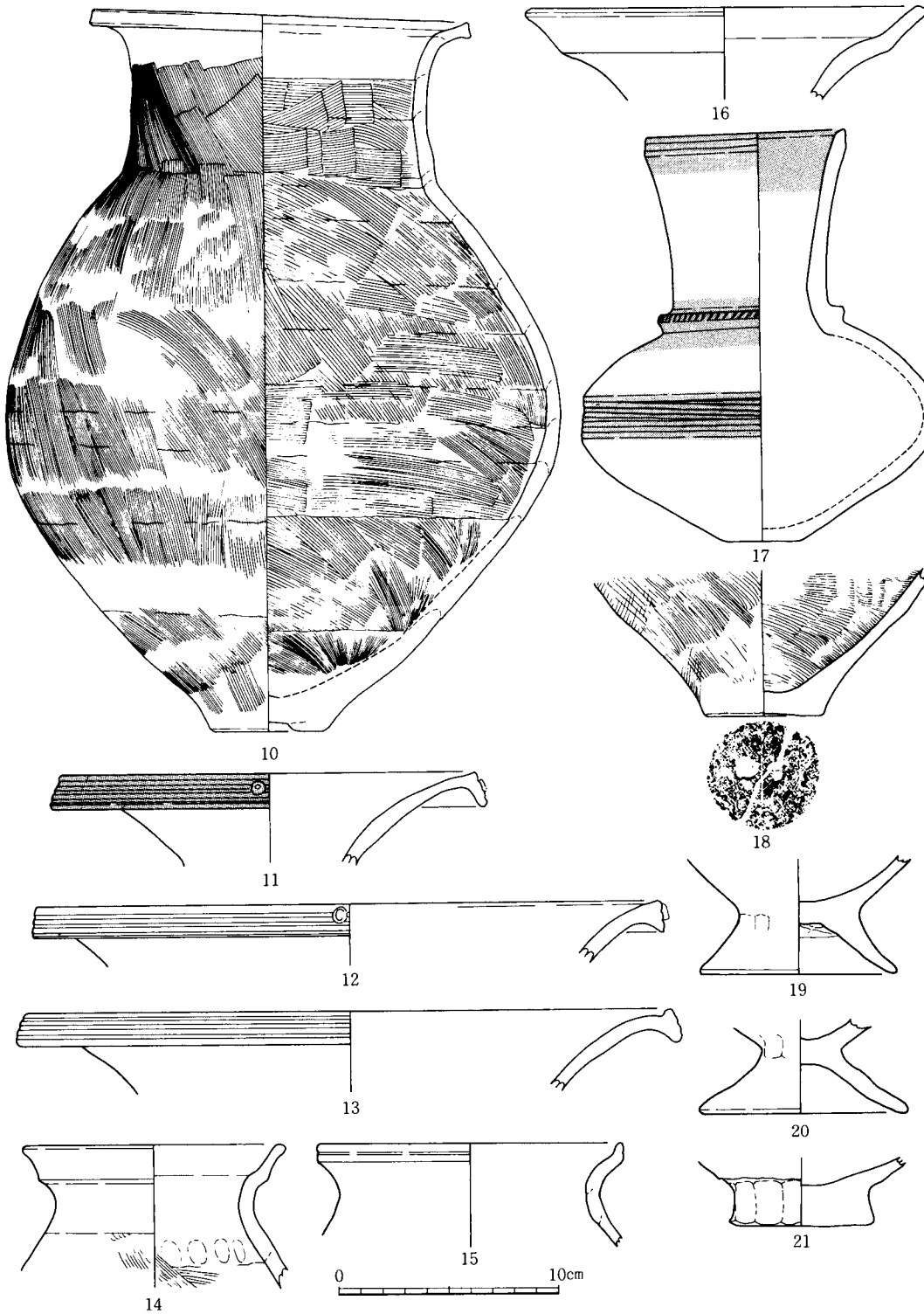
（註）

(1) 湯尻　修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅰ)』石川県教育委員会（1978）

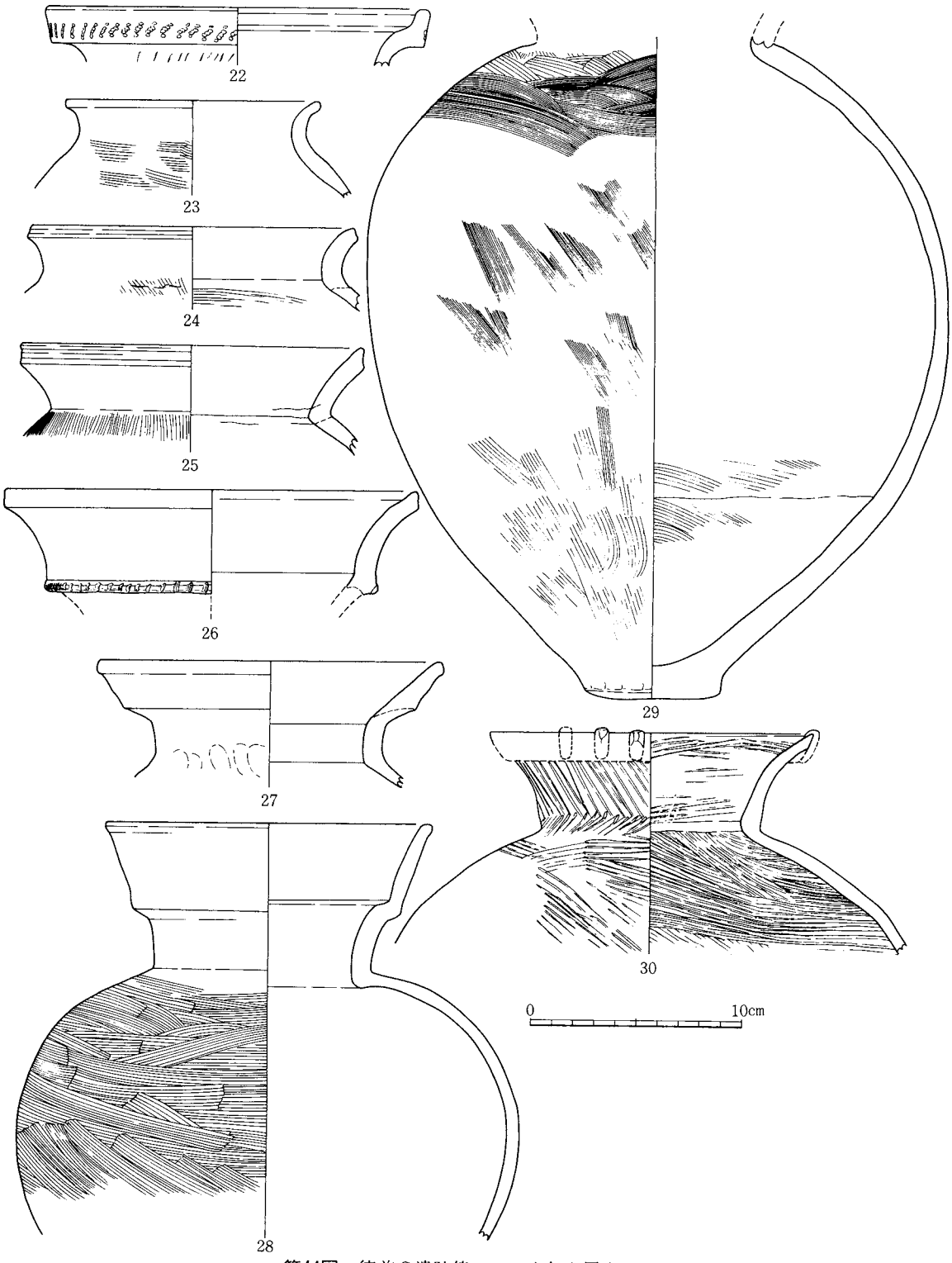
(2) 西野・平田・藤・浜野・福島『鹿島町徳前C遺跡調査報告(Ⅳ)』石川県立埋蔵文化財センター(1983)



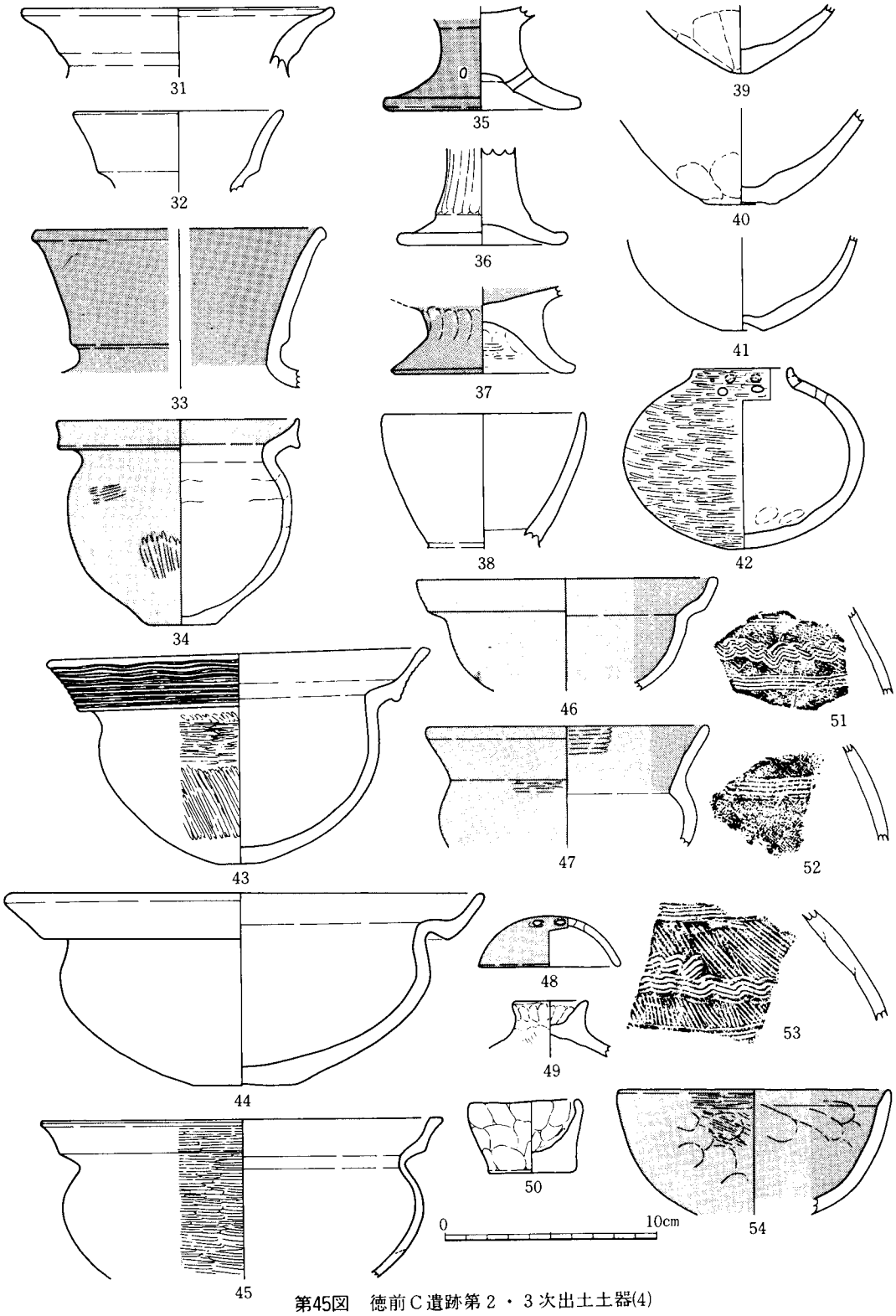
第42図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(1)



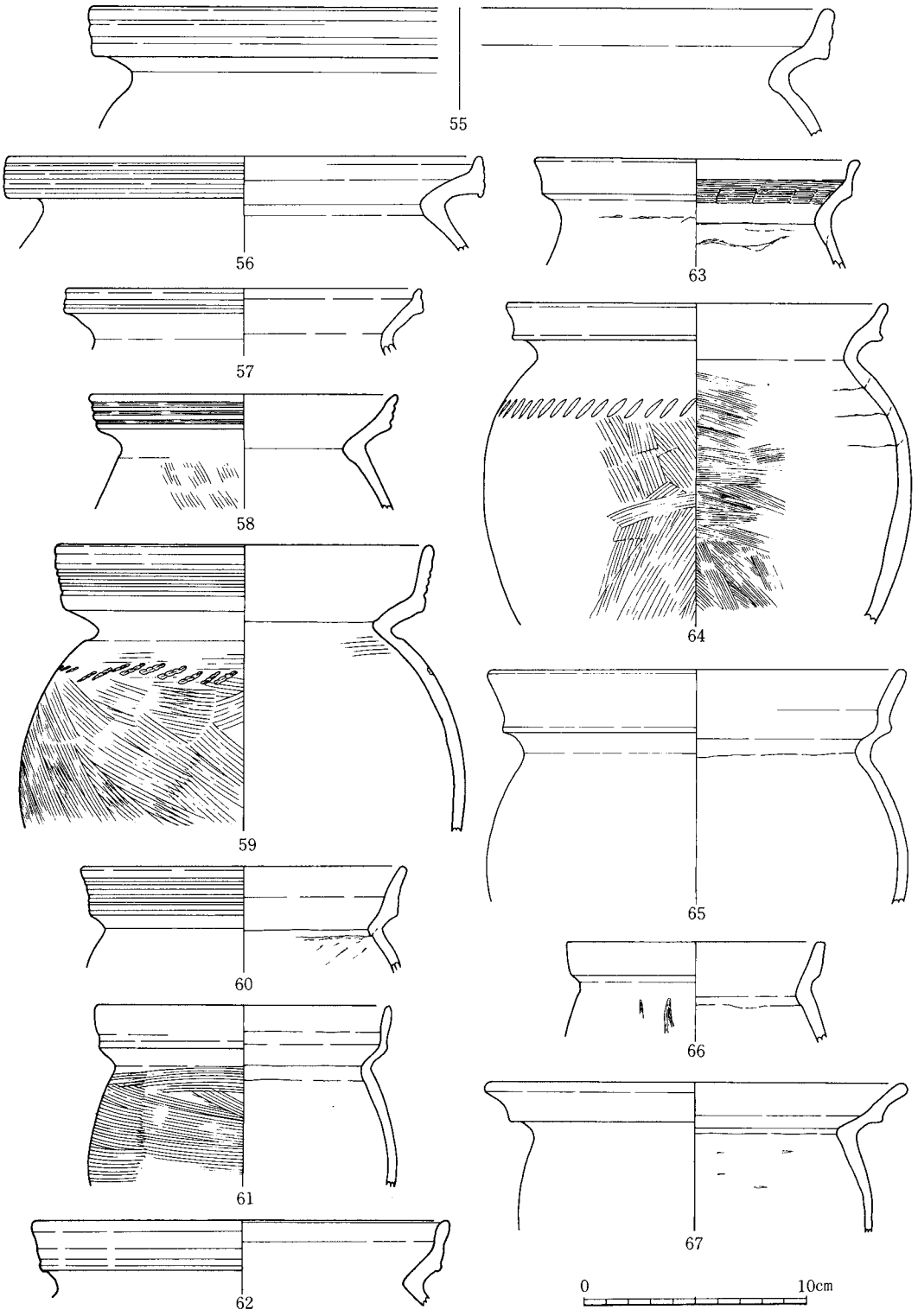
第43図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(2)



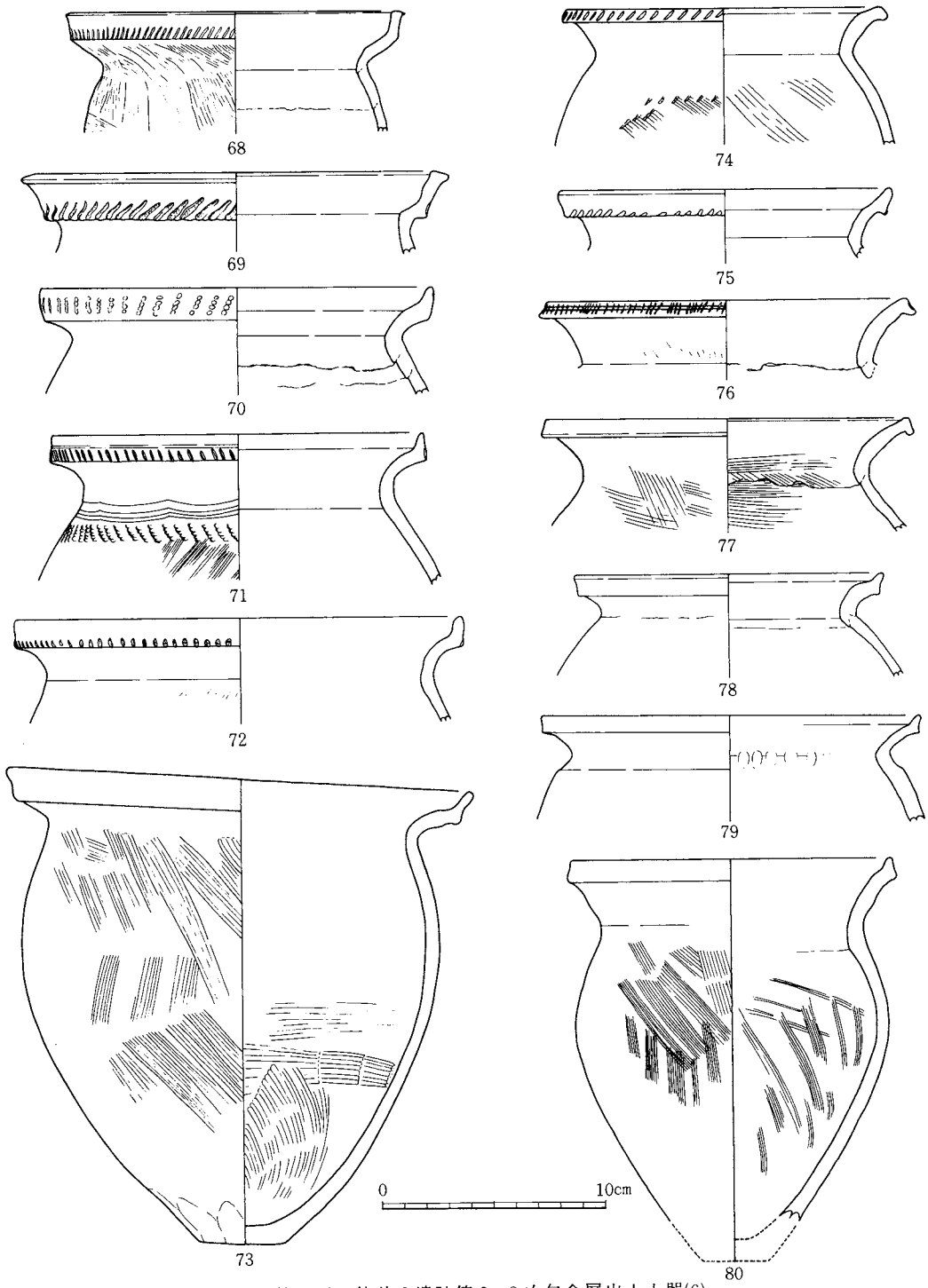
第44図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(3)



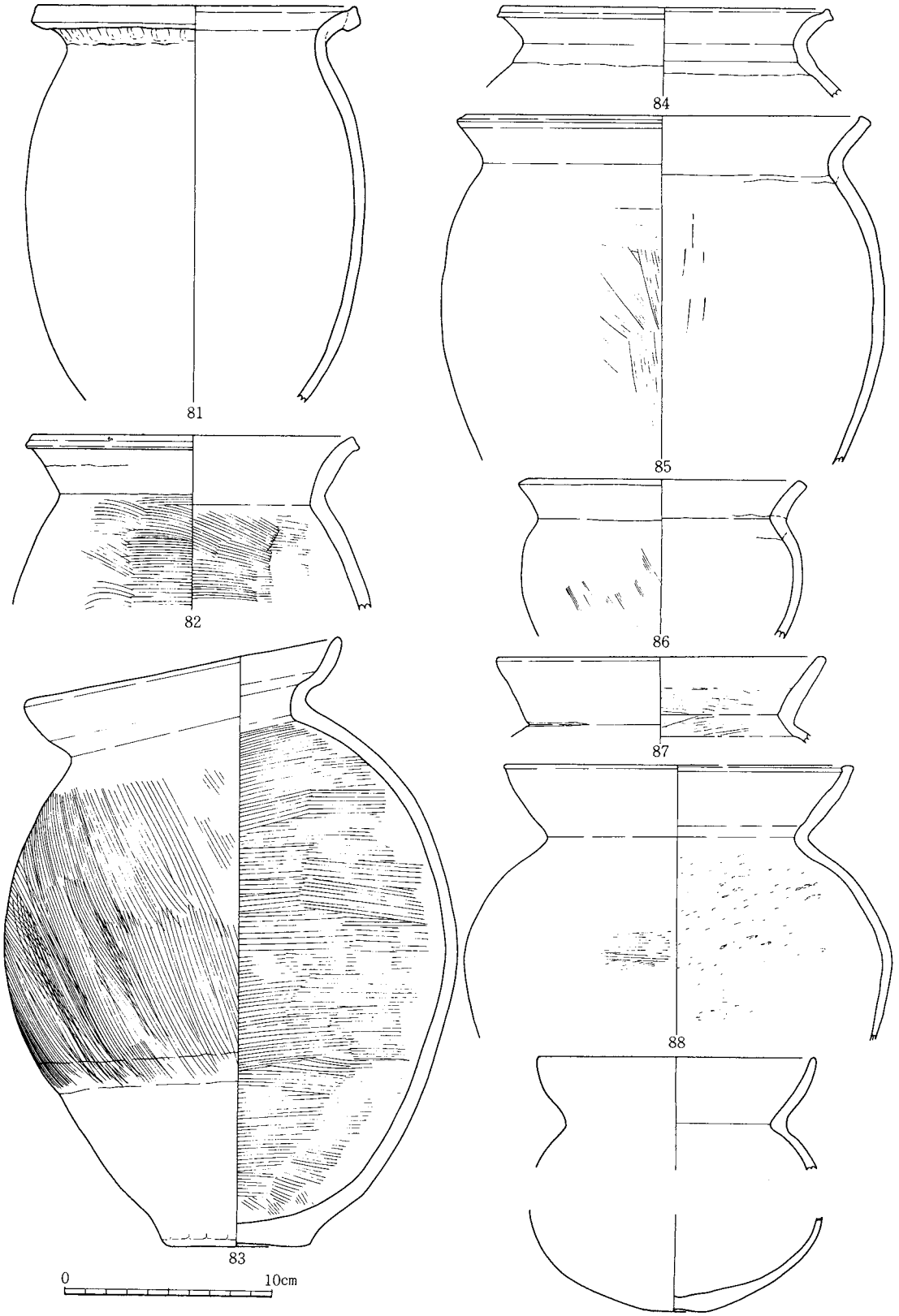
第45図　徳前C遺跡第2・3次出土土器(4)



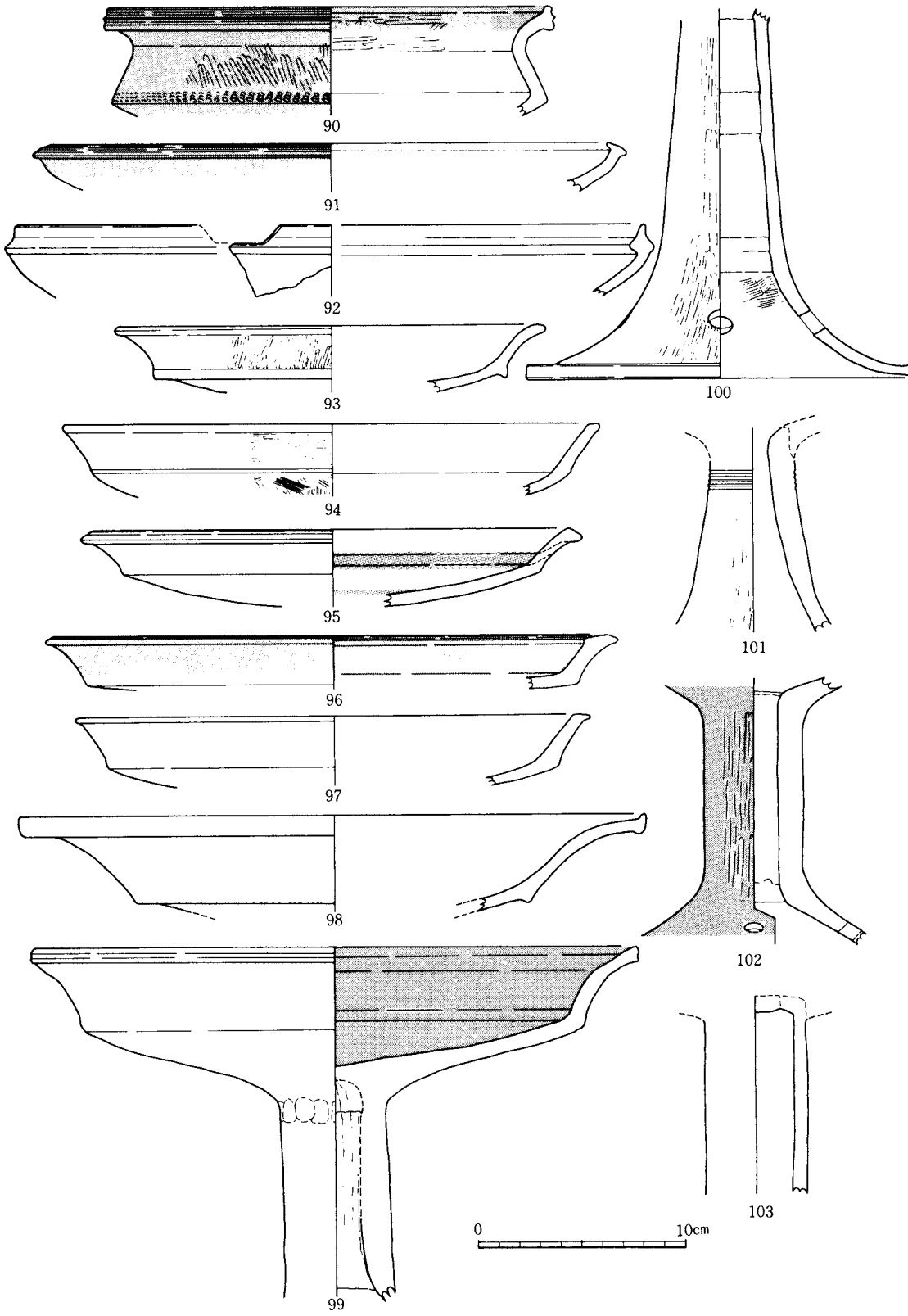
第46図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(5)



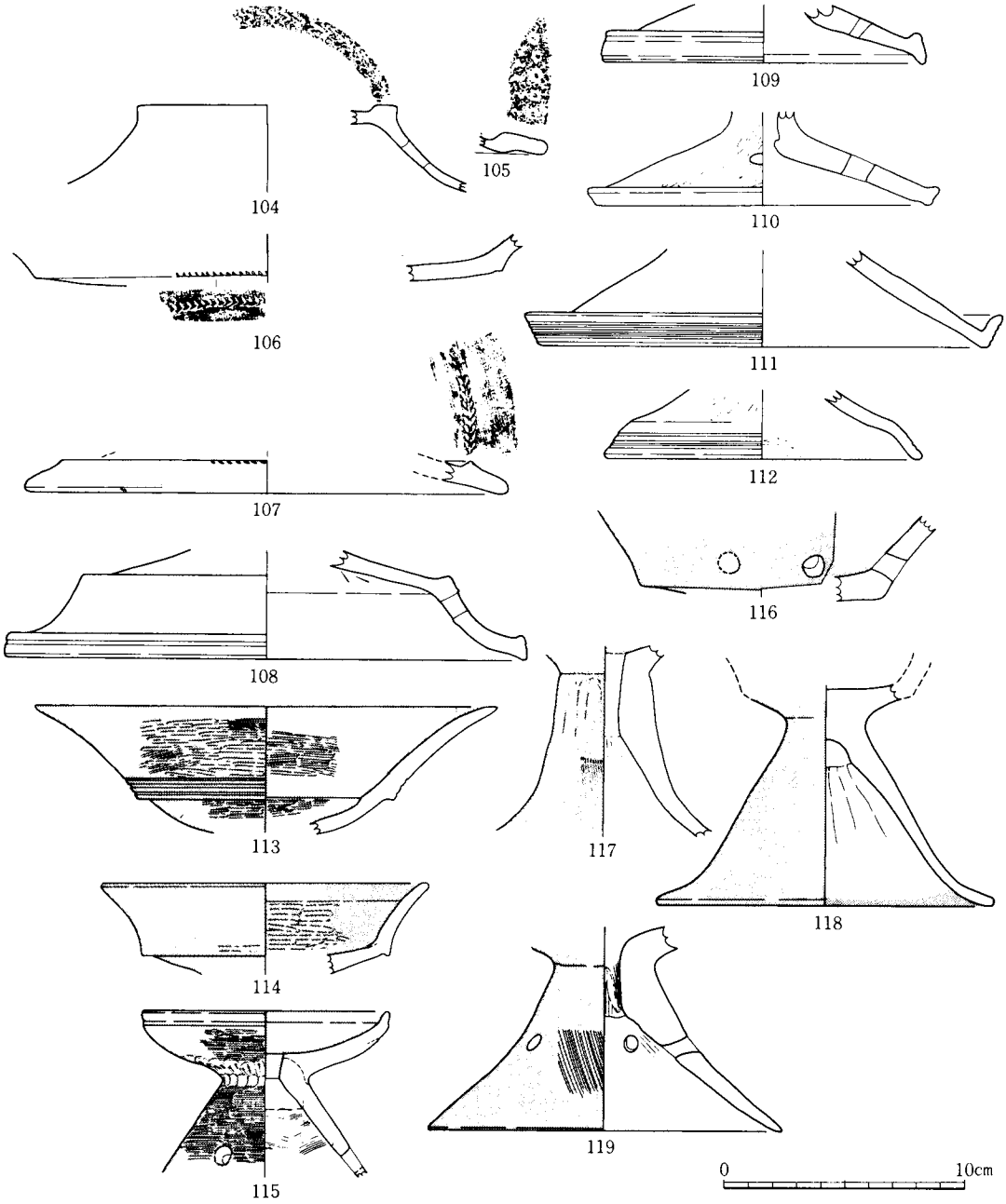
第47図　徳前C遺跡第2・3次包含層出土土器(6)



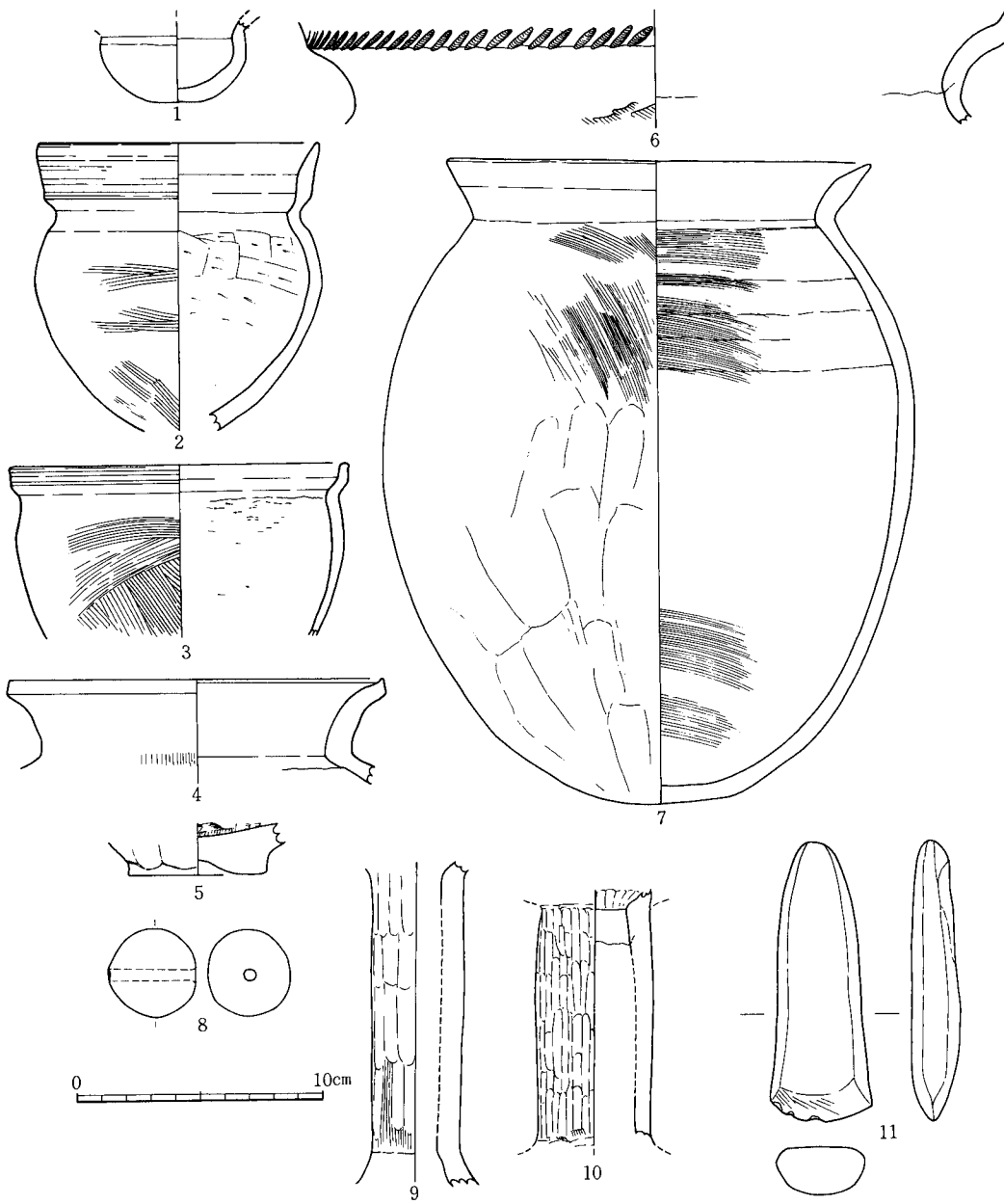
第48図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(7)



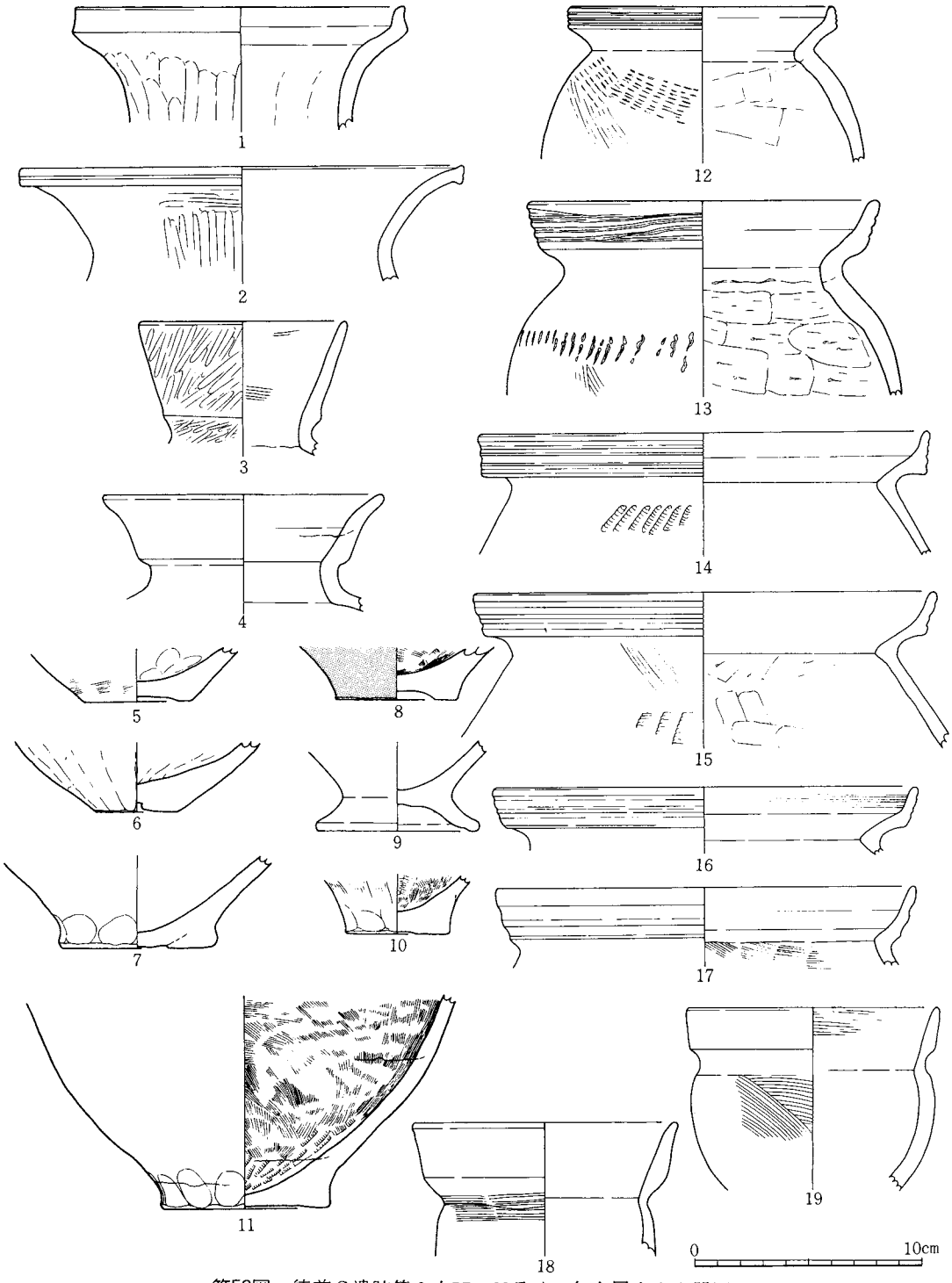
第49図　徳前C遺跡第２・３次包含層出土土器(8)



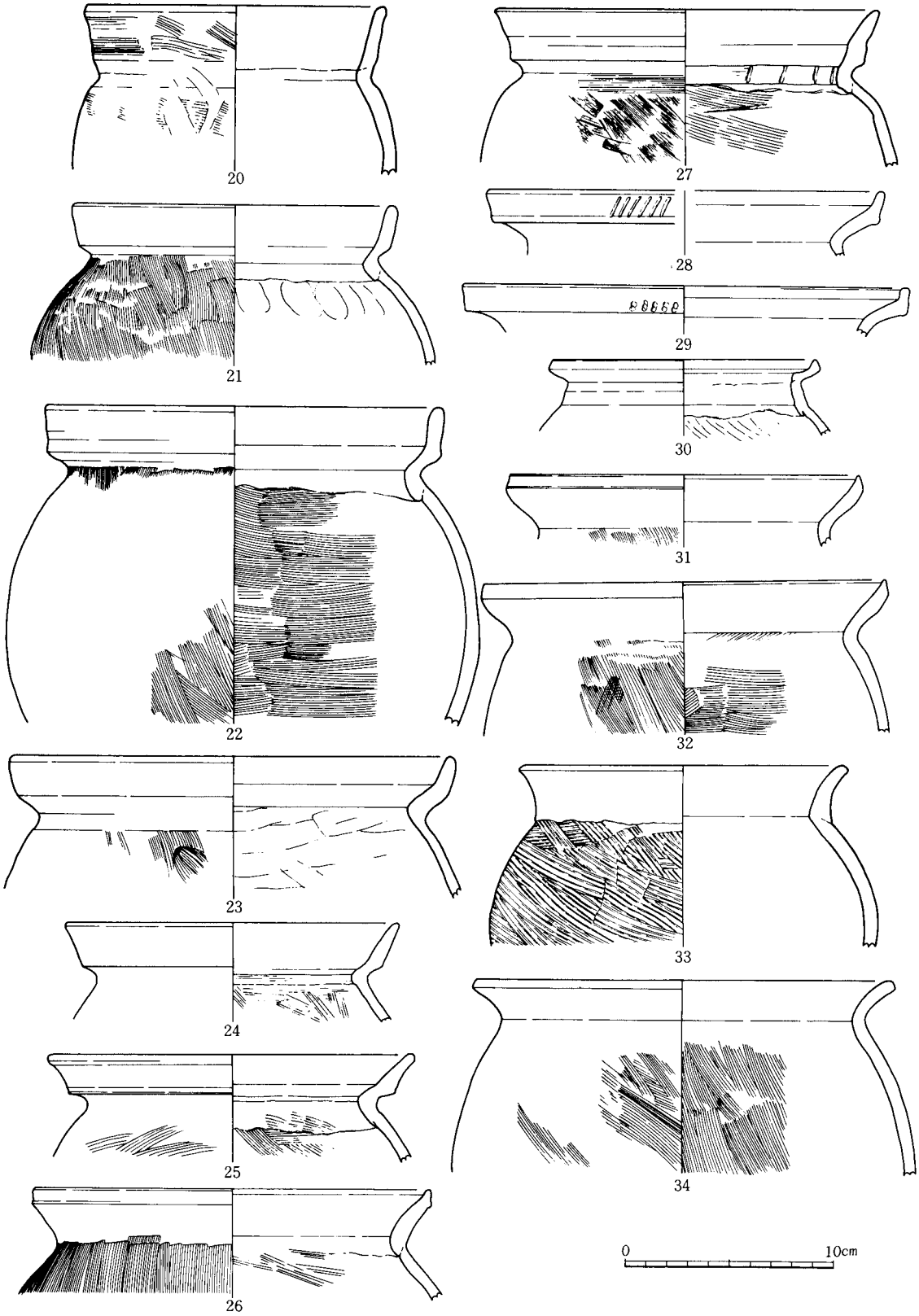
第50図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土器(9)



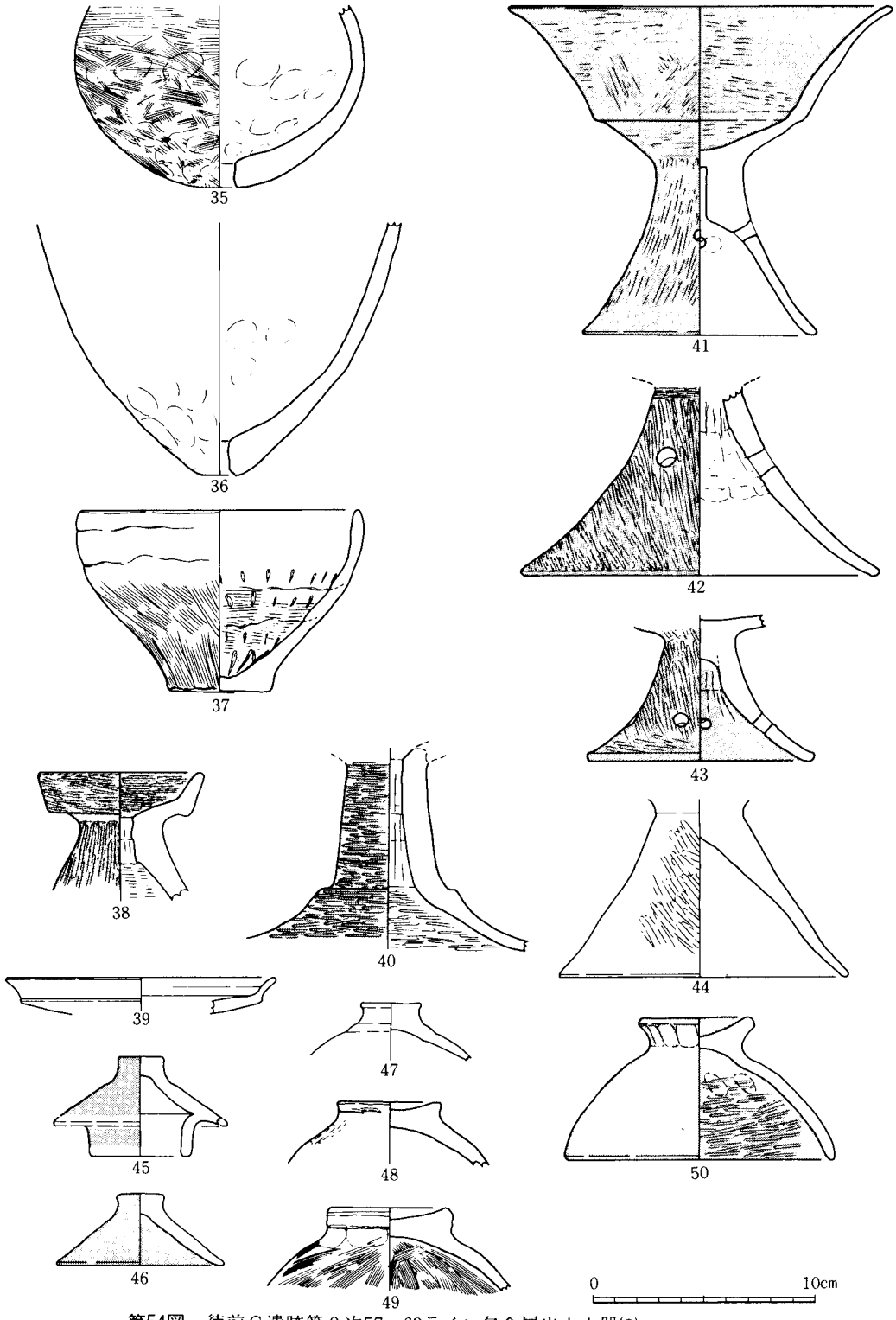
第51図　徳前C遺跡第2次包含層出土土器(10)



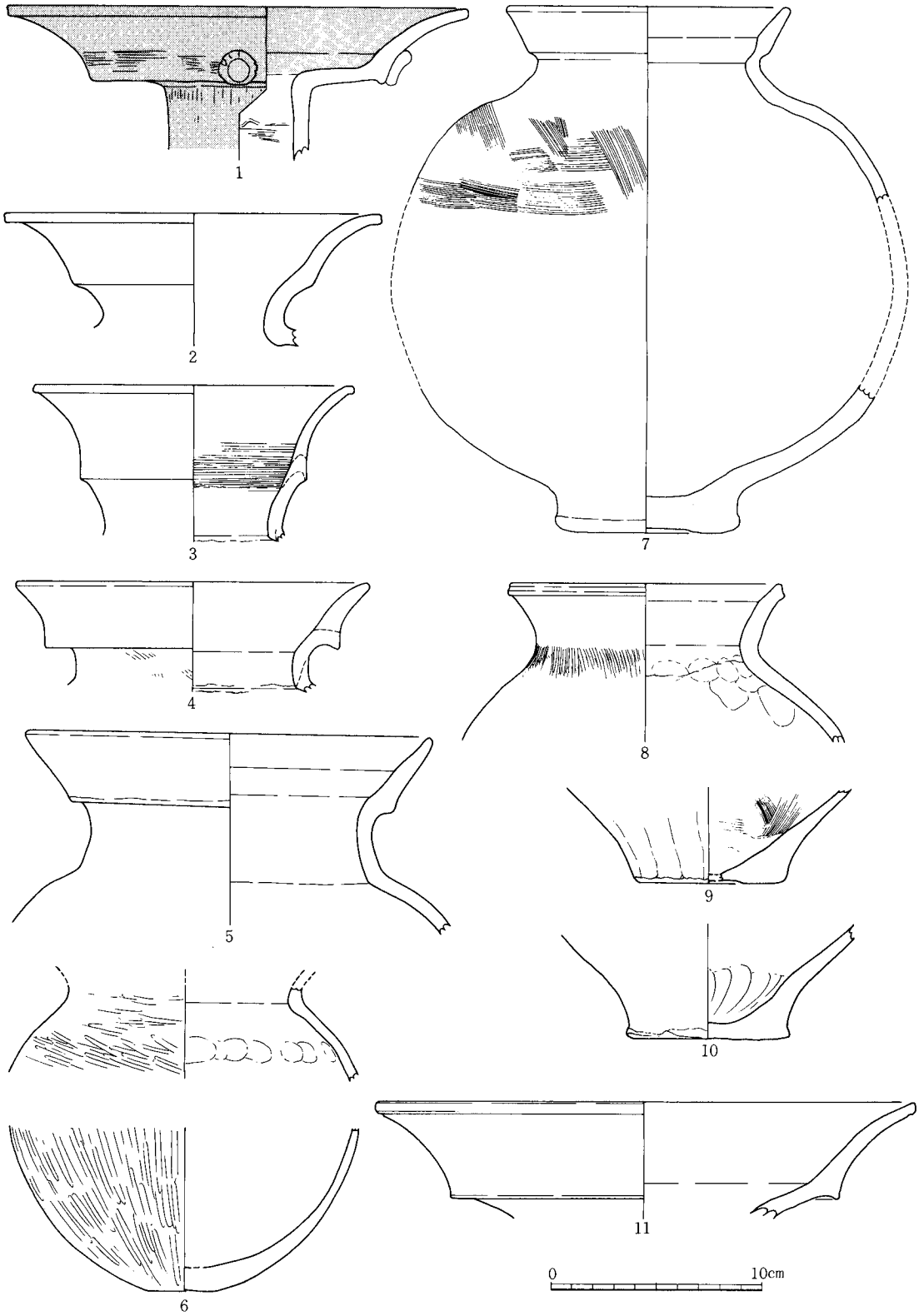
第52図　徳前Ｃ遺跡第２次57～63ライン包含層出土土器(1)



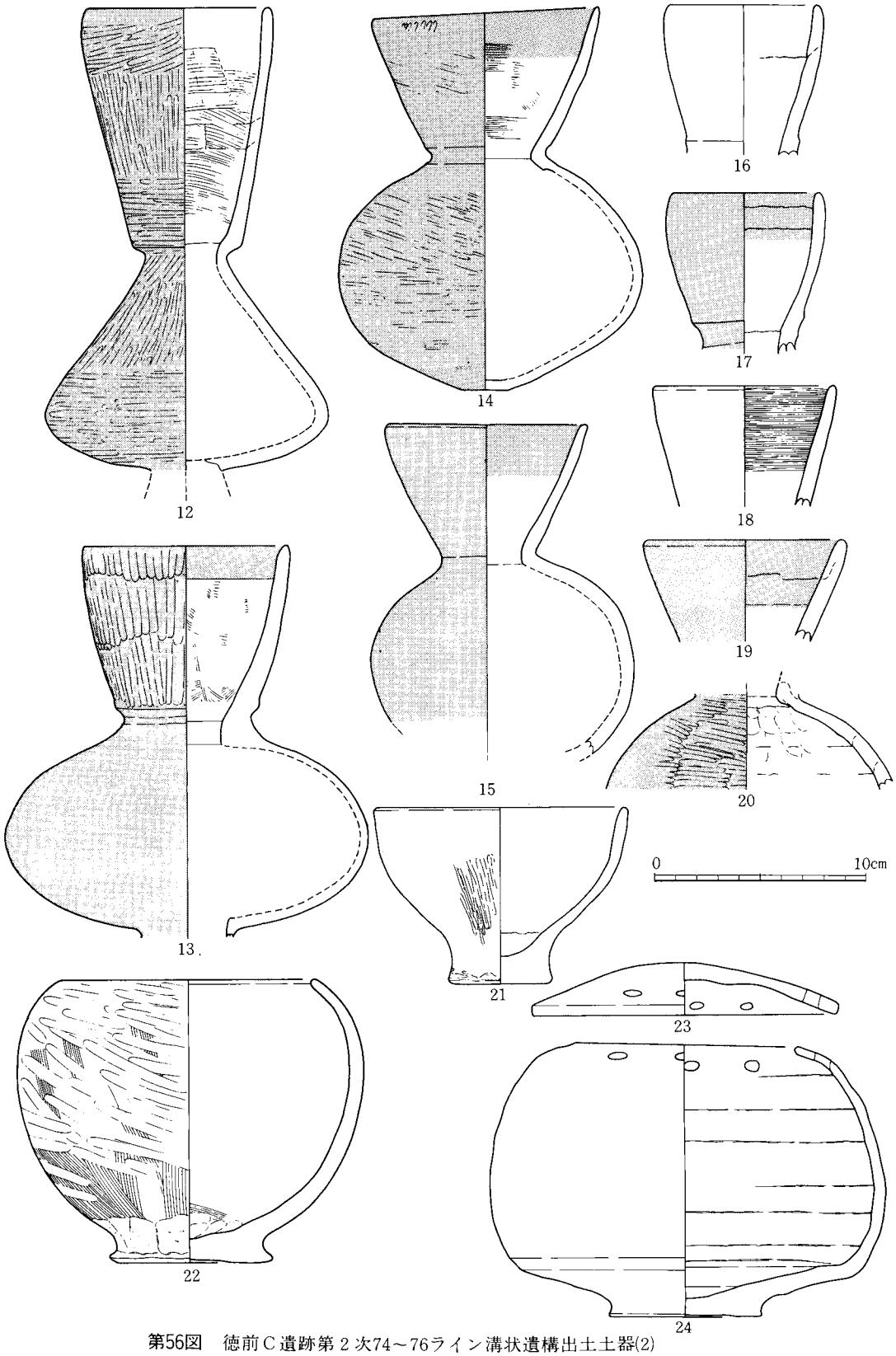
第53図　徳前C遺跡第2次57～63ライン包含層出土土器(2)



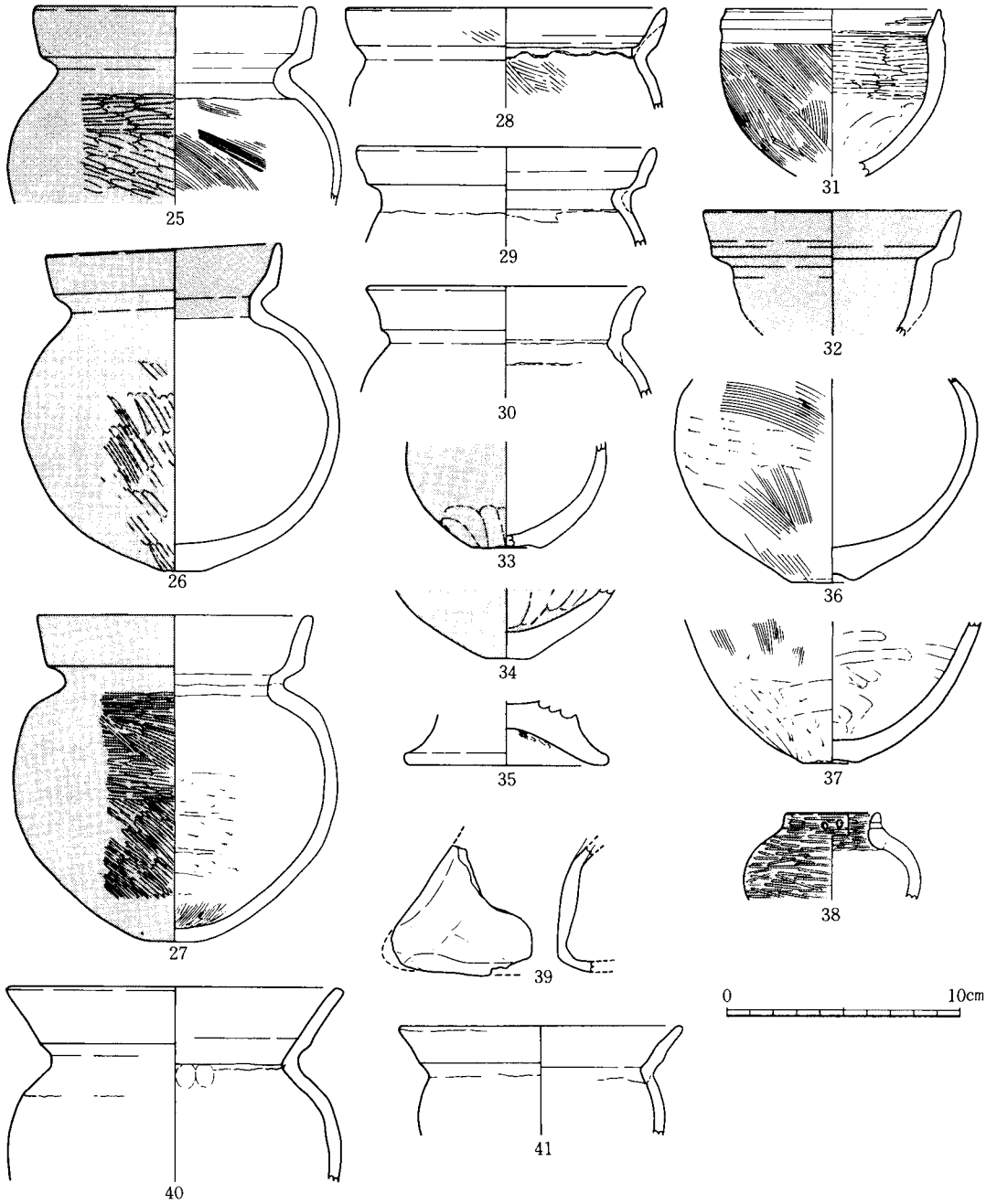
第54図　徳前Ｃ遺跡第２次57～63ライン包含層出土土器(3)



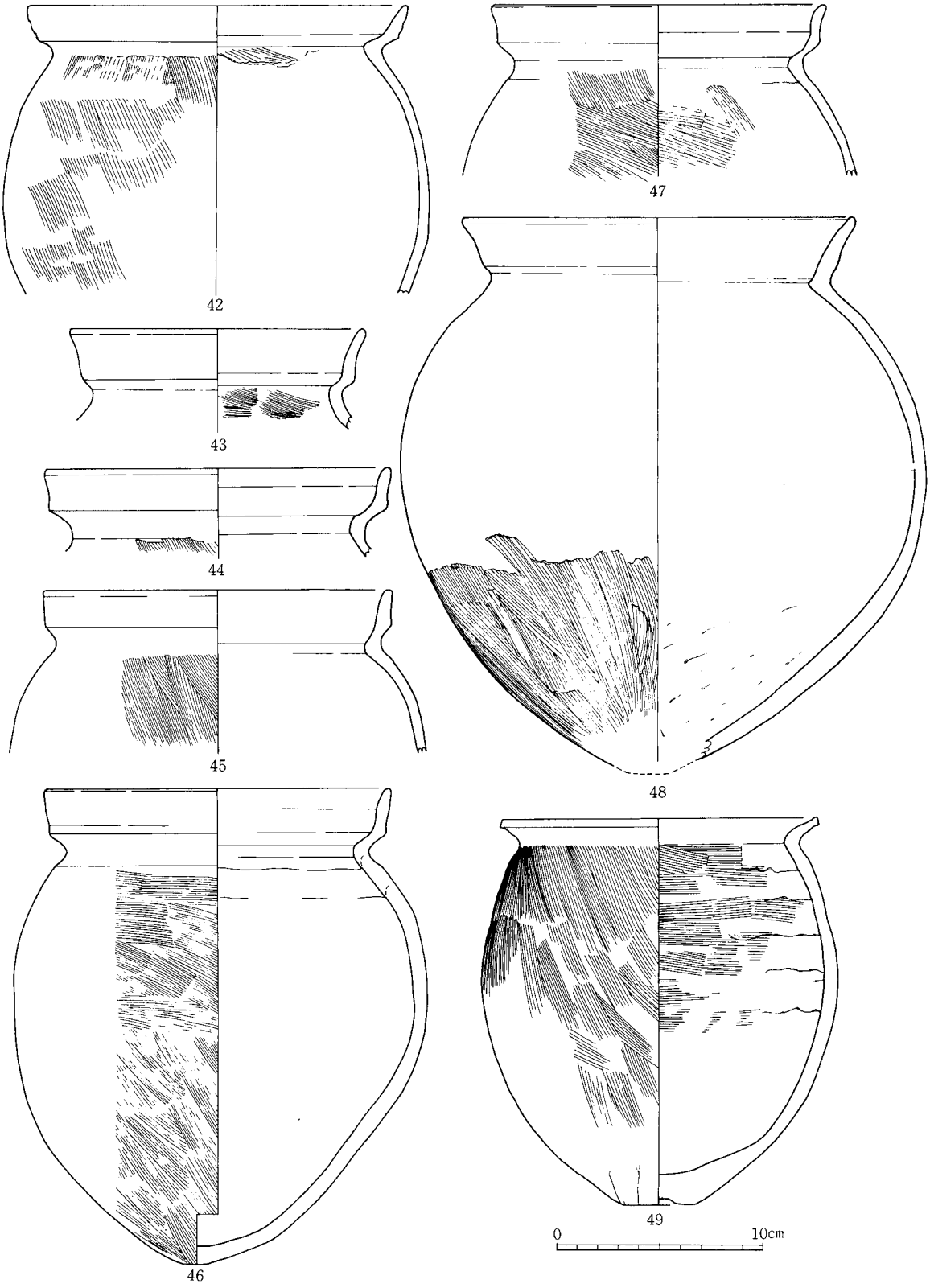
第55図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(1)



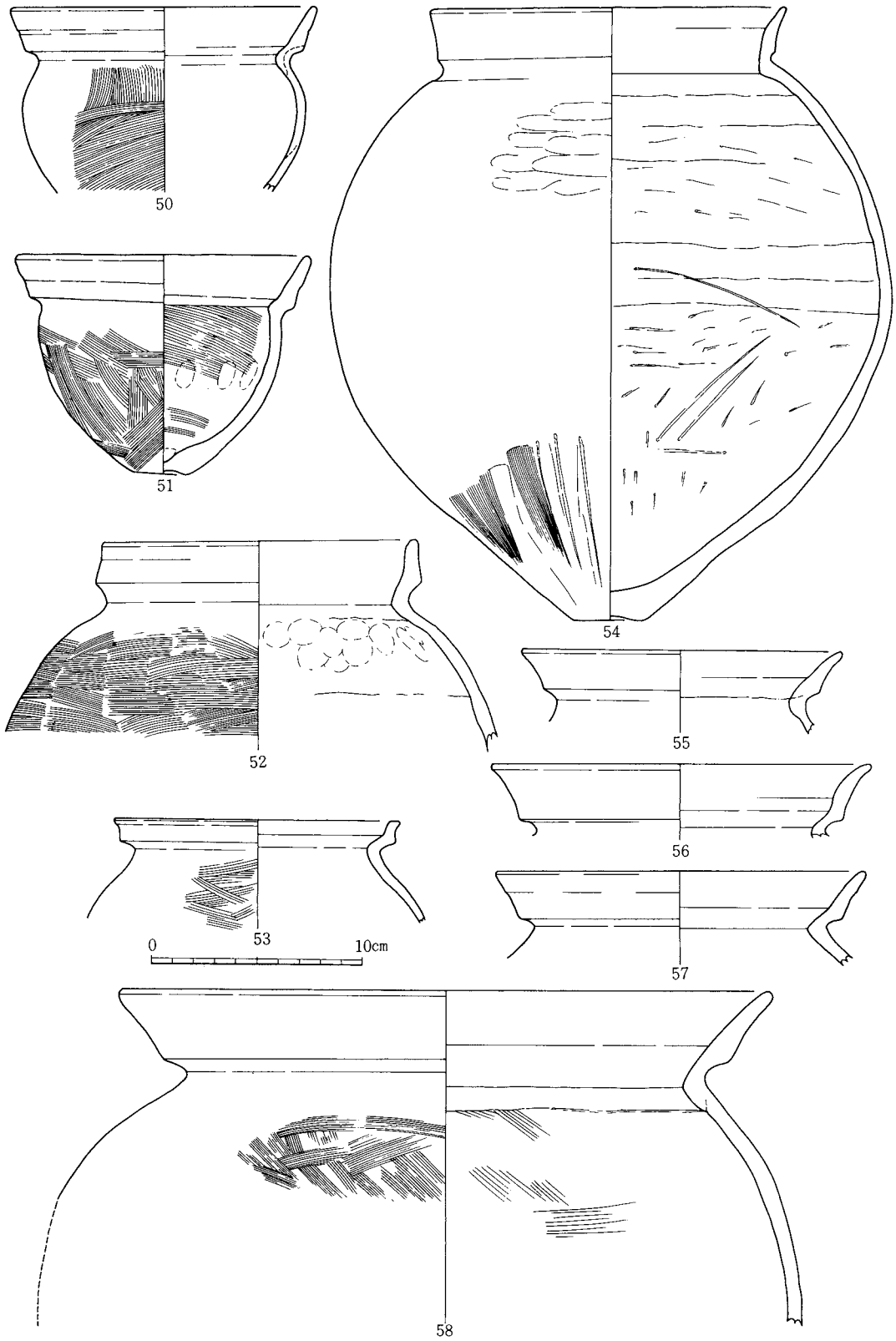
第56図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(2)



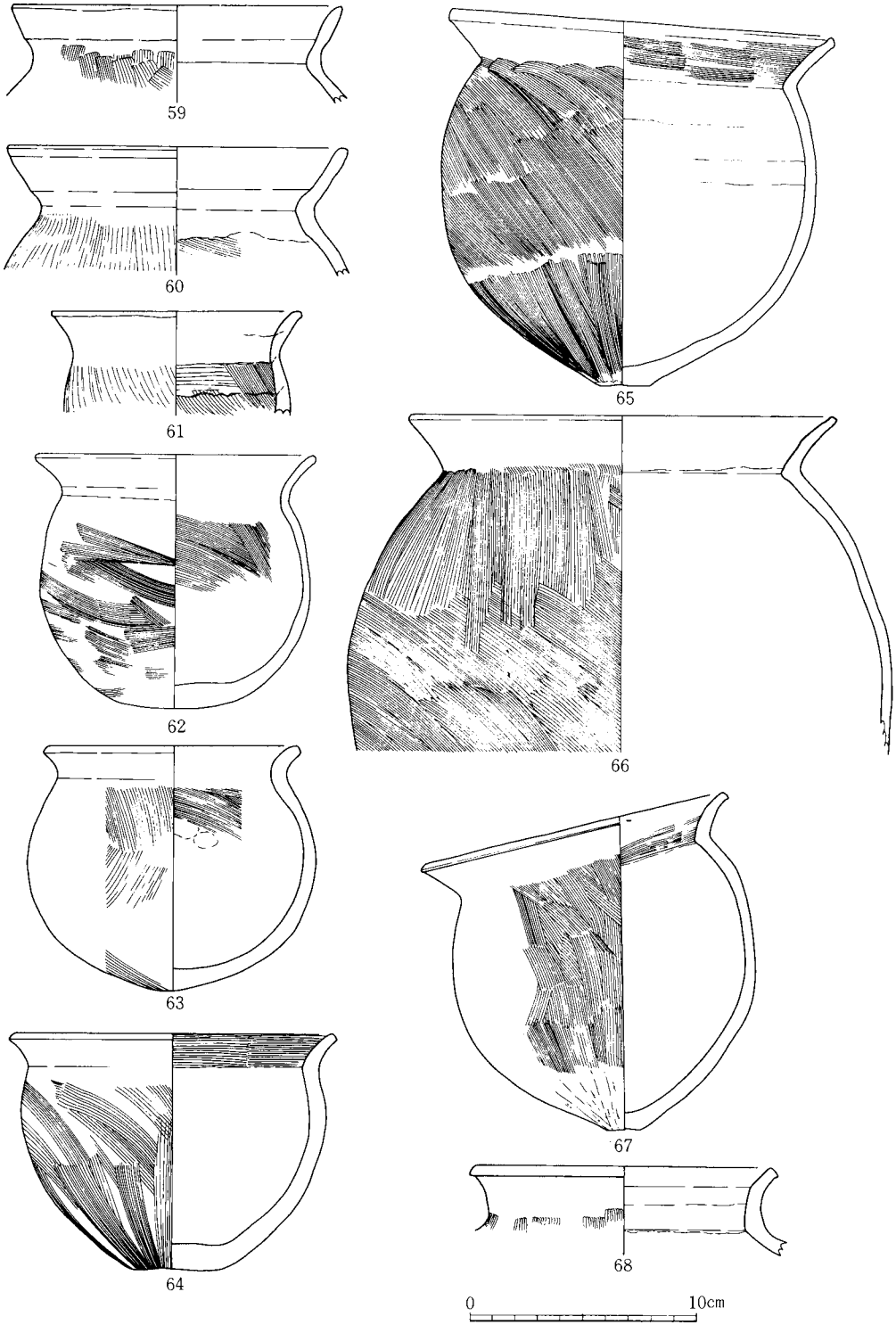
第57図　徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構出土土器(3)



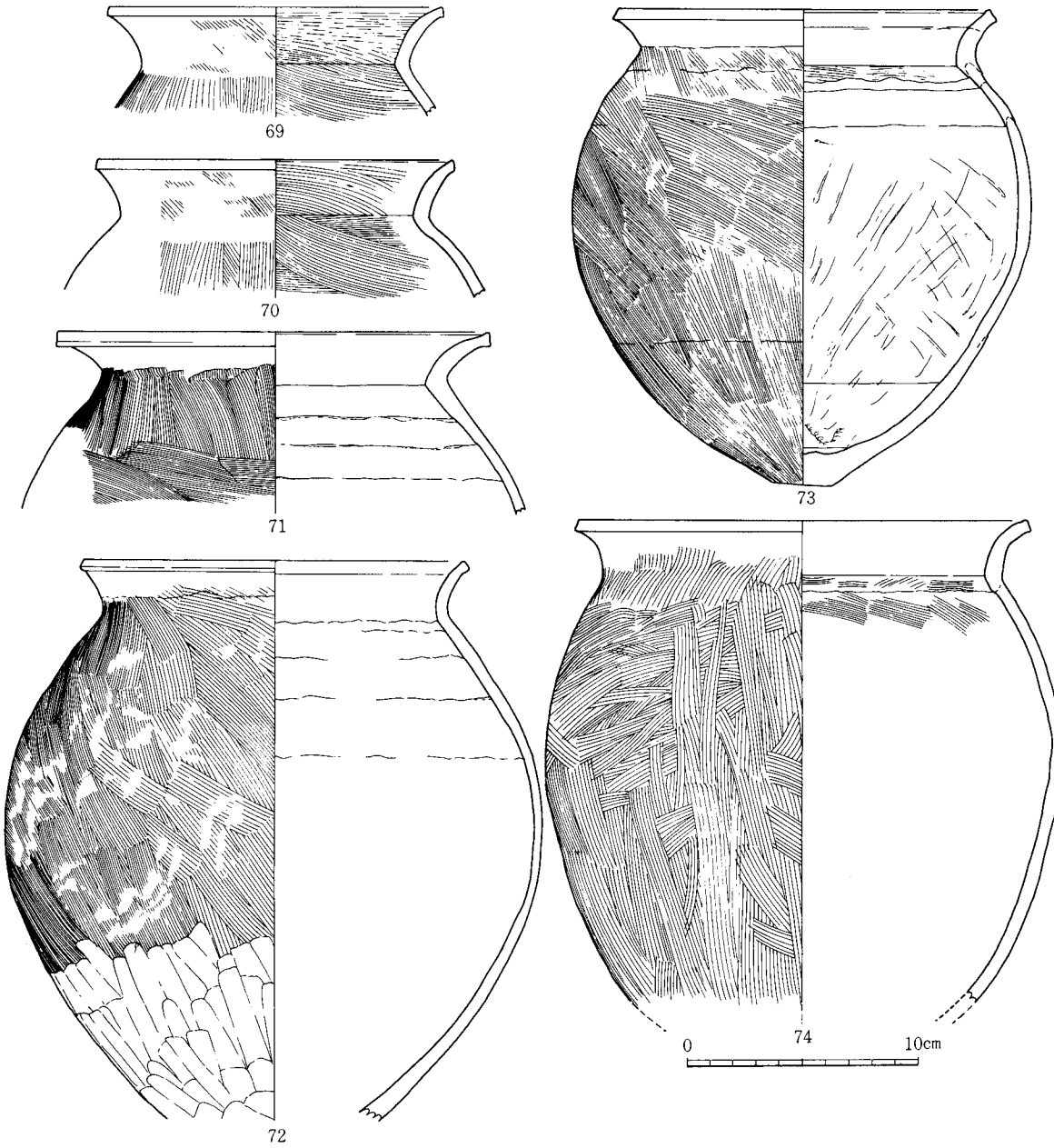
第58図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(4)



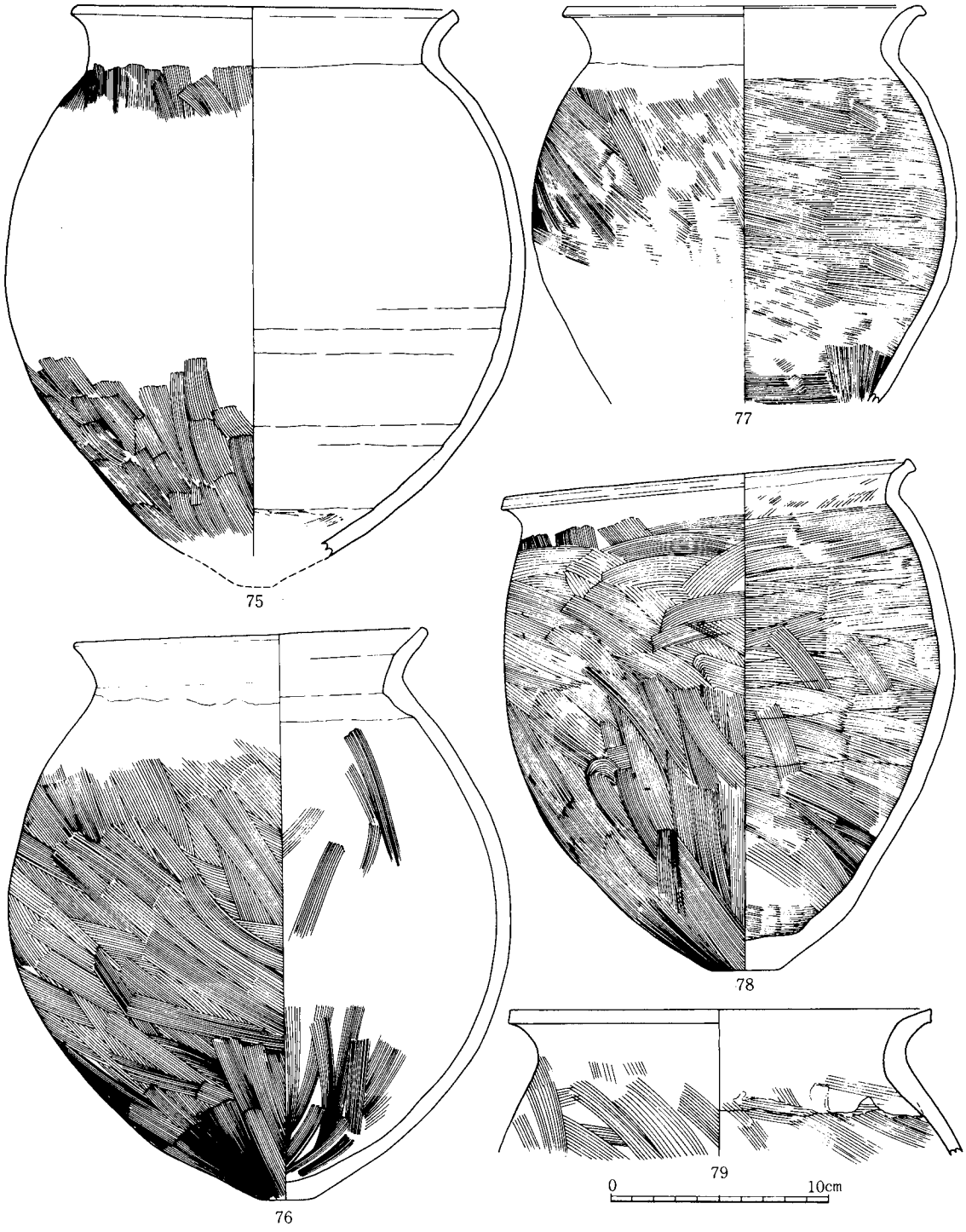
第59図　徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構出土土器(5)



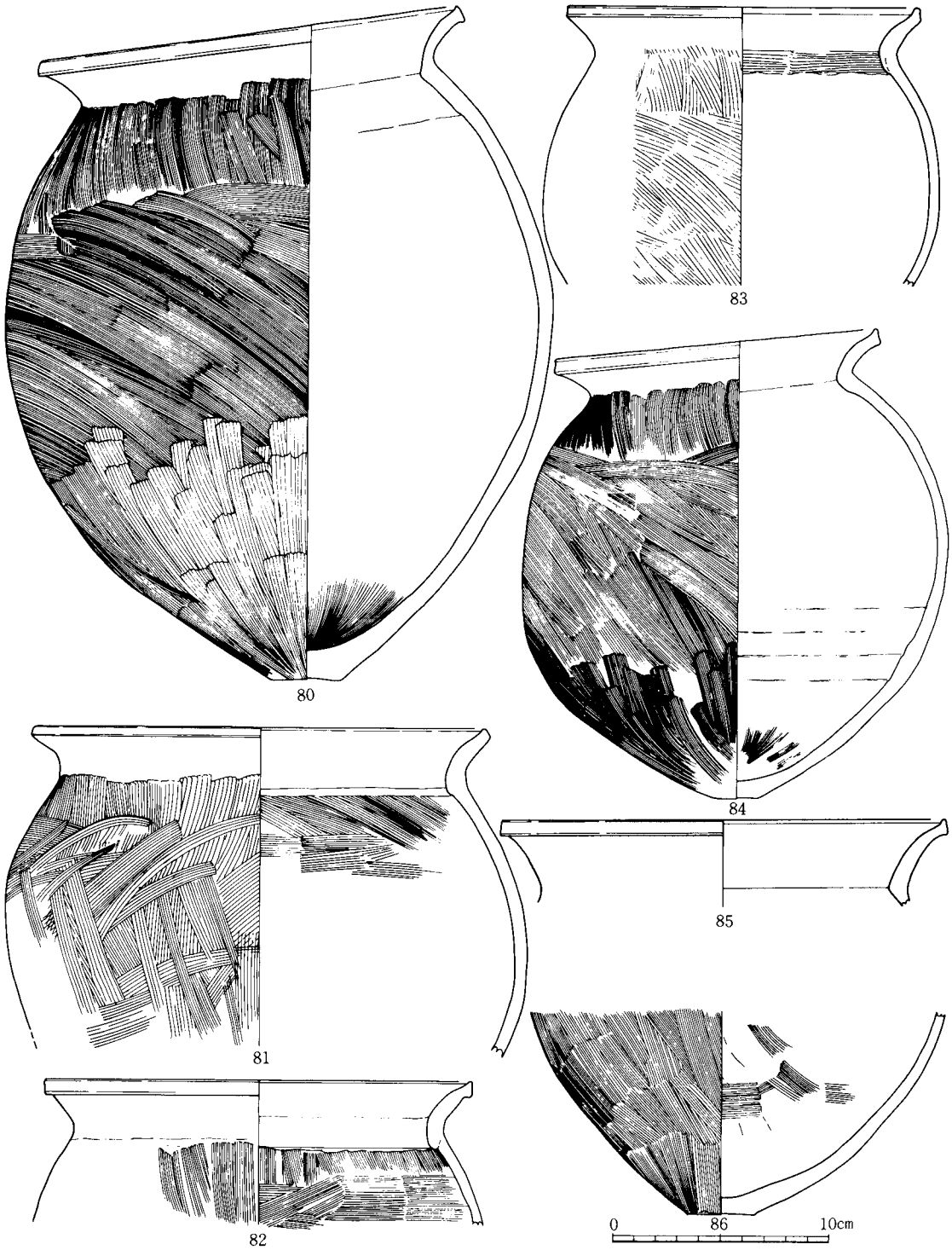
第60図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(6)



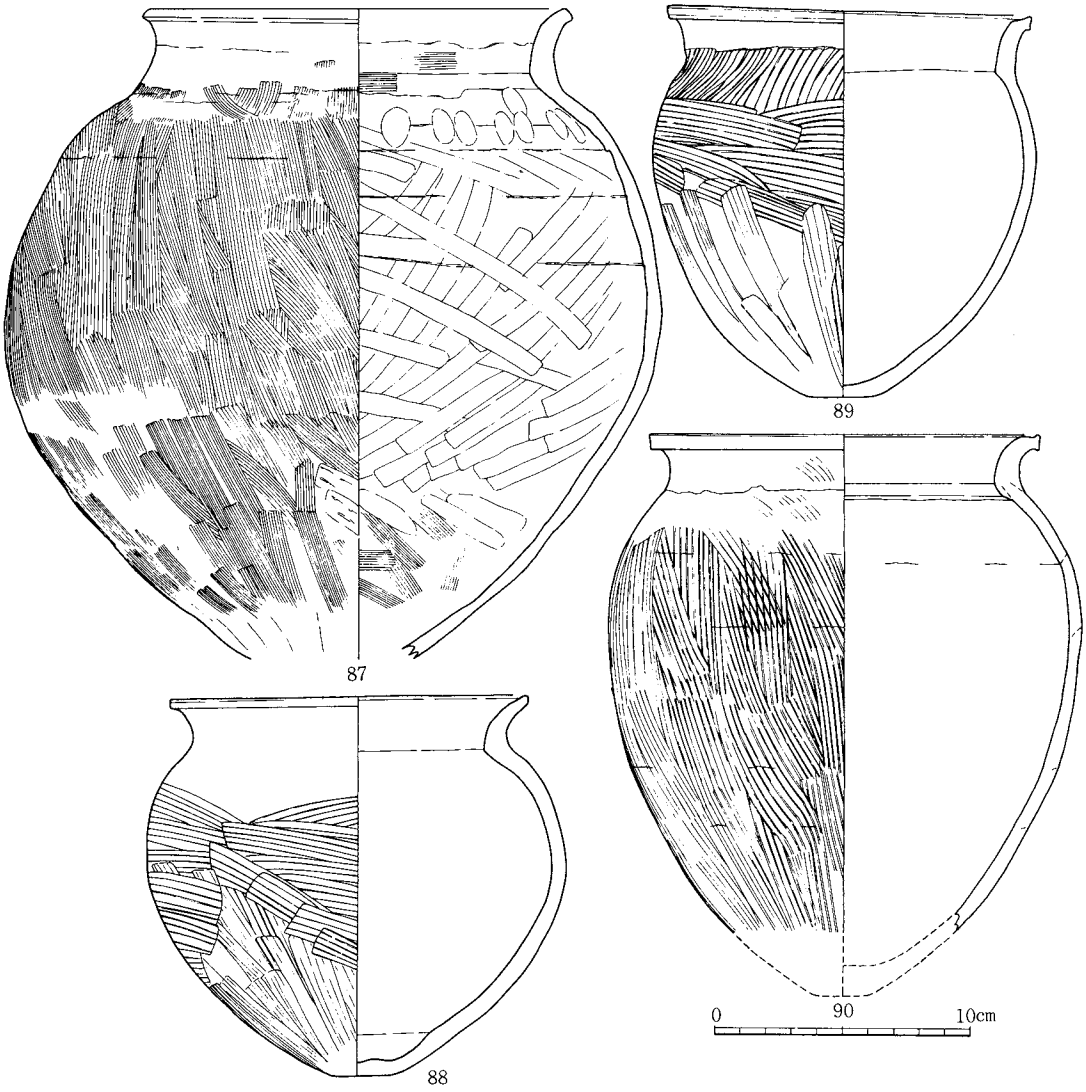
第61図　徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構出土土器(7)



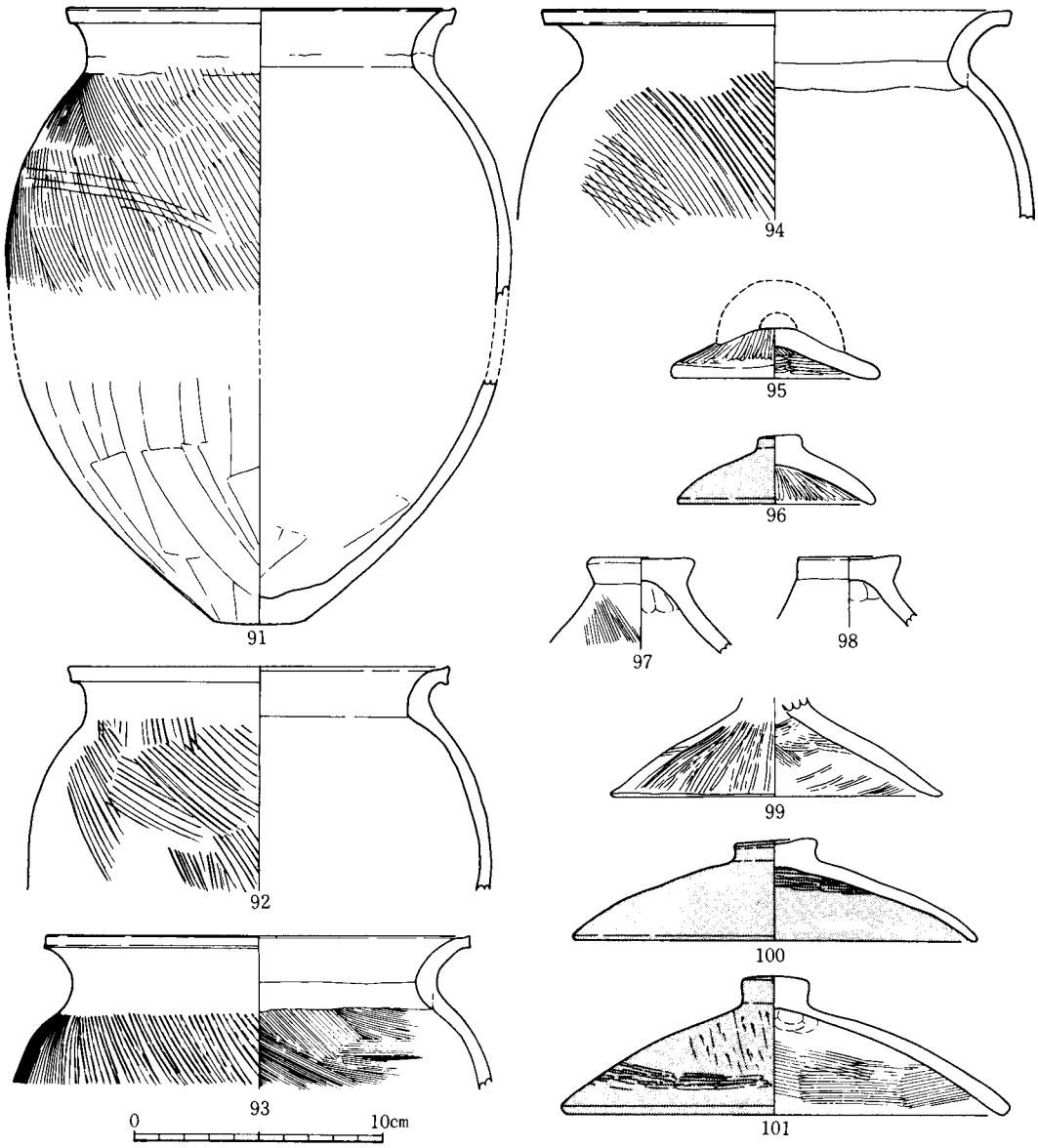
第62図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(8)



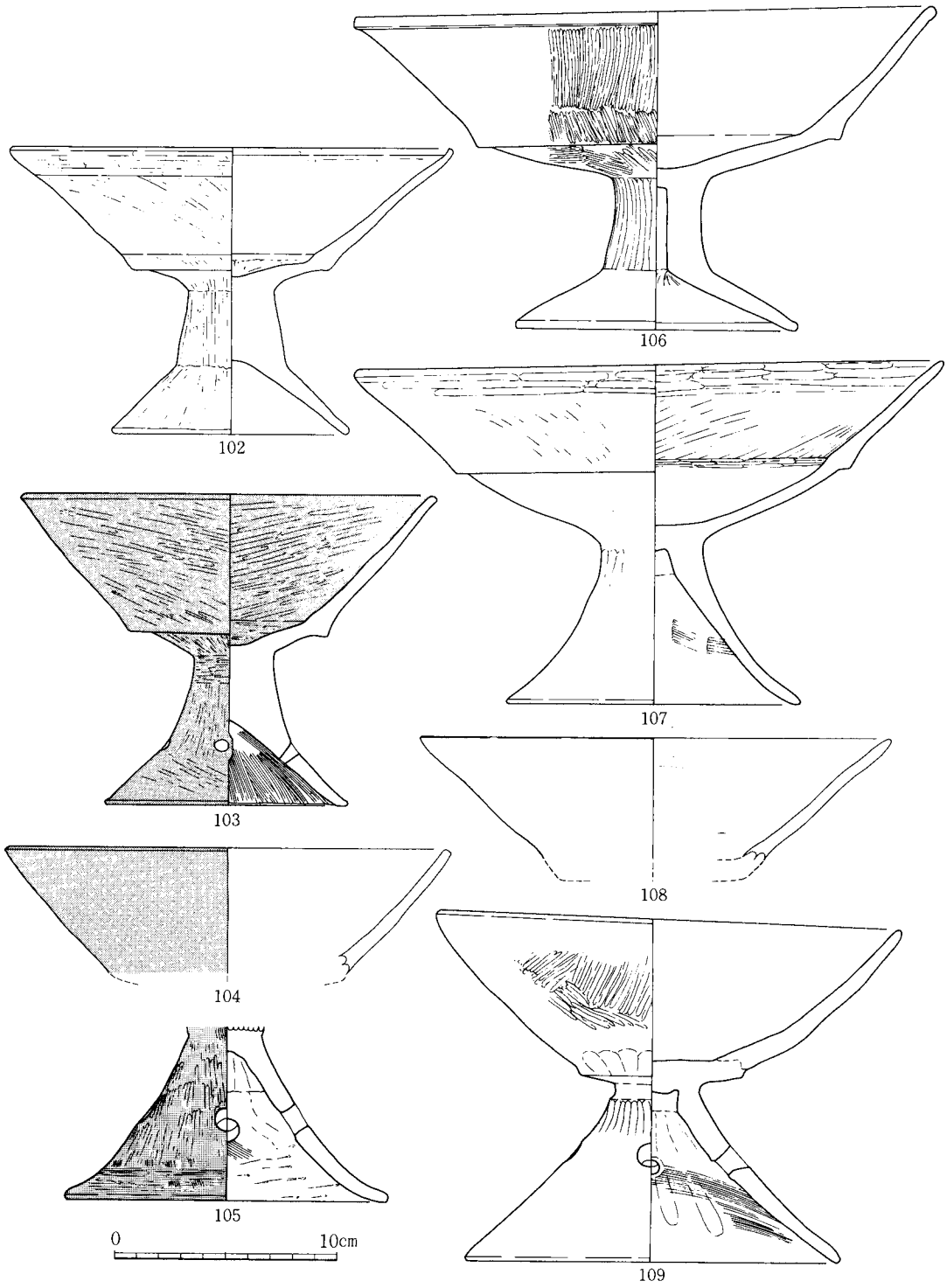
第63図　徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構出土土器(9)



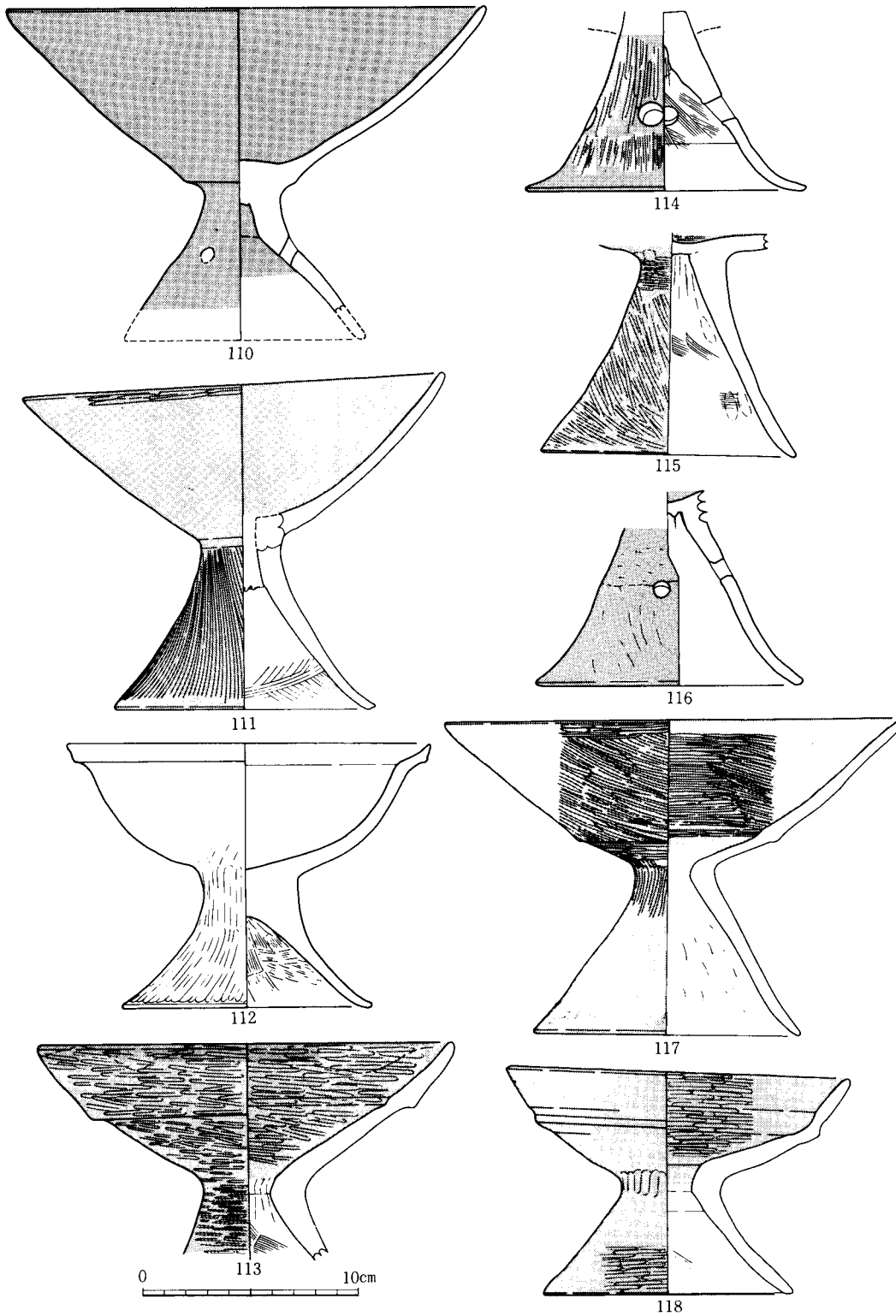
第64図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(10)



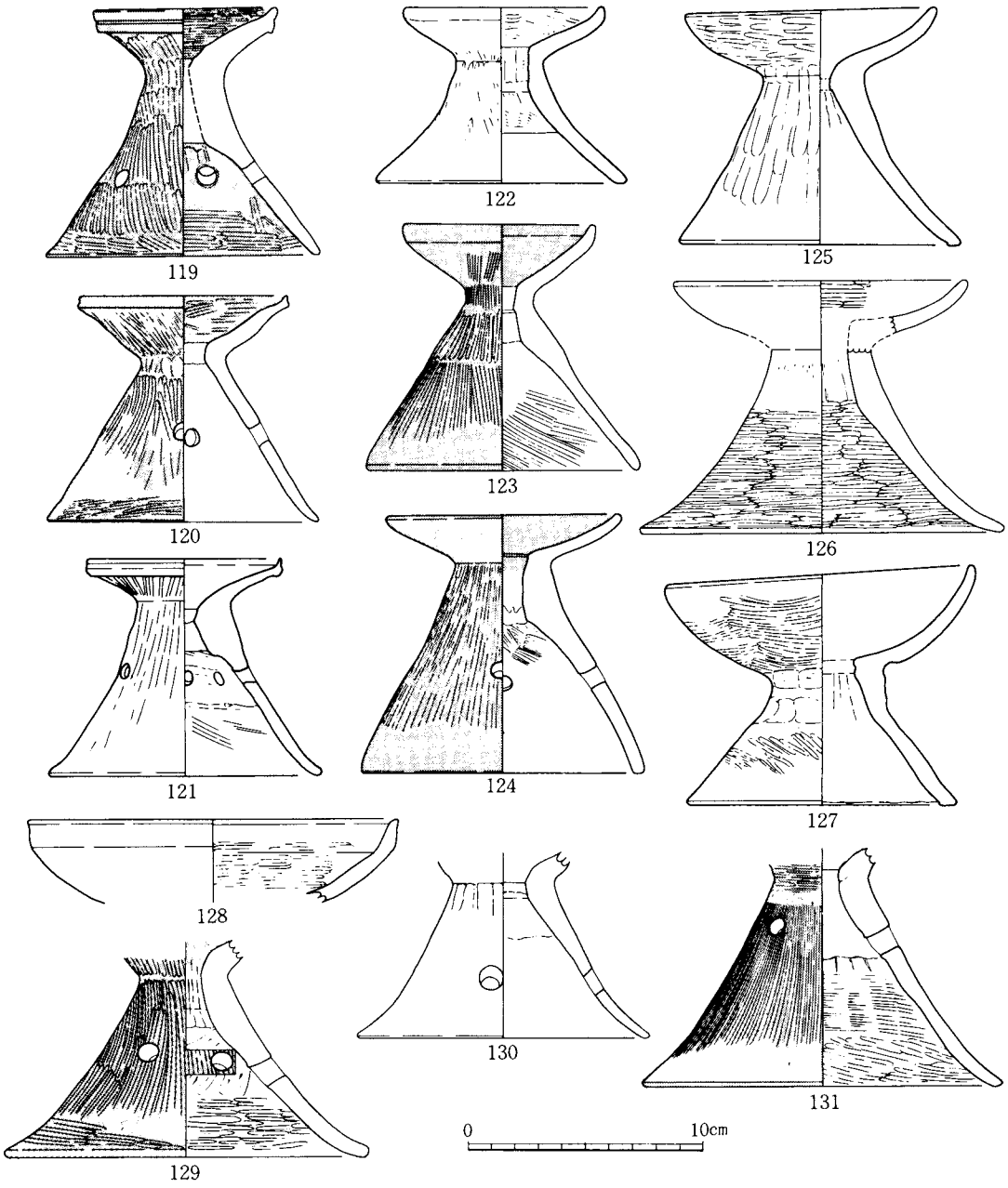
第65図　徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構出土土器(11)



第66図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(12)



第67図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(13)



第68図　徳前Ｃ遺跡第２次74～76ライン溝状遺構出土土器(14)

土器観察表　　1

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第42図1	壺 A_1	3次A区包含層	口径 9.0	並・不良	淡茶褐色	口縁端部面取り	外面ヘラミガキ，内面ハケ後ナデ	
2	〃	2次 115－ワ包含層	口径16.2 胴部径18.0 底部径 4.8 器高28.5	並・良	淡黄褐色	口縁端部面取り，頸部くびれ弱い	外面と口縁部内面ハケ，体部内面ヘラケズリ	口頸部に山形ヘラ描き文
3	壺 A_4	3次A区包含層	口径16.0	並・並	淡黄橙色	直立し，口縁端部開く	外面ハケ，内面ナデ	
4	壺 A_3	2次包含層	頸部径 8.8	良・並	淡黄灰色	くびれ明瞭	口縁端部ヨコナデ，頸部～肩外面，頸部内面ハケ，体部内面ナデ	
5	壺 A_2	2次 115－オ包含層	口径10.0	並・並	淡灰褐色	頸部短い(5cm)	外面ヘラミガキ，内面ナデ(指頭痕残)	
6	〃	2次 114－ワ包含層	口径12.9 胴部径17.7 底部径 6.4 器高26.3	不良・並	茶褐色	口縁端部わずかに広がる，頸部くびれ不明瞭	口縁部ヨコナデ，体部外面，頸部内面荒いハケ	胴下半煤付着
7	壺 A_3	2次 118－リ包含層	口径13.3	良・並	明黄灰色	有段口縁	口縁部強いヨコナデ，頸部外面ハケ，頸部内面ケズリ	
8	〃	2次 121－ル包含層	口径16.9	並・並	明灰黄色	口縁部に粘土紐を付加し，有段状とする，沈線1条	口縁部ヨコナデ	
9	〃	2次 73－ト包含層	口径17.8	並・やや不良	淡灰褐色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，頸部内外面ハケ	
第43図10	壺 A_5	2次 115－オ包含層	口径17.4 胴部径25.2 底部径 5.4 器高32.7	並・並	淡黄灰色	口縁端部面取り，頸部径14.2cmと太い	口縁部ヨコナデ，外面ハケ(細)，胴部下半はハケ後ナデ，内面ハケ内面粘土紐積み上げ痕	外面胴部全面に煤付着
11	壺 C	3次 A拡区包含層	口径18.7	並・並	淡橙黄色	口縁部外反し，幅広の口縁帯をもつ，3条の擬凹線，器台の可能性あり	摩耗のため調整不明，内面の一部にハケ残存	口縁帯赤彩 円形浮文1個残存
12	〃	2次 120－オ包含層	口径27.2	良・やや不良	明灰橙色	口縁外反，口縁部に3条の沈線	外面ナデ，内面ミガキ	円形浮文1個残存
13	〃	3次　包含層	口径29.1	不良・不良	明黄灰色	口縁端部肥厚，3条の擬凹線	摩耗のため調整不明	
14	壺 F_5	3次A区包含層	口径11.4	良・並	明灰黄色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，頸部以下ハケの後ナデ	
15	甕 E_3	3次A区包含層	口径13.8	やや・不良	淡橙黄色	受口状口縁，口縁帯に弱い沈線	内外面ナデ，頸部接合痕を残す	口縁部に煤付着
16	器台A	2次 123－ワ包含層	口径17.2	良・並	淡茶褐色	有段状口縁	内外面ヨコナデ	
17	壺 G	2次 120－ワ包含層	口径 8.9 胴部径15.6 底部径 3.5 器高18.6	良・やや不良	淡褐色	口縁部直口，体部ソロバン玉形，頸部に隆帯あり，口縁部に2条，体部最大部位に7条の沈線，頸部隆帯に刻み	外面と頸部内面ミガキ	口縁部，頸部，体部最大径部位に赤彩
18	壺底部	2次 121－ワ包含層	底部径 5.2	良・並	橙灰色		内外面ともハケ，底部ナデ	底面に木の葉圧痕
19	〃	〃	底部径 8.8	並・並	淡橙褐色	台付壺底部	台部ヨコナデ	
20	〃	2次 121－オ包含層	底部径 9.0	並・並	淡褐色	台付壺底部	台部ヨコナデ	
21	〃	〃	底部径 6.0	並・並	灰褐色			
第44図22	壺 E	3次 A拡区包含層	口径16.2	やや不良・並	淡黄灰色	受口状口縁	口縁部ヨコナデ	口縁帯に斜行刺突文
23	壺 D_2	3次A区包含層	口径11.8	並・並	淡灰色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，頸部以下ハケ	
24	壺 D_1	3次　包含層	口径15.2	不良・並	明灰褐色	くの字口縁，端部強い面取り	口縁部ヨコナデ，内外面とも頸部以下ハケ	外面に煤付着

土器観察表　　2

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第44図25	壺 D_1	2次 122－ル包含層	口　径16.2	並・並	淡灰褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部強いヨコナデ，外面頸部以下ハケ	
26	壺 F_2	2次 120－ル包含層	口　径19.5	並・並	灰橙色	有段口縁，端部面取り，段部外面隆帯に刻目文	内外面ともナデ	
27	〃	2次 114－オ包含層	口　径16.4	並・並	明橙褐色	有段口縁，段内側直線的	内外面ともナデ	
28	壺 F_1	2次 115－ル包含層	口　径15.3 胴部径24.2	並・並	黄橙灰色	有段口縁，段明瞭，口縁部やや外反，体部最大径中位，肩が張る	口縁部ヨコナデ，体部外面やや荒いハケ，体部内面ナデ	外面に煤付着
29	壺	2次 122－ワ包含層	胴部径28.5 底部径 6.4	並・並	黄灰色	口縁部欠失，体部最大径中位	頸部付近荒いハケ，体部外面と内面は部分的にハケ，他はナデ	
30	壺 D_3	2次 122－ワ包含層	口　径15.4	並・不良	淡橙灰色	くの字口縁，口縁帯をもつ	全面を荒いハケ	口縁帯に浮文3個
第45図31	壺	2次 121－オ包含層	口　径14.3	並・並	淡黄灰色	有段口縁，段は弱く端部丸い	口縁部ヨコナデ	
32	壺 I	3次A区包含層	口　径 9.9	良・やや不良	淡灰橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ミガキ	口縁部内外面赤彩
33	〃	〃	口径(推定) 13.5	並・不良	淡灰黄色	有段口縁，端部両取りの後ナデ		〃
34	壺 J	3次 A拡区包含層	口　径11.2 底　径 3.2 器　高 9.7	並・不良	淡灰褐色	有段口縁，口縁端部を上下につまみ出す，底部明瞭	口縁部ヨコナデ，外面ミガキ内面ナデ，体部上面粘土紐積み上げ痕	外面と口縁部内面赤彩
35	台付壺底部	2次 121－ワ包含層	底　径 9.5	良・並	淡灰黄色	中実の脚から開く，円孔は3個	ナデ	外面赤彩
36	〃	3次　包含層	底　径 7.3	良・並	明茶色	中実の脚から開く	円筒部はヘラによるナデ，端部ヨコナデ	
37	台付鉢底部	3次A区包含層	底　径 8.4	並・並	淡灰黄色	底部直下から開脚	外面と底内面ミガキ	外面と底内面赤彩
38	壺 H_3	2次 61－ヌ包含層	口　径 9.5	並・並	橙灰色	口縁部やや内彎，頸部に弱い凹み	内外面軽いミガキ	
39	壺底部	2次 115－オ包含層	底　径 0.8	並・不良	淡黄灰褐色		外面ヘラケズリの後ナデ	外面煤付着
40	〃	2次 121－ワ包含層	底　径 3.6	並・並	淡黄灰色	底面凹む，体部球状の壺底部	外面軽いケズリ，内面に炭化物付着	
41	〃	2次 121－オ包含層	底　径 2.0	並・やや不良	淡黄橙色	底面凹む，体部球状の壺底部	内外面ナデ	
42	壺 M	2次 114－ワ包含層	口　径 4.6 胴部径11.6 器　高 8.3	良・不良	淡黄灰色	短い口縁部が立ち上がる，体部は球状，口縁部に4孔1対の紐通し穿孔	外面ミガキ，内面ナデ	外面に赤彩痕を残す，元は全面か
43	鉢 A_1	2次 116－オ包含層	口　径19.0 底　径 1.8 器　高10.1	並・並	淡黄橙色	有段口縁，口縁帯9条の擬凹線口縁端部面取り	口縁部内外面ヨコナデ，体部外面ミガキ	外面煤付着
44	〃	2次 114－ワ包含層	口　径22.5 底　径 4.4 器　高 8.8	並・並	淡黄褐色	有段口縁，歪み激しい	口縁部外面ヨコナデ，口縁部内面・体部外面ミガキ，体部内面ナデ	
45	〃	3次A区包含層	口　径18.9	良・並	淡黄灰色	有段口縁，口縁端部水平面取り	内外面全面ミガキ	
46	〃	〃	口　径14.2	やや不良・やや不良	明灰黄色	有段口縁，口縁端部水平面取り	内外面全面ミガキ	内外面全面赤彩
47	鉢 B	〃	口　径13.4		淡橙色	くの字口縁，口縁部丸味もつ	外面・口縁部内面ミガキ，体部内面ナデ	外面と口縁部内面赤彩
48	蓋 A_1	2次 114－オ包含層	口　径 6.4 器　高 2.4	良・並	淡黄灰色	半球形の小形蓋，頂部に焼成後穿孔2	外面ナデ，ミガキ，内面荒いハケ	外面赤彩
49	蓋 A_2	2次 112－ワ包含層	つまみ径3.5	並・並	淡褐色		つまみ部分押さえとナデ	

土器観察表　　3

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第45図50	小形土器	2次 115－オ包含層	口径 5.1 底径 3.5 器高 4.3	並・並	淡灰褐色	底部の大きな盃状の小型土器	内外面指頭による押さえ	全面に漆状の皮膜残存
51	壺断片	3次A拡区包含層		並・並	明灰褐色		4条単位の櫛描文	
52	〃	〃		並・並	淡褐色		5条単位の櫛描文	
53	壺断片	3次 A拡区包含層		並・並	淡黄灰色		5条単位の櫛描文	
54	鉢 C_1	2次 115－オ包含層	口径12.6	良・並	淡黄褐色	椀形の小型鉢	口縁部ヨコナデ，外面ミガキ，内面ナデ	内外面全面赤彩
第46図55	甕 A_1	2次 123－ワ包含層	口径(推定) 33.6	不良・並	淡黄橙色	有段口縁	口縁帯を強くナデ，口縁部ヨコナデ	
56	〃	〃	口径21.6	並・並	淡黄褐色	有段口縁，口縁帯に4条の擬凹線	口縁部ヨコナデ	外面煤付着
57	〃	〃	口径16.1	良・並	褐灰色	有段口縁，口縁帯に2条の擬凹線	口縁部ヨコナデ	
58	〃	3次 A拡区包含層	口径12.0	並・不良	淡黄灰色	有段口縁，口縁帯に3条の擬凹線	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ケズリ，頸部接合痕残	外面煤付着
59	甕 A_2	3次A区包含層	口径17.0	並・並	淡橙灰色	有段口縁，口縁帯に4～5条の擬凹線	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，肩部に斜行刺突文，内面ケズリ	外面煤付着
60	甕 B_3	2次 121－ワ包含層	口径14.6	並・並	淡黄灰色	有段口縁，口縁帯に5条の擬凹線	口縁部ヨコナデ	
61	甕 B_5	2次 114－ワ包含層	口径13.3	並・並	黄褐色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，内面ナデ	
62	甕 B_1	3次A区包含層	口径18.8	並・並	淡橙灰色	有段口縁	口縁部強いヨコナデ，内面ケズリ	外面煤付着
63	〃	2次 115－ワ包含層	口径14.6	良・並	淡灰黄色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，有段部内面ハケ，外面ハケ，頸部接合痕残	
64	〃	3次　　包含層	口径16.9 胴部径19.4	やや不良・並	淡黄橙色	有段口縁，口縁帯下端稜をもつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ肩部に斜行刺突文	外面煤付着
65	甕 B_5	2次 115－オ包含層	口径18.5 胴部径19.1	並・並	明灰橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，内面ナデ，但し体部調整は摩耗	外面煤付着
66	甕 B_{13}	2次 121－ワ包含層	口径11.7	並・並	淡灰褐色	有段口縁，口縁端部水平面取り	口縁部ヨコナデ，内外面ナデ，肩部沈線文？	
67	甕 B_1	2次 121－オ包含層	口径18.9	やや不良・並	淡黄橙色	有段口縁，口縁帯下端稜をもつ	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，内面ナデ	
第47図68	甕 D_2	3次 A拡区包含層	口径15.0	やや不良・並	淡橙褐色	受口状口縁，口縁端部水平面取り口縁帯に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，内面ナデ	
69	〃	3次　　包含層	口径19.0	並・並	淡灰褐色	受口状口縁，口縁端部水平面取り口縁帯に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ	
70	甕 D_3	3次A区包含層	口径17.5	不良・並	淡橙黄色	受口状口縁，口縁帯に斜行刺突文	口縁部ヨコナデ，頸部接合痕残	
71	〃	〃	口径16.6	やや不良・並	淡橙黄色	受口状口縁，口縁帯に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，頸部4条櫛描文斜行刺突文体部外面ハケ	
72	〃	〃	口径19.8	やや不良・並	淡黄橙色	受口状口縁，口縁帯下端押圧文	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	
73	甕 E_3	2次 115－オ包含層	口径20.4 胴部径18.5 底径 3.8 器高21.5	並・並	淡茶褐色	有段口縁，口縁帯下端稜をもつ	口縁部ヨコナデ，体部外面・体部内面下半ハケ，体部内面上半ナデ底部外面ケズリ	外面煤付着

土器観察表　　4

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第47図74	甕 E_1	3次A拡区	口 径13.8	並・並	明灰橙色	くの字口縁，口縁端部肥厚し，斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，肩部斜行刺突文，体部内外面ハケ	
75	〃	2次 124－ワ包含層	口 径14.3	良・並	淡灰橙色	有段口縁，口縁帯下端斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ケズリ	
76	〃	3次A区包含層	口 径15.9	並・並	淡灰橙色	くの字口縁，口縁部を外に広げ口縁帯とする，口縁帯に沈線文	口縁部ヨコナデ，頸部接合痕残	
77	〃	〃	口 径15.9	並・並	淡黄灰褐色	くの字口縁，口縁部を外に広げ口縁帯とする	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	外面煤付着
78	甕 E_3	〃	口 径13.7	並・並	明灰橙色	付加状口縁	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	
79	〃	3次 A拡区包含層	口 径16.8	並・並	淡 橙 色	付加状口縁	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	
80	〃	2次 114－リ包含層	口 径14.1 胴 径13.9	良・並	明茶褐色	付加状口縁	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	
第48図81	甕 E_2	3次A区包含層	口 径15.4 胴 径16.1	やや不良・やや不良		口縁部粘土紐貼り付けによる拡張，頸部外面指頭押圧	口縁部ヨコナデ，体部内面軽いケズリ	
82	甕 F_1	2次 115－オ包含層	口 径15.4	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，口縁端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	
83	壺 B	2次 123－ル包含層	口 径15.5 胴部径22.0 底 径 6.8 器 高29.7	やや不良・不良	淡黄橙灰色	内彎するくの字口縁，体部長胴，底部大きい	口縁部ヨコナデ，体部内外面荒く粗雑なハケ，底部外面ナデ，分割成形痕を残す	外面煤付着
84	甕 F_2	2次 123－ワ包含層	口 径15.8	並・並	淡橙褐色	くの字口縁，口縁端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部ハケ，頸部接合痕残	
85	甕 F_1	3次 A拡区包含層	口 径19.1 胴部径21.5	不良・並	淡橙黄色	くの字口縁，口縁端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，頸部接合痕残	外面煤付着
86	甕 F_{10}	2次 121－オ包含層	口 径13.0 胴部径13.6	不良・やや不良	淡橙灰褐色	くの字口縁，口縁端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ後ナデ，内面ナデ	
87	甕 F_8	3次 A拡区包含層	口 径15.8	並・不良	淡赤橙色	くの字口縁，口縁端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内面ハケ	
88	甕 H_2	2次 115－ワ包含層	口 径16.8 胴部径20.6	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，口縁端部肥厚，水平面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	外面煤付着
89	甕	3次 A拡区包含層	口 径13.2	不良・不良	淡黄橙色	くの字口縁，口縁端部丸味もつ，体部球形	摩耗のため調整不明	〃
第49図90	高杯 A_1 (台付鉢)	3次A区包含層	口 径21.2	良・並	淡灰褐色	有段口縁，口縁帯に擬凹線2条，屈接部外面斜行刺突文	口縁部ヨコナデ，内外面ミガキ	外面と口縁部内面赤彩
91	高杯 A_2	2次 122－オ包含層	口 径27.0	良・並	淡黄灰色	口縁端部肥厚，口縁帯に擬凹線2条	口縁部ヨコナデ	口縁部外面赤彩
92	〃	2次 114－ワ包含層	口径(推定) 30.2	良・並	淡圧褐色	口縁部内屈，口縁部に抉り	口縁部ヨコナデ	口縁部内外面赤彩
93	高杯 A_3	3次A区包含層	口 径20.2	良・並	橙灰褐色	杯部下端稜をもつ	口縁部ヨコナデ，内外面ミガキ	
94	〃	3次 A拡区包含層	口 径23.1	良・並	淡茶褐色	口縁端部肥厚	口縁部ヨコナデ，杯部内外面ミガキ	杯部内面帯状に部分赤彩
95	〃	3次 A拡区包含層	口 径23.1	並・並	淡灰褐色	口縁端部水平面取り	口縁部ヨコナデ，内外面ミガキ	杯部内面部分赤彩
96	〃	2次 127－ワ包含層	口 径27.8	並・並	淡橙灰色	口縁端部肥厚，擬凹線4条	口縁部ヨコナデ	杯部内外面赤彩
97	〃	3次A区包含層	口 径24.9	不良・並	淡橙黄色	口縁端部肥厚	内面ミガキ，他は摩耗のため不明	

土器観察表　　5

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第49図98	高杯A₃	3次 A拡区包含層	口径30.2	並・並	淡褐黄色	口縁端部肥厚，外側面取り	口縁部ヨコナデ，内外面ナデ	
99	〃	2次 116－オ包含層	口径29.1	やや不良・並	淡黄褐色	口縁部面取り，円筒脚	口縁部ヨコナデ，杯部外面・脚筒部ミガキ，杯部内面ハケ	杯部内面赤彩
100	高杯脚部	3次 A拡区包含層	脚部径18.8	並・並	淡橙褐色	透穴4	外面ミガキ，内面ハケとナデ	
101	〃	3次A区包含層		良・並	黄橙灰色	脚上位擬凹線4条	外面ハケの後ミガキ，内面ナデ	
102	〃	2次 115－オ包含層		良・良	明淡橙色	透穴1あるが元の数は不明	外面ミガキ	外面赤彩
103	〃	3次A区包含層		並・並	淡橙黄色		内外面ナデ	
第50図104	脚部	〃		並・並	淡灰橙色	有段脚，有段部にスタンプ文	外面ミガキ	
105	〃	〃		並・並	淡黄橙色	縁帯部にスタンプ文		
106	高杯杯部	2次 122－オ包含層		良・良	灰褐色	杯部外面の稜に綾杉状押圧文	内外面ミガキ	
107	脚部	2次 123－ワ包含層		良・良	灰黄褐色	縁帯部外面に綾杉状押圧文	内外面ミガキ	内面赤彩
108	〃	3次 A拡区包含層	脚部径21.8	並・並	黄橙色	有段脚，端部に3条の擬凹線	外面ミガキ	
109	〃	3次A区包含層	脚部径13.3	不良・不良	淡黄灰色	端部肥厚，透穴1以上	端部ヨコナデ	
110	〃	〃	脚部径14.1	良・やや不良	淡橙灰色	端部肥厚，透穴4	端部ヨコナデ，外面ミガキ，内面ナデ	
111	〃	3次B区包含層	脚部径18.5	良・やや不良	淡黄灰色	端部突出，縁帯部に擬凹線4条	摩耗のため調整不明	
112	〃	2次 120－ワ包含層	脚部径13.0	良・良	淡黄灰色	有段状脚	端部ヨコナデ，体部内外面ミガキ	
113	高杯F	3次　包含層	口径19.6	良・良	淡灰黄色	口縁外反，杯底部凹む，外面凹線3条	ハケ調整後ミガキ	内外全面赤彩
114	高杯E	3次 A拡区包含層	口径13.6	良・並	淡黄橙色	有段口縁，端部丸味もつ	端部ヨコナデ，体部ミガキ	〃
115	器台C₃	3次A区包含層	口径10.3	良・並		皿状の器受部	口縁端部ヨコナデ，器受部内外面ハケの後ミガキ，脚部ハケ	器受部内外面と体部外面赤彩
116	器台H	2次 115－ワ包含層		不良・並	黄灰色	透穴2残存，元は10程度あり	内外面ミガキ	内外全面赤彩
117	器台脚部	3次A区包含層		並・並	淡灰黄色		外面ハケの後ナデ	外面赤彩
118	高杯C₂	2次 122－オ包含層	脚部径14.2	並・並	明黄橙色	裾部でラッパ状に開脚	外面ミガキ，内面ハケ	〃
119	器台脚部	2次 115－ワ包含層	脚部径15.1	並・並	淡黄褐色	直線的に開脚，透穴5	外面ハケ後ミガキ，内面ハケ，ナデ	〃
第51図1	壺N	2次 82－チ青灰砂	頸部径5.9	並・並	淡灰褐色	小形丸底壺，口縁部欠失	外面ナデ，内面ケズリ	
2	甕B₃	2次 97－リ包含層	口径11.6	並・並	淡橙灰色	有段口縁，口縁帯擬凹線の痕跡	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	
3	甕C	2次　包含層	口径13.5	並・並	淡橙灰色	有段口縁，口縁帯に擬凹線2条	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	
4	甕F₂	2次　包含層	口径15.4	並・並		くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	
5	壺底部	2次73－チ	底径5.6	並・並	淡灰黄色		外面押圧，内面ハケ	
6	土錘	2次Cトレンチ	径3.6×3.4	並・良	淡茶褐色	球形，径4㎜の穿孔，40.3g		

土器観察表　　6

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第51図7	甕 D_4	2次88－オ		不良・並	淡灰褐色		外面ハケ，内面ナデ	外面煤付着
8	甕 H_1	2次72－リ	口　径17.4 胴部径21.9	不良・並	淡黄褐灰色	くの字口縁，体部長円形，底部は球状をなすが平底を意識	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，体部外面下半ケズリ，内面粘土積上げ痕	〃
9	脚筒部	2次87－オ	径　3.8	良・並	淡茶灰色	円筒状脚	外面ハケの後ミガキ，内面ナデ	
10	〃	2次88－オ	径　4.8	良・並	淡黄褐色	〃	外面ミガキ	
第52図1	壺 A_3	2次60－ヌ溝	口　径14.8	良・並	淡灰褐色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，外面ミガキ，内面ナデ	
2	壺 A_5	2次 58－ヌ包含層	口　径20.0	並・並	淡橙灰褐色	口縁部外反，口縁帯に擬凹線1条	口縁部ヨコナデ，外面ミガキ，内面ナデ	外面煤付着
3	壺 I	2次61－ヌ溝	口　径 9.4	不良・並	淡橙色	有段口縁	外面ミガキ，内面ハケ後ナデ	
4	壺 F_2	2次66－チ	口　径12.6	並・並	黄橙色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，体部ハケの後ナデ	
5	底部	2次61－チ	底　径 4.9	不良・並	淡橙色	底面凹む	外面ハケの後ナデ	
6	〃	2次61－ヌ	底　径 3.7	不良・不良	淡赤褐色	底面中央凹む	外面ケズリ，内面ナデ	外面煤付着
7	壺底部	2次60－ヌ	底　径 6.8	並・やや不良	明黄橙色	底面凹む	内外面ナデ	
8	〃	2次61－チ	底　径 5.5	良・並	淡灰褐色	底面中央凹む	外面ミガキ，内面ハケ	外面赤彩
9	台付壺底部	2次60－ヌ	脚部径 7.4	良・並	暗灰褐色		内外面ナデ	
10	底部	2次66－ヌ	底　径 4.6	良・並	明褐灰色	底面わずかに凹む	外面ハケ後ナデ，内面ハケ	
11	〃	2次60－ヌ	底　径 7.6	不良・並	明灰黄色		外面ナデ，内面ハケ	
12	甕 A_1	2次60－ヌ	口　径12.0	並・並	淡橙黄色	有段口縁，口縁帯に擬凹線3条	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ，ナデ	口縁部に煤付着
13	甕 A_2	2次62－ヌ	口　径15.8	並・並	灰茶褐色	有段口縁，口縁帯に擬凹線3条，体部肩に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	外面煤付着
14	甕 A_1	2次60－ヌ	口　径20.2	不良・並	淡黄橙色	有段口縁，口縁帯に3～4条の擬凹線，体部肩に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，体部内面ナデ	
15	〃	2次67－ヌ	口　径20.6	良・並	淡赤橙色	有段口縁，口縁帯に3条の擬凹線，体部肩に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	
16	甕 B_4	2次60－ヌ	口　径18.8	不良・並	淡黄灰色	有段口縁，口縁帯内外面強いナデ	内面ケズリ	
17	〃	2次65－チ	口　径18.6	並・並	淡黄橙色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，内面ハケ	外面煤付着
18	甕 B_{13}	2次62－ヌ	口　径12.0	やや不良・並	淡灰褐色	有段口縁，内面段部直線的	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ後ナデ，内面ナデ	
19	〃	2次60－ヌ	口　径11.2 胴部径10.7	やや不良・並	淡橙灰色	有段口縁，内面段部直線的	口縁部外面ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	外面煤付着
第53図20	甕 B_{10}	2次60－ヌ	口　径14.8 胴部径15.7	並・並	淡灰褐色	有段口縁，段部弱く直線的	口縁部・体部とも外面はハケ後ナデ，内面ナデ	
21	甕 B_2	2次64－ヌ	口　径15.8	やや不良・並	淡橙色	有段口縁，口縁端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，頸部接合痕残	外面煤付着
22	〃	2次64－ヌ	口　径18.4 胴部径22.0	並・並	淡黄橙灰色	有段口縁，口縁端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケの後ナデ，内面ハケ，頸部接合痕残	

土器観察表　　7

図版号	器種	出土地点取り上げ番号	法量(cm)	胎土焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第53図23	甕 B2	2次59－ヌ	口径21.8	並・並	明黄灰色	有段口縁，口縁端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ケズリ	
24	甕 B7	2次65－チ	口径16.2	やや不良・並	淡橙灰色	有段口縁，口縁帯外傾	口縁部ヨコナデ，体部外面ナデ，内面ハケ，頸部接合痕残	外面煤付着
25	〃	2次60－ヌ	口径17.8	やや不良・並	淡橙灰色	有段口縁，口縁帯外傾	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	
26	甕 F4	2次66－チ	口径19.6	並・並	淡灰橙色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	外面煤付着
27	甕 B7	2次61－ヌ	口径18.6	やや不良・並	淡灰褐色	有段口縁，口縁部丸味もつ，頸部内面ヘラ押圧	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	〃
28	甕 D3	2次64－ヌ	口径19.0	並・並	明灰褐色	受口状口縁，口縁帯に斜行押圧文	口縁部ヨコナデ	
29	〃	2次58－ヌ	口径21.6	並・並	淡橙灰色	受口状口縁，端部水平面取り，口縁帯に刺突文	口縁部ヨコナデ	
30	甕 D1	2次61－ヌ	口径12.8	やや不良・並	暗灰橙色	受口状口縁	口縁部ヨコナデ，内面ハケの後ナデ，頸部接合痕残	
31	甕 F5	2次61－ヌ	口径17.0	並・並	淡褐橙色	くの字口縁，端部つまみ出し面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	外面煤付着
32	〃	2次61－ヌ	口径19.6	並・並	淡黄橙色	くの字口縁，端部つまみ出し面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	〃
33	甕 F8	2次63－ヌ	口径16.0	並・並	淡橙褐色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面荒いハケ，内面ナデ	〃
34	甕 F9	2次59－ヌ	口径20.8	並・並	淡褐灰色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	
第54図35	甕 I2	2次61－ヌ	胴部径14.2 穿孔径 1.6	並・並	淡黄橙色	丸底，底部焼成前穿孔	体部外面ハケ，内面ナデ	
36	甕 I1	2次60－ヌ	胴部径16.6以上 穿孔径 0.8	良・並	明灰橙色	体部砲弾形，底部焼成前穿孔	体部内外面ナデ，押圧	
37	鉢 C2	2次59－ヌ	口径12.8 底径 4.6 器高 8.3	並・並	明灰橙色	小形鉢	体部上半ナデ，下半ハケ，内面押圧の痕跡，積み上げ痕残す	
38	高杯C2	2次66－チ	口径17.4 脚部径10.6 器高15.1	並・並	淡茶褐色	有段口縁，杯部は深い，径5㎜の透穴4	杯部内外面と脚部外面ミガキ，脚部内面ナデ	杯部内外面と脚部外面赤彩
39	脚部	2次67－チ	脚部径16.2	良・並	淡黄灰褐色	径9㎜の透穴3	外面ミガキ，内面ケズリとナデ	外面赤彩
40	高杯脚部	2次63－ヌ	脚部径10.4	良・並	淡橙色	径7㎜の透穴2孔1対(計4)	外面ミガキ，内面ナデ	内外面赤彩
41	〃	2次67－オ	脚部径13.2	良・並	淡橙灰色		外面ミガキ，内面ナデ	
42	器台C	2次66－ヌ	口径 7.8	やや不良・並	淡橙褐色	有段口縁	口縁部と脚部外面ミガキ，脚部内面ハケ	口縁部と脚部外面赤彩
43	器台	2次66－チ	口径12.4	不良・並	淡灰褐色	口縁部やや外反	口縁部ヨコナデ	
44	器台F	2次59－ヌ		良・並	淡灰褐色	有段脚	外面と開脚部内面ミガキ	外面と器受部内面赤彩
45	蓋 C2	2次62－ヌ	口径 4.6 つまみ径 2.0 器高 4.5	並・並	淡灰茶褐色	反りをもつ笠形蓋	外面ミガキの後ナデ，内面ナデ	外面赤彩
46	蓋 C1	2次63－ヌ	口径 7.6 つまみ径 2.2 器高 3.3	やや不良・並	淡灰褐色	笠形蓋	内外面ナデ	内外面赤彩

土器観察表　　8

図版号	器種	出土地点取り上げ番号	法量(cm)	胎土焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第54図47	蓋 B_2	2次67－チ	つまみ径 3.8	やや不良・並	淡黄褐色		内外面ナデ	
48	蓋 A_2	2次67－チ	つまみ径 4.8	良・並	明橙灰色		内外面ミガキ	
49	〃	2次61－ヌ	つまみ径 5.6	並・不良	淡灰褐色		内外面ハケ	外面煤付着
50	〃	2次61－ヌ	口　径12.2 つまみ径 5.6 器　高 7.5	並・並	明黄橙色		外面摩耗のため不明，内面ミガキ	全面赤彩
第55図1	壺 L	2次76－リ溝 No.32	口　径21.6	並・並	淡灰橙色	有段口縁，端部面取り，口縁帯外面に円形浮文1	内外面ハケの後，部分的にミガキ	口縁部内外面と頸部外面赤彩
2	壺 F_2	2次75　溝	口　径18.0	やや不良・並	淡黄灰色	有段口縁，端部面取り	内外面ハケの後ナデ	
3	〃	2次75－ヌ溝	口　径15.2	並・並	淡灰褐色	有段口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，有段部内面ハケ	
4	壺 F_3	2次75　溝	口　径16.8	良・並	淡褐灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，頸部接合痕残	
5	〃	2次75－ヌ溝	口　径19.4	並・並	淡橙灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	
6	壺	2次76－チ溝	底　径 3.4	並・並	淡褐灰色	体部球胴，小さな平底をもつ	体部外面ミガキ，内面ナデ	
7	壺 F_3	2次77－リ溝	口　径13.6 底　径 8.6	並・並	淡茶褐色	有段口縁，端部丸味もつ，有段部は弱い	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ナデ	
8	壺 D_1	2次75－ヌ溝 No.13	口　径13.4	不良・並	淡黄橙色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ナデ，頸部接合痕残	
9	壺底部	2次76－チ溝	底　径 7.2	やや不良・並	淡橙灰色		外面ヘラナデ，内面ハケ	
10	〃	2次75－リ溝	底　径 7.8	並・並	黄灰褐色		内外面ナデ	
11	壺 F_2	2次77－チ溝	口　径25.6	並・やや不良	淡橙黄色	有段口縁，端部面取り	口縁部ミガキ，頸部ナデ	
第56図12	壺 H_1	2次76－リ溝 No.21	口　径 8.6 胴部径13.4	並・並	淡茶褐色	有段口縁，口縁帯は幅広(11.5)，体部下ぶくれ	外面は全面ミガキ，口縁部内面ハケ	外面は全面赤彩
13	壺 H_2	2次77－ヌ溝	口　径 9.8 胴部径17.4	並・並	淡褐色	有段口縁，体部は扁平球状	外面は全面ミガキ，口縁部内面ハケ	外面と口縁部内面の上部赤彩
14	壺 H_3	2次77－オ溝	口　径10.9 胴部径14.6 底　径 2.2 器　高18.3	良・並	淡茶褐色	有段口縁，体部は胴の張る球状，底部小さく自立不可	外面は全面ミガキ，口縁部内面ハケ・ナデ	外面と口縁部内面の上部赤彩
15	〃	2次76－ヌ溝 No.15	口　径 9.7 胴部径12.7	不良・不良	淡黄橙色	有段口縁？，体部球状但し底部の形態は不明	外面は全面ミガキ	外面と口縁部内面の上部赤彩
16	壺 H_2	2次76－ヌ	口　径 7.0	並・並	淡橙灰色	有段口縁	外面ミガキ，内面ナデ	
17	〃	2次75－チ No.32	口　径 7.0	並・並	淡橙黄色	有段口縁	外面ミガキ，内面ナデ	外面と口縁部内面の上部赤彩
18	壺 H_3	2次76－ル溝	口　径 8.6	良・並	淡灰黄色		外面ミガキ，内面ハケ	外面と口縁部内面の上部赤彩
19	〃	2次77－ヌ溝	口　径 9.6	並・並	淡橙色		外面ミガキ，内面ナデ	外面と口縁部内面の上部赤彩
20	壺 H_2	2次76－チ溝		良・並	淡橙色		外面ミガキ，内面押圧ナデ	外面赤彩

土器観察表　　9

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第56図21	鉢 C_2	2次76－チ溝	口径10.7 底径 5.0 器高 8.5	並・並	淡黄褐色	小形鉢	口縁部ヨコナデ，体部内外面ナデ	
22	鉢 C_3	2次76－ヌ溝 No.7	口径12.2 胴部径16.5 底径 7.8 器高13.6	並・並	淡黄灰色	体部半球状の鉢	外面ハケの後ミガキ，内面ハケの後ナデ	
23	蓋 B_4	2次76－ヌ溝 No.34	口径14.6 器高 2.5	良・並	淡橙灰色	笠形蓋，径8㎜の焼成前穿孔2孔1対(計4)	内外面ミガキ	24とセットになる
24	鉢 C_3	2次76－ヌ溝 No.16	口径10.6 胴部径18.6 底径 7.2 器高13.3	良・並	淡橙灰色	体部がやや下ぶくれとなる，口縁部に径8㎜の焼成前穿孔2孔1対(計4)	口縁部ヨコナデ，体部外面ミガキ，内面ナデ，内面に粘土積み上げ痕残	23とセットになる
第57図25	壺 K	2次75－チ溝 No.13	口径12.0 胴部径14.4	良・並	赤褐色	有段口縁，端部丸味もつ体部球状	口縁部ヨコナデ，体部外面ミガキ，内面ハケ，頸部接合痕残	外面赤彩
26	〃	2次76－リ溝 No.14	口径10.0 胴部径13.6 底径 1.7 器高14.2	良・良	明黄灰色	有段口縁，端部丸味もつ体部球状自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ミガキ，内面ハケ	外面と口縁部内面赤彩，外面煤付着
27	〃	2次75－リ溝 No.17	口径12.0 胴部径14.0 底径 2.8 器高14.1	良・良	淡茶褐色	有段口縁，端部丸味もつ体部球状自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ミガキ，内面ハケと軽いケズリ	外面赤彩，外面煤付着
28	甕 B_7	2次76－リ溝	口径14.0	やや不良・不良	淡黄橙灰色	有段口縁，段のくびれ弱い，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部ハケの後ナデ，頸部接合痕残	
29	甕 B_6	2次77－リ溝	口径13.2	並・不良	淡灰橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部ハケの後ナデ，頸部接合痕残	
30	甕 B_7	2次75－ヌ溝 No.32	口径12.2	並・並	淡橙灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部ナデ，頸部接合痕残	
31	鉢 C_1	2次76－ヌ溝	口径 9.4	やや不良・並	淡黄橙色	小形鉢，口縁部に強いヨコナデ	体部外面ハケ，内面ミガキ	
32	鉢 A_2	2次76－リ溝	口径11.0	良・並	明黄灰色	有段口縁	口縁部ヨコナデ，体部ミガキ	全面赤彩
33	壺底部	〃	底径 3.0	並・並	明黄灰色	底面わずかに凹む	胴部下半ケズリ，上半ミガキ	外面赤彩
34	〃	2次77－ヌ溝	底径 2.0	並・並	明黄灰褐色		外面ミガキ，内面ナデ	全面赤彩
35	壺	2次76－ヌ溝	脚部径 9.0	並・不良	淡橙褐色		外面ヨコナデ	
36	壺底部	2次76－ヌ溝 No.33	胴部径13.6 底径 2.6	並・並	黄灰褐色	体部球形，底面凹む	外面ハケの後ナデ，内面ナデ	外面煤付着
37	〃	2次76－ル溝	底径 2.4	並・並	淡灰黄色	底面凹む	外面ハケの後ナデ，内面ナデ	
38	壺 M	〃	口径 4.0 胴部径 7.6	やや不良・並	淡黄灰褐色	体部球形，口頸部に径2.5㎜の焼成前穿2孔1対	外面と口縁部内面ミガキ，体部内面ナデ	外面と口縁部内面赤彩
39	皮袋形壺	2次76－チ溝 No.13		並・並	淡黄灰褐色		外面ミガキ，内面ナデ	
40	壺 F_4	2次76－ヌ溝 No.33	口径13.8 胴部径14.4	良・並	淡褐灰色	有段口縁，端部面取り，段のくびれ弱い	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ後ナデ，内面ナデ	
41	〃	2次75－チ溝 No.14	口径12.4	並・並	淡黄橙灰色	有段口縁，段のくびれ弱い	口縁部ヨコナデ，体部内外面ナデ	外面煤付着
第58図42	甕 B_4	2次76－ト溝 No.13	口径18.6 胴部径20.8	並・並	橙灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部強いヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，頸部接合痕残	〃

土器観察表　　10

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第58図43	甕 B_6	2次75－ヌ溝	口　径14.4	不良 不良	淡黄灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ナデ	
44	〃	〃	口　径17.0	並・並	淡橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	外面煤付着
45	〃	2次75－リ溝	口　径17.0	並・並	淡灰褐色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	〃
46	〃	2次76－ヌ溝 No.4	口　径16.7 胴部径23.3 底　径 1.2 器　高23.5	並・並	淡橙灰褐色	有段口縁，端部丸味もつ，体部卵形，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，頸部接合痕残	外面煤付着
47	甕 B_5	2次76－リ溝	口　径16.2	並・並	淡橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	〃
48	甕 B_{11}	2次75－チ溝	口　径18.6 胴部径25.6	並・並	淡茶褐色	有段口縁，端部丸味もつ，段のくびれ弱い，体部卵形	口縁部ヨコナデ，体部内外面上半ハケ後ナデ，外面下半ハケ，内面下半ケズリ	
49	甕 F_1	2次76－リ溝	口　径15.4 胴部径17.2 底　径 3.4 器　高19.0	並・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部面取り，体部楕円形	体部内外面ハケの後口縁部ヨコナデ，体部内外面下半ナデ，底部外面ケズリ	外面煤付着
第59図50	甕 B_{12}	2次76－ト溝	口　径14.4 胴部径13.4	不良・並	淡茶褐色	有段口縁，端部丸味もつ，段部内面直線的	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	〃
51	〃	2次76－ヌ溝 No.11	口　径14.0 胴部径11.3 底　径 2.6 器　高10.4	不良・ 不良	淡茶褐色	有段口縁，端部丸味もつ，段部内面直線的	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，体部内面下半ナデ	〃
52	甕 B_9	2次76－ヌ溝 No.33	口　径14.9	並・並	淡黄灰色	有段口縁，端部丸味もつ，体部は肩が張る	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面押圧ナデ	
53	甕 D_4	2次75－リ溝 No.14	口　径13.6	不良・並	淡橙灰色	受口状口縁，端部水平面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	外面煤付着
54	甕 B_{11}	2次75－ヌ溝 No.8	口　径16.9 胴部径26.6 底　径 3.3 器　高20.1	やや不良・並	淡黄灰色	有段口縁，端部丸味もつ，体部卵形，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケの後ナデ一部ミガキ，下半ハケ，内面はケズリとナデ，内面に粘土紐積み上げ痕残	〃
55	甕 B_7	2次75－チ溝	口　径15.2	並・並	淡橙灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ	〃
56	〃	〃	口　径18.0	並・並	橙灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ	
57	〃	2次76－ル溝	口　径18.4	やや不良・並	明灰橙色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ	外面煤付着
58	甕 B_8	2次75－チ溝 No.7	口　径32.6	並・並	淡茶灰色	有段口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケとナデ，頸部接合痕残	
第60図59	甕 F_6	2次77－ヌ溝	口　径14.6	不良・ 不良	淡橙灰色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ	外面煤付着
60	〃	〃	口　径15.2	不良・並	淡灰褐色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	〃
61	甕 F_{10}	2次75－リ溝	口　径11.0 胴部径10.0	やや不良・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部丸味もつ	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，内面に粘土紐積み上げ痕残	〃
62	〃	2次76－ヌ溝	口　径12.6 胴部径11.9 器　高11.2	並・並	淡灰褐色	くの字口縁，端部丸味もつ，体部球形，丸底を呈す	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ・ナデ	〃
63	〃	〃	口　径11.4 胴部径12.8 器　高10.9	不良・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り，体部球形，丸底を呈す自立不可	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ・ナデ	〃

土器観察表　　11

図版号	器種	出土地店取り上げ番号	法量(cm)	胎土焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第59図64	甕 F_{10}	2次76ート溝 No.1	口径14.6 胴部径13.5 底径4.0 器高10.6	並・並	黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部外面ヨコナデ，内面ハケ，体部外面ハケ，内面ナデ	外面煤付着
65	甕 F_7	2次77ーヌ溝	口径17.1 胴部径16.6 底径2.4 器高16.7	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り，体部球胴	口縁部外面ヨコナデ，内面ハケ，体部外面ハケ，内面ナデ，内面に粘土紐積み上げ痕残	〃
66	〃	2次76ーヌ溝 No.33	口径19.0 胴部径24.2	良・並	淡褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ	〃
67	〃	2次75ート溝 No.8	口径14.0 胴部径13.4 底径1.5 器高14.9	並・並	淡黄灰褐色	くの字口縁，端部面取り，体部球胴	口縁部ハケ，ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，底部ケズリ	〃
68	甕 F_2	2次76ーリ溝 No.24	口径13.6	良・並	明灰黄色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面頸部接合痕残	
第61図69	甕 F_1	2次75ーリ溝	口径14.6	並・やや不良	明橙灰褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ハケの後ヨコナデ，体部ハケ	
70	〃	2次77ーヌ溝	口径15.6	不良・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部外面ハケ後ナデ，体部ハケ	
71	甕 F_3	2次77ーリ溝	口径18.8	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，内面ナデ，内面粘土紐積み上げ痕残	外面煤付着
72	甕 F_2	2次75ーチ溝	口径17.0 胴部径23.4	並・並	淡黄褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部外面下半ヘラナデ，体部内面ナデ，内面粘土紐積み上げ痕残	〃
73	〃	2次76ーリ溝 No.29	口径16.6 胴部径19.8 底径2.6 器高20.7	並・並	淡黄褐色	くの字口縁，端部面取り，体部球形，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面軽いケズリとナデ，頸部接合痕残，粘土紐積み上げ痕残	
74	〃	2次76ールー溝 No.5	口径19.8 胴部径22.5	不良・並	淡橙褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面荒いハケ，内面頸部ハケ，体部内面ナデ	外面煤付着
第62図75	〃	2次76ーリ溝 No.20	口径18.0 胴部径24.1	並・並	淡灰黄色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ・ナデ，底部外面ハケ，体部内面ナデ，内面粘土紐積み上げ痕残	
76	〃	2次75ーチ溝 No.13	口径16.5 胴部径23.4 底径2.4 器高21.5	やや不良・並	淡橙灰褐色	くの字口縁，端部面取り，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ナデの後部分的ハケ，頸部接合痕残，内面粘土紐積み上げ痕残	外面煤付着
77	〃	2次77ーチ溝	口径16.6 胴部径19.5	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，外面下半はハケ後ナデ	〃
78	甕 F_1	2次76ーリ溝 No.29	口径19.2 胴部径20.8 底径3.6 器高23.6	やや不良・並	淡茶褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ	〃
79	〃	2次76ーヌ溝 No.17	口径19.6	不良・並	淡黄橙色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	〃
80	甕 F_3	2次76ーリ溝 No.29	口径20.2 胴部径25.3 底径3.3 器高31.2	並・並	淡黄褐色	くの字口縁，端部面取り，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ナデ，底部内面ハケ，頸部接合痕残	〃

土器観察表　　12

図版号	器種	出土地点取り上げ番号	法量(cm)	胎土焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第62図81	甕 F_2	2次76－ヌ溝 No.28	口径22.0 胴部径24.2	やや不良・並	橙褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面上半ハケ，下半ナデ	外面煤付着
82	甕 F_1	2次75－チ溝	口径20.0	不良・並	淡灰褐色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部内外面ハケ，頸部接合痕残	
83	甕 F_4	2次76－ヌ溝 No.13	口径16.4 胴部径18.4	並・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，頸部内面ハケ，体部内面ナデ	外面煤付着
84	甕 F_3	2次75－ヌ溝	口径15.1 胴部径19.0 底径 1.8 器高21.8	並・並	淡灰褐色	くの字口縁，端部面取り，体部球状，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部内面ナデ，底部内面ハケ，粘土紐積み上げ痕残	〃
85	甕 F	2次75－チ溝	口径20.6	並・並	淡橙黄色	くの字口縁，端部面取り	口縁部ヨコナデ	
86	甕底部	2次75－ヌ溝	底径 3.0	やや不良・並	淡灰褐色		体部外面ハケ，体部内面ハケ・ナデ	外面煤付着
第63図87	甕 F_2	2次76－ヌ溝 No.25	口径16.8 胴部径25.8	やや不良・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り，体部球状	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ，体部下半ヘラナデ，体部内面ハケの後ヘラナデ，頸部接合痕残	
88	甕 G_2	2次75－ヌ溝 No.12	口径14.4 胴部径16.5 底部径 2.5 器高15.2	やや不良・並	淡橙灰褐色	くの字口縁，端部丸味もつ，体部球状，底部小さく自立不可	口縁部ヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	
89	甕 G_1	2次75－チ溝 No. 9	口径14.2 胴部径15.0 底径 2.6 器高10.5	不良・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部面取り，体部球状，底部小さく自立不可	口縁部強いヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	外面煤付着
90	〃	2次75－ヌ溝	口径15.4 胴部径18.6	やや不良・並	黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部強いヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	〃
第64図91	〃	2次75－ト溝	口径15.8 胴部径20.5 底径 3.9 器高(推定) 25	やや不良・並	黄灰褐色	くの字口縁，端部面取り，底部小さく自立不可	口縁部強いヨコナデ，体部外面上半荒いハケ，下半ヘラナデ，体部内面ナデ	〃
92	〃	2次75－チ溝 No.17	口径15.4 胴部径18.2	やや不良・並	淡黄灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部強いヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	〃
93	甕 G_3	2次75－チ溝	口径17.3	不良・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部強いヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	〃
94	〃	2次75－チ溝	口径19.6 胴部径20.8	不良・並	淡橙灰色	くの字口縁，端部面取り	口縁部強いヨコナデ，体部外面荒いハケ，体部内面ナデ	〃
95	蓋 B_1	2次76－リ溝 No.23	口径 8.4	良・並	橙灰色	笠形蓋，つまみ欠失，口縁部丸味もつ	内外面ミガキ	
96	蓋 B_2	2次76－リ溝 No.18	口径 7.9 器高 2.8	並・並	淡橙灰色	径1.8cmのつまみ中央に付く肉厚で端部丸味もつ	内外面ミガキ	外面赤彩
97	蓋 C_1	2次77－チ溝	つまみ径 4.4	並・並	淡橙灰色		外面ハケ，つまみ部と内面ナデ	
98	〃	2次76－リ溝	つまみ径 4.2	並・不良	淡黄橙色		内外面ミガキ	
99	〃	〃	口径13.4	不良・不良	淡橙色		外面ミガキ，内面ハケ	
100	蓋 B_3	2次77－リ溝	口径16.8 器高 4.5 つまみ径 3.2	良・不良	淡橙色		内外面ミガキ	全面赤彩

土器観察表　　13

図版号	器種	出土地点 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第64図101	蓋 B3	2次77－チ溝	口径18.0 器高 2.8 つまみ径 5.2	並・並	橙褐色		外面ヘラナデとミガキ，内面ハケ，中央部ナデ	外面赤彩
102	高杯C2	2次76－リ溝 No.18	口径20.1 脚部径10.8 器高13.0	並・並	淡黄灰色	口縁端部面取り，脚筒部中実	杯部内外面ハケの後ミガキ，脚部外面ミガキ，脚部内面ハケ	
103	〃	2次76－ヌ溝 No.34	口径18.8 脚部径11.0 器高	並・並	淡茶褐色	口縁端部面取り，脚筒部中実，径7㎜の透穴4	外面ミガキ，杯部内面ミガキ，脚部内面ハケ	外面と杯部内面赤彩
104	〃	2次77－リ溝	口径20.2	良・不良	淡黄褐色	口縁端部面取り	外面ミガキ，内面ハケ後ミガキ	外面赤彩
105	高杯脚	2次76－ヌ溝 No.9	脚部径14.6	良・並	淡橙灰色	径11㎜の透穴4，透穴の位置は一定でない	外面ハケ後ミガキ，内面軽いケズリ	〃
106	高杯C1	2次76－リ溝 No.26	口径26.4 脚部径12.6 器高14.8	並・並	淡黄灰色	口縁端部面取り	杯部内外面と脚部外面ミガキ，脚筒部外面ナデ，内面ハケ	
107	〃	2次75－ト溝 No.5	口径26.6 脚部径13.2 器高15.6	やや不良・並	淡橙褐色	杯底部直下より開脚	杯部内外面ヘラミガキ，脚筒部ミガキ，脚部内面ハケ	
108	高杯C2	2次77－チ溝 No.25	口径21.2	並・並	淡橙灰色		外面ハケ後ミガキ，内面細いハケ	
109	高杯D	2次75－チ溝 No.25	口径21.0 脚部径16.8 底径15.9	並・並	淡茶褐色	杯底部直下より開脚，径13㎜の透穴4	杯部外面ミガキ，内面ナデ，脚筒部外面ミガキ，脚部外面ナデ，内面ハケ・ナデ	
第66図110	高杯B	2次76－11溝	口径22.3	良・やや不良	淡橙褐色	杯底部直下より開脚，径8㎜の透穴3	外面ミガキ，杯部内面ミガキ，脚部内面ハケ	全面赤彩
111	〃	2次75－ヌ溝	口径19.7 脚部径12.1 底径19.5	良・不良	淡橙灰色	杯底部直下より開脚	杯部内外面ハケ後ミガキ，脚部外面荒いハケ，内面ハケとナデ	外面と杯部内面赤彩
112	高杯E	2次76－ヌ溝 No.34	口径16.8 脚部径11.6 器高12.3	良・並	淡灰褐色	有段状の鉢形，口縁端部面取り	杯部内外面ナデ，脚部外面ミガキ，脚部内面ハケ・ナデ	
113	器台E	2次76－ト溝	口径19.4	不良・並	淡黄灰色	有段口縁，口縁端部丸味もつ	外面と器受部内面ミガキ，脚部内面ハケ	外面と器受部内面赤彩
114	高杯脚部	2次75－ト溝 No.4	脚部径13.0	不良・並	淡黄橙色	杯底部直下より開脚，径11㎜の透穴4	外面ハケ後ミガキ，内面ハケとナデ	外面赤彩
115	〃	2次76－ヌ溝 No.12	脚部径11.8	並・不良	淡茶褐色	杯底部直下より開脚	外面ミガキ，内面ハケ後ナデ	〃
116	〃	2次76－ヌ溝 No.27	脚部径12.4	不良・不良	淡橙色	杯底部直下より開脚径9㎜の透穴3	脚部上半軽いケズリ，下半ミガキ，内面ナデ	〃
117	器台F	2次76－リ溝 No.23	口径21.3 脚部径12.4 器高14.8	やや不良・並	淡黄橙色		器受部内外面ミガキ，脚部上半ミガキ，下半ナデ，ケズリ	外面と器受部赤彩
118	器台E	2次75－ト溝 No.11	口径16.0 脚部径11.6 器高10.8	良・不良	淡黄灰色	器受部有段	外面と器受部内面ミガキ，脚部内面ナデ	〃
第67図119	器台B	2次75－リ溝	口径 7.8 脚部径11.6 器高 7.0	並・並	淡茶褐色	口縁端部面取り，沈線1条，径8㎜の透穴5	口縁部ヨコナデ，外面ミガキ，器受部と脚部内面下半ミガキ	脚筒部内面を除く全面赤彩
120	〃	2次76－ヌ溝 No.8	口径19.0 脚部径12.0 器高 9.6	やや不良・並	淡茶褐色	口縁端部面取り，径8㎜の透穴4	口縁部ヨコナデ，外面と器受部外面ミガキ，脚部内面ナデ	外面と器受部外面赤彩
121	〃	2次76－ヌ溝 No.2	口径 8.4 脚部径11.6 器高 9.2	不良・並	黒褐色	口縁端部面取り，径7㎜の透穴5	口縁部強いヨコナデ，器受部外面2条単位の放射状ミガキ，脚部外面ミガキ，脚部内面ハケ・ナデ	

土器観察表　14

図版号	器種	出土地 取り上げ番号	法量(cm)	胎土 焼成	色調	器形の特徴	調整の特徴	備考
第67図122	器台C1	2次76－リ溝 No.22	口径 8.6 脚部径10.6 器高 7.5	並・並	淡黄灰色	口縁端部丸味もつ	外面と器受部内面ミガキ，脚部内面ハケ	
123	器台C2	2次76－ル溝	口径 8.3 脚部径11.6 器高10.5	良・不良	淡灰橙色	口縁端部丸味もつ	外面と器受部内面ハケの後ミガキ，脚部内面ハケ後ナデ	外面と器受部内面赤彩
124	器台C3	2次77－リ溝	口径10.0 脚部径12.2 器高11.0	やや不良・並	淡茶褐色	口縁部丸味もつ，径8mmの透し穴4	器受部内外面丁寧なナデ，脚部外面ミガキ，脚部内面ハケ・ナデ	〃
125	器台C1	2次76－ヌ溝 No.15	口径10.6 脚部径11.2 器高10.1	並・並	淡黄灰色	口縁部丸味もつ	外面ミガキ，器受部内面丁寧なナデ，脚部内面ハケ	
126	器台C3	2次76－リ溝 No.30	口径12.4 脚部径15.3 器高(推定) 10.8	良・やや不良	灰褐色	口縁部丸味もつ	内外面ミガキ	
127	器台C1	2次76－リ溝 No.21	口径13.1 脚部径11.4 器高10.2	良・良	淡黄灰色	口縁部丸味もつ，器受部深い	外面ミガキ，内面ナデ	
128	器台C2	2次76－リ溝	口径15.8	並・やや不良	淡灰褐色		内外面ミガキ	
129	器台脚部	2次75－チ溝	脚部径15.4	良・並	淡橙褐色	径10mmの透穴2孔1対計4孔	外面と脚端部内面ミガキ	外面赤彩
130	〃	2次75－ヌ溝	脚部径12.4	良・並	淡橙色	径10mmの透穴3	外面ミガキ，内面ナデ	
131	〃	〃	脚部径15.2	良・並	明茶色	径9mmの透穴3	器受部外面ミガキ，脚外面荒いハケ，端部ナデ，脚部内面ハケ	外面赤彩

（註）　74～76ライン溝状遺構の土器取り上げ番号は，実測図番号と一致しない。

第３節　奈良時代の遺物

奈良時代の遺物を中心に扱うが，第４次調査の結果と同様に若干の古墳時代後期と平安時代の土器を含んでいる。第２次調査の奈良時代の遺構に伴う土器も断片的にあるが，大部分は包含層からの出土である。

須恵器杯蓋（第69図１）

古墳時代後期の須恵器杯蓋の断片。第３次調査Ｂ区からの出土。

須恵器杯蓋（第69図２～17・図版25・26）

口径14～15cm前後，器高３cm前後のものと，口径12～13cm前後，器高２cm前後のものに大きく２分される。また，後者は器形の状態，特に口縁部の屈接の度合によって３つに細分される。分類については第Ｉ次の報告で行ったのでこれに準拠する。２，３はＡII類とした蓋で，３では口径26.3cm，器高3.7cmで径3.6cmの扁平なつまみをもつ。４～８・12はＡＩ類とした蓋で，ＡII類より器高が低い。９・10はＤ類としたタイプで肩平な体部をもつ。口縁部の屈曲はゆるく，外側へ開くものである。11は口縁部の屈接部をもたず，端部を強くヨコナデする。14・15はＥ類とした蓋で，器高は低く，14では口径13.9cm，器高2.1cmを測る。２・10・14～17にはヘラ記号が内面にみられる。本遺跡出土の奈良時代の須恵器は，杯も含めて胎土中に石英質の大粒の砂粒を含むものが多く，蓋口縁部やつまみ部分の調整も雑なものが多い。なお，図示しなかったが第２次調査の包含層から蓋の内側全面に墨が付着した破片１点が出土しており，墨入れ皿として転用されたものとみられる。（図版25下の上段中央）

須恵器杯（第69図18～22）

口径12～14cm，器高2.2～3.2cmの，口径の割に器高の小さいものが多い。底部からゆるく立ち上がり，口縁部をヨコナデによりわずかに広げる。

須恵器高台杯（第70図23～39，図版25・26）

口径が11～12cm前後のものと13～15cm前後のものに２分される。器高は3.2～4.2cmの大きくならないものが多い。形状からみれば，口縁部の立ち上がりが強く，底部のカーブが丸くなる24・31・32・34と，口縁部が斜め上方に広がる26・27・30・33・37・38がある。前者は『報告書Ｉ』の分類のＣＩ・II類，後者はＢＩ・II類に該当する。39はやや趣きを異にしており，口径15.4cm，器高5.4cmを測って，口縁部は斜め上方に開がる。後出的な様相をもつとみられる。先にも述べたが，高台杯においてもその胎土や調整が必ずしも良いとは言えないものがあり，特に高台の形態では24・25・27・30・35・38の様に低平であったり，29・31・32の様に器体に対して貧弱な印象を与えるものがある。

須恵器壺・甕（第71図44～47，第72図49～51・53）

44は口径９cm，45は口径14.2cmを測る壺の口縁部で，45には２条の沈線がある。46は復元口径23.5cmの壺の口縁部，47は復元口径19.9cmの横瓶の口縁部である。49・50も壺の口縁部と肩部の破片で外面に平行叩き，内面に同心円叩きがみられる。51は瓶の肩部断片で幅５mmの隆帯をめぐらす。53は底径8.8cmの有台瓶底部で底平な高台をもつ。底面に回転糸切り痕を残す。51・55の

２点は平安時代前期～中期の所産と考えられる。

須恵器鉢（第71図48－１・48－２，図版27）

３次調査Ｂ区包含層から出土した把手付の鉢で，復元口径29.3cmを測る。口縁部をヨコナデし，体部外面に平行叩き，内面に同心円叩きを施す。灰褐色を呈し，焼成はやや甘い。48－２は同一個体の破片であるが，48－１との接合部分はない。底部近くに当る部分と推定される箇所に明瞭なヘラ描き文字「郡」が器体と逆の方向に記されている。「郡」の上と右横下にもう一字ずつ文字が存在した事は確実であるが判読できない。「郡」の左側と下には字が見られず，その配置を推定すると，「郡」のみが独立してその左側に２字以上からなる銘文があったか，「郡」の上に一字以上あって郡名を記し，その左側に１字以上の銘文があったか，破片の隅部にあたるため不明である。胎土中に多くの砂粒を含み，他の須恵器と同様な特徴を備えており，鳥屋町深沢・春木・末坂・花見月などに広がる鳥屋窯跡群から供給された製品であることは間違いない。

土師器杯（第71図40～43・図版26）

40と42は黒色土器で，42では内面を良く磨いている。42は口径15.2cmを測り，胎土は精選され焼成も良い。41は口径12.8cm，器高2.3cmの浅い杯で口縁部内外面を良くナデ，底部外面をヘラで削る。内面は赤彩され，胎土・焼成ともに精良。43も黒色土器であるが底面に回転糸切り痕をとどめる。外面をナデ内面を良く磨いている。41・42は奈良時代前期の所産とみられ，43は平安時代に降る時期の土器とみている。

土師器甕・堝（第72図52・54・55，第73図56～59）

54は口径34.4cm，器高33.6cmの長胴甕で，くの字に外反する口縁部をもつ。体部内外面に荒いハケ調整を施す。55は口径30.7cmの甕で，口縁部を肥厚させ，端部を面取りする。体部は横方向のカキ目調整をする。56～58はくの字口縁の小形甕で口径10.8cm～12.0cmを測る。52も小形甕の底部とみられ，回転糸切り痕を残す。59は口径27.0cmの堝。体部外面にカキ目を施す。54・55の大形甕，59の堝は奈良時代前期の所産であろう。

砥　　石

第73図80は砥石の断片である。砂岩質で暗茶褐色である。

第４節　中・近世の遺物

第３章でも触れたように包含層から特に中世の遺物が断片的に出土しており，特に第２次調査では遺構の存在も確認したが，不十分な調査で終結した。第73図58～79に図示した資料は，第２次調査時出土資料に若干の第３次調査出土資料を加えたものである。

土師質土器（第73図60～69，図版27）

口径が10cmに満たない小形の皿と，11～13cm前後のやや大きな皿に分けられる。形態的には，口縁端部を丸くするものと面取りするものがあり，底部が段をもってくびれるものとそうでないものがある。底部は平底で指頭による押さえやナデによる調整がなされる。22は径7.8cmの小皿であるが，底部近くに径２mmの焼成後穿孔１個が確認される。

珠洲焼壺・甕（第73図71～75）

いずれも体部の小片である。斜行の平行叩きを施す。

珠洲焼鉢（第73図76～79）

76・77は断片であるが器体の開く擂鉢形の断片と思われる。78・79は従来珠洲焼の製品では余り例のないタイプの鉢である。78では口径20.6cm，底径16.0cm，器高8.35cmを測り，広口鉢とでも言うべき器体である。79も底径16.8cmとなって同様な器形となろう。体部外面下半を叩き，内面には強いヨコナデの痕跡を残す。

瀬戸小皿（73図70）

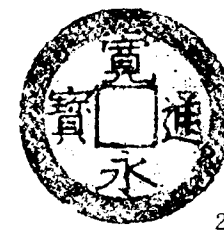
口径9.4cmの小皿で，2次調査の際121ラインの近世河川の撹乱土中から出土した。内外面に灰色の釉がかけてある。

中世の土師質土器や珠洲焼の編年的位置については，土師質土器に口縁部面取りを行うものがあること。底部が平底でナデ調整をしていることから，13世紀後半頃の所産と考えており，珠洲焼もこれとほぼ同時期とみて差し支えなく，吉岡編年の第II期，13世紀後半の時期に置けるとみている。

寛永通宝

1は径2.2cmで孔は一辺6mm，重さ2.1gを測る。鋳上がりが悪いうえに遺存状態も良くない。2は径2.8cmで孔は一辺6mm，重さ3.6gを測る。背面に波文をもつ。いずれも第2次調査の際に出土しており，2は120ラインの近世河川の撹乱土から出土である。

1

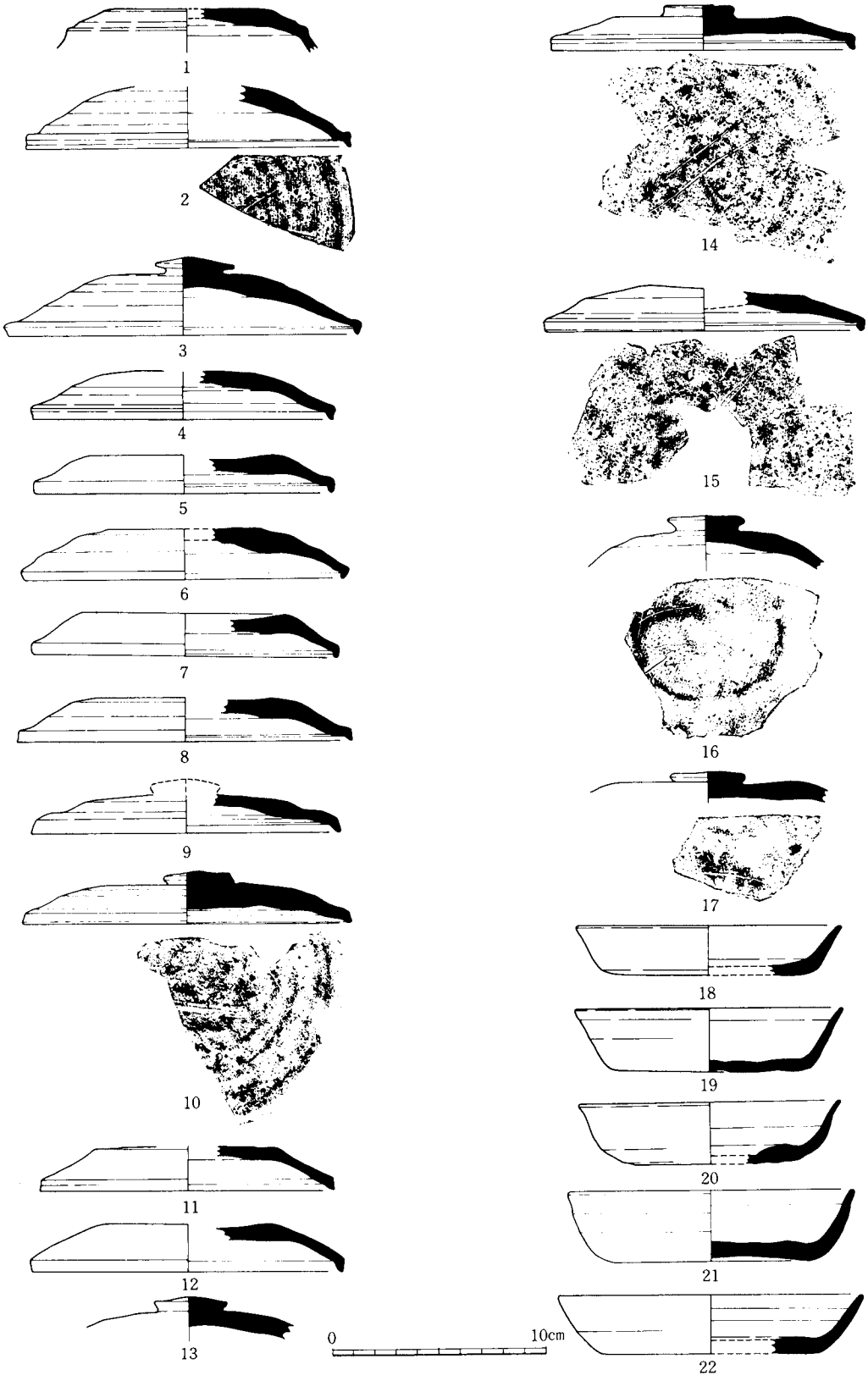


2

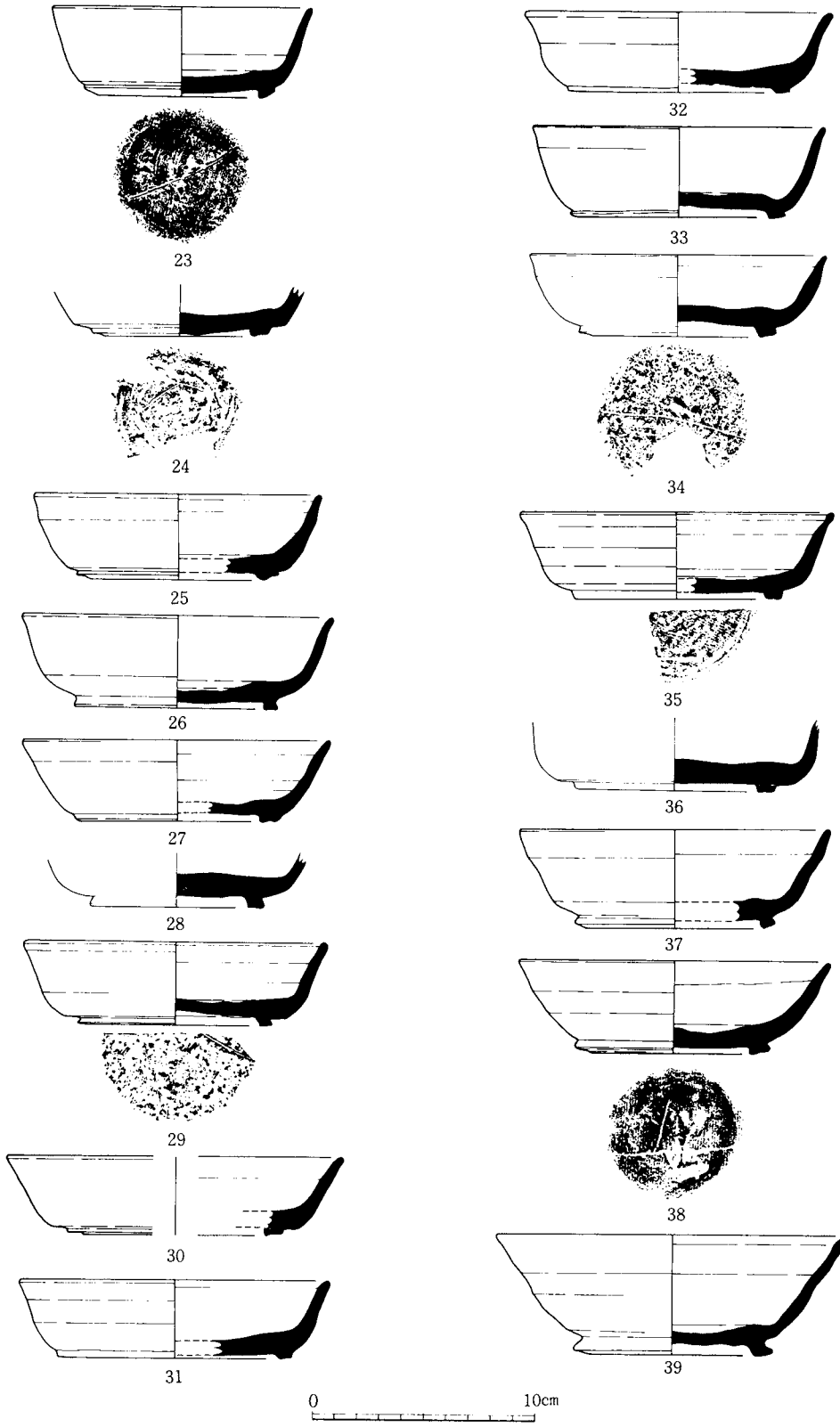
参　考　文　献

吉岡康暢「第2部研究編　第2章奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会（1983）

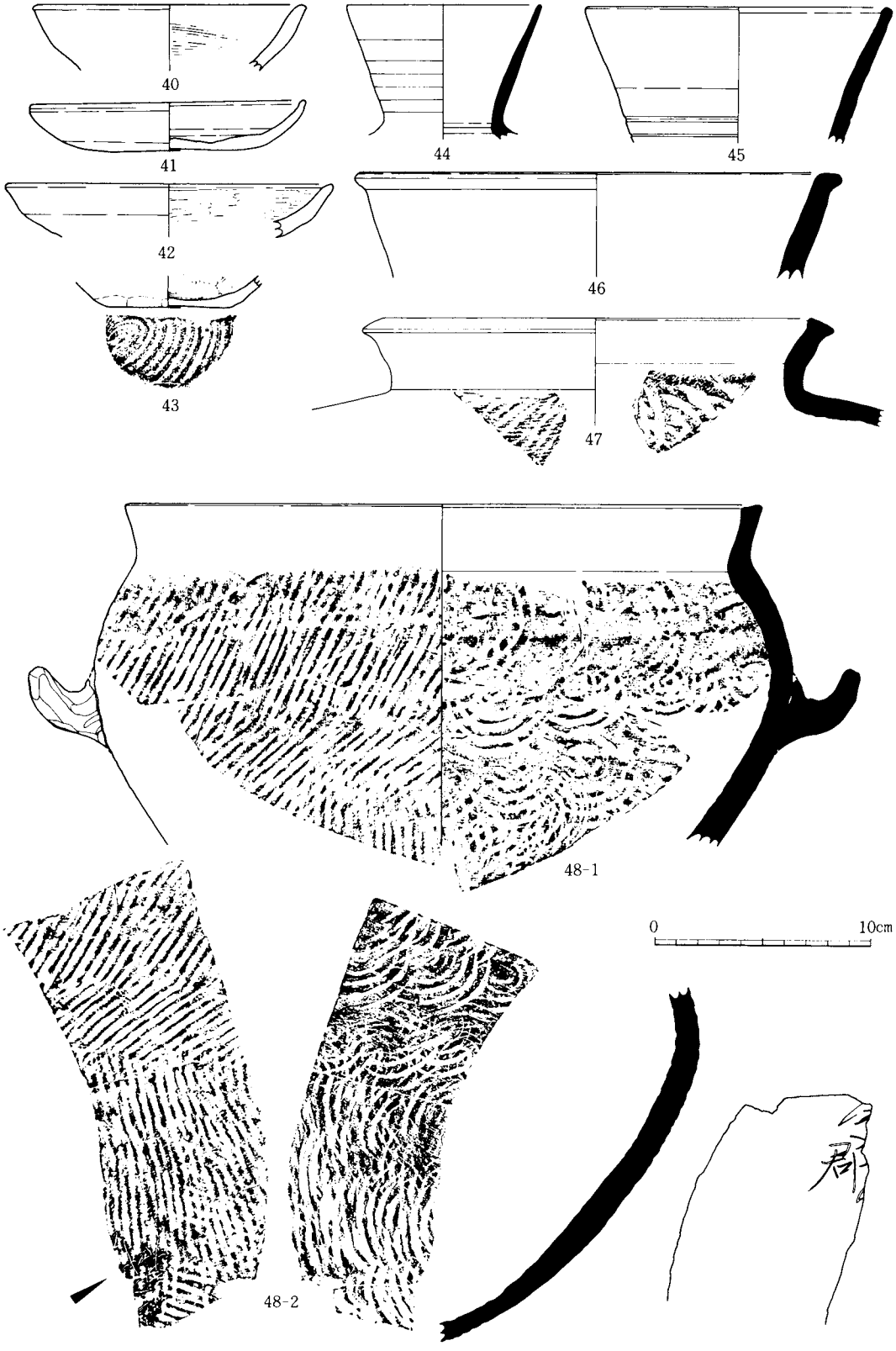
吉岡康暢・平田天秋「珠洲古窯跡」『石川県珠洲市史』第1巻（1976）



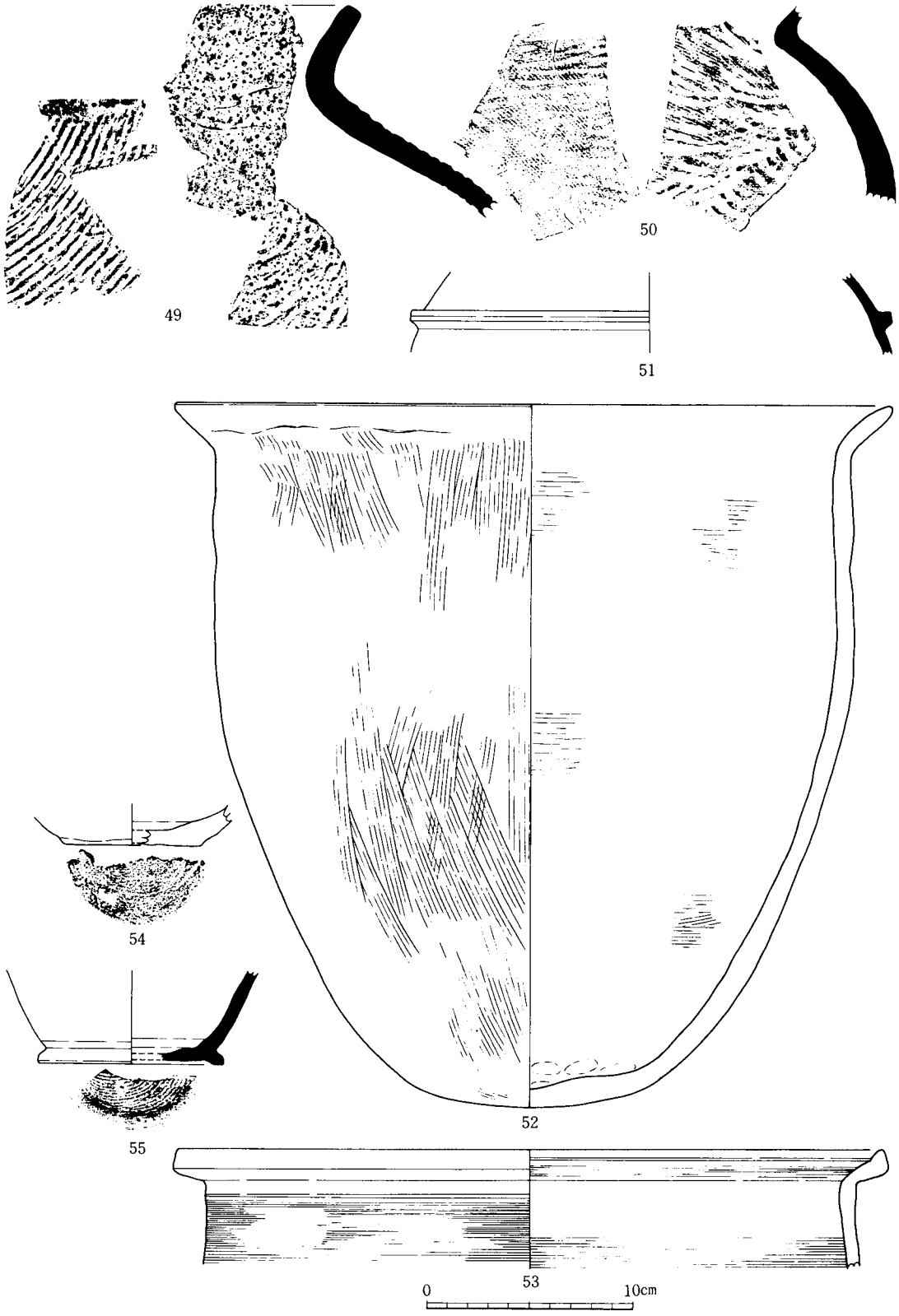
第69図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土須恵器(1)



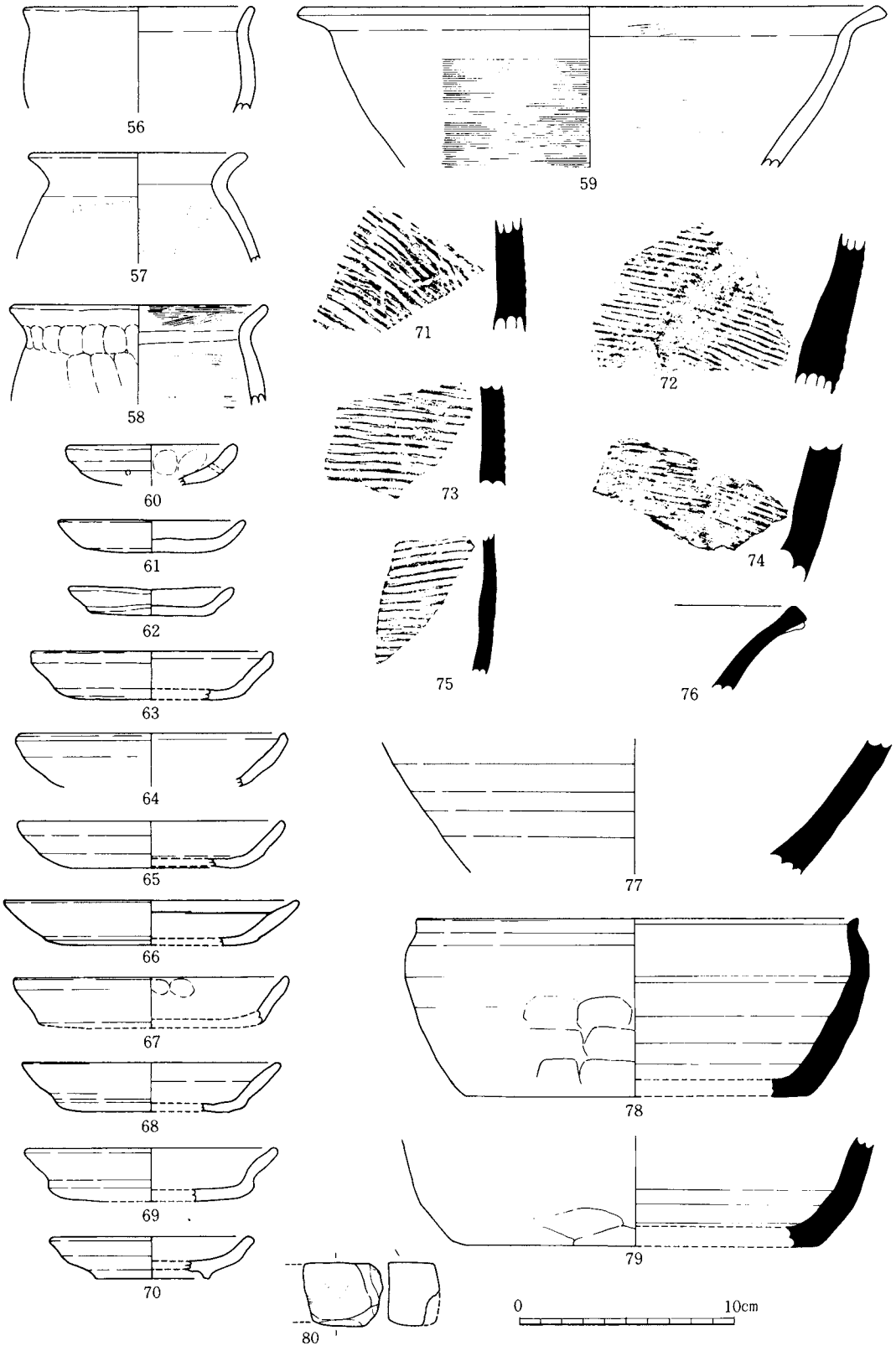
第70図　徳前C遺跡第２・３次包含層出土須恵器(2)



第71図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土須恵器・土器師(3)



第72図　徳前C遺跡第２・３次包含層出土須恵器・土師器(4)



第73図　徳前Ｃ遺跡第２・３次包含層出土土師器・土師質土器・珠洲焼(5)

第5章　ま　と　め

第1節　遺　　構

徳前C遺跡の第2・3次調査で発掘した遺構は，第3章第2節から第5節で説明を行った。しかし，いずれの遺構もまとまりをもつものとは言い難く，しかも調査が十分できなかったことについても再三述べてきたところである。以上のような理由から本節では，第1次調査で発掘し，第2次調査で若干の補足を行った奈良時代前期の掘立柱建物群に限って取り上げ，検討を加えることとした。なお，第1次調査では8棟の掘立柱建物を確認し，『報告書Ⅰ』[(1)]で3期にわたる変遷を示しておいた。第2次調査では更に多くの建物群が発見されることを期待したのであるが，近世河川の撹乱を受けて遺存状態が良くなかったこともあって，4号建物の柱穴を追加補足したに止まる。従って，集落の区域が第1・2次調査区の北西側へ広がることは確実であるが，現段階においても確認された調査区内での建物群を材料とする他にはない。

さて，徳前C遺跡の建物群について湯尻は『報告書Ⅰ』の50頁で，2～3棟の建物が1つのまとまりをもって計画的に配置されていることに注目して，この建物群が「集落を構成する基礎的な単位の房戸に該当する」のではないかと暗にほのめかしている。また，別稿[(2)]では整然とした建物の配置を強調して「中核集落」という概念的(抽象的と言った方が正確であるが)な用語でまとめ，その集落の性格について「イメージとしては小地域の郷長クラスの住居であろうと考えている。したがって一般集落（房戸）とは差をもって存在するとみており，建物の配置のあり方はこれを反映したものと考えている。」とした。徳前C遺跡の建物群に対するその性格付けも含めた見方の根本は，今も基本的に変わってはいないが，湯尻の説明不足や概念規定の拙さによることもあって，未だ混乱を招いていることも事実である。本節では，徳前C遺跡の他に県内での2・3の調査成果を参考として「中核集落」の概念について補っておきたい。

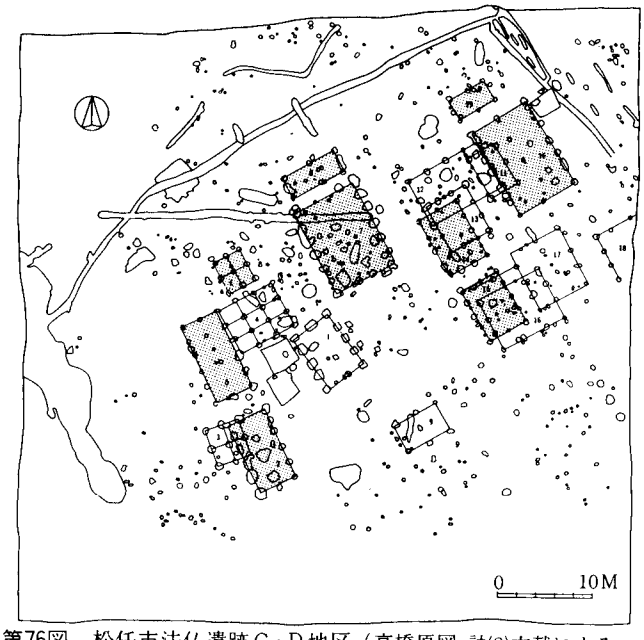
徳前C遺跡の奈良時代前期の建物群は，3期にわたって建て替えられた建物群であるが，A期の2・3・4号棟が梁行の軸線を揃えて並列すること，B期の5・6・8号棟が棟の方向や規模・構造こそ異るが，非常に計画的な配置をとる点に特徴がある。別稿では，この企画性・計画性に，他の集落遺跡の調査例と比較しながら差を見い出し，そこに集落間での階級差の反映があるとした。徳前C遺跡の建物配置を考える上で参考となる遺跡をあげると，七尾市八幡昔谷遺跡，[(3)]加賀市西島遺跡，[(4)]松任市法仏遺跡C・D地区[(5)]などがある。ここでは，八幡昔谷遺跡と法仏遺跡C・D地区を取りあげ検討を進めたい。

第76図に掲げた七尾市昔谷遺跡は，七尾市街地の南西約3㎞の徳田丘陵から派生した標高20mの舌状台地に位置している。昔谷A地区では奈良～平安時代前期の竪穴住居跡1棟と掘立柱建物14棟が検出され，更にA区東方向の台地鞍部には，くの字形にめぐる延長100m，幅約1m(最大)，深さ約0.8m（最深）の溝が検出され，集落跡を画していた。掘立柱建物は重複の状況から「少なくともⅢ期にわたって営まれ，うち6棟（図中アミカケの建物）は方形掘方をもち，主軸を南北

に統一して正確に南面している。」南側梁行3間，北側梁行2間のやや特異な柱間構造をもつ建物4棟も含むが，基本的に梁行2間×桁行3間を基本とした建物群と考えている。この6棟の建物の配置は，極めて整然としており，建物の1棟当たりの規模が約13.7m²から約23m²で，約17～18m²の平面積しかなく，整然と配された建物群の割には1棟当りの建物規模がやや小さいように思われる。八幡昔谷遺跡の建物の性格については，「これら遺構群とくに掘立柱建物と同丘陵外側を巡る溝状遺構の性格については，現段階では速断できないが，単に集落跡と見るよりも，特殊な性格を有する官衙的関連施設と推定している。」とされている。官衙的関連施設として見るかどうかは別として，八幡昔谷遺跡にみる建物の配置は重要である。

第75図　七尾市八幡昔谷遺跡
（七尾市教育委員会提供・註(3)文献による，一部改変）

松任市法仏遺跡C・D地区の建物群は，その配置のあり方・規模ともに注目される。報告書が未刊のため個別建物の時期をおさえることはできないが，平安時代中期頃までに継起的に営まれたものと考えている。ここで取り上げる建物群は，調査担当者の高橋　裕氏の了解を得て湯尻が別稿[(5)]で紹介した建物群であり，田嶋明人氏によれば建物群は奈良時代前期と推定されるという[(6)]。第76図に示した法仏C・D地区の建物群は，類似する建物配置をとって東・西に並ぶ2つの建物群で構成されている。東側に4棟，西側に倉庫1棟をもつ5棟からな



第76図　松任市法仏遺跡C・D地区（高橋原図・註(2)文献による，一部改変）

る建物群が桁方向を揃えて並び，東群の主屋で約67.2m²，西群の主屋で約57.1m²の平面積を測る。田嶋氏は東西両群の建物群を比較して，西群の主屋の規模が東群のそれに対して大きいことと西群に倉庫が存在すること，溝を「屋敷地」の区画と理解した場合，西群がその約⅔の面積を占めて配置されていることから，そこに格差を指摘されている。田嶋氏の進められた分析は重要であるが，湯尻もこの建物群が一般の集落遺跡および官衙遺跡と性格を異にするものとみて，これに初して「中核集落」という概念でまとめようとした。即ち，法仏C・D地区の建物群が，一般の農民層の集落ではなく，かと言って官衙的な性格をもったものと言えない，しかし，建物群の規模や配置から考えると上位の集落であったとみる方が妥当な集落遺跡なのである。法仏C・D地区の建物群の報告書が未刊のため，細かい検討はできないが，建物配置のあり方そのものに徳前C遺跡や八幡昔谷遺跡でみた，柱筋の方向を揃えて建物を配置する「計画性」が見い出せるのである。これらの集落の生産基盤は当然農業を重としたものであっただろうが，建物群が「計画性」のある配置をとること自体に，「計画性」の乏しい建物群で構成される一般集落とは格差をもって存在する「中核集落」であったとみておきたい。何故ならこの建物配置の計画性にこそ，いわゆる官衙的遺跡とか官衙遺跡とされる遺跡の建物配置と共通する部分があることを指摘できるからである。湯尻は別稿で「中核集落」について「イメージとしては小地域の郷長クラスの住居であろう」とした。けれども，この規定について，「中核集落」の住人に果たして郷長クラスの階層まで含んで良いかどうかの検討は全く不十分であり，この点については，最近，浅香年木氏の出された示唆[(7)]に負うところが多い。

徳前C遺跡でみる奈良時代前期の建物群をその配置の計画性を重視して「中核集落」の部類に含めたいと考えているが，その意味で本報告書で取り上げた「郡」銘のある須恵器鉢と，墨入れに用いたとみられる須恵器杯蓋各1点，それに第1次調査で出土した墨書土器1点のもつ意味は大きい。いずれも1点ずつの出土であるから過大な評価は慎むべきであるが，墨書土器と墨入れに用いたとみられる須恵器は，徳前C遺跡の住人が識字層であったことを示している。また，「郡」銘の須恵器鉢は，生産地である鳥屋窯跡群で記されたものであるとしても，この「郡」が当時の「能登郡」を示す可能性が高く，改めて徳前C遺跡の建物群の性格，引いてはこの集落に居住した住人の階層の一端を裏付ける資料といえよう。

（註）

(1) 湯尻修平『鹿島町徳前C遺跡調査報告書(Ⅰ)』石川県教育委員会（1978）
(2) 湯尻修平「第2部研究編第1章加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会（1983）
(3) 浜岡賢太郎・桜井憲弘「七尾市八幡昔谷遺跡の調査について」『第29回石川県五学会発表要旨』（1979）
(4) 平田・橋本『加賀市西島遺跡』石川県教育委員会（1971）
(5) 未発表資料。但しその概略は註(2)文献で湯尻がとりあげている。
(6) 田嶋明人「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡―加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚書」『北陸の考古学』（1983）
(7) 浅香年木「第二章　古代の上日郷と石動山」『鹿島町史通史・民俗編』102頁（1985）

第2節　縄文時代の遺物

徳前C遺跡出土の縄文土器は，すでに第4次調査で出土した土器群が報告されている。それは石川・富山両県の中期前半の研究史を詳細に検討した上で，前期末葉から中期前葉の土器群を文様別に第1～12群に群別し，キャリパー形や円筒形の器形も1～10類に類別して詳細な検討を加えている。キャリパー形や円筒形の深鉢で口縁部に軌軸文，逆位蓮華状文，横位無文帯を持つ主体的な土器群を，かつて小島俊彰氏が位置づけた朝日下層・新保様式の第3段階にあてはめるなど大きな調査成果がもたらされている。今回報告した第3次調査出土の土器群も第4次調査報告に準じて分類したが，ここでは本遺跡の主体的な土器群に後続し，新崎様式の第1段階とされる金沢市大桑町中平遺跡出土土器群との間で器形や文様構成の比較検討を進め，その変遷の一端を窺いまとめとしておきたい。この中平遺跡の調査は昭和48年11月に沼田啓太郎氏を中心にして黍野藤二郎，河村義一，浅井勝郎，岡本　晃，船山真一，直山邦雄の各氏が行ったもので，同遺跡の出土遺物の報告は，沼田啓太郎氏が昭和51年に石川考古学研究会会誌第19号に「金沢市中平遺跡報告」と題して発表されている。この中平遺跡の出土土器に最初に注目されたのは南　久和氏で，沼田氏の中平遺跡調査報告が掲載された同じ研究会会誌第19号に「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」と題する論考を発表された。それは新崎式の格子目文，蓮華文，無文帯の変遷を跡付けもので，その新崎式の半截竹管を使用して描出する蓮華状文以前のものとして，中平遺跡の彫刻蓮華文をあげておられる。この沼田氏の報告された土器群中には断面形を実測しているものも存在するが，その多くは接合作業以前に採拓された拓影図が多く，その説明も概略が記載されているのみである。ここではこの資料の重要性から実測して掲載したものである。この土器群を発表するにあたり同遺跡の調査に参加され，現在遺物の一部を保管されている岡本　晃，河村義一両氏から発表することの承諾を得ている。また，浅井勝郎からも同遺跡出土の遺物について教示を得ており，各氏に感謝申し上げたい。同遺跡出土の土器群はキャリパー形や円筒形の深鉢，浅鉢，台付土器等が存在している。ここで掲載したのは（第77図～第82図，図版50～52）文様構成や器形の判明したもので，縄文や木目状撚糸文を施す胴部片や底部片，台付土器等は今回掲載していない。以下，器形別に器形や文様構成等の概略を簡単にまとめたい。

深鉢（キャリパー形）

①（第77図1，第78図13）頸部から直立ぎみに外反し，上部が内屈するもの。口縁には山形の突起があり，突起下には「し」の字形の貼付突起がある。口縁上端と頸部を横走する半隆起線文間には縦位半隆起線文を密接して引いている。13は同一個体と推定され，頸部には横走する5条の半隆起線文がある。口縁部はキャリパー形といってもやや変形している。

②（第77図2～4，6～8，第78図11，13～18）頸部の縦位半隆起線文施文部が直線的に外傾し，上部が内屈してそこに軌軸文や軌軸文の上下や中央にヘラ先による三角形の抉りを加えて表出した六角文を配している（2～4，6～8）。口縁下部の縦位半隆起線文間には地文の斜縄文を持つものと持たないものがある。その持つもので2は口径約29.6cm，3は同じく約28.7cmと約1cm程度のズレが存在するが同一個の可能性が高い。2，3はその縄文上に縦位の半隆起線文を等間隔

に引くが縄文地文を残しており，その断面形も丸い部分と角ばる部分が存在している。また，2はその半截竹管を器面に対して平行に引いているが，3は右傾させて引いており半隆起線文の右側沈線が左側よりも深くなっている。この2，3，34は同一個体の可能性が高い。

縄文地文を持たず縦位の半隆起線文を密接して強く引くものと弱く引くものが存在している。その強く引くものは断面形が丸くなるもの（11，13，15，17，この11は半隆起線文は他より太い）と弱く引いて断面形が角ばるもの（4，16，18）があり，8は等間隔よりも少し狭い間隔で弱く引かれて角ばっている。これも口縁部の貼付突起は頸部までの間に止まっている。また，口縁上部を横走する半隆起線文と下部の縦位半隆起線文間には横位の無文帯は形成されてはいないことも注意したい。5の縦位半隆起線文は左側から右側へ順番に引かれている。4は口唇部に粘土紐貼付で突起を表示するが，貼付後竹管やヘラ等での調整をせず，最初に貼り付けたままの状態で円形の刺突や三角形の抉りを表現するなど，かなり手抜きをしている。六角形文内は抉りを持つが正位の格子目状にしている。

③（第78図9，10）頸部側から直線的に外傾するが，口縁上部は直立ぎみに立ち上っている。これらは口縁上部に軌軸文が横走し，この横の口縁上端から密接する半隆起線文を垂下させている。9の軌軸文下部は無文帯の可能性もある。10の剝離した貼付突起痕上部には三角形の抉りを入れている。ただ，この2点はその胎土からして浅鉢の可能性があり，その区別は俄に判断できないが，ここでは深鉢と考えておきたい。口唇部は肥厚している。

④（第78図19）内湾する口縁部のＲＬの縄文地文をヘラ先で切るものである。

⑤（第81図52）これもキャリパー形ながら直立ぎみのもので，口唇部側に向って肥厚している。口縁部と口唇部では爪形文の大きさと方向が異なっている。

⑥（第78図12）これは波状口縁で直立ぎみに立ち上り，口縁に沿って太い半隆起線文を引き，その下に逆位の蓮華状文を配している。時期的には新しいものであろう。

深鉢（円筒形）

①（第78図20，第79図21，第80図25，26）これは大型品で口縁部の外反するものである。20は口径約41.2cm，21は口径約45.2cmを測る。器厚も21は20より厚く約1.5cmを測る。また，21は口唇部が肥厚して平坦に仕上げ，口縁上端には太い爪形文を加えている。文様は横位無文帯を挟み横走する半隆起線文を2段に構成するもので，口唇部の突起下にあたる無文帯上端から4条程度の半隆起線文を胴部へ垂下させ，胴上部を横走する半隆起線文内で右流れの突起を貼付している。胴部は木目状撚糸文となっている。25，26はその胴部片であるが，粘土紐による貼付突起を下段の半隆起線文内に貼付し，胴部へ半隆起線文を垂下させている。25は胴部径で約35cm，器厚は約1.5cm，26も胴部径で約33.4cm，器厚も約2cmと厚手の作りとなっている。

②（第80図23）これも大型品で口縁が外反し，口径約42.4cmを測る。口縁上端には太い爪形文が加えられている。横位無文帯の上下にある半隆起線文内には中を正位の格子目状にし，上部から三角形に抉りを入れて表出した印刻蓮華状文が連続している。頸部には隆帯状の半隆起線文が貼付されている。これも器厚が約1.6cmと厚い。

③（第79図22）これは口縁の内湾するもので，口径約23cmを測り中型の深鉢である。横位無文

帯を挟み横走する半隆起線文を2段に構成している。縦位の半隆起線文は無文帯上端から垂下するものではなく，下段の横走する半隆起線文から縄文地文上へ下っている。口唇部に半円形の突起を貼付し，口縁の一部も山形になり爪形文を加えている。

④（第80図24）これは小型品である。口径約20cmを測り，胴部は円筒状で口縁部が外反している。口縁上端には爪形文を加え，無文帯を挟み上下に5条と6条の半隆起線文を横走させるが，下段の横走する半隆起線文は胴部へ垂下する半隆起線文の左右で1条分ズレている。胴部の正位格子目状文は縦位の半隆起線文を強く密接して引き，それを同じ半截竹管で左から右へ切っている。ただ，胴部右側の部分では格子目状文とした後，中央部の縦位半隆起線文を引き直している。

深鉢胴部文様（第82図27～51）はA縄文地文を持つものとB無文地上に格子目状文と半隆起線文を残すものに区分される。

A①（27～29，30，49，51）これは縄文地文上に縦位の半隆起線文を引くもので，49は縄文地文上に半隆起線文を引くが，その中に縄文が残っている。中心線側の無文部は指ナデ調整して縄文を消した可能性もある。29は底部側へ裾窄まりの器形の胴部であるが，他は円筒形のものである。

A②（31～33）縄文地文上をヘラ先で縦位に切り，縦位方向に半隆起線文を引き直している。この土器はその器壁のカーブ等から強く裾窄まりのする深鉢胴部である。

A③（34）縄文地文上に縦位半隆起線文による縦長の区画を等間隔に引き，その縄文地文の中間を縦位のヘラ先沈線で切っている。拓影右側部分のこの沈線上端は三角形に抉られている。この破片は2，3と同一個体の可能性が強く，胴部が裾窄まりの形態となる。

B①（35～44，50）無文地上に半截竹管で縦位の沈線を引き，これを同じ半截竹管で左から右へ切って正位格子目状文を地文とし，縦位の半隆起線文を強く引いている。35～37，39は同一個体の可能性が強く，頸部から底部へゆるやかに裾窄まりとなっている。格子目状文の間隔は密ではなく，半隆起線文を引いた半截竹管と同じものが施文具として使用されているようである。

B②（48）縦位に密に強く引かれた半隆起線文を同じ施文具で左から右へ切っている。円筒深鉢④（24）の胴部の格子目状文と同じものである。

B③（45～47）縦位の半截竹管による沈線をヘラ状具で横に切り，縦位の半隆起線文を引き直している。47は直線と山形の半隆起線文間に残った部分をヘラ先で抉り出している。45の半隆起線文の幅は他のものより太い。

浅鉢は2個体出土している。形態的に①鉢形で口縁の直立ぎみのもの（第81図53）と同様な器形であるが口縁の内湾ぎみのもの②（第81図54，55）に区分される。

①（53）これは口径約29.7cm，器高約15.2cm，底径約10.7cmで，口縁には4ケ所突起があり，その内外面は玉抱き三叉文風に加飾されている。口唇部には縦位の短線が引かれている。口縁には右流れや左流れの貼付突起もある。口縁から底部にかけては垂直や左流れに半隆起線文を引き，この縦位区画の口縁上部には軌軸文や三角形の抉りを入れ，この下にヘラ先による正位の格子目状文を配している。この格子目状文は区画内すべてに施されず，縦位区画内を指ナデ調整して無文地にする部分が多い。

②（54，55）この2点は同一個体の可能性が高い。54は口径約33.5cmを測り，口唇部は肥厚し

内面端部は内側へやや突出している。口縁部には軌軸文と六角形文や三角形の抉りを持っている。55は口唇部に突起を付けて波状にし，この内面にはヘラ先による格子目状文を施している。胴上部には三角形の抉りを等間隔に入れ，抉りの頂部とその横の無文地に沈線を垂下させ，蓮弁の長い蓮華状文を表出している。

以上の中平遺跡の土器群と徳前C遺跡の土器群を比較すると，中平遺跡では徳前C遺跡の第2群土器のいわゆる斜格子目状文等を持つものは存在せず，この点徳前C遺跡では出土しており，すでに指摘されているが[(1)]朝日下層・新保様式の枠内に位置する徳前C遺跡との違いがある。

第3群土器の中でキャリパー形の深鉢には種々の文様構成を持つものが認められる。新保II 1型式からの系譜で追える1類，1類A，1類B①と他のものでは，縦位半隆起線文の間隔が狭くなる点のみならず，横位や縦位の半隆起線文の引き方も乱雑になってきている。また，縄文地文上に引かれるものと新たに無文地上に等間隔に引かれるものも出てくるなど新保式の段階のものと比べるとかなり変化してきている。

また，その断面形態を比較すると第3群1類では，1類（16），1類A（23），1類K（29）があり，口縁部が丸く内湾して上部が直立したりやや内側へ入っている。口唇部も平坦で頸部内面にも稜線を残している。胴部の形態では裾窄まりになるもの，円筒状になるものが存在している。軌軸文，印刻蓮華状文，横位無文帯を持つ第4群1類では，口縁は頸部から丸く内湾して上端が内側へ入り，胴中位あたりで脹らむ1類A①（86）。丸く内湾する口縁上部がまっすぐに立ち上り，頸部内面に稜線を残し胴部も裾窄まりになると推定される1類B④（68），1類A④（49）もこれに近い。頸部から直線的に外傾して上部が内湾する1類A④（48）。緩く内湾ぎみに開く1類A③（87）が存在している。また，頸部片で半隆起線文を密に引き，そこが直線的に外傾する（71，75）ものも認められるなど，キャリパー形といってもその形態に多種類のものが認められる。これに対して中平遺跡では頸部から直線的に外傾し，その口縁上部が内屈するものが主体で，口唇部を肥厚させている点も特徴といえる。

その文様構成も第4群1類ではA種の縄文地文を持つものでは①軌軸文＋縦位半隆起線文（等間隔）1類A①（86），②軌軸文＋横位無文帯＋縦位半隆起線文（等間隔）1類B①（91），③印刻蓮華状文＋縦位半隆起線文（等間隔）1類A③（87），のものがあり，B種の縄文地文の無いものでは④軌軸文＋縦位半隆起線文（密接・等間隔）1類A②（41），⑤軌軸文＋横位無文帯＋軌軸文＋縦位半隆起線文 1類B②(57)，⑥印刻蓮華状文＋縦位半隆起線文（密接・僅かに無文部を残すもの）1類A④（49），⑦印刻蓮華状文＋横位無文帯＋印刻蓮華状文＋縦位半隆起線文（等間隔）1類B④（68），⑧軌軸文＋横位無文帯（1類B③55，ただし，これは口縁上端を欠くため正確さを欠く）となる。C種の爪形文を伴うものでは⑨軌軸文＋爪形文＋縄文施文部＋爪形文1類C（114）⑩印刻蓮華状文＋爪形文＋印刻蓮華状文1類C（111），⑪軌軸文＋横位無文帯＋爪形文＋横位無文帯のものが存在している。このA・B種では8タイプの文様構成があり，そのうち4タイプに横位無文帯を伴うなど，徳前C段階では新保II 1型式からの系譜を引くキャリパー形深鉢の口縁部に軌軸文等を組み合せて多くの文様構成を展開している。中平遺跡のものはAの縄文地文を持つものでは①軌軸文・六角形文＋縦位半隆起線文（等間隔）で，Bの縄文地文を持たないものでは②縦位

半隆起線文のみ（密接），③軌軸文・六角形文＋縦位半隆起線文（密接・等間隔よりもやや狭い），④印刻蓮華状文・六角形文・縦位半隆起線文（密接）の構成のものが認められる。が，縄文地文を持つものは少なくなり，横位無文帯を形成していない所にも特徴がある。この新保式の口縁部から徳前C，中平式にかけて口縁下部に引かれる縦位半隆起線文の間隔の変化やその地文の有無については，本遺跡第4次調査報告で指摘されているが，[2] その中平遺跡のものは縄文地文や無文地に等間隔に引くものは少なく，無文地に密接して引くものが主体となっている。ただ，その密接させて引いているものも半隆起線文の断面形が丸くなるもの（1，9～11，13，14，15，17）と角ばるもの（2～4，8，16，18）があり，その丸くなるものでも半隆起線文の中に地文部を残すものも認められる。また，深鉢（キャリパー形）③（9，10）の口縁上端から縦位に数条の半隆起線文を密接して引くものは他に類例がなく，本遺跡のみのものであろう。その中で深鉢（キャリパー形）④（19）としたものは，内湾する口縁部の縄文地文をヘラ先で切っている。これに類似するものは本遺跡第4次調査第3群1類B（39）や羽咋市寺家遺跡[3]にあり，第3次調査での沈線を引くものは断面形がやや異る。第4次調査や寺家遺跡のものは口縁部が丸く内湾し上部がまっすぐに立ち上るもので，頸部内面に稜線を残し，胴部が裾窄まりの器形を呈する。その胴部文様は先に縄文地文を施した後，縦位方向に半隆起線文を引き，その縦長の区画内に斜位のヘラ先による沈線を入れている。これらの胴部文様は，口縁部の突起や爪形文を加えた隆帯の垂下部分に対応して縦長の無文部（縄文地文を磨消したもの）を4個所に入れ，文様を縦に4分割していた可能性が高い（これは3単位まで確認できる）。また，この形態の口縁部と類似するものには，縄文地文を半截竹管で浅く切るものがあり，その口縁部の屈曲度合や口縁部上端の半隆起線文にややあらい爪形文を持つなど共通性が認められる。第3次調査では口縁部から底部にかけて残る土器が少なく，この種の形態を呈する口縁部は第3群1類（16），同1類A（23），同1類K（29，30），第4群1類A④（48，49），同群1類B④（68）などのものが認められる。胴部文様も第4次調査の第3群1類Bに類似するものは中平遺跡の深鉢胴部A②（31～33）やこれに近いA③（34）がある。第3次調査では第8群1類①（211），同群1類②（248），同群3類③a（212，222）は地文上を半截竹管の沈線で切り，同群3類④a（234，241）ではヘラ先で切っている。また，同群3類⑤b（260，289～291）では縦位の半隆起線文と無文帯や胴部文様を上下に分割する横位の半隆起線文を持っている。胴部の地文部を切るのに半截竹管やヘラ状具の2種類の施文具が使われる。その半截竹管を施文具としている土器群の出土している遺跡に富山県長山遺跡がある。その出土土器群は厳照寺Ⅰ式や中平式の段階に位置づけられている。[4] そのⅠ群1類A，1類Cのキャリパー形口縁の形態は第4次調査第3群1類B（39）と類似し，胴部も裾窄まりのもの，同筒形のもの，胴下部で脹らむものが認められ，口縁部や胴部の縄文地文を半截竹管で浅く切っているのが特徴といえる。また，口縁上端を横走する半隆起線文には爪形文を加え，右流の隆帯上には同様な爪形文を加えるなど，徳前C遺跡のものと関連性が強いようである。この種の口縁部には軌軸文や横位無文帯を持つものは無く，上部に細く地文縄文を残すものが僅かに存在する程度である。一般的に縄文地文上に横走する半隆起線文と縦位の沈線を引き，新保式第Ⅱ1型式の系統内にこの種の系譜を引くものが，軌軸文を持つものと別系譜として存在し，長

山遺跡ではそれが主体となっている。この系譜のものが次期以降のいわゆる新崎式の深鉢である鳥屋町花見月遺跡[5]，宇ノ気町上山田貝塚[6]，志賀町堀松貝塚[7]などの土器群へ器形をやや変化させながら発展するのであろう。中平遺跡ではその長山遺跡で主体のものが少なく，徳前C遺跡で軌軸文やこれから派生した印刻蓮華状文を持った系譜のものが主体といえる。そこに両遺跡で主体となる土器群の系譜に違いが認められる。胴部文様でも中平遺跡や徳前C遺跡では縄文地文を半截竹管やヘラ先で切り半隆起線文を引き直すものは存在するが少なく，長山遺跡では縄文地文を半截竹管で切り半隆起線文を引き直すものが主体となっている。

円筒形の深鉢は大型化して厚手の作りのものが目立ち，それは徳前C遺跡第4次調査第6群3類Aからの系譜を引くものと推定される。第4次調査報告で徳前C遺跡と中平遺跡の時期差を示す特徴を指摘されているが，[8]それと伴に口唇部の肥厚化と胴部の右流れ突起貼付，さらに胴部の木目状撚糸文へ半隆起線文が垂下することも認められる。その中で深鉢（円筒形）②の（23)は横走する半隆起線文間に中を正位の格子目状にした印刻蓮華状文を持っている。これなどは徳前C遺跡第3・4次調査出土の深鉢の土器群より器形的にも文様的にもそれは新しい。中平遺跡（円筒形）③の（22）は形態的にも類例が乏しい。同じく深鉢（円筒形）④の（24）は小型の深鉢であるが，これなどは第3次調査第6群4類B（156，158）や第4次調査第6群4類（257～259）からの発展で，第4次調査第7群5類(322)と時期的に近く，胴部を格子目状文にするかしないかの違いではないかと推定される。特に中平遺跡のそれは胴部の縦位半隆起線文を同じ幅の半截竹管で切って正位格子目状文としている。この正位格子目状文を持つものは徳前C遺跡や中平遺跡でも多く，長山遺跡ではかなり少ない。長山遺跡ではこの円筒形でも縦長の器形を呈するものがあり，中平遺跡では存在してはいない。この種の深鉢は第3次調査第4群土器3類B①(136）との関連性が推定されるもので，口縁部の無文帯から下段の半隆起線文間に「し」の字形をした突起に軌軸文等を加え，胴部縄文地文上に縦位半隆起線文を引き，さらに胴部文様を上下に分割する横位半隆起線文を引いている。長山遺跡ではこの「し」の字状の突起が半円形のものに変化して胴部側へ降下し，縄文地文を半截竹管で縦に切り，その後縦位半隆起線文を引く手法へと変化している。その場合胴部文様を上下に分割する横位半隆起線文を引くものは認められない。徳前C遺跡では縄文地文や無文地に縦位の半隆起線文を引き，さらに胴部文様を上下に分割する横位の半隆起線文を引くものが多い。縄文地文や無文地を半截竹管やヘラで縦位に切る場合胴部文様を上下に分割するものが少なく，長山遺跡で主体的な文様は新しい手法といえるであろう。ただ，正位格子目状文のあり方では，中平遺跡でその器形の判明するもの少ないが，その破片の厚さや器形の反り等から判断すると第4次調査第6群3類Cに分類された深鉢と同様なタイプのものと推定され，そこにも徳前C遺跡，中平遺跡と長山遺跡間のつながりと相違点が認められる。

浅鉢では①（53）は縦位の半隆起線文で区画し，その上部に軌軸文や三角形の抉りを加え，その下部にはヘラ先による正位格子目状文を持っている。この種の文様を持つものは他に類例がなく，深鉢をイメージして作られたようにも窺われる。その器形や口唇部に短線を入れる手法は福井県古宮遺跡出土の浅鉢[9]との関連性が推定される。浅鉢②（54，55）もその口縁部の形態や文様構成から①と同様に深鉢をイメージして作られたように窺われる。この②（54，55）は胴部に三

角形の印刻を連続して施し，その頂点やその横からヘラ先や半截竹管の沈線を垂下させているもので，他に浅鉢でこの種の文様を持つものの類例は聞かない。先の古宮遺跡の土器[10]を介して長野県大石遺跡の土器群[11]との関連性もあるのではと推定している。深鉢では徳前C遺跡第4次調査第3群1類G（79），長山遺跡I群1類C（2）の他に穴水町新崎遺跡[12]，加賀市新掘川遺跡[13]の資料中に存在している。これらの土器群はいわゆる新崎式のキャリパー形深鉢で，先に指摘した花見月遺跡，堀松貝塚，上山田貝塚等出土の土器では蓮弁を半截竹管で表現し軸の長い蓮華状文を表出しているが，この徳前C遺跡第3群土器1類に含まれているものは，この系譜の土器に蓮華状文が施され始めた初期段階の状況を示すもので，徳前C遺跡第4群土器1類や中平遺跡で軌軸文等の文様を持つものとは別個の系譜と考えられる。中平遺跡をもって軌軸文等で飾られたキャリパー形の深鉢や浅鉢が盛行するのが終り，以後キャリパー形深鉢でも徳前C遺跡第4次調査第3群1類B（27，29，31，39，40）同1類C（63，65），1類G（79），長山遺跡I群1類A，同Cの軌軸文を持たないタイプの深鉢が主流となって行くのであろう。反対に円筒形の深鉢では中平遺跡のものは以後蓮華状文を持ちバケツ形が釣鐘形を呈する深鉢へと変化するのであろう。存続時期と地域を異にする徳前C，中平，長山の各遺跡であるが，器形と文様によって徳前Cと中平，徳前Cと長山，徳前Cと長山という結びつきの図式が描けるようである。それはかなり錯綜した状況を示しているが，その土器群の変遷の一端が窺えたのではないかと思っている。ただ，そのため第3次調査出土の土器群については一部を除いてほとんど触れることができず，この時期を概観的に見るといってもかなり荒削り的なものとなってしまった。いずれその欠を補いたい。本稿作成にあたり西野秀和，南　久和，加藤三千雄，小島俊彰，神保孝造の各氏から有益なる教示をいただいたが十分生かせなかったことをお詫びし，感謝の意を表しておきたい。

（註）

(1)　小島　俊彰　1977年　「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」　石川考古学研究会々誌第20号　P37～54

(2)　西野　秀和　1983年　「第5章　第3節　縄文時代について」　『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅳ）』石川県立埋蔵文化財センター　P125，132

(3)　米沢　義光　1986年　「第5章　祭祀・砂田地区の縄文・弥生時代　第一節　縄文時代の遺構と遺物」『寺家遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

(4)　島田　修一　1985年　「（3）　出土遺物　A　土器」　『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』　八尾町教育委員会　P39，40

(5)　宮下　栄仁　1984年　「第Ⅳ章　出土遺物　第1節　縄文土器」　『花見月遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　P30－4

(6)　小島　俊彰　1979年　「第5章　縄文土器・土製品　第1節　縄文土器」　『上山田貝塚』　宇ノ気町教育委員会　P63－22

(7)　高堀勝喜他　1955年　「石川県羽咋郡堀松貝塚調査報告」　石川考古学研究会々誌第7号　P67－24

(8)　註1と同じ　P129，132

(9)　渡辺　誠・編　1978年　「第3章　出土遺物1・土器　第4節　Ⅳ群土器」　『福井県古宮跡発掘調査報告書』　勝山市教育委員会　P57

(10)　註8と同じ　P50－22～28

(11) 土屋　積　1976年　「Ⅲ　調査遺跡　6　大石遺跡（ＳＯＩＢ）」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――茅野市・原村その１，富士見町その２――第 122 図第18号住居址出土土器８，12，第 176 図第20号住居址出土土器１～４など，なお，同遺跡では北陸系の土器も出土している。土壙 201 では軌軸文と六角形文を持つ土器が五領ケ台式系かと推定される土器と伴出しており，注目されるものといえる。

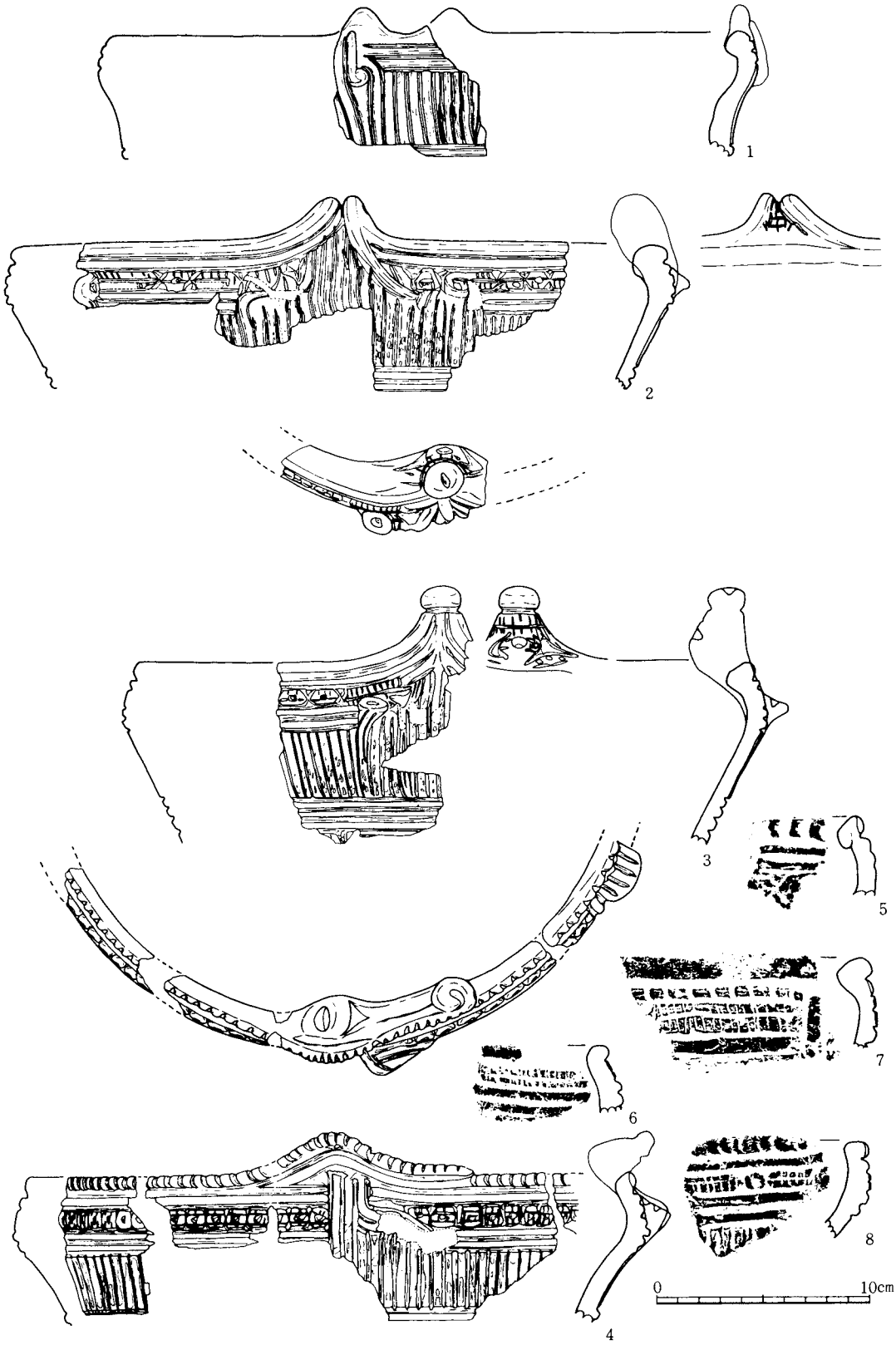
(12) 沼田啓太郎拓影集による。

(13) 註12と同じ

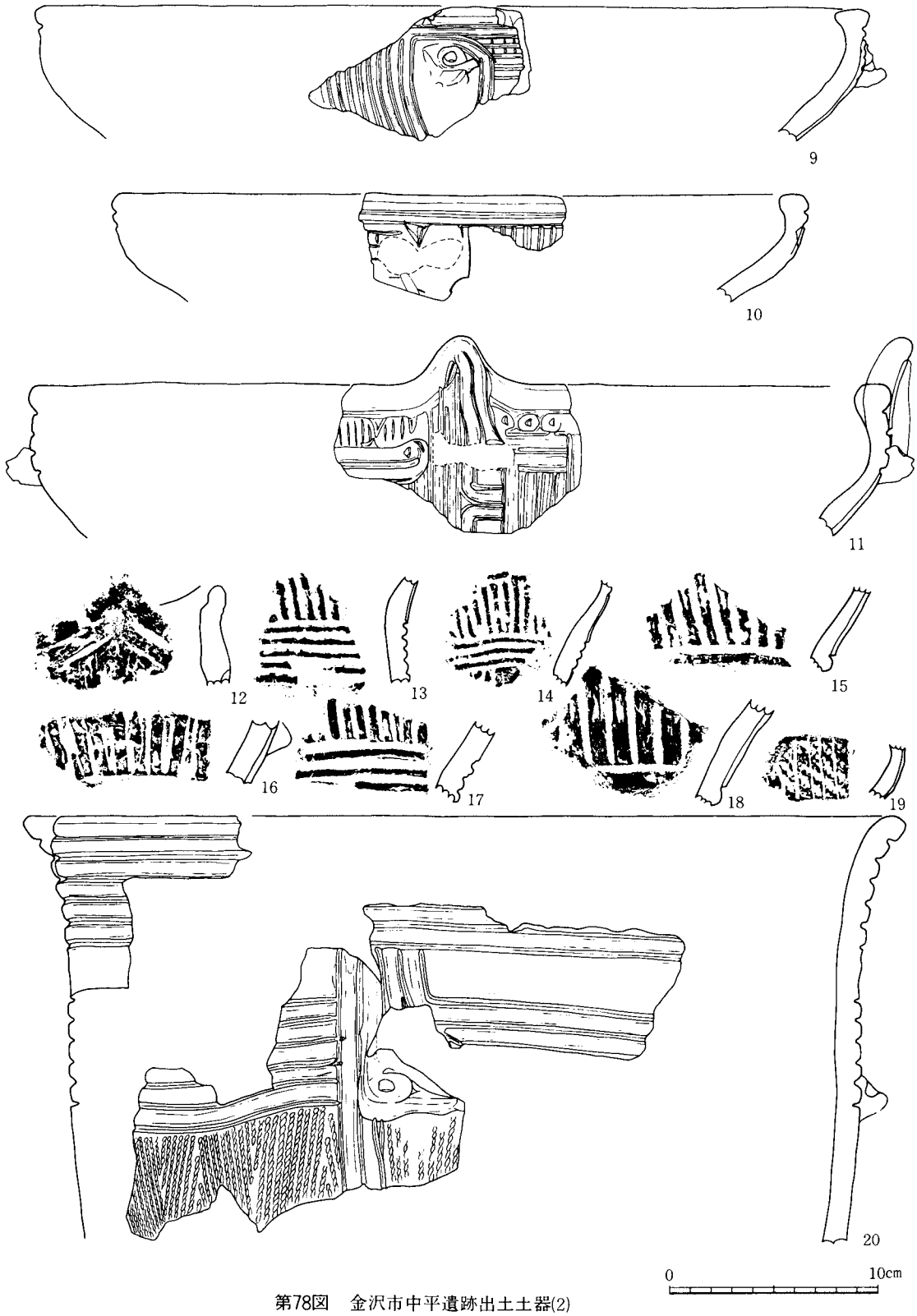
参　考　文　献

神保　孝造　1977年　「３　遺物　縄文時代の土器」　『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』　Ｐ７～16

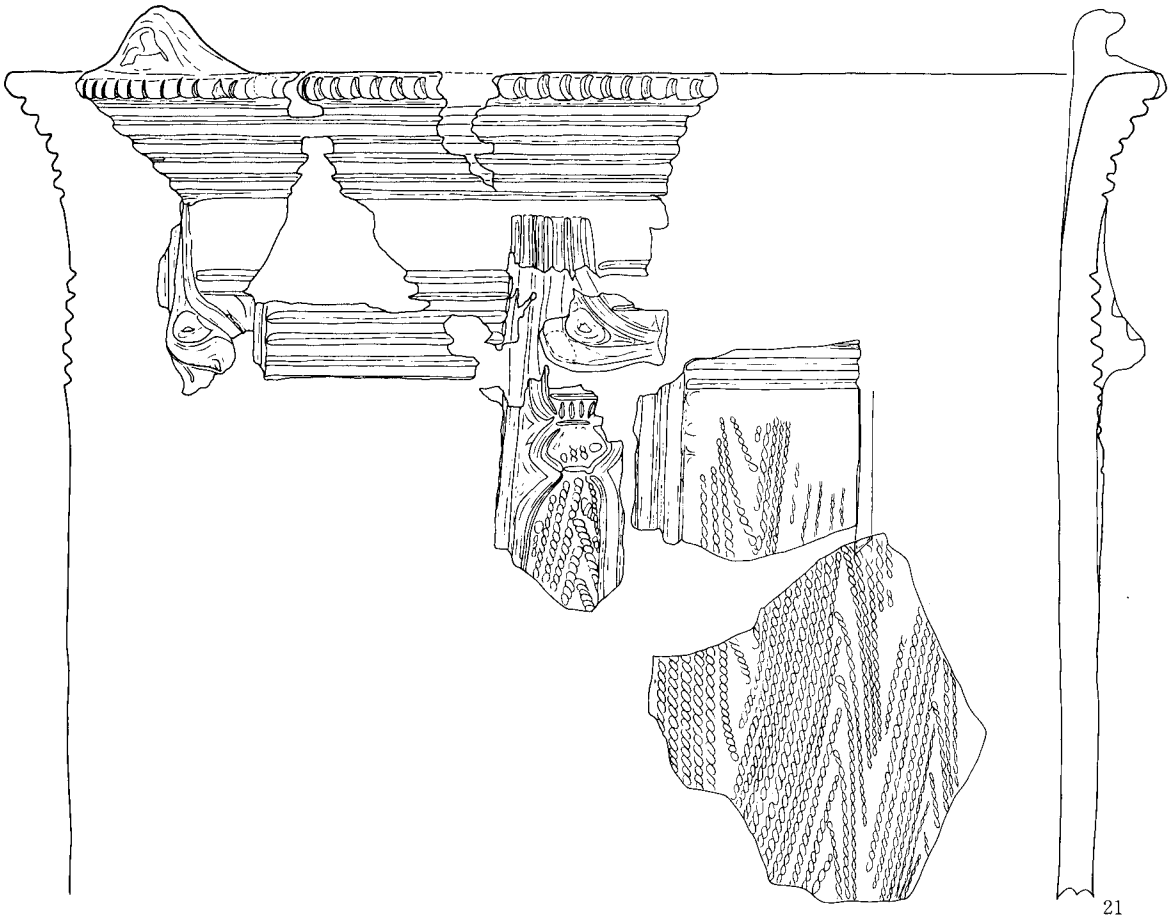
西中遺跡発掘調査団　1982年　『西中遺跡』　美山町教育委員会

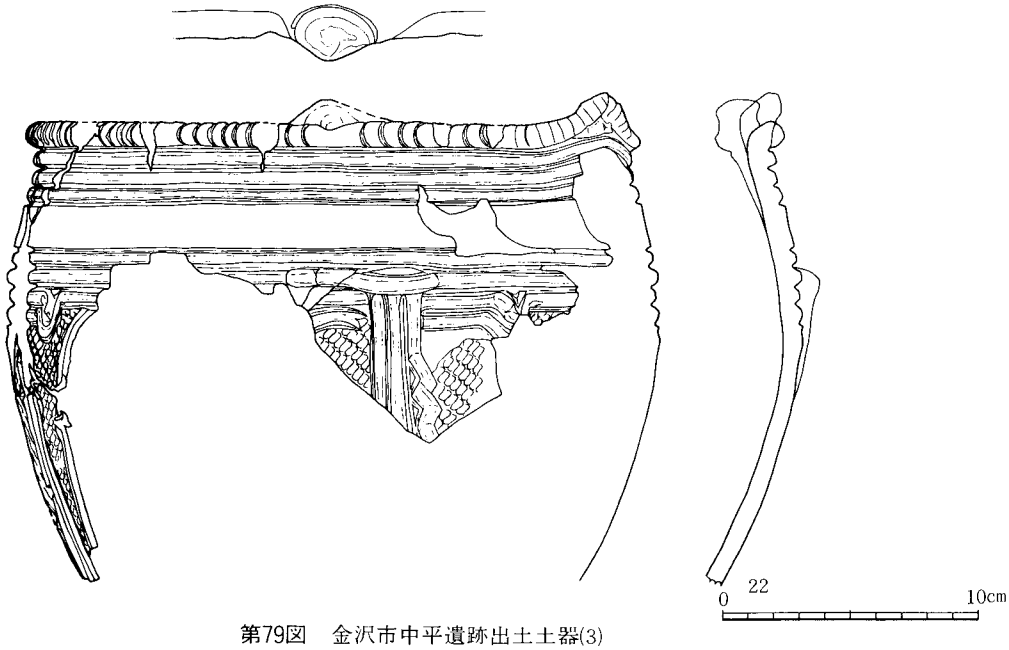


第77図　金沢市中平遺跡出土土器(1)

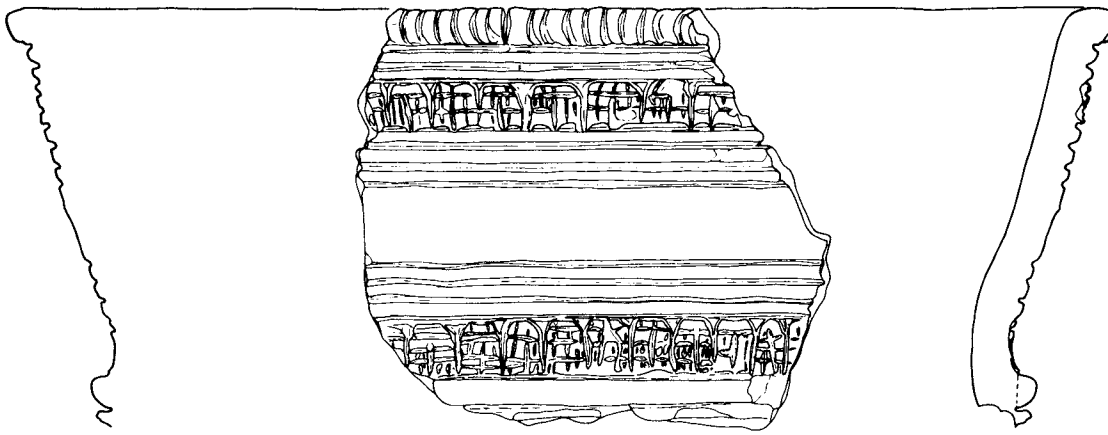


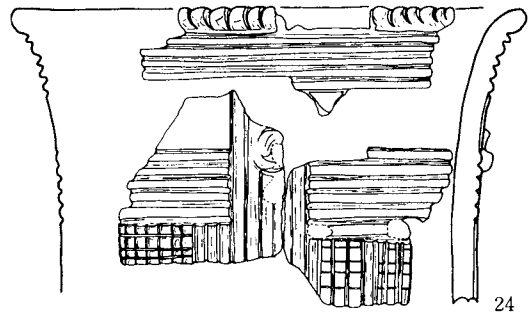
第78図　金沢市中平遺跡出土土器(2)

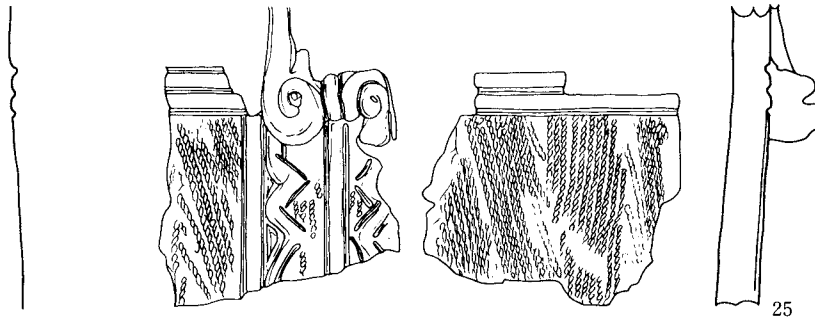


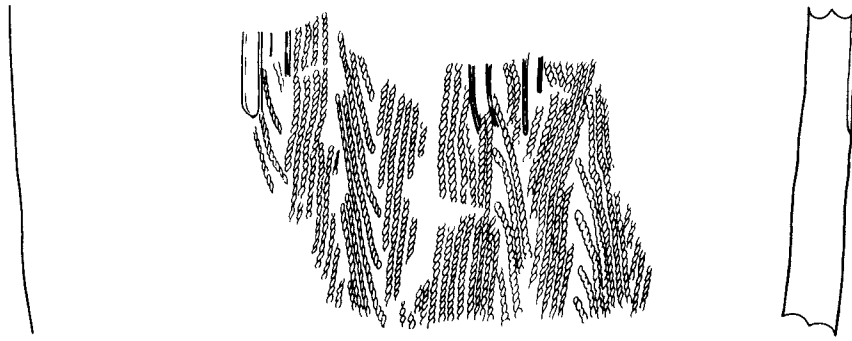


第79図　金沢市中平遺跡出土土器(3)



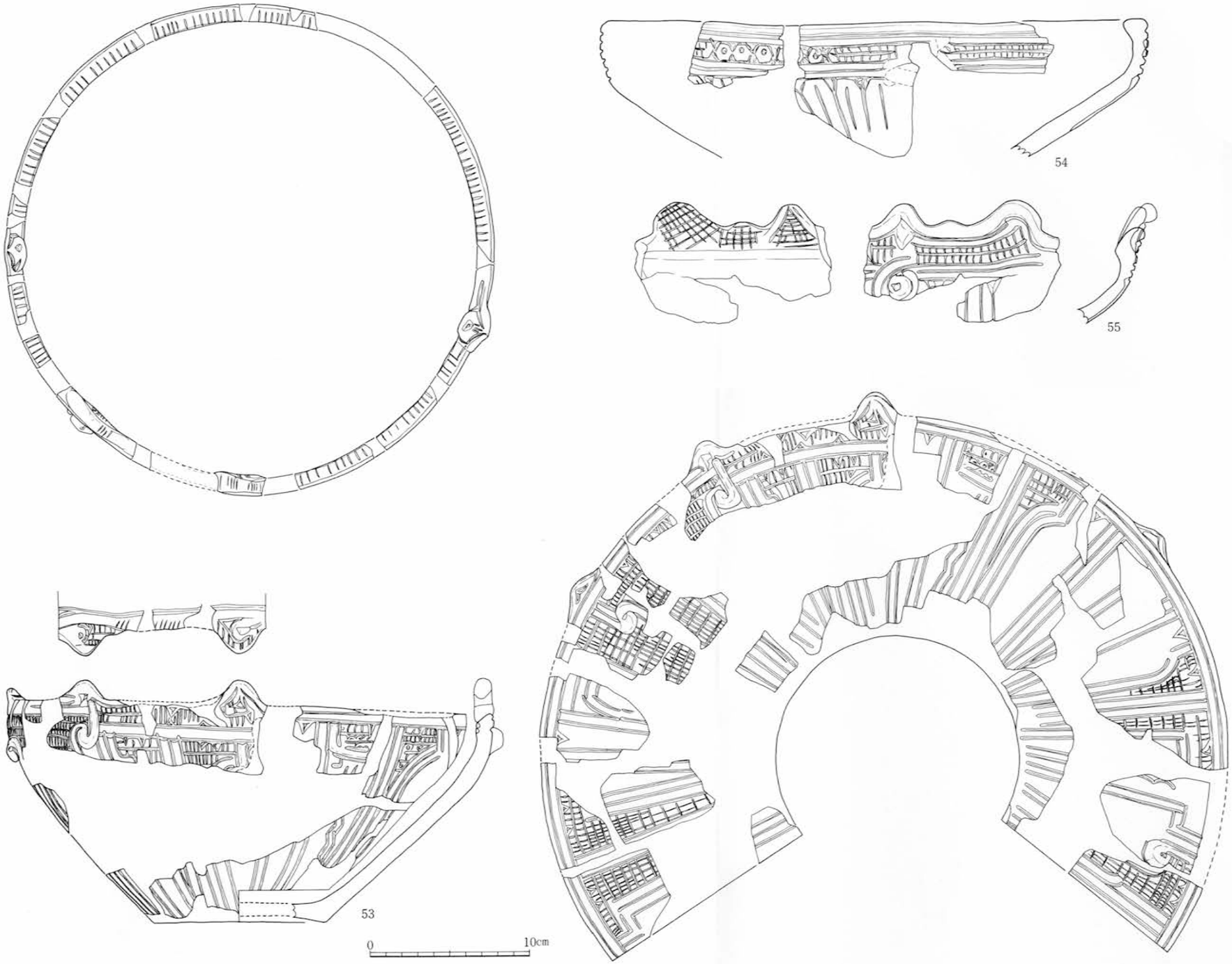




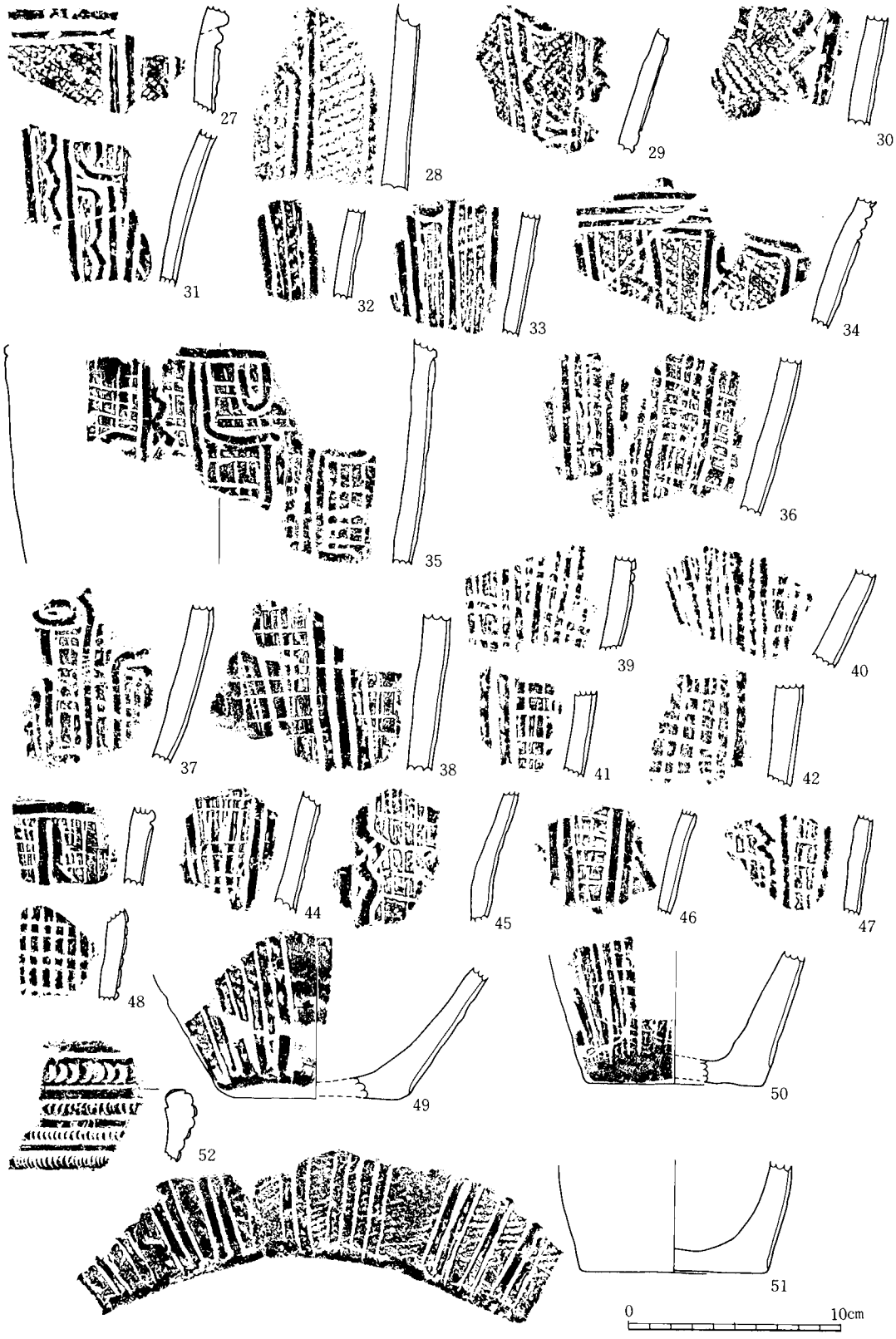


0 10cm

第80図　金沢市中平遺跡出土土器(4)



第81図　金沢市中平遺跡出土土器(5)



第82図　金沢市中平遺跡出土土器(6)

第３節　弥生・古墳時代の遺物

徳前Ｃ遺跡の第２・３次調査においても第１次調査で下層として扱った包含層から弥生時代後期から古墳時代前期の土期が多量に出土した。第２次調査の74～76ラインで溝状遺構からまとまって出土した土器を除いては，遺構を確認できなかったため，第４章第２節でも包含層からの出土土器として扱った。『報告書Ⅰ』[(1)]において，湯尻は，当該期の土器を分類し，Ⅰ～Ⅲ様式を設定した。当時，能登地方における良好な資料に恵まれておらず，加賀地方における土器編年の成果をふまえて行った作業である。また，全て包含層からの出土資料でもあったため，土器の様相に時間的な幅をもつ資料であるという前提から様式という用語を用いたのであった。羽咋市柳田ウワノ遺跡Ａ溝状遺構出土土器を基本にⅠ様式を抽出し，金沢市塚崎遺跡の出土土器（塚崎Ⅱ式土器）とそれに続く金沢市月影遺跡出土土器に類似する土器をⅡ様式とした。また，鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡Ａ群土器に類似する土器をⅢ様式として分類したのである。『報告書Ⅳ』[(2)]で考察を進められた浜野伸雄氏は，さきの湯尻の分類を継承しながら，当該期における能登と加賀の土器にみられる地域差を指摘し，十分考慮した上で，なおかつ能登地域での資料での乏しさからⅠ様式を羽咋市柳田うわの遺跡～七尾市奥原遺跡併行期，Ⅱ様式を津幡町谷内石内遺跡～金沢市月影遺跡併行期，Ⅲ様式を金丸宮地遺跡Ａ群土器併行期に変更対比された。また，浜野氏は各器種の細分作業を進めたうえで，それぞれの系譜を把握する作業を同時に行われている。

第２・３次調査で得られた土器をみると，第２次調査区の110～120ラインを中心とする遺物包含層と第３次調査区の包含層では，Ⅰ様式とした土器にⅡ・Ⅲ様式とした土器が混存するあり方を示して第１・４次調査の出土状況と一致する。しかし，74～76ライン溝状遺構と60～62ラインの遺物包含層では，Ⅱ様式の土器を主体とし，60～62ラインではこれにⅠ様式の土器が混在している。これは，各々の調査箇所における遺物包含層のあり方を反映したものといえる。

(1)　徳前Ｃ遺跡第２・３次調査出土土器の分類

『報告書Ⅰ』で湯尻は出土土器をⅠ～Ⅲ様式に分類し，それぞれの編年的位置付けを行った。第２・３次調査での出土土器をみると，すでに述べたようにこのⅠ～Ⅲ様式に基本的には分類が可能である。ところが最近の能登地方における当該期の資料の増加は，湯尻の行った様式区分では理解するのに混乱を生ずる結果を生むこととなってきている。これを避けるためには，様式なる用語の用い方とその定義を明確にすべきであるが，『報告書Ⅰ』を作成した時点での様式の理解は個々の様式土器がある時間幅をもつ土器群であるという前提で，将来型式に細分されていく要素をもつ土器群であると考えたからに他ならない。しかし，各々の土器群で構成される様式が間断のない時間的序列でもって組まれるべきであるならば，徳前Ｃ遺跡第１次調査で報告した土器はその様式間に時間的空間が存在することは，違いないのであり，そこでの様式の用語は不適切であったことになる。従って本書では，徳前Ｃ遺跡の出土土器の中でその連続した時間的序列を追うことができないという点から，『報告書Ⅰ』で用いた様式の用語を撤回し，替わって「ある時間幅をもつ土器からなる群」という意味を含めて群という用語を用いることとした。

第１群土器

壺A_1・A_2・A_3・A_4・A_5・C・E・G，鉢A_1・D，甕A_1・A_2・B_1・D_2・D_3・E_1・E_2・E_3，高杯A_1・A_2・A_3をまとめた。壺A類としたものは，いわゆる長頸壺に属するものであるが，A_1～A_3の長胴のものと，A_4・A_5の体部がやや球状をなす長胴短頸壺に分けられる。壺A_1は柳田うわの遺跡や鹿首モリガフチ遺跡T18出土土器[(3)]にみられる。特に壺A_1・A_3・A_5は柳田うわの遺跡[(4)]の例と似る。壺B類は例を見ない個体であるが，A_5類と同様に体部下半を別に接合する方法をとっており，鹿首モリガフチ遺跡T18出土土器と共通する製作手法をとる。本遺跡での壺A，B類には煮沸に用いられた土器があり，器種と機能の区分が十分でなかったことを示している。壺Cは広口壺の口縁部とみて区分したのであるが，第4次調査で出土した器台形土器Cや器台の脚部と分類されたものと殆んど区別ができない。その点からこの中にも器台として別に扱うべきものを含んでいる可能性がある。壺E類は甕D・E類とともに近江地方の影響を受けた土器である。壺Gはいわゆる装飾壺の系譜におかれる器種で，後には壺HやIに発展していくものと考えられる。鉢A類は弥生時代後期の遺跡から多く出土する器種である。A_1としてまとめて扱ったが，体部が丸味をもつタイプは後期後半でも新しい様相としてとらえた方が良いかも知れない。鉢D類は小形土器で富山県上市町江上A遺跡で多くの出土例がある。甕A_1は有段口縁部に凝凹線をもつものであるが，甕B_1類よりは先行する形態と考えられ，金沢市西念・南新保遺跡[(5)]や富山県江上A遺跡[(6)]などの例からみれば後期前半まで上げて良いものもある。甕A_2・B_1は鹿首モリガフチ遺跡T18出土土器に類品がある。甕D・E類は特徴的な土器である。甕D類は第1・4次の調査でも他の遺跡の出土例に比して多く出土しており，本遺跡での土器組成の1つの特徴といえる。近江地方の影響を受けたものとみているが，胎土・焼成ともに良好な搬入土器と思われる破片もわずかながら出土している点でも留意したい。高杯A_1は，すでに説明したように台杯鉢とした方が良い器種である。A_2類も高杯とするより台付鉢とした方が良いかも知れないが，断片的な資料であることに加え類例にも乏しい器種である。高杯A_3と脚部は，柳田うわの遺跡や鹿首モリガフチ遺跡から出土している。

第1群土器は，甕形土器などに一部古相を示すものを含むが，その主体となるものは弥生時代後期後半に位置付けられ，柳田うわの式土器（羽咋市柳田うわの遺跡溝A出土土器標式）[(4)]と後続する鹿首モリガフチ式土器（志賀町鹿首モリガフチ遺跡T18調査区出土土器標式）[(3)]にまたがる時期に考えておきたい。

第2群土器

徳前C遺跡第2次調査の74～76ラインで検出した溝状遺構からの出土土器および60～62ライン包含層出土土器の一部をもってまとめたい。壺D_1・F_1・F_2・F_3・F_4・H_1・H_2・H_3・I・J・K・L・M，鉢A_2・C_1・C_2・C_3，蓋A_1・A_2・B_1・B_2・B_3・B_4・C_1・C_2，甕B_3，B_4・B_5・B_6・B_7・B_8・B_9・B_{10}・B_{11}・D_5，甕F_1・F_2・F_3・F_4・F_5・F_6・F_7・F_8・F_9・F_{10}・F_{11}・G_1・G_2・G_3・I_1・I_2，高杯B・C_1・C_2・D・E・F，器台B_1・B_2・B_3・D・E・Fがこれに該当する。本群の土器は，74～76ラインの溝状遺構からの出土土器をもってその実体が一層明らかとなった一群で，特に別項を設けて後述したい。

第3群土器

壺N・O，鉢B，甕H_1・H_2，器台Gを第3群とした。しかし，資料のいずれも単品の資料であり，内容的にもまとめて扱える資料とはいえない。従ってその時間的幅も決め難く，むしろ個別土器において若干補足しておく。壺Nは小形丸底壺の底部。甕H類とほぼ同じ頃の古墳時代前期の土器である。壺O類は古墳時代前期から中期の前半頃に比定されようか。甕H_1は『報告書Ⅳ』で浜野氏が甕形土器Wとしたものに類する。甕H_2はいわゆる布留式に併行する土器であり，図示した他にも別個体の口縁部小片2点がある。能登地方における布留式甕（加賀でいう高畠式）(7)の最初の確認例である。器台G類は器受部に透穴をもつ。この種の器台は最近わずかずつながら類例が増えてきており，第2群土器とほぼ同時期とみられる鹿首モリガフチ遺跡竪穴住居跡出土品の中にも認められており，その初源は月影II式期まで上りそうである。

(2) 第2群土器について

前項で略述した第2群土器について，第2次調査74～76ライン溝状遺構からまとまって出土した土器を中心にまとめておく。まず，溝状遺構での出土状態から判断して，この資料が比較的良好な一括資料として扱える資料とみており，しかも完形品もしくは完形に近い状態に復することのできた土器が多いことがあげられる。含まれる器種には壺，鉢，蓋，甕，高杯，器台の基本的な器種を網羅しており，しかもそのバラエティに富む点でも今後の研究の基本的な資料となりうる土器であると考えている。溝状遺構からの器種別構成比は第3表にまとめたが，甕が全体の約½弱を占め，その甕の中でもF類がその約66%を占める。

第3表　74～76ライン溝状遺構出土土器器種別構成比

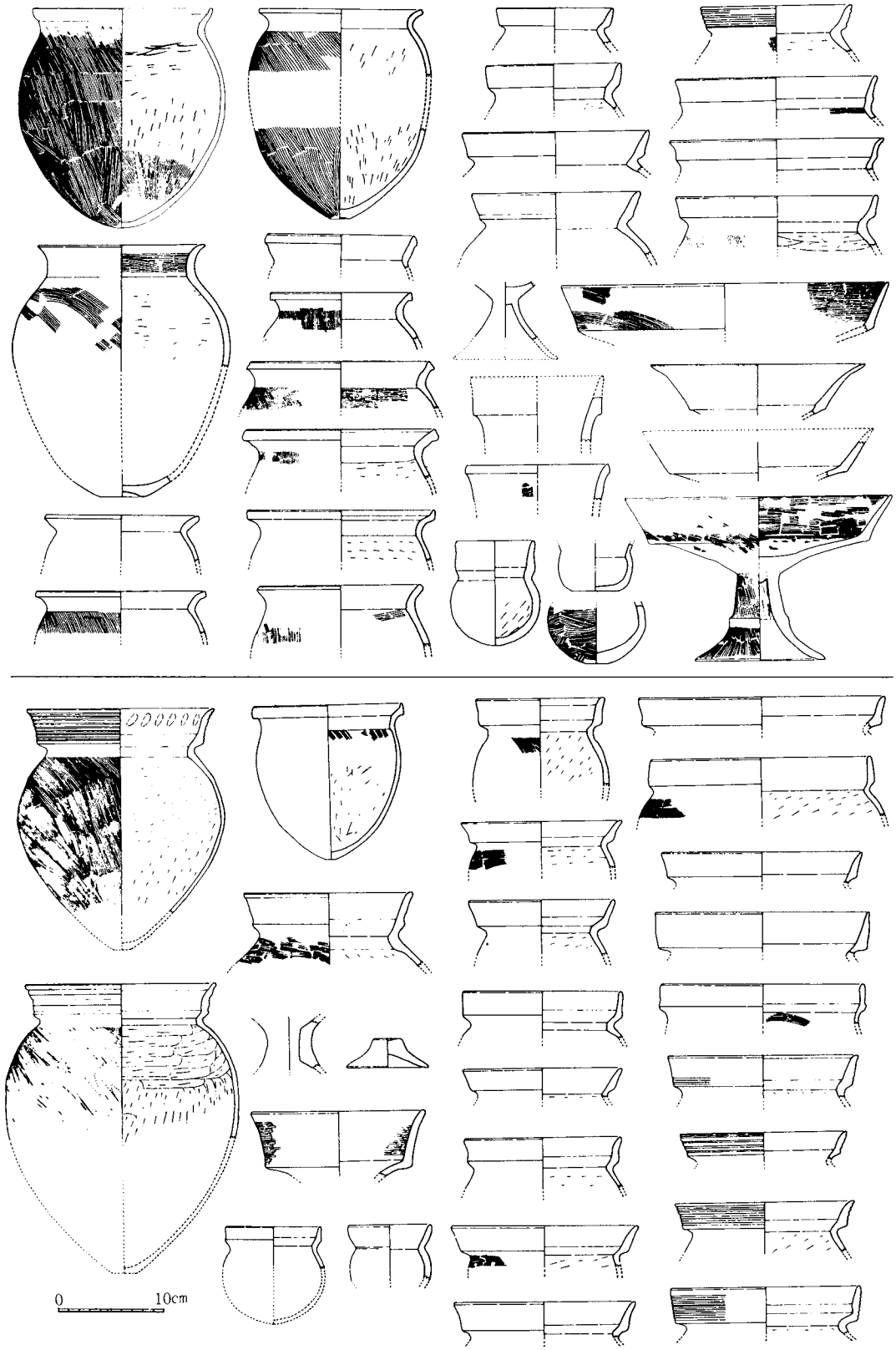
器種		構成比(%)	個数	実測個数
甕	B	10.0	34	17
	D	0.3	1	1
	F	31.7	108	29
	G	5.8	20	7
甕小計		47.8	163	54
壺		10.0	34	24
鉢		1.4	5	5
蓋		3.5	12	8
高杯		10.9	37	15
器台		11.2	38	16
底部(他)		15.2	52	9
合計		100.0	341	131

また，壺H・I・L・M類や高杯・器台に赤彩品が多く，類別器種ごとでは80%を超えるような高率となることも一つの特徴といえる。徳前C遺跡の第2群土器とするものは，北加賀でいう月影II式期の範疇でとらえられる土器群とみているが，近年の調査資料の増加に伴って加賀地方と能登地方における当該期の土器の様相にかなりの違いが認められることも指摘(8)されてきている。

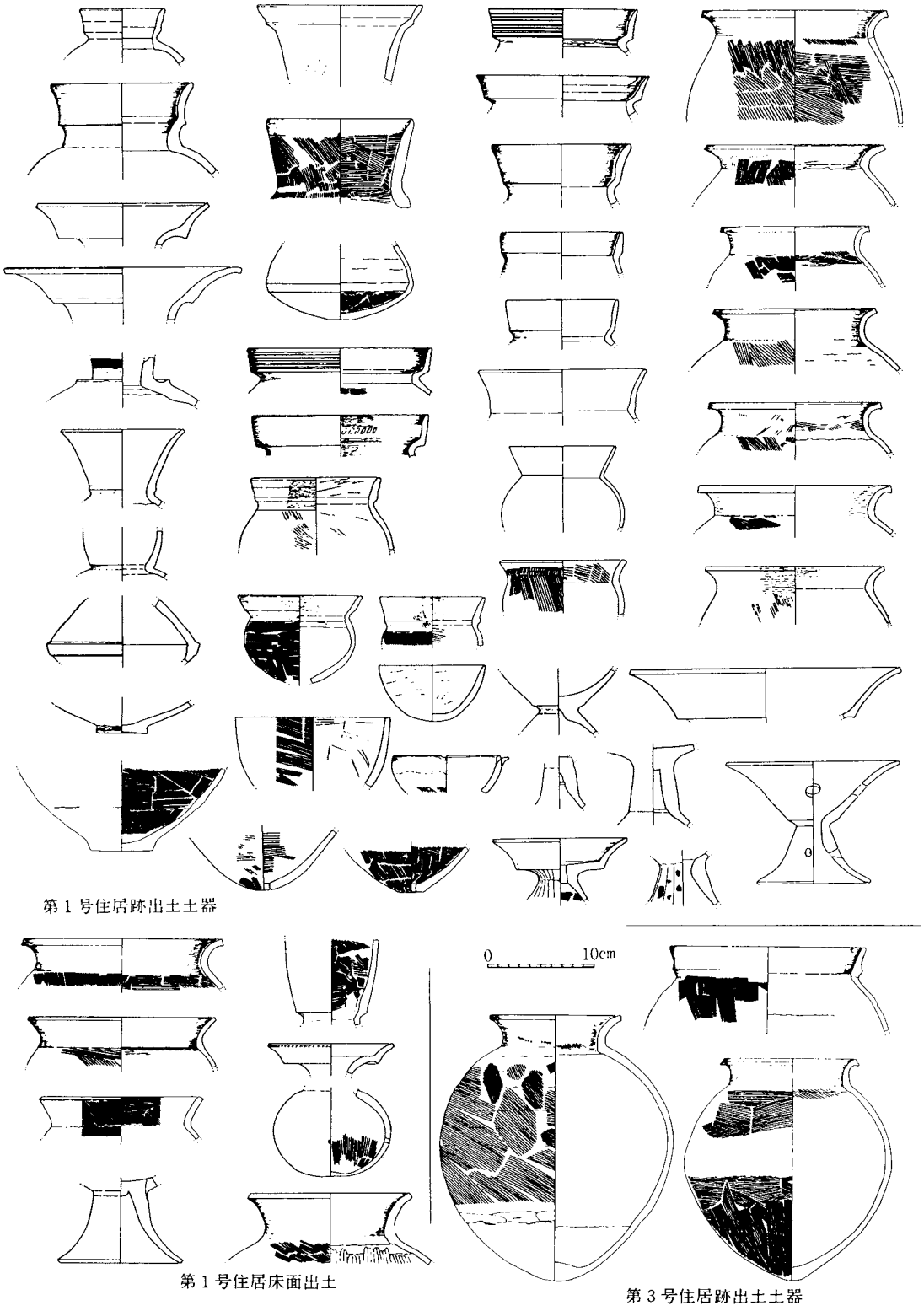
徳前C遺跡第2群土器の内容をみると，壺D_1は弥生時代後期後半の富山県上市町江上A遺跡の出土土器の壺A_1類に系譜を追える。壺F類は有段口縁壺で口縁帯をヨコナデする。第2群土器の壺でも最も個体数の多い器種であるが，口縁部内面の段が明瞭なF_1・F_2と内面が直線的であるF_3・F_4類がある。これは甕B_2～B_6と甕B_7～B_{13}のあり方と同一にとらえておきたい。壺H類は有段口縁のいわゆる装飾壺で，台付のH_1・H_2と小さな平底となるH_3がある。この二種の壺は別系統の類とみており，口縁部が直線的に開き有段部がその痕跡をとどめる状態となったH_3類は，次の古府クルビ式への流れを濃くもつ器形とみたい。壺K類も有段口縁で赤彩された小形壺であるが体部が球状を呈し，弥生時代後期以後の系譜の中でとられるより，新たな器形への転換的な要素を窺わせる土器である。壺Lは畿内系の壺で，古府クルビ式期への系譜をもつが，出土点数はわずか1点である。壺Mも特徴的な小形壺で，出土点数は全体でも2点しかない小数

器種である。鉢は器形によって細分したが，出土点数は少ない。包含層出土のA$_2$・C$_1$と溝状遺構出土のC$_2$，C$_3$がある。C$_3$は無頸壺の類として扱うべきかも知れない。C$_3$を除いて小形品が多く，鉢そのものの小形化を示しているようである。甕は包含層出土のB$_3$のように北加賀における月影I・II式にみられるような有段口縁に凝凹線を施す甕（もっとも凝凹線そのものはかなり不明瞭で変形した状態である。）もごく少数存在するが，有段口縁甕の主体は口縁部に凝凹線をもたないB$_2$～B$_{13}$に分類した甕である。溝状遺構からの甕B類ではB$_2$・B$_4$の様に，口縁帯を強くヨコナデして擬凹線風な調整痕を残す甕も若干存在したが，明瞭な擬凹線を施す個体は，34点出土した中には皆無であった。これは当該期の北加賀における有段口縁甕の様相と全く異にするものであり，浜野氏や谷内尾氏によってすでに指摘されてきたところである。甕B類の中でも口縁部内面の段が明段なB$_2$～B$_6$と有線的なB$_7$～B$_{13}$に分けられることは先にも述べた通りであるが，全形の窺えるB$_{11}$などの甕では，器体の分割成形と体部下半に異るハケ調整が行なわれて，「くの字」口縁甕のF・G類との親近性を強く感じる。そこで先に壺F類での口縁部の形態差からやはり2分されることを指摘したが，有段口縁の壺や甕のうち，口縁部内面に段をもたない群が有段となる群とは別に系譜として存在する可能性が高いといえる。しかし，その出現の契機は有段口縁と「くの字」口縁の合体にあったことは十分予測されるところであり，この点からも第2群土器が古府クルビ式への傾斜を強く示す土器群であると考えられる。溝状遺構出土の甕のうち「くの字」口縁のF・G類の占める割合は78.5%の高率に達する。すでに加賀と能登の土器の様相差があることは触れたが，「くの字」口縁甕の多いことは，徳前C遺跡の溝状遺構の調査が限定されたものであったにせよ，そこに大きな違いを見ることができる。この傾向は，富山県大門町串田新遺跡[9]や滑川市本江遺跡[11]の住居跡出土土器にみる器種構成と似た状況を示している。調整も口縁部をヨコナデで面取りを行い，本部は外面をハケ，内面をナデた個体が多い。体部下半は分割形痕をとどめ，土器の製作手法においては鹿首モリガフチ式以来の手法をそのまま受け継いでいる。甕G類とした荒いハケ調整を行う甕も富山県本江遺跡出土土器と極めて類似する。本遺跡にみるような「くの字」口縁甕は，富山県から新潟県西半部[12]に広く，しかも甕の主体的器種として分布しているようであり，第2群土器の甕では北加賀地方との直接的な土器の対比が困難である程の違いをみせている。高杯はB～Fに分類したが，C類は畿内系の高杯とみられ，C$_1$は富山県大門町串田新遺跡第1号住居跡出土器に類例がある。器台はいわゆる小形器台に分類されるA～C類が存在しており，やはり古府クルビ式への強い流れを窺せている。

以上，徳前C遺跡第2・3次調査で出土した第2群土器について述べてきたが，吉岡編年の塚崎III式[13]，谷内尾編年の月影II式[14]の範疇に含まれる。しかし，北加賀と能登の当該期における土器の様相差は，擬凹線有段甕と「くの字」口縁甕の構成に端的に示される如く異なっている。このような前提を念頭に置きながら谷内尾氏の月影II式と第2群土器を比較してみると，徳前C遺跡第2群土器の方がより古府クルビ式に近い様相を窺わせるのであり，弥生後期後半以降の伝統的な器形や器種組成が大きく転換して古府クルビ式・高畠式＝布留式併行へと移って行く，まさに過渡的な土器群と言えるのではあるまいか。第82図に掲げた土器は富山県串田新遺跡第1号住居跡（下段）と第3号住居跡（上段）出土の土器である。中山氏は1号住居跡を塚崎I式の一部か



第82図　富山県大門町串田新遺跡出土土器（上段第１号住居跡，下段第３号住居跡）



第83図　富山県滑川市本江新遺跡第1・3号住居跡出土土器

ら塚崎II式，３号住居跡を塚崎II式からIII式にあてられている。湯尻は第２群土器の比較から，３号住居跡は吉岡編年の塚崎III式（＝月影式），１号住居跡は徳前Ｃ遺跡第２群土器に併行するものと考えたい。第83図は富山県滑川市本江遺跡第１号住居跡（上段および下段左）と第３号住居跡出土土器の一部である。すでに紹介したように本江遺跡の出土土器は，第２群土器の様相と極めて類似した一群と考えている。徳前Ｃ遺跡の第２群土器は，谷内尾編年の月影II式新段階に位置付けられるが，土器の小地域間における様相差が激しく直接的な対比は，特に口能登南部地区や富山県西部における資料の増加を待ってされるべきであろう。徳前Ｃ遺跡第２群土器の編年的位置を月影II式の新段階としたが，その様相そのものはむしろ古府クルビ式の方への様相を強めた土器群と理解しており，改めて二ツ屋式なるものの評価がなされるべきである。この点からすれば第２群土器はまさしくこの二ツ屋式の一部に該当する可能性が高いが，これも今後の資料の増加にまちたいと思う。

徳前Ｃ遺跡の土器群を次の様にまとめておきたい。

<table>
<tr><td>能　登</td><td>柳田うわの式</td><td>鹿首モリガフチ式</td><td>＋</td><td colspan="2">＋</td><td colspan="2">二ツ屋式</td><td>＋</td><td>宮地式</td></tr>
<tr><td>口能登の主要遺跡</td><td>柳田うわの溝Ａ</td><td>鹿首モリガフチT18
奥原2･3･4･6住</td><td>津向大杉崎</td><td colspan="2">柳田うわの２号住</td><td colspan="2">国分尼塚１号墳</td><td colspan="2">宮　地</td></tr>
<tr><td>徳前Ｃ遺跡</td><td colspan="2">第１群土器</td><td></td><td></td><td colspan="2">第２群土器</td><td></td><td colspan="2">第３群土器</td></tr>
<tr><td>北　加　賀</td><td>法仏Ｉ式</td><td>法仏II式</td><td>月影Ｉ式</td><td colspan="2">月　影　II　式</td><td colspan="2">古府クルビ式</td><td>高畠式</td><td>宮地式</td></tr>
<tr><td>越　　中</td><td>魚射･江上Ａ</td><td>江　上　Ａ</td><td>中山南1･2･5号住</td><td>串田新3号住</td><td>串田新１号住
本江1・3号住</td><td colspan="2"></td><td></td><td></td></tr>
</table>

土肥富士夫他『国分高井山遺跡』[16] 49頁表に加筆

（註）

(1) 湯尻修平『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ｉ)』　石川県教育委員会　(1978)

(2) 福島・西野・浜野・平田・藤『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅳ)』　石川県立埋蔵文化財センター (1983)

(3) 谷内尾・中島・田中・栃木・山津『鹿首モリガフチ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　(1984)

(4) 谷内尾晋司「第二節弥生遺跡　第二項柳田うわの遺跡」『羽咋市史原始古代編』　(1973)

(5) 宮本哲郎他『金沢市西念・南新保遺跡』　(1984)

(6) 酒井・宮田・狩野・久々他『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』　上市町教育委員会 (1983)，酒井・宮田・狩野・久々他『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品・総括編―』　上市町教育委員会　(1984)

(7) 橋本澄夫『金沢市高畠遺跡』　金沢市教育委員会　(1975)

(8) 文献２・３に同じ

(9) 橋本澄夫・高橋　裕他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(III)』　(1976)

(10) 中山修宏『串田新遺跡II』　大門町教育委員会　(1981)

(11) 小島俊彰「本江遺跡」『滑川市史考古資料編』　(1979)

(12) 横山勝栄他『国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書　内越遺跡』新潟県教育委員会 (1983)

(13) 吉岡康暢・小嶋芳孝他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』　(1976)

(14) 谷内尾普司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会　(1983)

(15) 浜岡賢太郎・吉岡康暢「加賀・能登の古式土師器」古代学研究32　(1962)

(16) 土肥冨士夫他『国分高井山遺跡』七尾市教育委員会　(1984)

図版1　遺跡周辺の航空写真

昭和48年10月24日撮影（セントラル航業株：撮影）

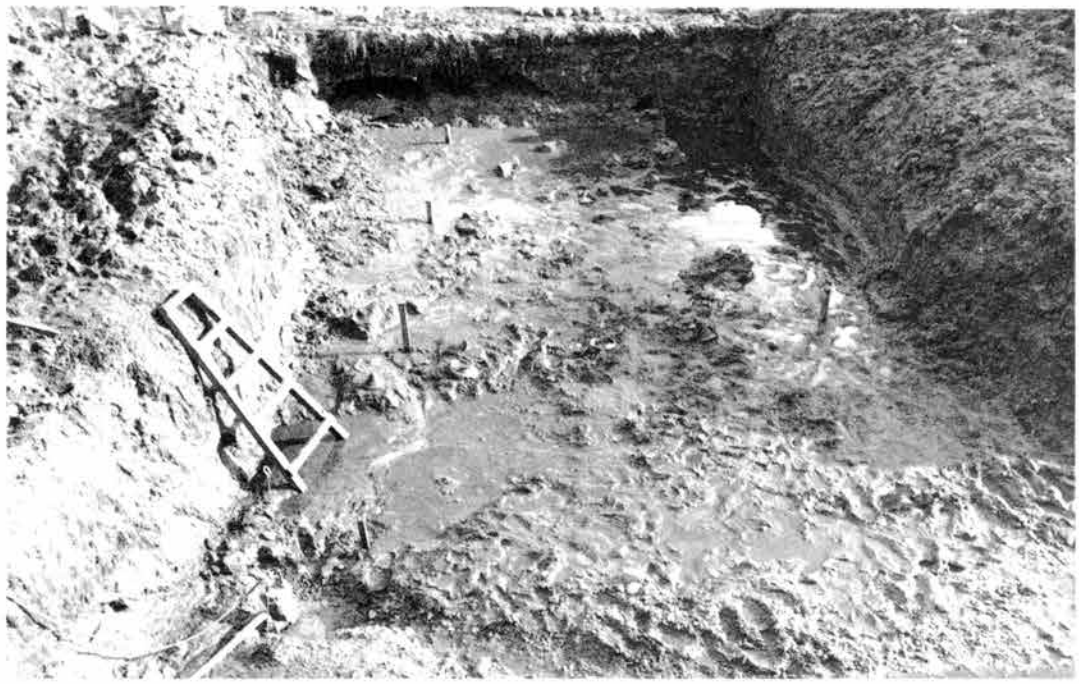
昭和53年10月26日撮影（セントラル航業株：撮影）

図版2　徳前C遺跡第2次調査　その1

←↑下層包含層の発掘

←↑土器の出土状況

図版3　徳前C遺跡第2次調査　その2



74～76ライン溝状遺構土器出土状況と完掘の状態

74～76ライン溝状遺構遺物出土状況

同　　上

図版5　徳前C遺跡第2次調査　その4

74～76ライン溝状遺構遺物出土状況

42図-6

42図-2

42図-9

42図-2

44図-28

43図-10

包含層出土土器（番号は実測図に一致する）

55図-2

44図-30

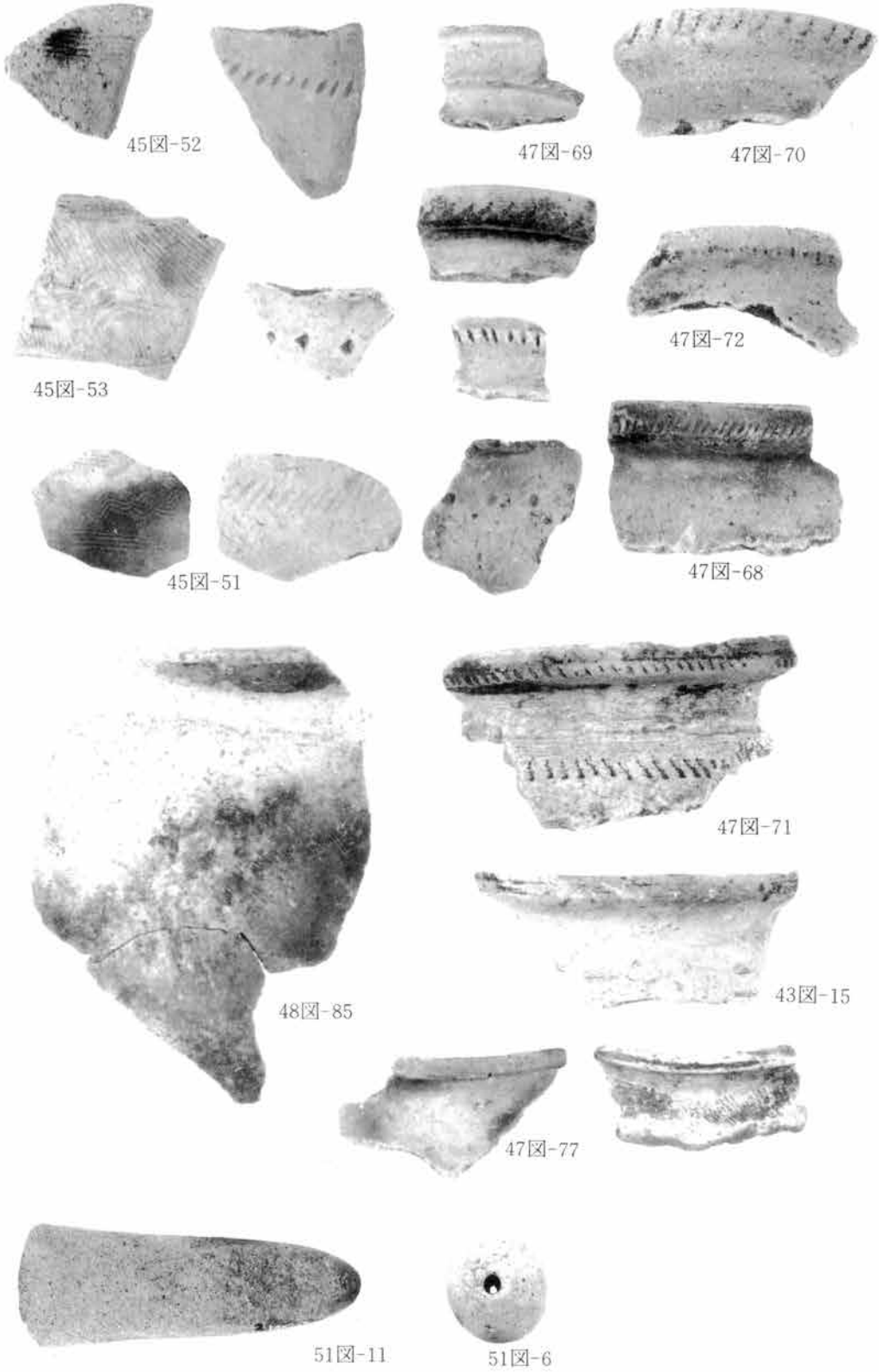
43図-17

45図-42

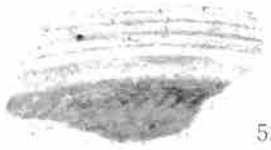
47図-80

47図-73

包含層出土土器（55図-2を除く）



包含層出土土器および石斧・土錘


52図-14

46図-55

52図-15

49図-99

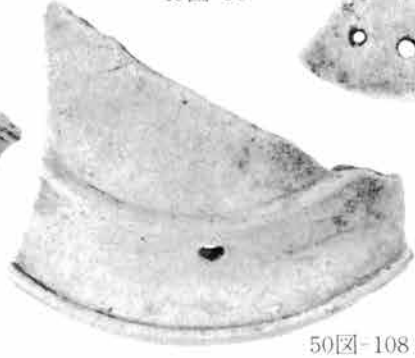
49図-100

50図-113

49図-98

49図-90

49図-103


50図-108

49図-93

包含層出土土器

45図-44

51図-2

45図-43

51図-3

48図-83

51図-8

48図-88

51図-1

包含層出土土器

55図-1

55図-8

55図-5

56図-12

55図-7

56図-13

56図-14

74～76ライン溝状遺構出土土器

57図-27

56図-15

57図-26

56図-24

57図-25

56図-24

65図-96

56図-23

74～76ライン溝状遺構出土土器

65図-101

65図-95

65図-100

54図-46

56図-21

56図-22

59図-54

59図-52

74～76ライン溝状遺構出土土器(54図-96を除く)

60図-63

58図-45

60図-62

58図-47

60図-65

61図-71

74～76ライン溝状遺構出土土器

58図-42

58図-46

58図-48

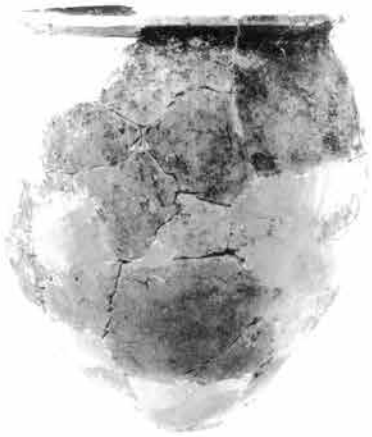
61図-73

58図-43

63図-80

59図-51

74～76ライン溝状遺構出土土器



62図-78

58図-49

60図-66

60図-65

62図-75

63図-84

74～76ライン溝状遺構出土土器

61図-74

61図-72

62図-77

64図-87

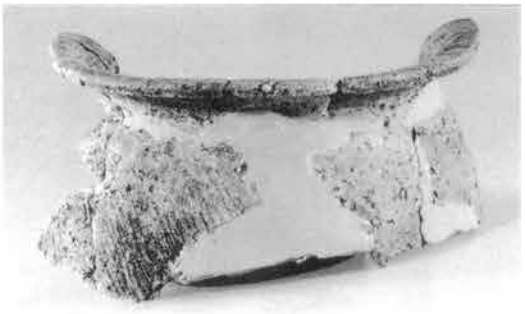
65図-91

62図-76

74～76ライン溝状遺構出土土器

64図-88

60図-64



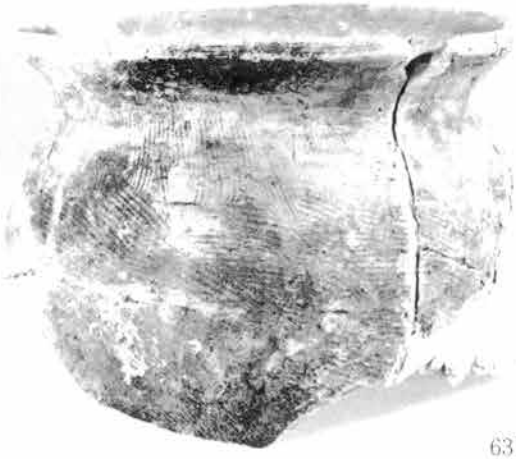
65図-94

64図-88

65図-92

64図-90

74～76ライン溝状遺構出土土器



63図-81

63図-84

62図-75

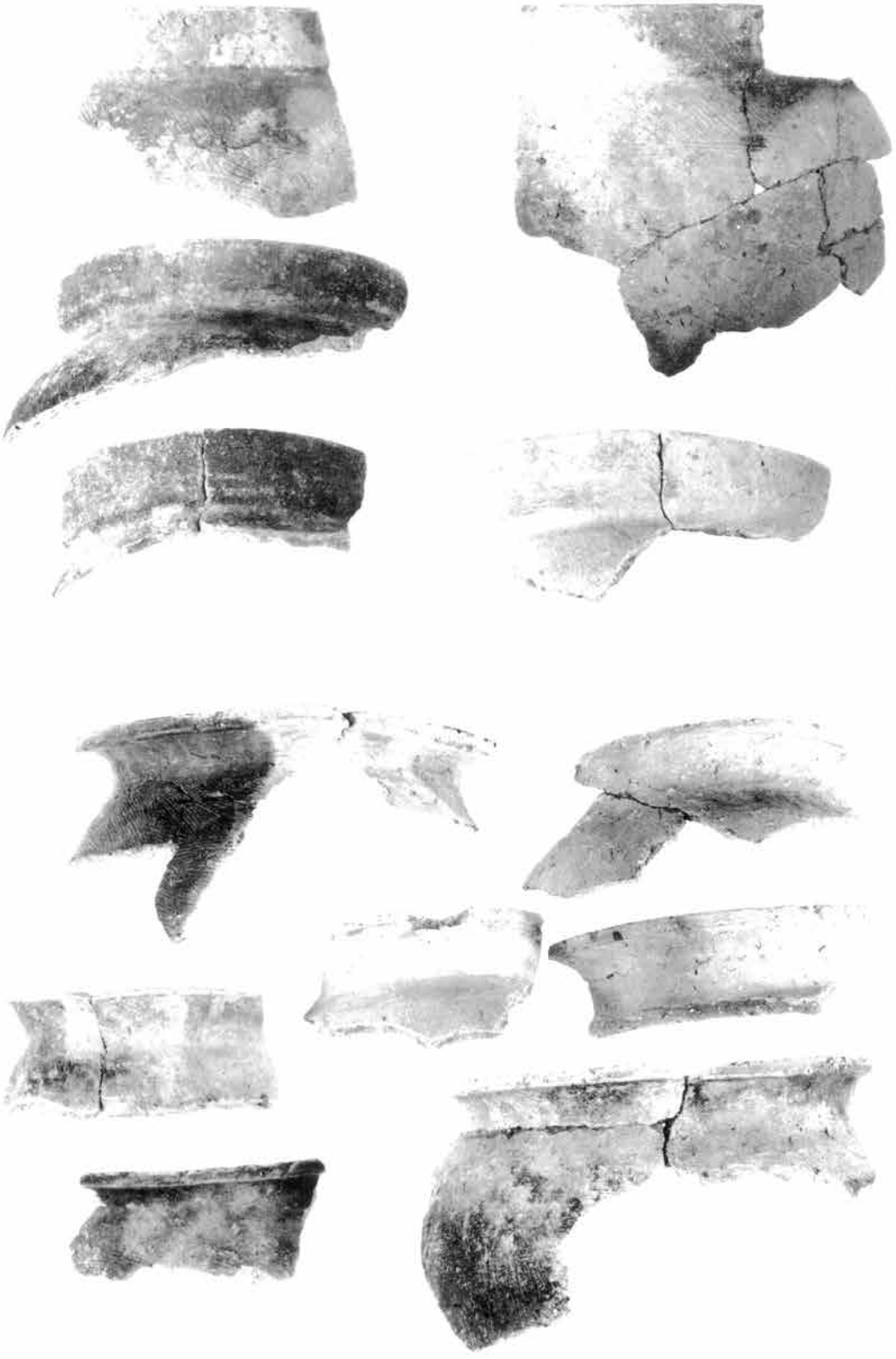
62図-79

63図-80

64図-87

63図-84

74～76ライン 溝状遺構出土土器



74～76ライン溝状遺構出土土器

66図-106

67図-115

67図-116

66図-107

66図-105

66図-109

66図-103

74～76ライン溝状遺構出土土器

67図-110

67図-118

67図-112

67図-117

66図-103

67図-111

74～76ライン溝状遺構出土土器

67図-113

68図-127

68図-125

68図-122

68図-123

68図-121

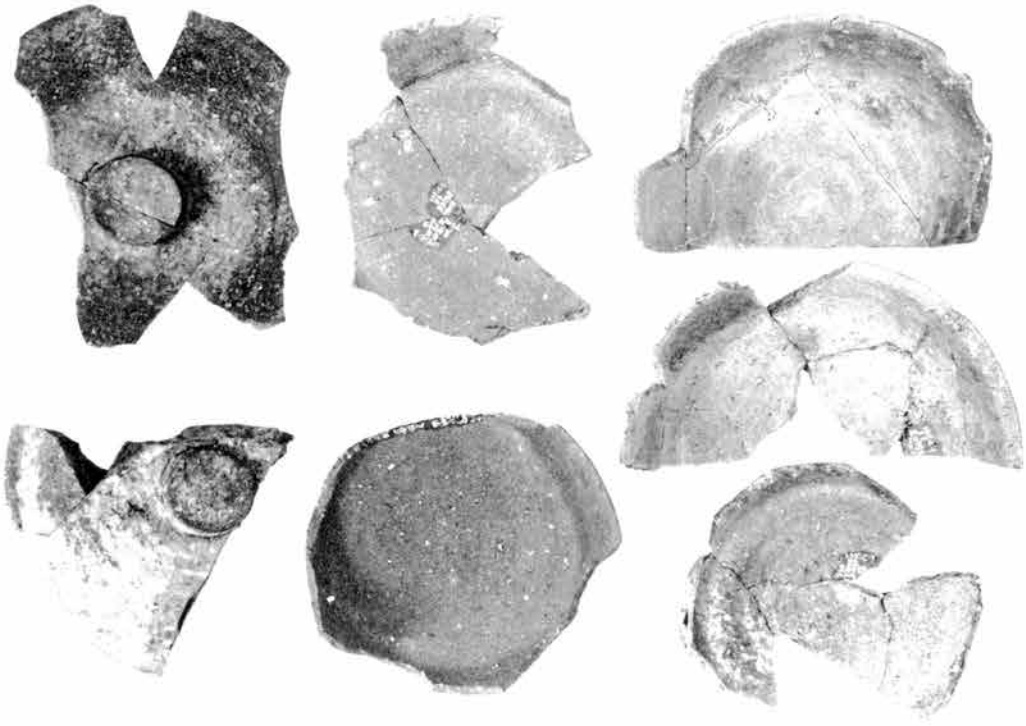
68図-129

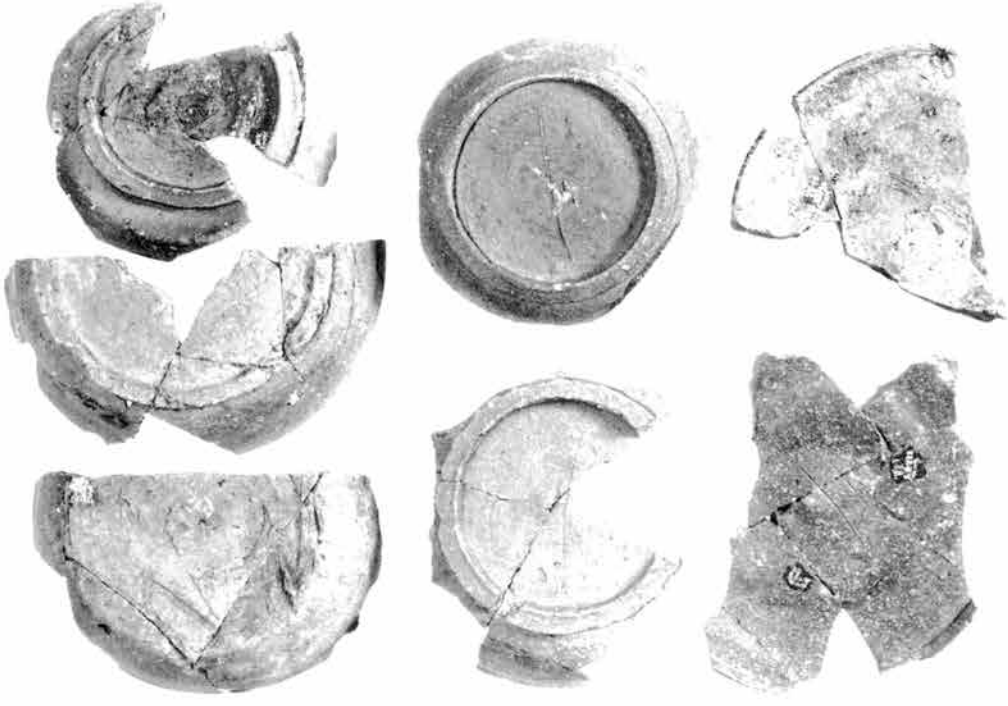
74～76ライン溝状遺構出土土器

図版24　徳前C遺跡第2次調査　その23

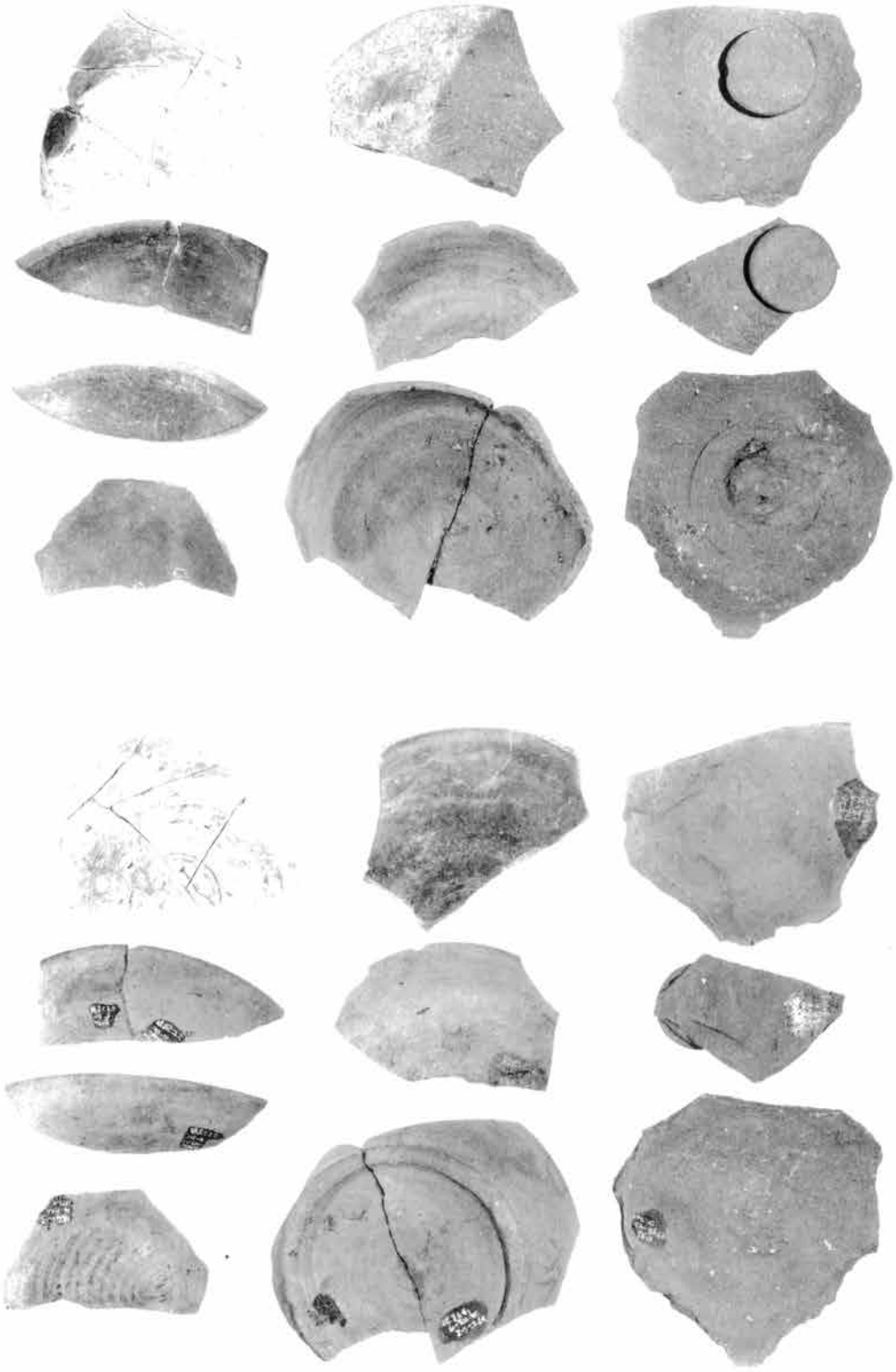
奈良時代前期の遺構(西より)

第1次調査時の奈良時代前期の遺構(西より)





須恵器蓋・坏



須恵器蓋・坏、土師器坏

図版27　徳前C遺跡第2・3次調査　その26

（実大）

↑「郡」銘須恵器鉢→

珠洲焼、土師質土器

寛永通宝

A・B区調査風景（羽咋側より、手前の盛土部分が第1次調査地）

A・B区調査風景（七尾側より）

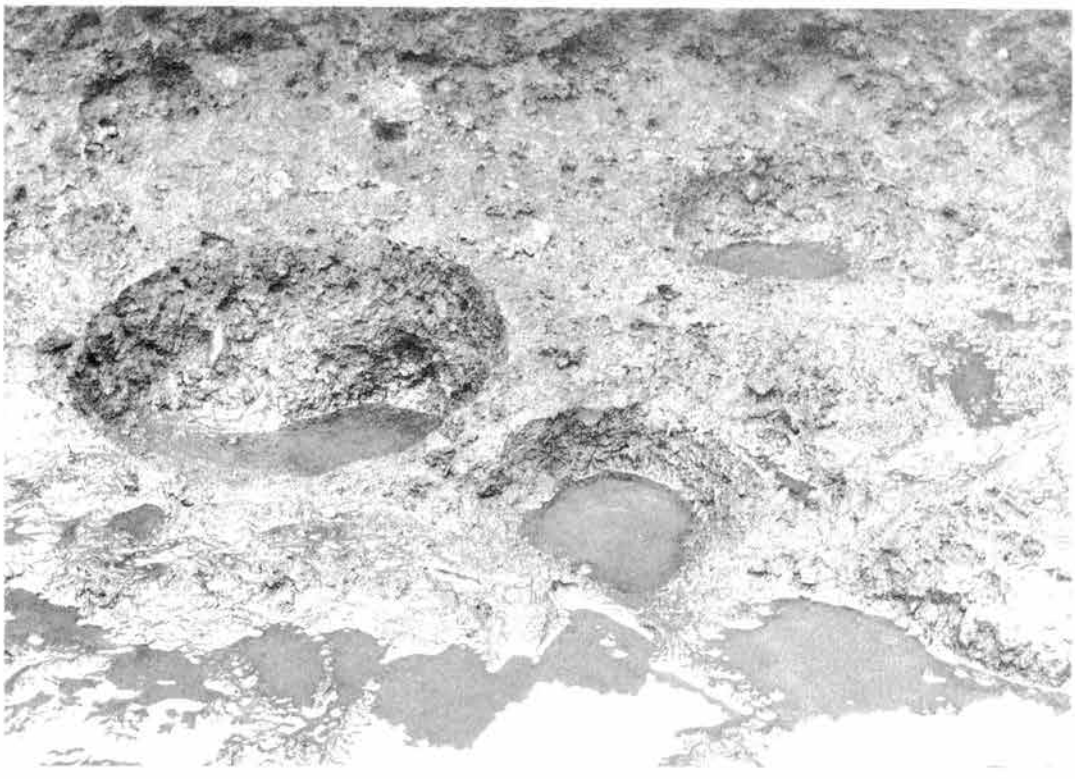
第3次調査七尾寄調査状況

A区調査状況・B区重機による排土除去作業

図版30　徳前C遺跡第3次調査　その3

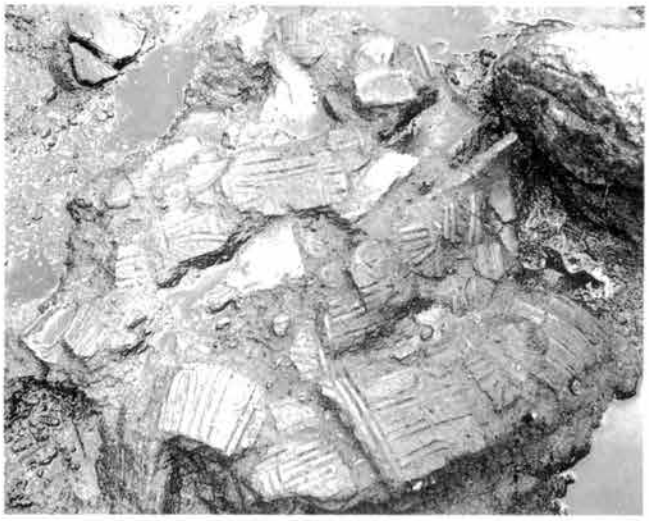
A区　調　査　風　景（B区側より）

A区　調　査　風　景（B区側より）

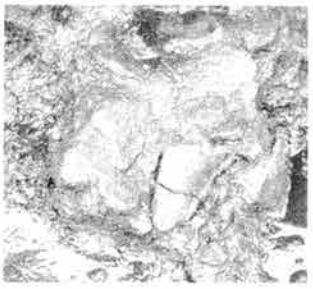


A区南東側 微高地上検出遺構（西側より）

A区南東側 微高地上遺物出土状況（西側より）

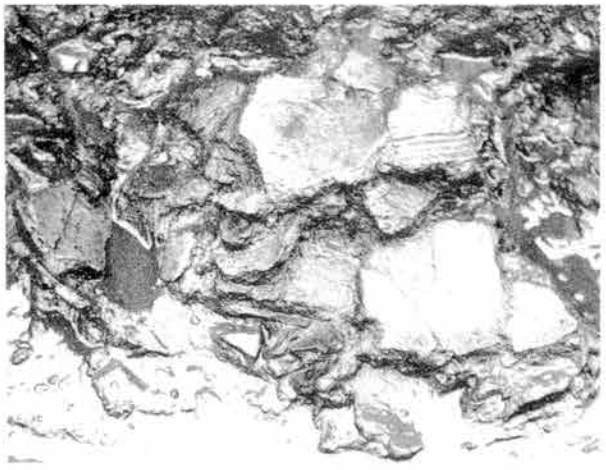


A拡張区 土器136出土状況



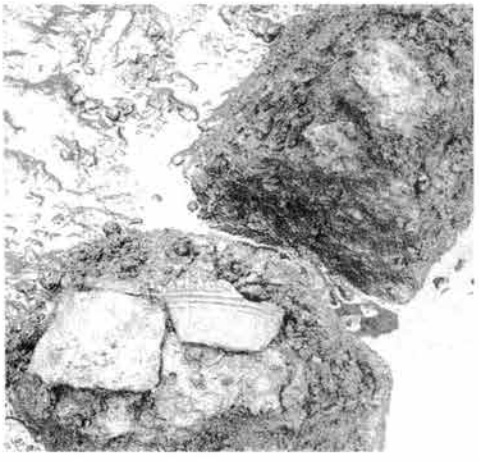
A拡張区 土器388出土状況

土偶出土状況



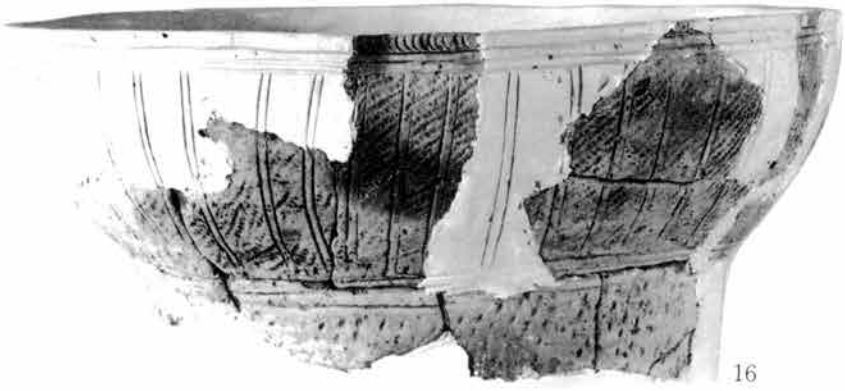
A拡張区 土器出土状況

A区 土器456出土状況



A区 土器84出土状況

A区 弥生土器出土状況



縄 文 土 器 ①　　(1/3)

49

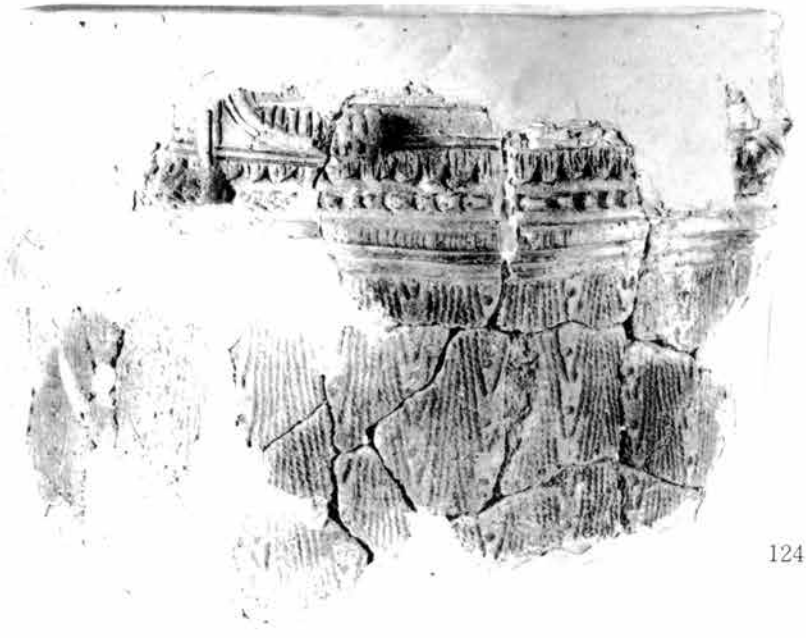
204

157

169

縄文土器②　(1/3)

134



124

縄 文 土 器 ③　　(1/3)

136

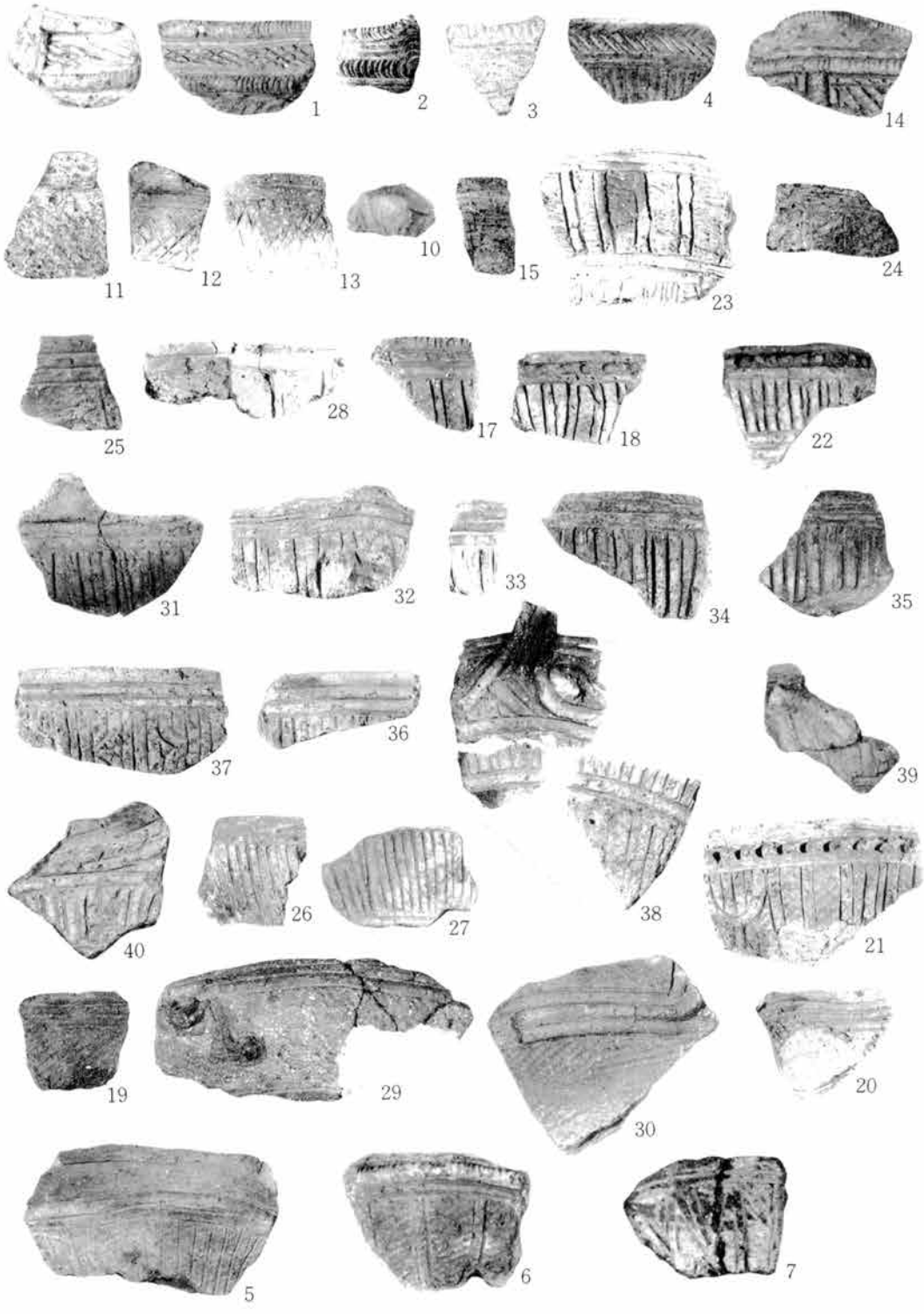
縄文土器④ (1/3)

390

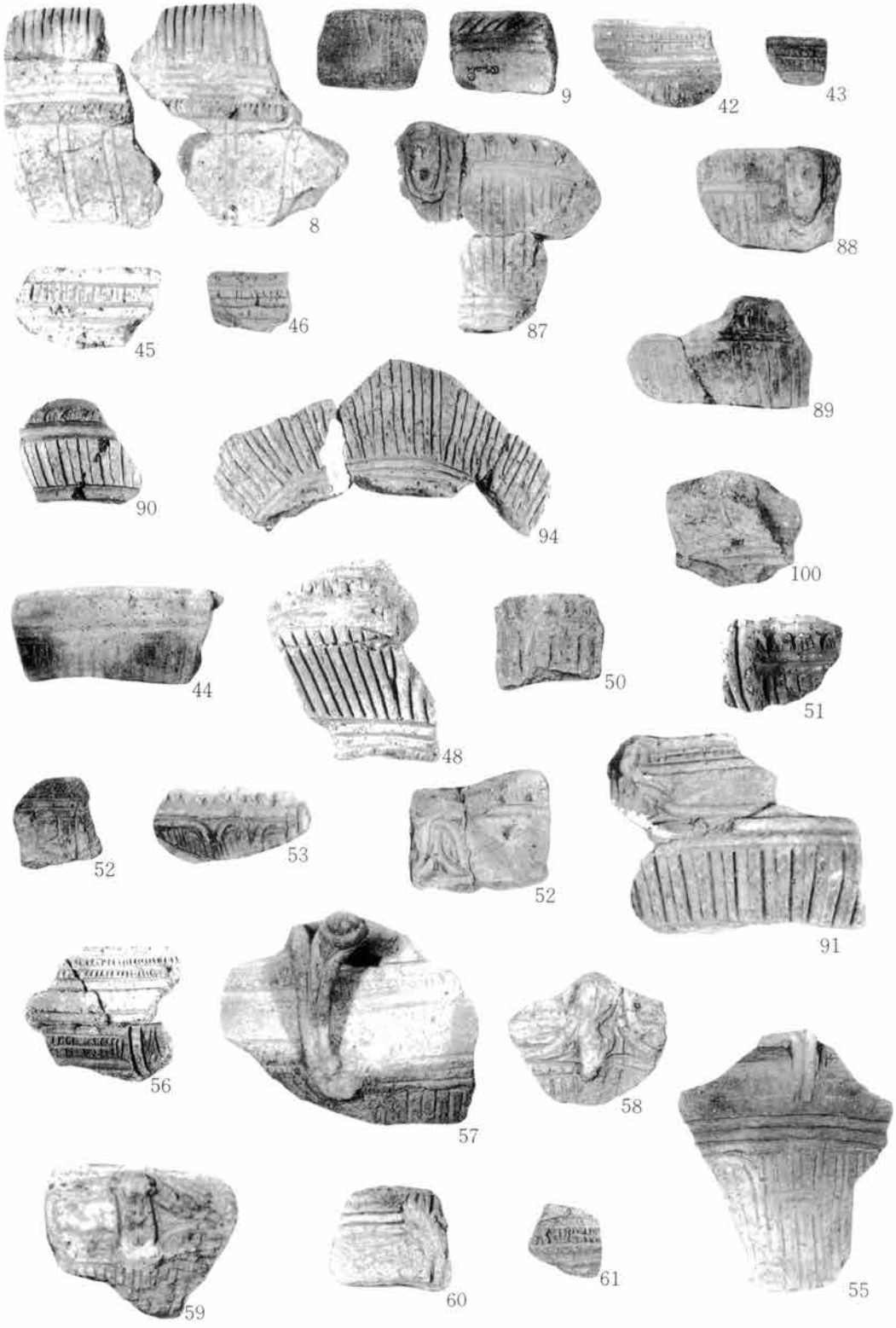
456

縄 文 土 器 ⑤ (1/3)

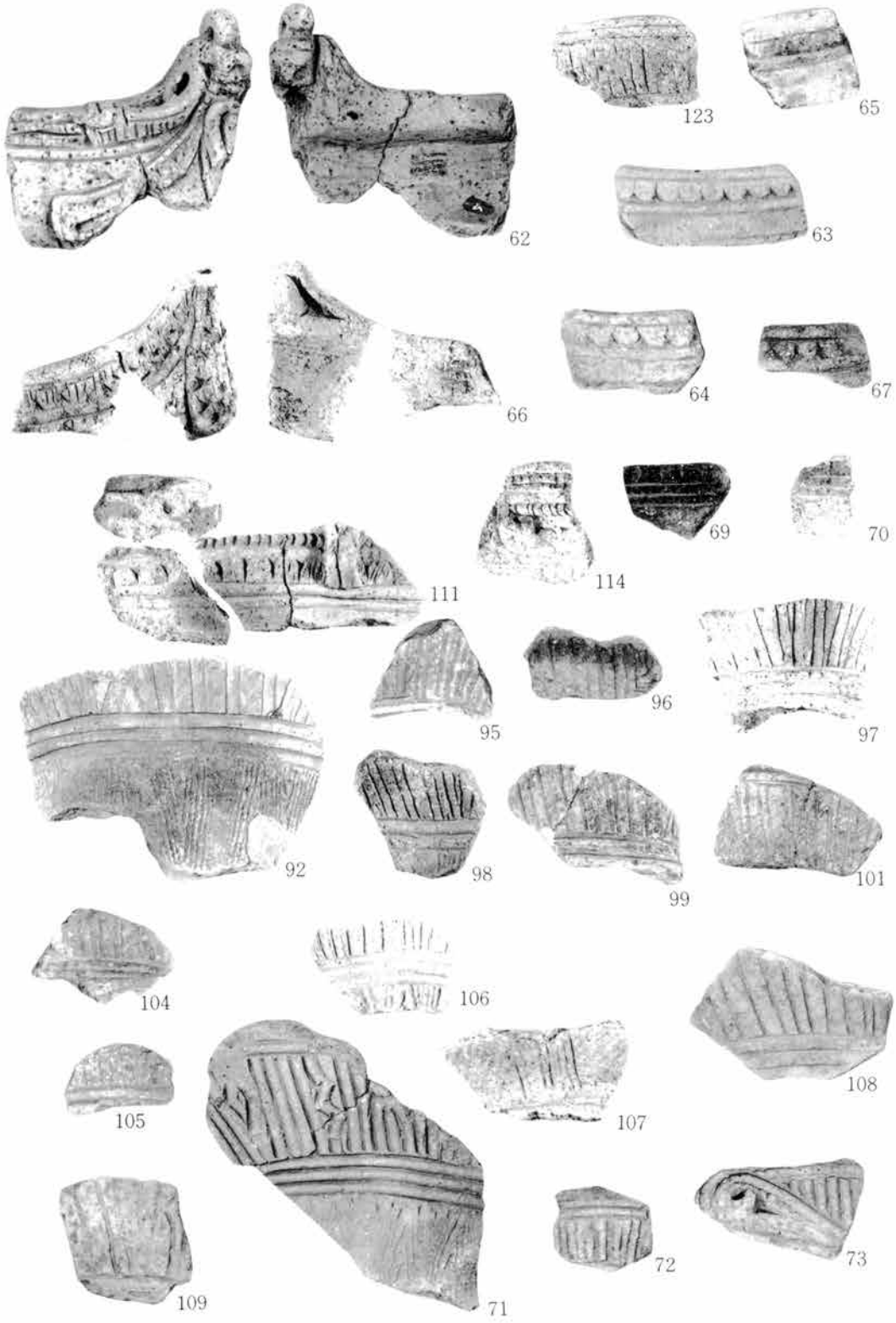
縄 文 土 器 ⑥ (1/3)


1
2
3
4
14
11
12
13
10
15
23
24
25
28
17
18
22
31
32
33
34
35
37
36
39
40
26
27
38
21
19
29
30
20
5
6
7

縄 文 土 器 ⑦　　(1/3)

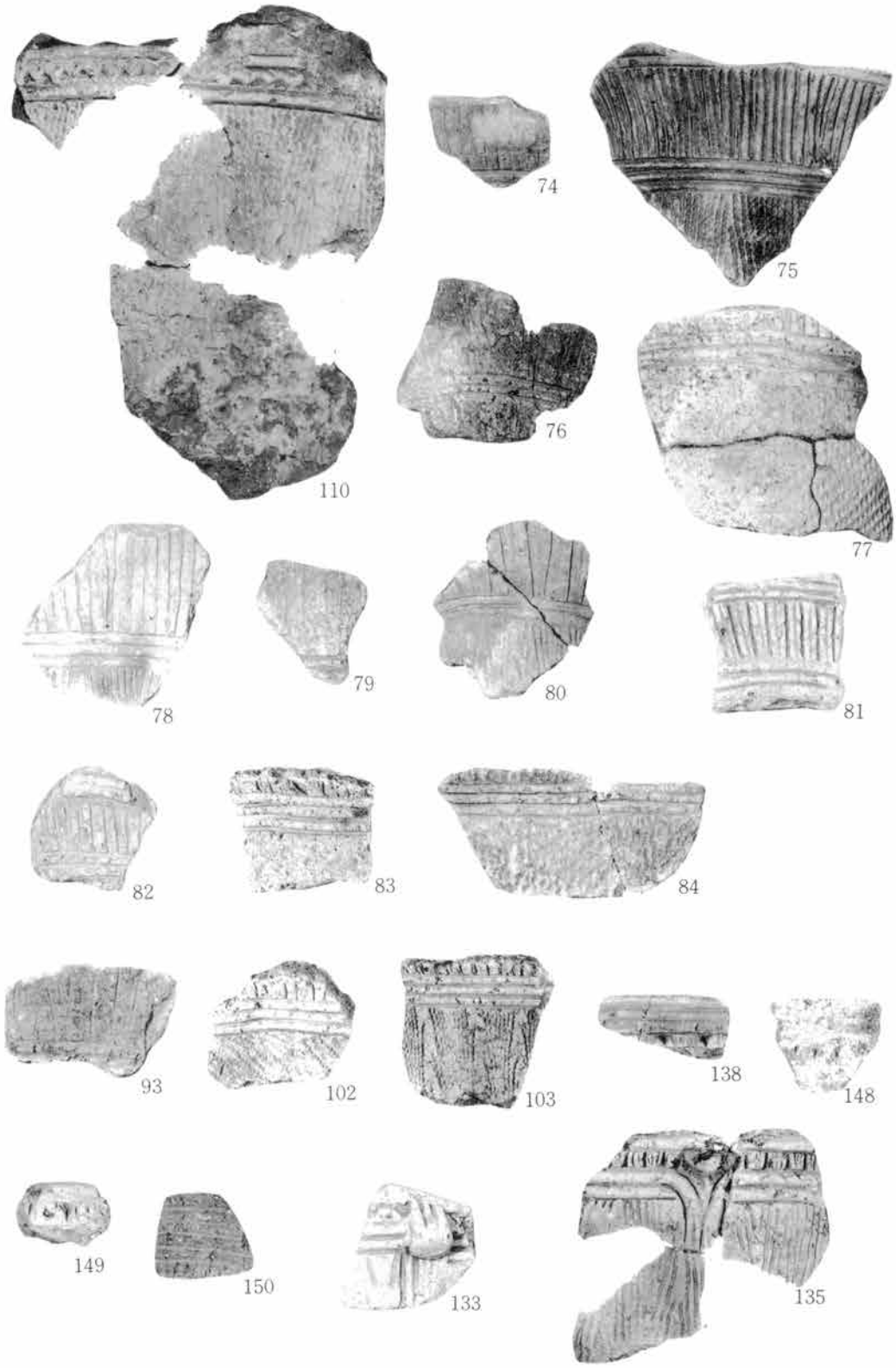

8
9
42
43
88
87
45
46
89
90
94
100
44
48
50
51
52
53
52
91
56
57
58
59
60
61
55

縄文土器⑧　(1/3)

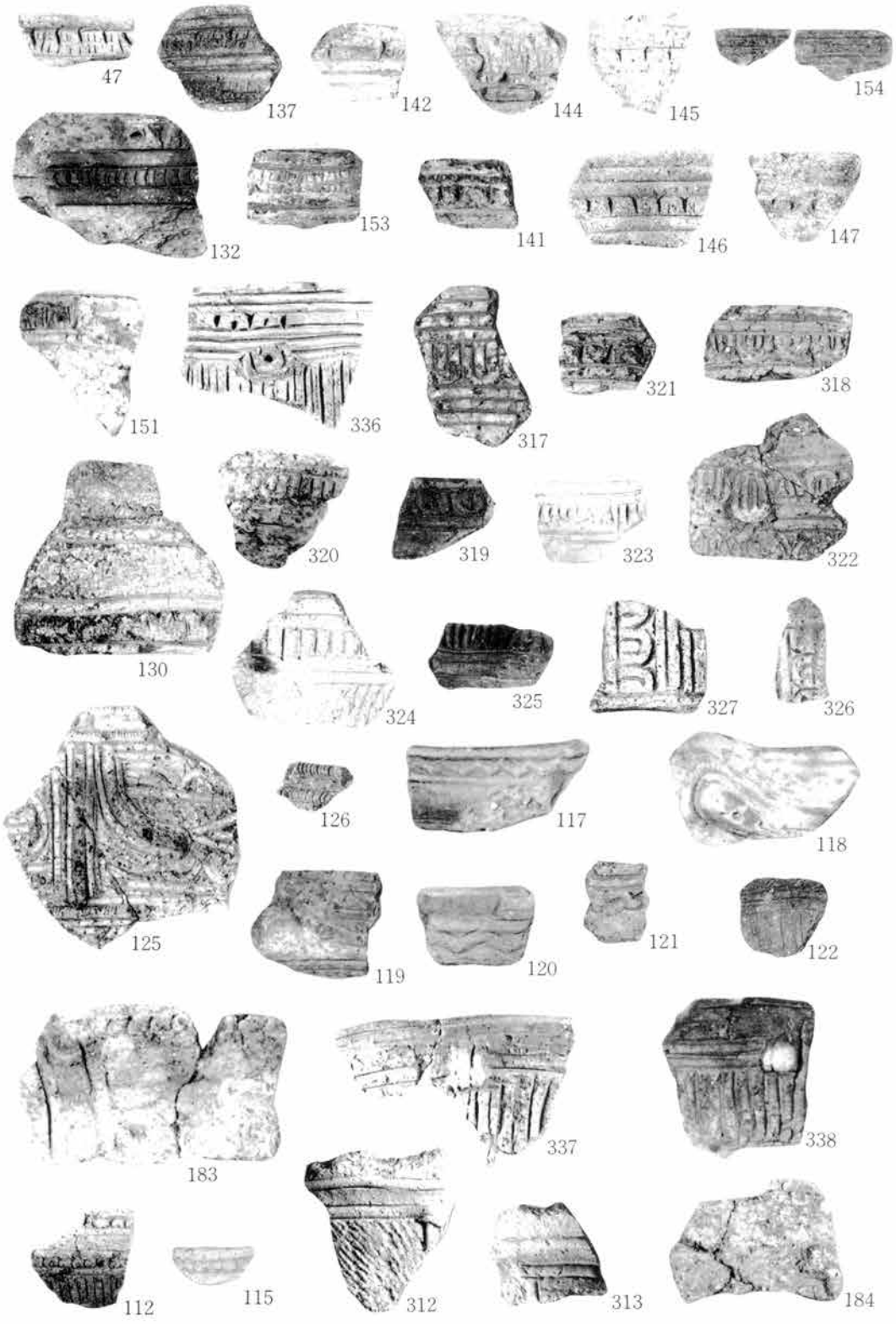

62
123
65
63
66
64
67
69
70
111
114
95
96
97
92
98
99
101
104
106
108
105
107
109
71
72
73

縄 文 土 器 ⑨　　(1/3)

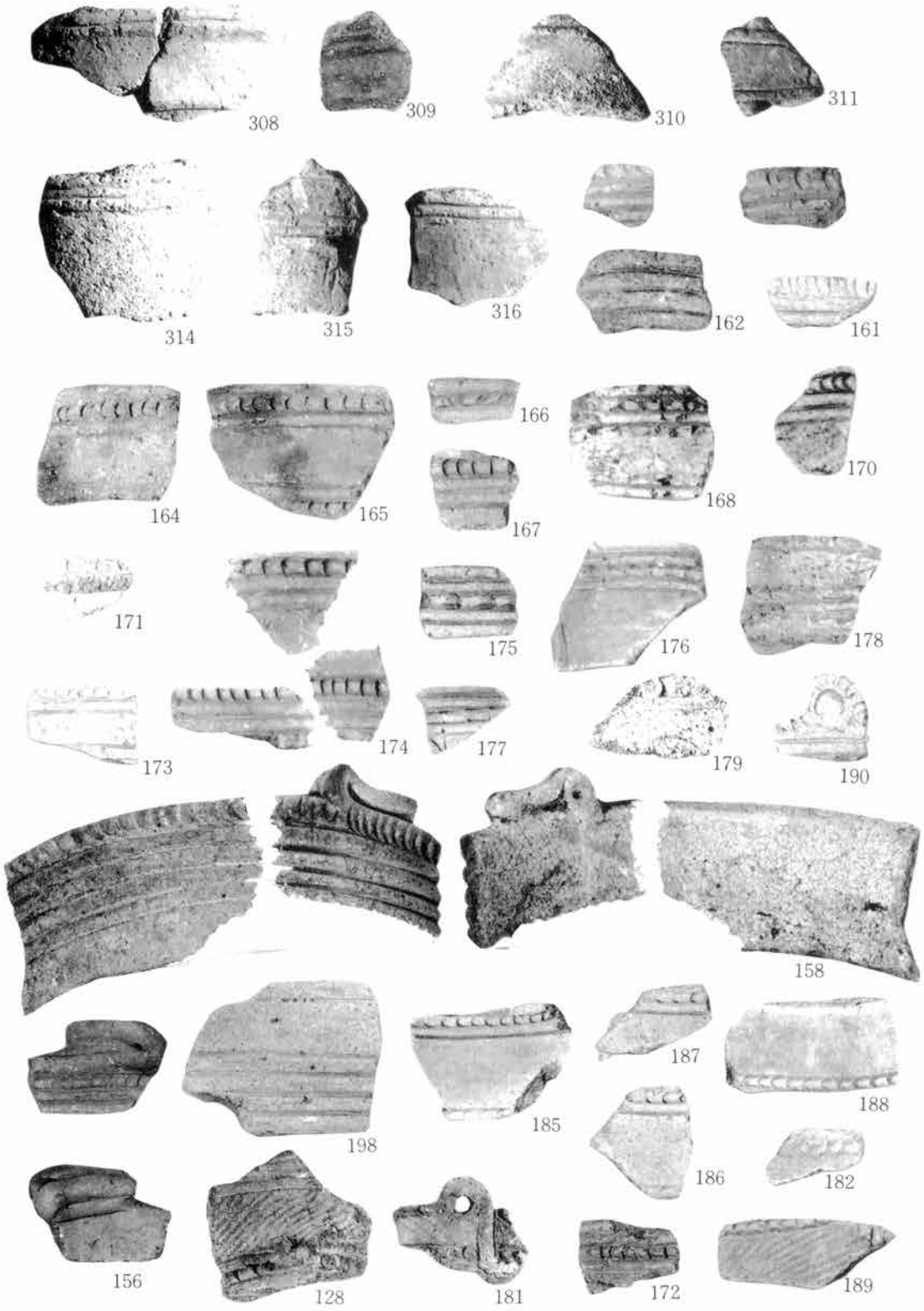
図版42 徳前C遺跡第3次調査 その15



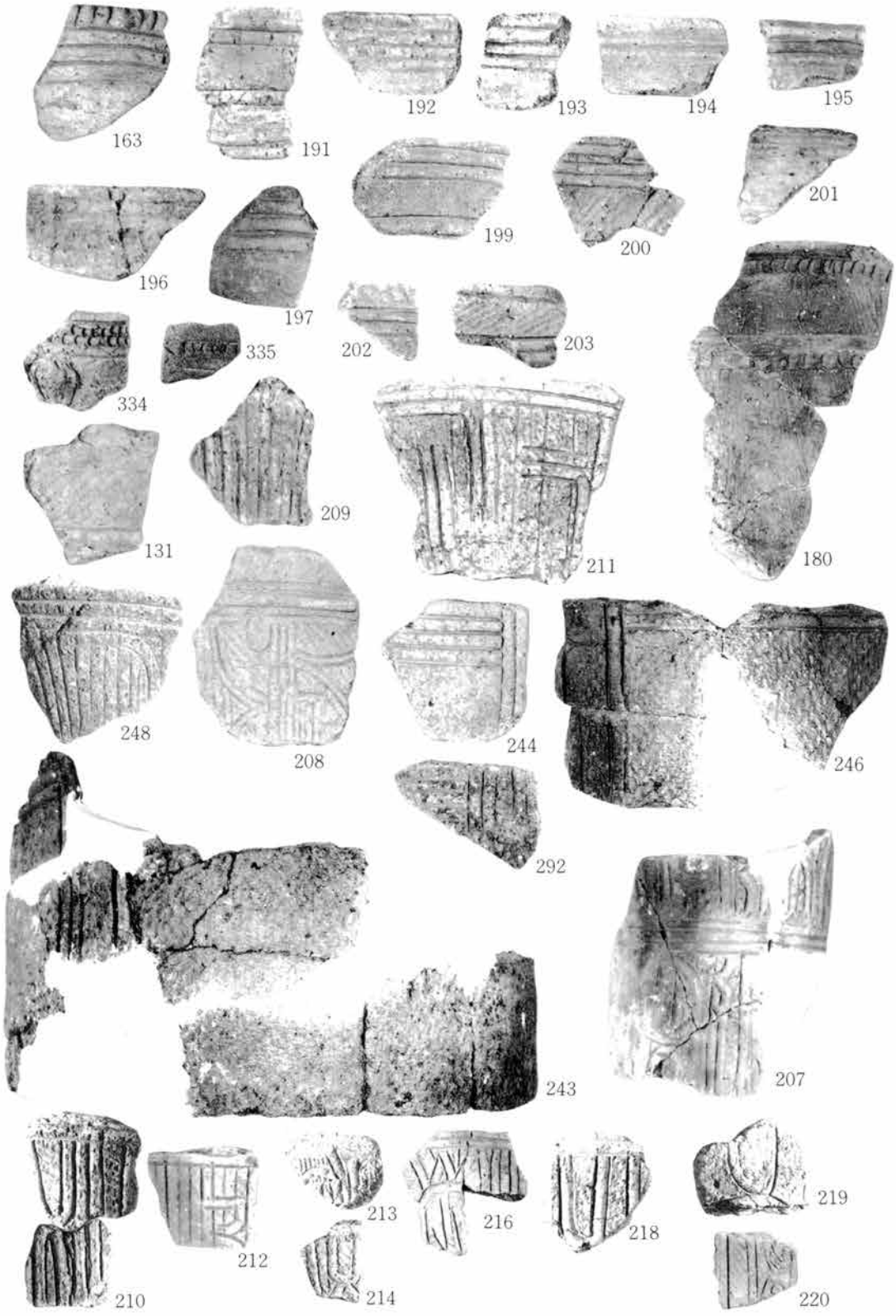
縄 文 土 器 ⑩　　(1/3)


47
137
142
144
145
154
132
153
141
146
147
151
336
317
321
318
320
319
323
322
130
324
325
327
326
126
117
118
125
119
120
121
122
183
337
338
112
115
312
313
184

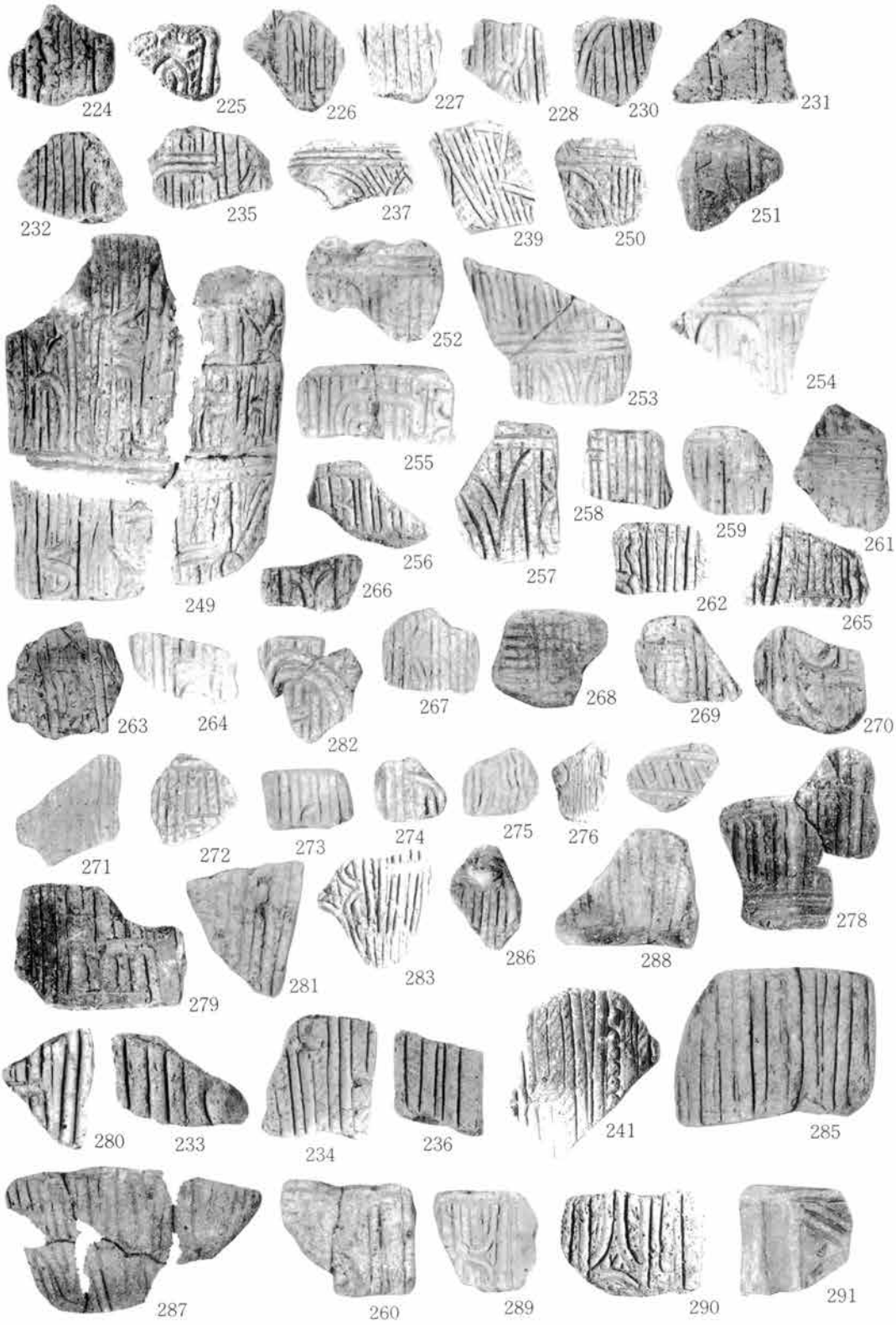
縄文土器⑪　(1/3)


308
309
310
311
314
315
316
162
161
164
165
166
167
168
170
171
175
176
178
173
174
177
179
190
158
187
188
198
185
186
182
156
128
181
172
189

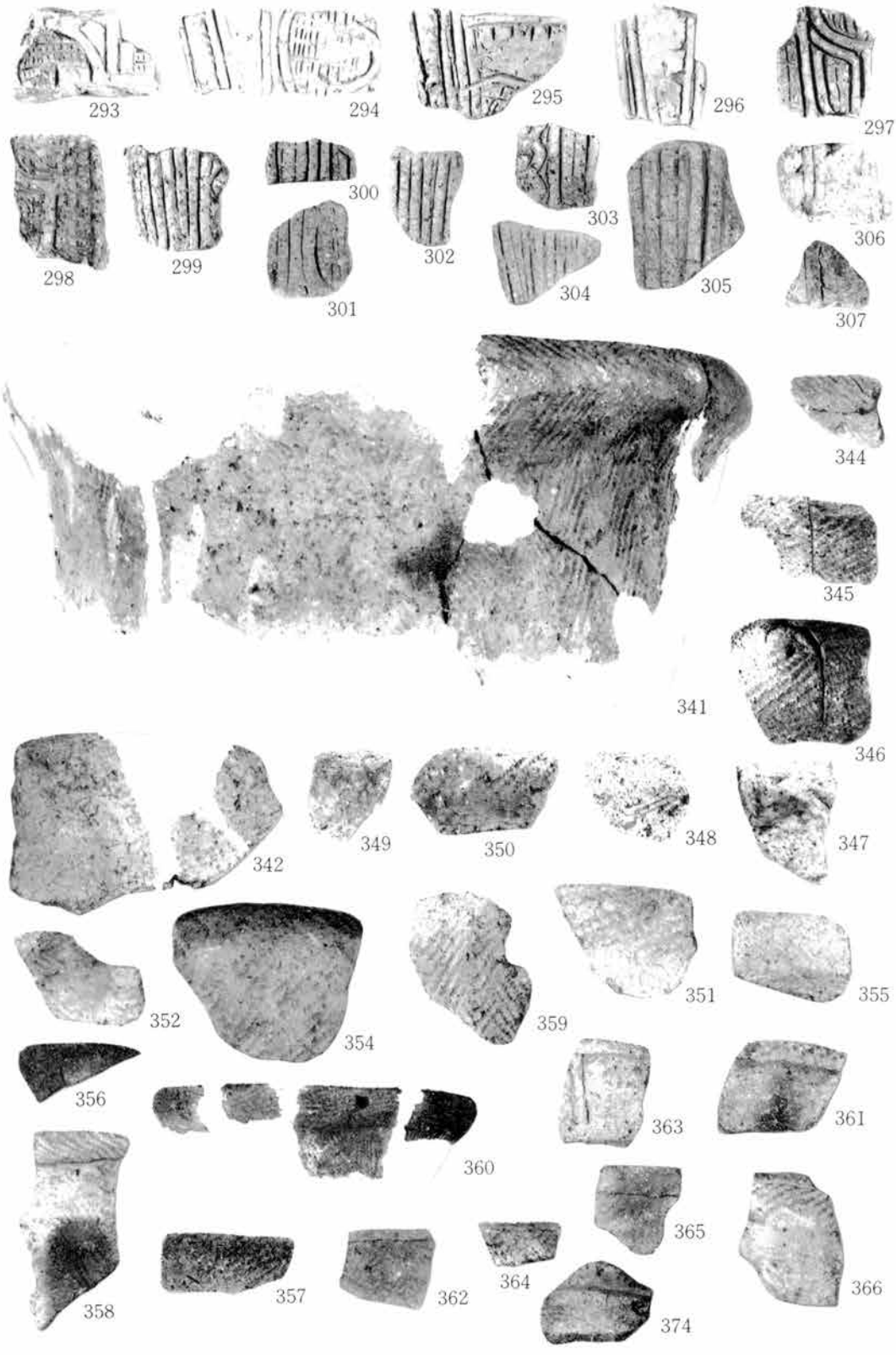
縄 文 土 器 ⑫　　(1/3)


163
191
192
193
194
195
196
197
199
200
201
202
203
334
335
131
209
211
180
248
208
244
246
292
243
207
210
212
213
214
216
218
219
220

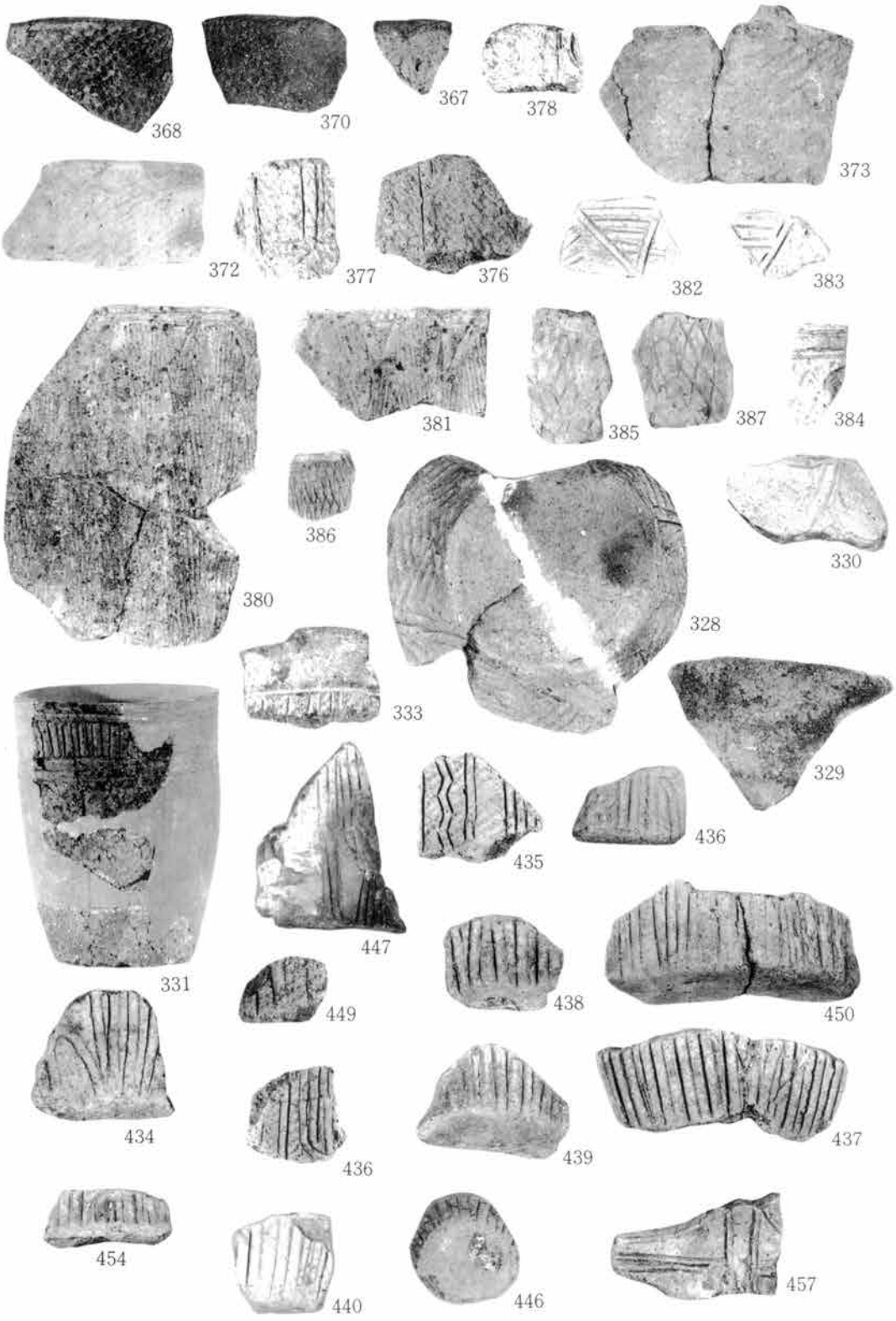
縄文土器⑬　(1/3)


224
225
226
227
228
230
231
232
235
237
239
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
261
249
266
262
265
263
264
282
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
278
279
281
283
286
288
280
233
234
236
241
285
287
260
289
290
291

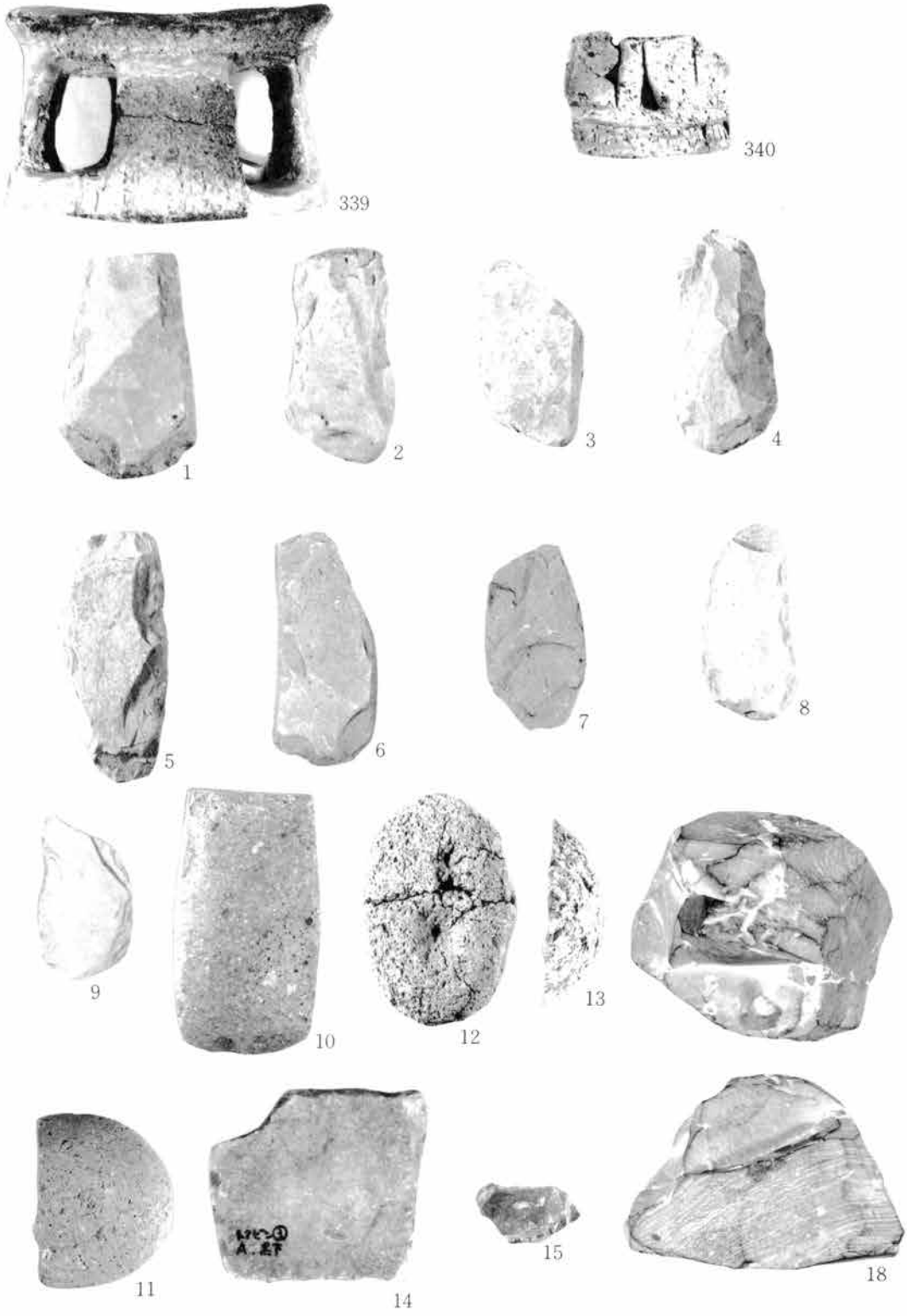
縄 文 土 器 ⑭ (1/3)


293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
341
342
344
345
346
347
348
349
350
351
352
354
355
356
358
359
360
361
362
363
364
365
366
357
374

縄文土器⑮　(1/3)

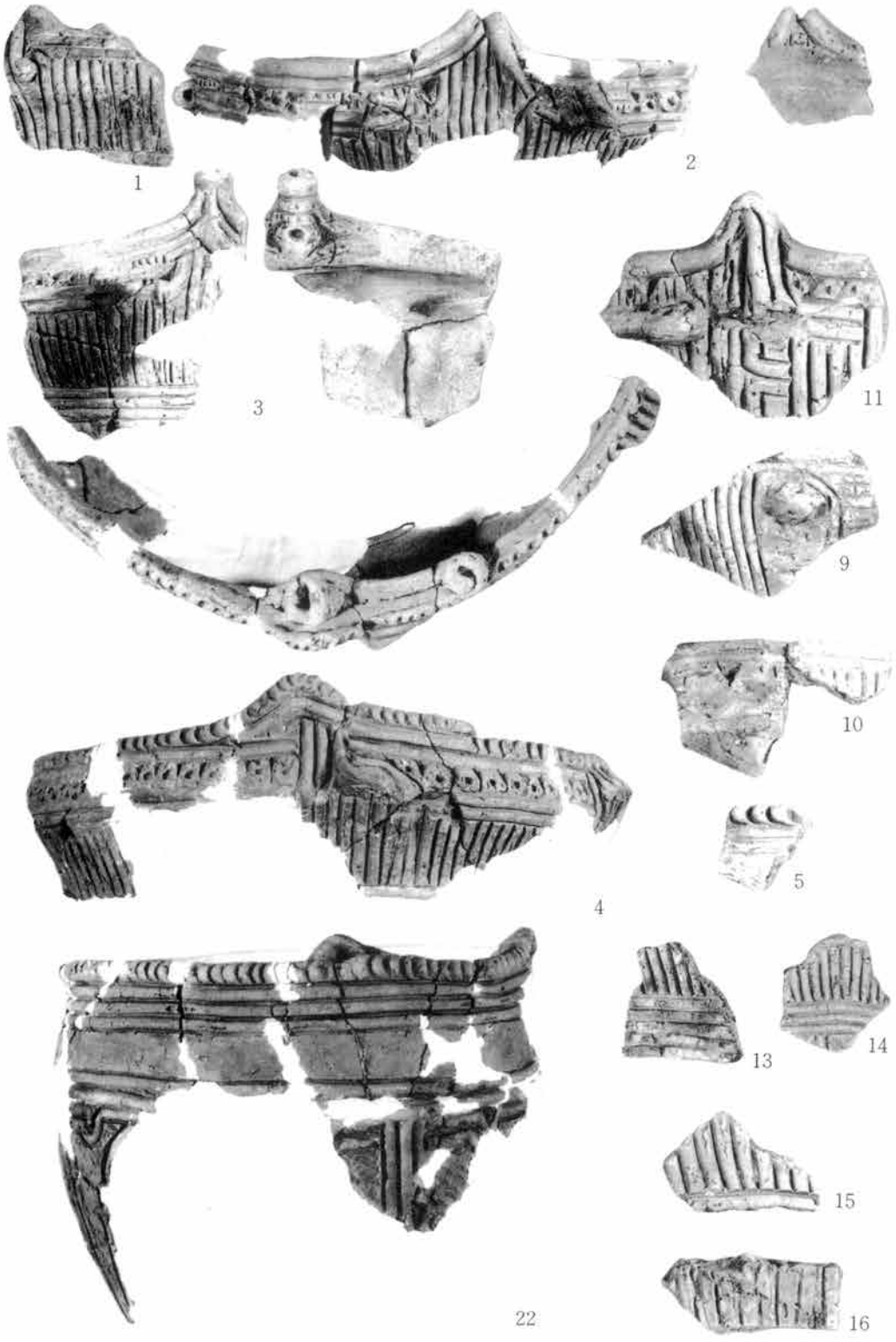

368
370
367
378
373
372
377
376
382
383
381
385
387
384
386
330
380
328
333
329
331
435
436
447
438
450
449
434
436
439
437
454
440
446
457

縄文土器⑯　(1/3)

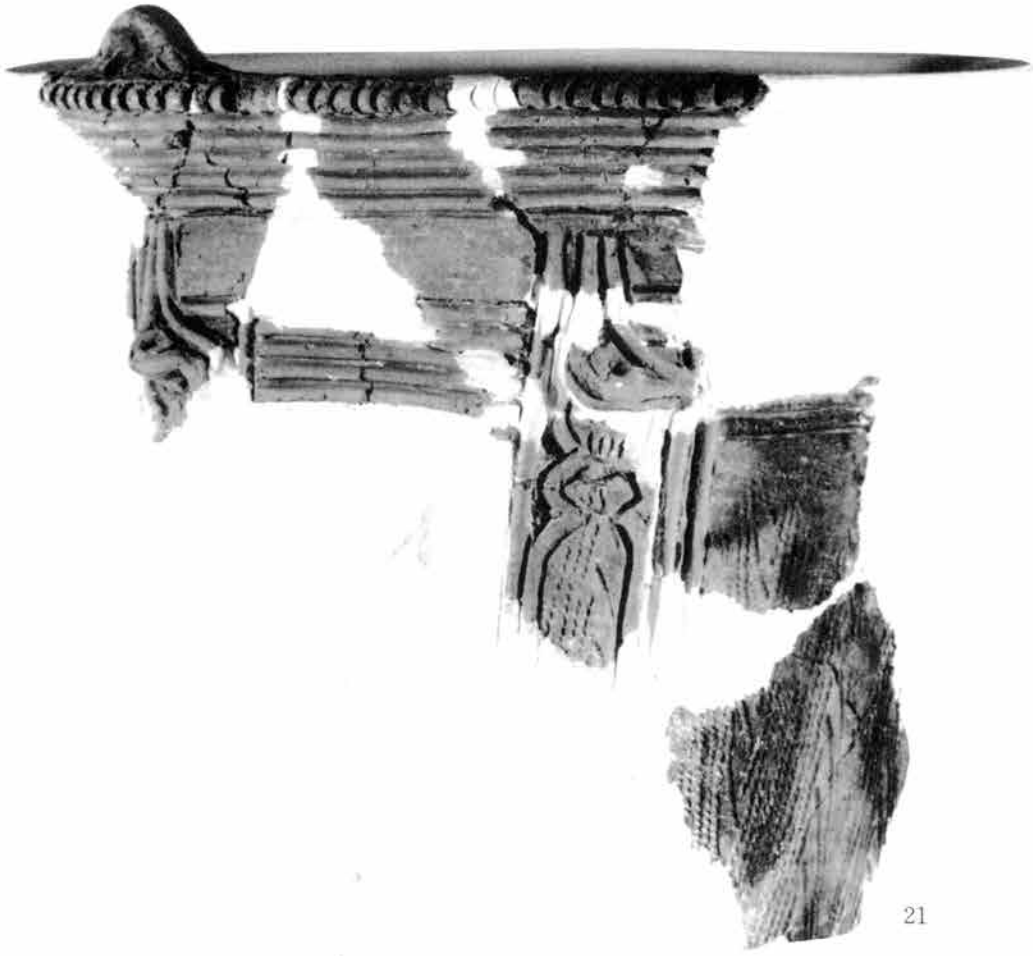


縄文土器⑰・石器 (1/3)

図版50　金沢市大桑町中平遺跡出土土器　その1

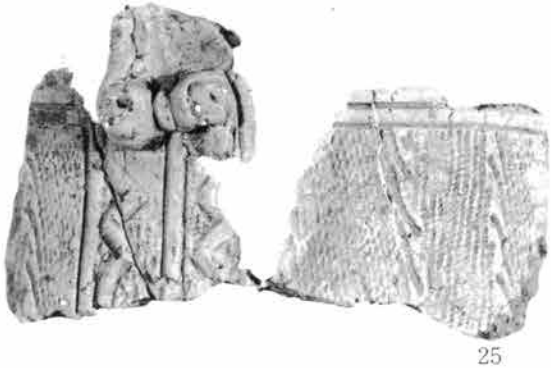


図版51　金沢市大桑町中平遺跡出土土器　その2



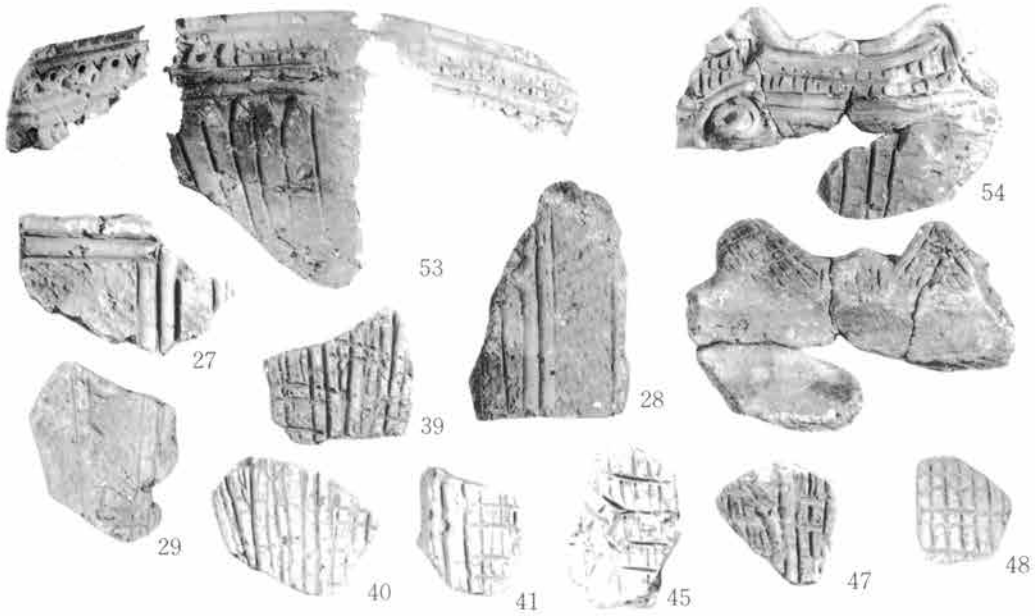
21

23



25

図版52　金沢市大桑町中平遺跡出土土器　その3



鹿島町徳前C遺跡(II・III)

国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡
鹿島町徳前C遺跡第2・3次緊急発掘調査報告

発行日　昭和61年3月20日（1986）

編集・発行者　石川県立埋蔵文化財センター

〒921　金沢市米泉4－133
電話　（0762）43－7692

印刷者　ヨシダ印刷株式会社